
訳有りの記憶喪失でも生きていく

駄作工場長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

訳有りの記憶喪失でも生きていける

【NZコード】

NZ8335V

【作者名】

駄作工場長

【あらすじ】

全身を大怪我した状態で発見された少年。そんな彼は記憶喪失だった！？しかも気づけば貴族の屋敷で執事になつていた・・・。唯一残されたのは名前だけ、今、前代未聞の物語が始まる・・・かもしれない。現在、解雇中・・・。

独自設定、原作改変などが含まれます。ご注意ください

タイトルが違いますが旧題「執事にされた記憶喪失少年」です

番外編は幻想入り・・・?

プロローグ（前書き）

どうも、過去から学べない馬鹿、駄作工場長をしている者です。今回もいつもの発作が起きて完結できるはずの無い新作・・・。もうさ、寛大な人だけ読んでください。私はもう知らない！

プロローグ

「君、大丈夫…？今手当をするからね…」

綺麗なブロンドの女性が大怪我をしているらしい俺を抱きかかえる、どうやら近くにいる人間に指示を飛ばしているらしいが…そこで視界が真っ暗になつた。

「う、ん？」「は…・・・

次に目覚めたのは薬品の匂いが充満する場所、白い天井には蛍光灯が設置されており部屋を明るく照らしていた。おそらく病院なのだろうが…・・・如何せん身体が痛い、すぐに動けるような状態では無かつた。

「あら、起きたみたいね。気分はどうかしら
「あなたは？」

見覚えが無い、まあ当たり前ではあるが…・・・。

「私はミコア・オルコット、あなたは？」両親に連絡しなくちゃいけないのよ

「…・・・・・」
「どうしたの？」

わからない、自分が何者なのか。記憶を探しても何も出てこない、家族も、思い出も。

「お、思い出せないです。なにもかも・・・」「あらあら、それは大変ね。名前はどいつかな?」

どいつか探る、それだけはすぐに出でてきた。

「き、まわらわわ如月音羽」

「如月君ね、あとは覚えてないのね?」

「は、はい。それ以外は・・・あの、俺はどいつもなんですか?」

一番気になる」と尋ねる、おわりに孤児院行きだろ?と思つて、いた俺の耳に驚くべき言葉が飛び込んできた。

「家で働いてみない?孤児院に行くよりは良こと悪いわよ」

プロローグ（後書き）

なんかわ、一巻から読み返したら衝動的に書きたくなつたとこう
今までひりひり始めてて、何回も失敗してゐるのにね。やつと「
IIS・ゴースト」で克服できたと思つたのに・・・。
多分、向ひひで行き詰つたときひりひを更新すると思つます。
過去から学べない私を誰か許して！

1・始まり（前書き）

ゴーストが投稿の一歩手前で消えたショックから立ち直れないまま
です

1・始まり

「は？」

わけがわからない、ただそれだけだった。普通ならば見ず知らずの子供などを面倒みるよりは預けてしまったほうが良い。まして働くせるなど・・・果たしてそこまでの余裕があるのか？

「簡単な話、執事をやってほしいのよ」

「いや、正直俺はまだこんなですし」

事実、10歳程度なのだ。どうやら知能レベルは高いみたいだが・・・できるのだろうか？

ポケットに入っていた身分証らしきものには11歳とあったが、戸籍記録に俺の存在は無いらしい。

つまりは「存在しない人間」ということだ、はつきり言って面倒ごとなのは目に見えている。

「細かいことは気にしなくても良いわよ、まあ執事と言つよりは護衛だけど」

む、むう。ここは好意に甘えさせてもうのが得策なのか？戸籍が無いんじゃ孤児院にも預けられないし、この人にも要らぬ迷惑を掛ける。

「やります」

「はい、よろしくね」

こうして、俺、如月音羽の新たな生活が始まった。

1・始まり（後書き）

原作5年前からです、えつと・・・セシリアは10歳ですね

2 初仕事（前書き）

短い！

「もしもの為に私の娘を守つてほしいのよ」

そうして連れて来られた場所は大きな屋敷、門の前にいるのだが・・・外壁の端が見えないとはどういうことなのだろう?まあ、気にしている暇は無いのだが・・・え、娘・・・そりやあ、11歳には自分の身を任せられないだらうけども。

「今日から配属になりました、如月音羽です。よろしくお願ひします」

ひとまず、最初の挨拶は大事だよね。これから世話になるんだ、助けてもらつた恩もある、全力で頑張ろ!。

「軍隊みたいね、その挨拶」

「ふへ?ああ・・・そうですね、以後気をつけます」

う~む、一体以前の俺は何をしていたのだろうか?気になるなあ・・・まあ、気にして仕方ないか。

「・・・・」

なんなんだ、この俺をじ~っと見つめてくる金髪の娘は?「この娘をお願いね」ええっ!?

すごい警戒されてるんですが、軽く睨まれてるし・・・やつていけるのかなあ。

「お、お嬢様でよろしくでしょ!つか?」

「セシリアと付けるのをお忘れなく、あなたが執事ですか？」「はい、全力で仕えさせて頂きます。音羽とお呼びください」

く、年下にとは・・・いや、仕事だから仕方ないか。ああ、こんなきつい感じの子を相手にか・・・。

旦那様は媚売つてるような感じだし、そうなれば自然にこいつなつてしまつた。女尊男卑の社会の極端な例か。

「では、紅茶を」

「一はー」

移動するセシリアお嬢様（なんか抵抗が・・・）を確認しながら専属メイドのチャルシーさんにお願いし、自身はテーブルの準備を・・・！…ああっ、もう座つてる！…と、運んで・・・。初日でこんなにできるかああああー！

「はあ、はあ、はあ。・・・ふつ

「もう少しうつくりでも良いですわよ？」

「はい、善処致します」

う、恥ずかしい・・・むう、だつて早く出したかったし。どうせならすぐにできたてを出したいじゃないか、息をせえはあやつてたら意味無いが。

「あなた、名前は？」

「は、如月音羽で」¹やれこめす

「そり、ではこれからよろしくお願ひ致しますわ

「はーなんなりと申しつけください」

うん？好感触・・・なのかな、そうだったらいいいなあ。

2 初仕事（後書き）

多分、次の更新は遅くなります

3・初日終了

「はへへへへ

どうにか初日の仕事を終えて、入浴中。え、早いって？そんなの知るか、俺は疲れたの！

「はああ・・・なんとかやれたけど明日からが本番か」

今の時間は午後11時、もう既にほとんどの人は就寝している。早く俺も寝なくてはいけないな。

明日は6時から起こしに行つて・・・・学校に送つて・・・その間にまた色々とやって。

「・・・銃器の携帯は強制つて言われたしなあ、そこまでなんかなあ」

どうやらオルコット家はその筋では有名らしい、ミリアさんは大企業の社長だつて言つし。なんでそんな人が道端に倒れていた人間を見かけたのかはわからないが、まあ、感謝はしてる。でも、全身が赤く染まってるほどの怪我だつたのに俺が目を覚ますまでの数時間でほぼ完治してしまつていたらしい。

「まあ、気にしてもしょうがないか・・・・？」

なんかカラカラつて音がしたぞ、誰か来たのか。こんな時間にとは誰だろうか。

「お疲れ様、どうだつた？」

「//コアさん、まあ、なんとかです」

なんとかとしか良いようが無い、なにせほととぎすの点（自己評価）
だつたからなあ。まだまだ改善すべきところはある、仕える主に心
配されるようでは意味が無い。といふか笑い者だ。

「つて、まだ起きてるんですか？」

「さつき片付け終わつたところだね、社長は大変なものよ」

まあ、有名な大企業レベルだとそうなのだろう。まあ、上に立つ人
間ができる奴じやなければ成り立たないとは言つてしまふ。俺つ
て記憶喪失なんだよな？

「そうだ、音羽君の記憶喪失って全生活史健忘みたいよ」

「自分に関することだけ思い出せないって言つタイプですか？」

全生活史健忘（Generalized Amnesia）

発症以前の出生以来すべての自分に関する記憶が思い出せない（逆
向性・全健忘）状態。自分の名前さえもわからず、「ここはどこ?
私は誰?」という一般的に記憶喪失と呼ばれる状態である。「記憶
喪失」と同視されている。障害されるのは主に自分に関する記憶で
あり、社会的なエピソードは覚えていることもある。
多くは心因性。まれに、頭部外傷をきっかけとして発症することが
ある。発症後、記憶は次第に戻つてくることが多い。治療としては、
催眠療法で想起を促すことなどが行われる。

（Wikipe diaより抜粋）

「やつぱりね、てか詳しいのね」

「うへん、もどかしいなあ

「時機に戻るわよ、それまでほいじで頑張つてみなさい。あなたならできること

はい、まあ、やつてみるしかないよね。もし戻らなかつたらほいじで正式に雇つてくれるって言つてくれたし。

「じゃあ、おやすみなさい

「はい」

「どうか、セシリ亞をお願いね

それが何を意味しているのか、その時の俺には想像もつかなかつた。

3・初回終了（後書き）

もつべししたら飛びます

4・とあるいつもの

「お帰りなさいませ、セシリアお嬢様」

一年も経てば仕事も身に着く。え、時間経過が早すぎない？誰が自分の醜態なんか晒したいんだよ。笑われたんだぞ年下に！まあ、一つ下くらごどつひととは無いけどさ。

「さてと、チャエルシーさん浴場は？」
「いつでも入れます！」

最近は風呂に帰宅後すぐに入るようになつたセシリア、うん、風呂は良いよ！疲れがとれるからね。ちなみに、俺は名前や見た目からして東アジア系。おそらく風呂好きから日本人らしい。というかDNA検査で日本人に一番近かつたらしいが。

「音羽」
「はい」

最近だつたらこれだけで何を要求されているか一発でわかる、今は『風呂上りのアイスティー』だ。

個人的にはアイスボックスタンドがなあ、まあ意見はしないけど。

「やはりこれに限りますわ、ねえ？」
「個人的にはピノですがね」
「それは何ですか？」
「日本で販売されている氷菓です」

やつぱり意見する、うん、雪見大福も良いよね！アイスが好きなんですかって？もちろん！

「そのうち食してみたいものです」

「そうですね~」

「結局執事らしくありませんわね、音羽」

勝手に言つてくれ、自分でもわかるけど。まあ、仕える身なのに敬語使わないとかは納得だけど。

もっとフリーダムでも良いと思つんだ、やるとさせやるナビも。

「あ、そういうえばアイスクリーム店ができたらしいですね
「早速休日に向かいますわよ~」

なにぶん、甘いもの・アイス好きついで打ち解けたのも大きい。最初に比べて結構話すし。

最近では暇な時間にちょっとしたお菓子を作つて出すこともある、しかも中々に好評だ。

ミリアさんもこの前はサンデイッチを持つていつたし。作った甲斐があるとこうものだ。

「その前にヴァイオリンです、あともう少しですからそんなに落ち込まないでください」

「はあ、やらなくてはいけないと分かっていても憂鬱ですわ」

まあ気持ちはわかるけどさ、どちらかって言つたら俺だつてやらせたくないよ。

オルコット家が舐められるのが嫌だつて気持ちは同じだから仕方ないけどさ。

「そういえば来年の6月にはもうワードトレイン開通ですね
「お母様が招待されていますわ、本来ならばわたしも行きたかった
のですが」

まあ、企業トップとか代表に対してのお披露目式だからなあ。いくら娘でも無理だろう、その日は確か運動会だったっけか。

4. ヒカルことひかるの母（後妻）

セベニア、フランシス（祖母の）

5・いつもなオルゴジト家

もはや日常と化した燕尾服執事が掃除機片手に歩き回る光景・・・俺だよ。

なんかこいつ座つてらんないんだよね、お掃除ロボットと一緒に掃除機を走らせる。

「~~~~~」

え、係の人に任せろって？俺の暇つぶしを取らないでくれ、後は全クリアしたP-P版IS/V/Sくらいしか無いんだ。何もすることが無いときに裏ルートとかまで行つたし。することが無い。

「ん？ ありや、壊れてんのか？」

突然その場で回転・・・・わ〜、ここまで高速で回転できるものだけか？何故か独楽のように回り始めたお掃除ロボットを掴み自室に向かう。暇人の力をとくと見よ！

「ふ〜む？ ああ、シャフトが曲がってるのな」

暇すぎた結果身に着いた器用さでドライバーやピンセット、ペンチを動かす。手先が器用になつたは良いけどこれが暇人の末路と思うと空しい。普通は暇だからって専門書を読まないと思うが・・・それしか無かつたという現実。身に着いて損はしないけどさ、なんか悲しいのは俺だけか？

「マスター、お嬢様が呼んでいます」

「え、そう？ わかった」

絨毯が敷き詰められた廊下を先導して走るのはサポート用ロボットのメタルギアmk?。いや、できるかな~って休暇のときにも2日でMG S4をクリアし、3日で急造したんだ。女尊男卑の世の中でもああいうゲームがあるのは嬉しことこなんだ。

「ただいま来ました」

「音羽、ちょっと相手になつてくれません?」

そう言って手渡されるのは一本のラケット、セシリアの手にはラケットとシャトルが握られていた。mk?はなんか得点板の近くに移動してゐるし、バドミントンントレーニング室。

「まず着替えさせてくれ

「すでに準備していますマスター」

ワイヤー状のアームには運動用のジャージが握られている、なんでここまで完成度高いんだろうか。

とにかくこの光景が普通になつてているのだから凄い、セシリアに至つてはお気に入りらしい。

「つと、その前にお客様さんか?」

「そうみたいですね、数は「7です」そうですか?」

名家である以上その遺産は莫大なものになる、無論それを狙う輩は必ずいる。その令嬢となれば狙われるのは当たり前である、人質としての利用価値に奴隸としても。そんな奴らからの守護を命じられているのが俺なんだがな。

「mk?、セシリアを連れて中へ」

「了解です」

「音羽、頼みましたわよ」

「終わつたら続きをしましょ」

足元に敷き詰められたタイルの一つ、注視しなければわからないレベルで飛び出ているそれを踏む。オルコット家本邸に設置される自衛用のガンストックの一つ。それが田の前に音を立てて展開される。

「守られる」ではなく「攻める」

これが長い間オルコット家が生き残ってきた理由らしい、ミリアさんも一度組み手してもらつたけど強かつたし。そのときに銃器の扱いも基本から叩き込まれた・・・。

「とはいへ、まだ1-1の子供には撃たせられないよなあ

俺は1-2だが・・・・・・

ストックに立て掛けられているM4カービン（硬化ゴム弾）を構える、なあに精々痛いだけだよ。当たり所悪いと骨にヒビ入るけど。

「もういい!」

特注のドラママガジンからゴム弾が絶え間なく供給され、木の陰や柱の上などあちこちの侵入者の額を撃ち抜く。流石に子供に人殺しはさせない、といつか殺さずに撃退できるのならばやうする。

「ひぎやー!」

「ふみやー!」

「んのわあー?」

「ぎやあー?」

「ぬふ！」

「ウゾダゾンドゴゾーンー！」

あ～あ～、ビヤビヤと地面に落つひたしてくる侵入者（笑）。そりやあ額に大きい衝撃が走れば普通にはじてられないよな、なんか聞こえたが無視するけど。

「さてと、やつたら来たらどうだい？」

「素晴らしいな、流石オルゴット家のと言つたところか」

拍手をしながらひらへ歩いてくる男、身長は高すぎて俺じゃあ頭は触れられないか。というか2mは普通に超えてるよなあ・・・正直そんなんでマツチヨとか気持ち悪い。せっせと倒してしまおつ、うん、そうしよう。

「マスター、こいつら纏めておきます」

「ああ、わかった。セシリ亞、もつもつといつてな

「はい、急いでくださいね？」

「りょーかい」

え、大男空氣つて？知るかそんなもん、勝手に入つてきて邪魔しあがつた奴に平等に対応すると思つたら大間違いだ。

「無視すんな」「ワー！！！」

「はいはい、逆ギレノーフと」

ベキゴスドゴー！

ラリアットをしゃがんでかわし、隙を見つけたりそのまま足を引っ掛け転ばせる。もちろん足首の関節は外して、じやなきや逃げる

からね。ついでに後頭部を肘で殴りつける、はいおしまこ。

「こいつ見ても上手くやりますわね」

「ははは、じゃあmk?頼む」

「はい」

氣絶した大男をmk?が引きずつていぐ、ちなみにこれも日常の一部だったりする。いや、普通じゃないだらけだぞ。

「じゃあ、やりましょうか」

「ええ、負けませんわよ!」

今日もまた賑やかなオルコット家です、と。やつこや明後日はリーラインの記念式典だつてか、今日から1週間はミニアさんがないから俺が管理してる。といつても全部の指揮権はセシリリアにあるんだがな、なんでも有事のさいは全て任せるとだとか。やっぱ出来る人は考えが違うね、用心にこしたことは無いことだよ。

「さあ、手加減しませんよ?」

「勝つたら今日はわたくしが夕食作りますわよー!」

え、それは防がねば!

5・いつもなオルコッシュ家（後書き）

あ〜、両親フラグ！

ちなみに名前呼びしてるのは仕事振りが認められたから・・・
と言う名の実はフラグ立てだつたり（展開の都合上によつまだ見せ
ません）

6 · とある朝の風景（前書き）

のどかだねえ···

6・とある朝の風景

「ふああ～～～、朝か」

午前5時、俺の一日の始まりだ。いつもはもつ少し寝てるんだがミリアさんが式典参加で不在のために俺が実質仕切らねばならない。

「mk?、並べておいて

「はい、マスター」

あ～、午前の仕事終わったらmk?の整備しよう。もしも の為にEXみたいにしよう、うん。

つてその前に窓開けなくちゃならないな、雇つてる人員が少ないし他の人は休ませたいから俺が率先してやる。

「それにしてももう一年ちよつとになるのか、早いな

俺がボロボロの状態で病院に運ばれ、ミリアさんに雇われて執事兼護衛をしてもう一年。思ひ返せば言葉にできないほどに助けてもらつた。

「一生かかっても返せないなこれは、つてやべもう七時だ！」

八時にはセシリ亞を学校に送らねばならない、しかも俺が起こすことになつてゐるんだよ！ 遅刻なんてさせられない、いや、いつもこんな時間だけどもさあ。

「おっはよう～、朝だぞ。起きろ～！ ふぐわ～」

「五月蠅いですわ、もう少し静かにできませんの！？」

うん、騒がしく起こしたから枕を投げつけられた。当たり前か、朝から元気が出るよつこと思つたんだがなあ。

「ホント、執事らしくない執事一位も頷けますわ」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてませんわ！まあ、護衛としては優秀ですが」

とふざけている暇も無いか、さつせとしなければ遅刻してしまつし。それにそんなことがあれば帰つてきたミリアさんにボコられる。それだけは勘弁したい、なにせ娘のことになるとあの細身の体からは想像できない力出すから。

「さあや、今日は味噌汁に納豆とたくあんに鶏焼きとほうれんそうのおひたしですよ」

「あ～、今日は納豆ですか」

誰だ、貴族らしくない朝食だ！つて言つたやつは、いくら資産があつてもいちいち高級なものばかり食べるわけないだろ。それに日本食ブームらしいから良じんだよ、味噌汁は気に入つてゐらしきし。納豆が苦手らしいけど。

「好き嫌いはダメだぞ、綺麗でいたいならしつかり食べる。いいな？」

「わ、わかつてますわ。まつたくもつ、卑怯ですわその言い方」

「なんか言つたか？」

「なんでもないですわ！」

なんだろうか、ここ数ヶ月俺と会話してるはずなのに語尾が小さくなることがある。今時はそういうのが淑女のたしなみなんだろうか、

俺はわからないから指摘しないけども。

「今日は音楽発表会が9時からなんですから、急いでください」

「8時には会場入りでしたわね、音羽、車の準備を

「はいわ～ー！」

え、なんで未成年が運転できるって？するわけないだろ、m_k?に任せせるんだよ。一応A1載せてるからそれくらい簡単だし。

「マスター、準備終わりました」

「行きますわよ！」

「おじ、三木？出してくれ

向かうは音楽発表会が行われるエルヴィンホール！

6・となる朝の風景（後書き）

あと2・3話で急展開の予定

さて、到着したはいいが・・・。Dの35つてどーじだ？親の代わりとして入ったはいいが、広すぎてわからん。

といつか小学生レベルの奴が親代わりに観客席にいるつてのも不思議な話だが。なになに、案内板によると、おおすぐそーじだ。

「ふう、これで落ち着いて見れる」

ふかふかの座席に座り、腕時計を確認する。そろそろだな、確か合奏でヴァイオリン演奏だったつけか？

いまだにこいついう高級椅子には慣れない、気持ちよくて寝ちゃうんだよな。今日は寝る暇なんて無いけども。お、始まったみたいだ。

中学クラスのグループの次に小学生クラスの順番だ、流石中学生と言つたところだった。

「それでは最後に『チゴイネルワイゼン』です

確かサラサーテ作曲1878年の作だったか、ギャグマンガから舞台まで幅広く使われる誰もが一度は聞いたことがあるはず。mk？にアラームで鳴らされたときは驚いたけども。

た～ら～ら～ら～～ら～ら～ら～

特徴的な始まり、うんなんともサスペンス劇場な感じ。おお、手さばきが上手くなってる。俺の場合はP Cかm k?で弾くから全然弾けない・・・別にいいさDTMで。

「お疲れ様、良かつたよ」

「と、当然ですわ！」

帰りの車の中で向き合いながら談笑する、付き添いで練習して良かつたな。終わつたあとは拍手喝采の嵐だつたし、できたらミリアさんにも聞いてほしかったな。まあ、録音はバツチリだしあとでメールで送るつ。うん、そうしよう。

「よ～し、じゃあ今日は久しぶりに腕振るつちゃうかな」

「お母様にも聞かせてあげたいですわ」

「ん、じゃあさつさとメール送るか、ちょい待つてな」

ケータイを胸ポケットから取り出す、このときめびこの行動を後悔したことは無かつた。

緊急ニュース速報が画面の下を流れる、そこに表示される『ローニアトレイン試乗車事故、生存者不明』の文字。

「どうしたのです、そんな蒼白にして」

「まあ、待て。まずは戻ろう。m k?、急いでくれ

落ち着け、まだ詳細は分からんんだ。いや、おそらく信じたくないという拒否反応からなのか、それとも突然すぎて感覚が麻痺していたのか。

「お嬢様！音羽さん！」

「わかつてゐる。セシリ亞、早く來い」

「なにが・・・・・・」

客間に入った瞬間、その場にいる誰もが口を閉ざした。テレビ中継される悲惨な事故現場を、陸橋の一部が砕けリニアトレインが地上13mから転落。炎上している光景を。

「そ、そんな・・・お母様・・・・・」

「待て、セシリ亞、氣をしつかり持て。まだ決まつたわけじゃない」

いや、誰もがこの映像を見て生存者がいると言えるわけがない。画面いっぱいに火の赤が広がり、今まさに燃えているのだから。車両は炎に包まれて黒煙だけが立ち上っている。

「チエルシーさん、セシリ亞を向こうへ

「はい、確認をお願いします」

結果は悲惨だった、1週間後に届いたのは両親の遺体が見つかってただけ。確認には俺だけで向かった、無論、セシリ亞に見せられる状態ではなかった。おそらく、一番大変なのは明日からだろう。

「ただいま戻りました」

重苦しい空気が客間を埋め尽くす、もつ誤魔化せない。言ひしか、
ない。

8・離別・決意・出発

「そう……ですか」

オルコット家本邸はいつも以上に暗い雰囲気が充満していた、だが、泣くことは許されない。

目前のテーブルにはミリアさんの自室にひつそりと仕舞われていた遺書がある。そしてその内容は思にもよらないものだった。

「もし、これが読まれているのなら私はこの世にいないでしょうねおそらくこれを読んでいるのはセシリアとチャエルシー、音羽君でしょうね。

あれこれ書く前に言つておくわ、ここに書かれたことは絶対に行うこと。

例え不満があつても必ず。

まずはセシリア、あなたはもう十分自分で立つて生きていけるはず。勿論、まだ子供のあなたには大変かも知れない。

それはわかってる、でも一つだけ。あなたの名、オルコット家を守り抜いてちょうだい。

おそらく遺産目当ての親戚が大勢来るでしょう、いや、もう来たかな?

ただ、あなたの帰る場所をあなたが守つてちょうだい。これが母である私からの最初で最後のお願い。

チャエルシー、幼馴染であるあなたにはセシリアの傍について支えてあげて。

酷かもしれないけど、あなたに教えたことを使って。
メイドであるあなたに頼むのは正直悪いと思ってる、だけど、どうかお願い。

音羽君、あなたは拒否してしまつかも知れない。

あなたの気持ちもわかるけど、残念ながら私が残したものではあなたのことを見つけることはできない。

私が生きていたなら護衛を頼めたのだけれど、右目のこともあるから。

あなたがこれを見た翌日、あなたを解雇して日本に移住させます。あなたには生きていてほしい、そのための手段なの。許してちょうだい、今のあなたを守れるほどの力が無いの。

「そ、そんな」

「まあ、そりやそつか。戸籍無し・記憶無し・右目は軍の兵器、隠すのが難しいか」

つまり、俺は無理をして守られていたということ。俺という一人の人間のために。

一年前にあつた誘拐事件、その時に発現した右目の擬似ハイパー・センサーらしきもの。

ドイツで生み出された技術らしい、そんなモノを持つてゐる人間を秘匿するなど普通の人にできるわけがない。

「わかりましたお母様、音羽、チエルシー。わかりましたわね」

『はい』

もし、俺が残ればオルコット家が危険に晒される。結局は俺が出て

行くしかない。

俺ができる恩返しはそれしかない、まだ幼いセシリ亞を置いて出で行くのは気が引けるが。

「気に病む必要はありません、あなたには生きていってほしい。それだけです」

「ツ・・それ言つたら卑怯だよ、わかつたよ。ただし、ここを頼むぞ」

「わたしもいます、心配しないでください」

手続きや肩な親戚を脅してスッキリしたとある9月の朝、場所はロンドン・ヒースロー空港第三ターミナル。一応あれこれやっている内にあつと言つ間に三ヶ月、まあ親戚共は掃除できだし大きい心配事は無い。頑張ってイギリスの代表候補生になつてやるつて言つてたし、あの日は本気だ。

「じゃあ、セシリ亞のことお願いします」

「お任せください、何があつても大丈夫です」

チエルシーさんがいるし、もう大丈夫か。あとは俺が生きていけるかだ。

「じゃあ、セシリ亞」

「ええ、でも、たまには連絡くださいね」

「わかつてゐるつて、元氣でな」

「はい！音羽もお元氣で！」

搭乗口へと歩く、振り返ると涙田のセシリアが手を振っていた。俺も振り替えず、おそらくもう一度と会えないだろう。一年という短い間だったが、一生俺はそこで過ぎた思い出を忘れないだろう。

最後にセシリアへ向けて敬礼をする、せよならセシリア。そして、ありがとう。

俺を乗せたジェット機が名残惜しそうに飛行機雲を作りながら空へと飛んでいった。

救つてもらったこの命、絶対に無駄にしない。必ず生き延びる！そう決意した俺を乗せ飛行機は遙か遠くの日本へと向かっていった。

8・離別・決意・出発（後書き）

次回から新生活の始まりです

9・主人公設定

如月音羽
きさらぎおとは

年齢（原作開始時）・17歳（年上）

性別・男

容姿・灰色がかつた肩までかかる黒髪（変装のつもり）そのためには女子と間違えられることがある。赤いフレームのスクエアレンズの眼鏡をかけている。基本的に左サイドテール。

身長・176cm

体重・測定不可

全身に怪我をし路上に倒れていたところをオルコット家当主、ミリア・オルコットに保護される。

身の安全のために匿われ娘であるセシリ亞・オルコットの執事兼護衛として暮らす。

二年後、セシリ亞の両親がリニアラインの事故で還らぬ人に。音羽自身とオルコット家の安全のために遺書によつて解雇、日本へ移住。

隣家の織斑家とは親しく、一夏やその友人の弾に音兄と慕われる。プレイしたゲームに登場したメタルギアmk?を実際に作つてしまふなど手先が器用だが、曰く「暇人の末路」らしい。

護衛をしていた経験から銃器の扱いに長けている。また、素手での格闘戦も得意で1対多は特に強い。

執事兼護衛を始めて一年経つたころにセシリ亞とともに誘拐された

時に、右田の空間展開型擬似ハイパーセンサーが発現する。（イメージは無音ゼロのあれ）

オルコット家に保護される以前の記憶が無く、今でも戻っていない。明るい性格だが、今でもオルコット家の墓には毎年墓参りしている。経験から人を助けることに躊躇が無い。セシリア曰く「執事らしくないですが頼りになる」らしい。

藍越学園受験予定（執事教育の結果中1時点では中学内容はクリアさせられたため余裕）
偶然か織斑家の隣家を借りて住んでいる。

9・主人公設定（後書き）

原作開始三年前です

「（ - 。 ）」

日本に着いてから2週間、そこまでは良い。俺今いくつだ？・・・14だ。中一だな、うん。

なんで顔文字かって？餞別として極秘ルートで配達され昨日届いたアタッシュケースにうん千万と入っていたからさ。現在間借りした一軒屋の居間にて荷物を片付けたところだ。

「そりやあ、なにかと中一は金がかかるだらつけどもさあ。こんなには必要無いんじゃないかな」

いやまあ、未成年の生活だから金は必要になるけどさ。ちなみに転校生として近所の中学校に入ることになつていい。まあ、今は先に今日の夕食を作らねば。現金は隠して・・・・と。

「マスター、不審な動きはありません」

ちなみにm-k?は足が着かないようだとオリジナルは持つてきた、もう一台は置いてきたが。

流石に一人では状況把握ができないのでスペコン並みの性能を持つしまつたm-k?に監視や調査は任せてる。例えば町内の監視カメラにハックして見張りしたりなど。

「ふう、あ、やべ

考え方をしながら野菜を炒めていたらなにか焦げた匂いが・・・うわわわ。

「あ～、勿体無い
「考え方をしているからです」

う、痛いところを突きやがって。その通りだけもとあ、誰がこいつ
いう性格にしたんだか。
ああ、俺か。まあいいや、明日から学校か。執事の教育で中学レベ
ルを制覇させられた俺はどうじゅうと？

ピンポーン

インター ホンだ、この時間に誰だらうか。

「はい、どちら様でしじゅうか？」

玄関の扉を開けると一人の見知った小学生がいた。名は織斑一夏、
有名な初代ブリュンヒルデの弟だ。
だが最近は姉の千冬が帰つてくることが少なく、一人でいることが多い。

「多く作っちゃつたから、おすそわけ」

「ん、またお姉さん帰つてこれないのか。だつたら上がりな

そのため、お隣さんといつことでたまに「うすむ」ともある。昨日
は鈴音リンインつて言う女の子といつしょだった。彼女の家が定食屋つてこ
とでたまに世話になることもある。

「ふ～ん、そうか。そりやあ良かつたな」

「うん！」

夕食を終えてソファーに座りながら談笑する、そういう一夏たちは来年中学生になるのか。そのときもこの町で暮らはせたら良いな。

「あ、もう少しひつ時だ。じゃあおやすみなさい。」

「おひ、おやすみ」

一夏が帰る、俺も明日への支度を終わらせて寝じこもった。

翌日、朝7時。

「良し、制服もよし。さて、頑張りますか」

鞄に道具を詰めて口締じを確認した闇の扉を開ける、陽光が筋になつて足元を照らす。

目指すは徒歩15分の並木野中学校。

「あら、あなた見ない顔ね」

「ん?」この人か、今日からなんだ

「転校生なの?」

曲がり角で会つたこの青い髪の少女、どうやら並木野中の生徒らしい。というか日本で青い髪とか、見たことないな。

「俺は、如月音羽。君は？」

「私は更識楯無、といふであなた男なの？」

う、それを言われるとなあ・・・。流石に本当のことは言えないが。

「まあな、髪型は・・・訳あつてな」

「そう、よろしくね」

そのまま握手をする、はて、更識・・・何か忘れてるようだ。まあいいか。

じつして、俺の中学生生活が始まった。

11・女尊男卑・立体機動

「初めまして、如月音羽です。」¹う見えても男です、よろしくお願ひします」

並木野中学校1年3組、教壇の前で俺は自己紹介をしていた。担任は岸川頼子先生、なんか今時の女性臭がするのは気のせいだらうか。

「如月君は・・・更識さんの隣で良いかしら?」

「はい、構いません」

む、朝に会った女の子か。まあ良い子やつだし問題無いか、それで早速授業を。

「ふふふ、改めてよろしくね樋無でいいわ」

「おひ、よひしへ。音羽でいいだ

うへん、更識でなにか忘れてるよつな。別にやうでも無かったよつな、いこや、授業に集中しなひ。

やあ、一時間目の数学が終わつたとこだよ。正直に云おひ。

「(簡単すざる)」

簡単な話、高校生に小学一年生の問題をやれつて言われてるよつなもの。執事教育恐るべし、そして退屈だ。

「音羽、いつしょにお食いべない?」

「ああ、良いぞ」

びつやら並木野中は昼食を持参の弁当か食堂で済ませるひじい、普通は給食じゃなかつたか?

しつかり準備はしてきたが樋無さんはどうなんだろ。

「友達もいつしょで良い?」

「ああ、できればたくさんの人と友達になりたいしな」

屋上に移動すると眼鏡をかけたポニテ女子が樋無さんの後ろを歩いてきた、何、眼鏡がぶつてるだと・・・!?

「布仏虚です、以後よろしくお願ひします虚とお呼びください」

「ひぢらこそ、虚・・さん。如月音羽です。気軽に音羽って呼んでください」

やはりかしこまられると呼び捨てできん、流石に癖は簡単には抜けないか・・・・・。

「・・・・・ちょっと昔の癖だ気にしないでくれると助かる」

「わかりました」

おお、虚さんは話がわかる方のようで・・・なんかお嬢様の付き人みたいに思えるのは氣のせいかな?

「あ、もう午後の授業始まるんじやね?」

「げ、あ、虚がない!」

ええ
氣づけば虚がない、屋上に取り残されたのは俺と楯無だけ。
い、背に腹は変えられぬ！

I can Fry!

櫛無を左腕で抱え、屋上のフェンスを飛び越えてダイブ。

地上20mからの落下、パラシュー無し、女の子抱えて。やれる、このワイヤーインカーがあれば！

バッシュンツ!!

「でえい！」

窓が開いている場所にア
ンカーを突き刺し、滑空移動。
降下、もとい落下しながら校舎の反対側。

いつ作ったそんなもの？暇なときに決まってる、というか授業に遅れるわけにはいかん。

の組み手なのよ」「うしー。

「俺に構わぬ先に行け！」

一
・
・
・
わ
か
つ
た
！

いやまあ、櫛無を先に入らせなきゃ俺が入れないからってだけなん
だよね。

とこ'うか、そのノリの良さ。嫌いじゃない。

その後、どうやら俺だけ遅刻だったらしい。0・1秒の・・・・ま
あ遅刻だけそれにはづくつてどうこ'うことだよ。

11・女尊男卑・立体機動（後書き）

こんなのが出してつていう機械があつたら感想やメッセージでどうぞ

ちなみに今回は「立体機動装置」

12・腕(ハラ)が違うんだよ(前書き)

スポーツと実戦は違うって話

12・腕(ハラ)が違うんだよ

「さあて、如月。初日から授業に遅刻とはわかつてただろ? な?」

体育館（6時間目）が終わり畠が出されたまま、柔道やつてたみたいで俺は教育的指導を始められようとしていた。

「今後気をつけます、申し訳ありませんでした」

ちなみにこの国語教師（名前は知らん）は生徒内でも嫌われている、教師内でもあまり良い評価ではないらしい。噂だが前の勤め先でやらかしたとか・・・。そして女は偉いから男は言うこと聞けって思考。

「さて、では始めよつか」

「倒せたら帰つて良いんですね?」

今まで勝てた人がいないらしいが、ギャラリーでも「勝てるわけがないヨー!」とか聞こえる。

なんでも性格には難有りだが格闘技の実力はそれなり、高校時代には全日本で2位だったとか。

知らんけども、これは言える。

「それだけの技術をこうこうとこで使つなんてね」

「ええい、教師に楯突くとは...」

つて直線的に突っ込んできたところを右サイドへ避けてそのまま足払い

「のああー？ぐふつー？」

倒れこんだところを後ろから首筋に3連続で肘を叩き込む、もつとでかい大男と戦ったときより随分と楽だ。

『おおおー！』

いつの間にか大勢になっていたギャラリーから歓声が聞こえる一応手を振り替えしてみよ、って岸川先生がすげえ手を振ってる。思つたより良い人か？というか目で「もつとやれ」って言わないでくれませんか、一応教師でしょ。悪い気分じやないけどもさあ。

「ま、まだまだああああああー！」

「俺に勝てたら這つこと聞いてやりますよ」

久しぶりに身体を動かすからなあ、ウォーミングアップも兼ねてやろうかな。

え、失礼だつて？教師として外れてる二流に真面目に相手するかよ、まあ遅刻したのは悪いと思うけども。

「つでつやああああああー！」

ラリアットをしてくるが、その腕を始点にし肩車状態になる。

「ごめんねえー」

「な、うおぎやあー？」

体重をかけ、振り子のように揺れて反動でバランスを崩させて倒す。あれだよ、バイオ5のジル戦でシェバがやる体術。名前知らんけど。あの乗つかつてバタンのやつ。

「ふう、もう良いですか？」

正直疲れた、精神的に。というか中1に負ける元有段者って……いやまあ、俺が教わったのが全部実戦用のばかりだからかも知れないが。

「如月君かつこいい！」

「転校生すげえええ！..」

「けしからん、もつとやれ！」

なんか混じってる気がするが、まあいいか。さあて、勝ったんだし帰ろうかな。そろそろ一夏を迎えるにいかねばならん。

「はい、さよなら」

後ろから飛び掛ってきた先生（笑）を両腕を掴み目の前の床（木製）に勢いを殺さずに叩きつける。もとい突き落とす。どうやらそれがトドメになつたのか動かなくなつた・・・・あ、氣絶してゐる。

「・・・じゃあ、みなさんさよなら～。また明日ね」

さあて、一夏を迎えて行くか。確か買い物するつて言つてたけど荷物持つの大変だらうし。

このときの俺はある人物に尾行されているとは思いもよらなかつた。

13・追跡者と食堂と俺の奢り

「音兄、手伝ってくれてありがとう」「なあに、お前がいつも頑張つてるからだよ。じゃあ気をつけてな」

近所のスーパーに学校を終えた一夏と鈴音ちゃんを迎えて行き、一夏の買い物に付き添つた俺は一夏と別れて空き地へと向かっていた。それにしても鈴音ちゃんは可愛いねえ、いやけしてそういう趣味じやないよ。

元気にしている子を見れるってのは平和な証だからねえ、あ、今日の夕食は鈴音ちゃん家に行こう。あそここのチャーハンは格別なんだよね。

「わあて、そろそろ出でてきたらどうかな?」

学校を出てからずっと尾行されていた、気づかないフリをするのは中々に骨が折れたが。

俺の言葉に反応したのか人影が壁から出てきた。意外な人物・・・では無かつた。

なにせ予想はしていたからな。

「ひとまず話は飯食いながらにしないか? 楯無

「あはは、それもそうね」

鈴音ちゃんの家、中華料理店「鳳凰」は俺のお気に入りだ。安くても多く、しかも家から近いときた。ならば通学路の途中だから忙しいときに下校中に寄れるところ。

「おつかれさん、チャーハンと天津飯一つずつお願ひ」「あいよ、ちよい待つてな」

「」飯系はもづ、某「一ポレーショ」ン会長みたいに「素晴らしき…」つて言えるくらい美味しい。

「で、なんで尾行したんだ？」

「いや、まあ。なんで強いのかなあつて気になつたから、あの子つて弟？」

厨房から中華鍋が振るわれる音がある、中華は火力だよね。

「隣の家の弟さん、お姉さんが忙しいからしてたまに世話をしてくれる」

「そりへ、といひでわあ「逸らすな」もづ、連れないわね」

もしかしたら……もしかして……とにかくやつぱり更識で何か忘れてるような。

「いや～、なんであんなに強いのかなあつて」

「え」

「どうしたの？」

「それだけ？マジで？」

え、え、ライ。なんだよ、警戒するほどのことじやなかつたのかよあ～あ。そうだよなあ、普通の中学生のレベルじゃないものなあ。この世界のどこに大人と張り合える中学生が居るんだよ。

ああ、俺か。つてそれじゃ意味無いじやん……てか、墓穴掘つちやつたよ。

「本気と書いてマジと読む、あ、この天津飯美味しいー!
「だらー、ここはお気に入りなんだよ」

興味本位ならば別に警戒しなくていいや、あ～チャーハン美味しい。
おまけのわかめスープがまた良いんだよね。

「そういえば音羽君って、何かスポーツしてるの?
「ん~、ちょい前まではバイアスロンやつてたな」

バイアスロン

バイアスロン（biathlon）とは、二種競技のこと。ラテン語で「2」を意味する接頭辞bi-にathlon（競技）を合成した造語。一般にはクロスカントリースキーと、ライフル射撃を組み合わせた冬の競技が有名だが、ランニング・自転車・ランニングを通して行う夏の「バイアスロン」（トヨアスロン）も存在する。

（Wikipe diaより抜粋）

「え、すじこーつてことは海外にいたの?
「まあな、英語くらいならペラペラだぞ」

事実、一年イギリスで暮らせば英語はできるようになる。できなきや生活できないもの、まあISOがあるからこそ日本語通じて良かつたつてのもあるけども。

「それにしてもやつ過ぎたなあれは

確実に学校内で話題になるだろ、なぜにあれだけ生徒が集まつたのかは不明だが。

というか、教師数人で「もつとやれ」のアイコンタクトはダメだろ。

「あはは、頑張つてね」

櫛無が笑いかけてくるが・・・俺の心はブルーだった、別に水色の髪だったからかけるわけではない。

「いやあまた明日ね～」

「おー、おーちゃん甚定お原し！」

さあて、明日も頑張るかな（目立たないよう）、手遅れな気がする

13・追跡者と食堂と俺の着り（後書き）

次々回はちょっと飛びます

14・同性の友人・・・求む（前書き）

オリキヤラ登場！

14・同性の友人・・・求む

「おひはよつ!」

「おはよつ・・・」

目の前に立つショートの朱髪、身長は俺より下の少女。ジャクリーヌ・ウェルキン、一学年生徒会書記だ。なぜか一昨日のあれを見て勝負を挑まれて返り討ちにしたら、懐かれたっぽい。

曰く「強い人には惹かれるものだよ」らしい、「ふ〜ん。

「でだ、ジャック。なんで俺は1学年生徒会副会長やつてんだろ? ね?」

「初日で日本馬鹿(あの国語教師のこと)を倒しちゃつたからじゃない?」

なんでも岸川先生の話によると、「生徒からの要望があくまで、『めんね』らしい。

まあ、あんなの見ればそつなるのも仕方ないのか・・・うん。どうやっても目立たずには暮らすのは無理らしい。

「別に受験有利になるから良いんじゃない?」

「ああ、せりやあとうか」

ちなみに俺は将来が約束された学び舎《藍越学園》を受験する予定だ、卒業後には地元密着の関連企業に就職できるところ。中一つぽい言い方するなって? 気にしたら負けだ。

「さあ、一時間田は体育よ。頑張つてね~」

「棚無・・・おまえなあ」

ところでのジャック（そう呼んでつて言われた）から聞いたところによると、樋無は一学年生徒会長らしい。道理で他の女子が憧れの視線の集中砲火をしているわけだ、その中に俺も追加されたらしいが。（主に男子から、あんまし嬉しくない）

「で、来週の中学校説明会に出ると。まあ副会長なら当たり前か」「うん、司会やってくれないかな？」

来年入学する小学校6年生に親に対する説明会、その時に必要な書類や体操着などの注文書なども渡される。つまりは来なきゃダメですよ！って奴だ。

「別に良いけども、お前は何するんだ？」

司会なんて夜会で十分経験があるから問題ない、あ～セシリ亞分が足りん。

膝枕して撫でてたあのときが懐かしい、まだ少ししか経つてないが。

「私は挨拶と受付「あたしは雑務」そんな感じ」「で、決める」とはあるのか？一年が

普通は二学年か、三年がやるものじゃないのか？聞いたことないぞ、というかジャック・・・俺の上に乗っかるな。書記が記録取らないなんてどういうことだ。だから俺が今話しながらメモってるわけだ

が。

「以外に万能ね、音羽」

「できることしかできなことよ、てか読心術使つな」

そつこいや一夏も何気に鈴音ひやんに考へてると読まれてたなあ、まあ顔に出てるからだけども。

たまに俺も読まれたりする、なんでだかなあ？

「大丈夫よ、セシリア分が足りない」とかは言つぱらはないから
「だ～、もつ言つてるじやんかよ・・・」

あ、つまりは一夏や鈴音ちやんが来るのか。せつかくだしいこと見せなきゃいけないな、後輩になるんだし。

「お～、じゃあわざと決める」と「特になし」は～。

「仕事決めるだけだもの、はい、計画表」

手渡されたのは薄い10ページあるかとこいつのプログラム表、
mjk

そのためにわざわざ集まつたのかこ、まあいいや。

「んじや、また明日～」

「私もついて～」

「勿論私も」

「わかつたからジャックは乗らないでくれ」

なぜかジャックが俺の上に乗るんだよ、まあ重いって言つたり血の雨が降りそつだから言わないけど。

あ～今日は夕飯どうしようかな。

「やつだ、今日は音羽ん家にお邪魔しよ～」

「ちよ」

「あ、それは興味深いわね。そつしましょ～」

その後、両腕を掴まれて強制送還された。その後なにがあったかって？

お察しください

14・同性の友人・・・・求む（後書き）

そのうちキャラリまとめやらねば

あ、こんなキャラ出してほしいとこの方はどうぞ感想でもメッセー
ジでもどん

15. ジジから音羽の連休でお送りします（前書き）

まともにシリアル書けない

15・I'IJからはず音羽の提供でお送りします

「あはは、凄かつたね
「一人暮らししてるなんてね」

この時期に転校してきた人物として情報収集を続けていたが、一向に出でこない。

一般人ならば個人情報などが出てきてもおかしくは無いのだが、そのデータも全て架空の物だった。

「じゃあ、また明日ね~、たてちゃん
「うん、じゃあね~」

ジャックと別れ、再び音羽の自宅へ向かう。あの戦闘能力は一般人が手に入れられるものではない。
まして、あの反応速度。もし敵に回れば更に脅威になる、
情報が無いというのが余計にそれを暗に示していた。

「よお、どうした? 忘れ物か
「あ、うん」

買い物袋を持つた音羽が近づいてくる、いつもの笑顔だが。今はそれすらも怪しく感じた。

不思議そつに自分を見つめてくる、けして敵意を感じないのだが。

「あちや、なら仕方ないか

難なく音羽の自宅へ再度入る、普通ならば空き地など目立たない場所なのだが。

生憎、近所に空き地は無かつた。樋無自身が焦つていたのもあるが。

「ふう、お茶で良いか？話はそれからだ」

すぐにわかつた、見透かされていると。まだ未熟とはいえ暗部としての技術を身につけたのだが、それを音羽は難なく見破つていた。やはり、只者ではない。自分の本能がそれを告げていた。

「おいおい、なんて顔してんだ。可愛い顔が台無しだぞ」「ふにゃあー？」

樋無が「忘れ物」と言つて戻つてきた、忘れ物なんてしていらないのだが。遂にか、とは思つたが正直ほんと心配はしていなかつた。まあ、ビビッているのを見て内心こぢらが心配させられたが。そういうや、まだ16代目が実質仕切つてるんだつたか。

「おいおい、なんて顔してんだ。可愛い顔が台無しだぞ」「ふにゃあー？」

田の前で緊張して今にも爆発しそうな17代目を落ち着かせようとしたら、なんか可愛らしい声出して驚いていた。もしかして、本番はこれが始めてなのか？

「まつたく、せめてもう少し鍛えてから挑めよな」「くう、いつから気づいたの？」
「ん~、昨日くらいに更識のこと思い出した」

「これは事実だ、といふかもやもやしてたから本気で2時間くらい考

え続けて「ああ、あれか」ってスッキリしたかったのが強いんだがな。良くあるよね、もう少しで思い出せそうなのに思い出せないもどかしい。

「先に言つておくけども、俺自身自分が何者かわからないんだよな」「え？ どうして？」

「簡単に話せば、道端に倒れていたところを保護されて育てられて。今は手ががありそうな日本に住んでるつてことだ」

未だにミリアさんに助けられる前の記憶が無い、ミリアさんがあれこれ調べていたけども有力な情報も無かつたって言つてたし。ただ、右田のこともあるしなにかしらあるのは確実。まあ、過去なんてあそこで暮らしたことだけあれば十分だがな。

「じゃあ・・・」

「だから保護してくれた人が架空の戸籍を作ってくれた、もちろん迷惑かららんように繋がりは消したからな。調べても意味無いのは当たり前だ、これでわかった？」

正直なところ、相手が「更識」だからここまで言つんだよな。敵視されたら敵わないからな、これで16代目에서도「安全」つてのが伝われば良いんだがな。もしダメならこの町から出なければいいから。

「寂しくないの？」

「寂しくないと言つたら嘘になるが、まあ、今が楽しいからな」

事実、日本に来てからは普通の中学生として生活ができた。イギリスでの生活も楽しかったが、一般人としての生活も中々だ。たまに変装してセシリアの様子を見に行くがな。誰だ、システムとか言つた奴。

「普通に接してくれるなら、嬉しいんだがな。悪いが俺が教えられるのはこれだけだ」

「ああ、そう。わかつたわ、まあそれだけで十分よ。邪魔しちゃうたわね」

「別に、心配事が無くなつたから問題無い」

さあて、こんじん匱いに行かなくちゃな。

16・説明会だつてさ

あ、樋無に俺のおまかなし性説明をしてから一週間。

「みなさん初めまして、並木野中学校説明会の司会を勤めさせていただきます。如月音羽です」

並木野中学校の学校説明会だ、もちろん司会は俺。結構な重大な役回りだが、これも経験だ。
お、一夏と鈴音ちゃんがこっち見てるな。あ、お気に入り五反田食堂の息子さんも来てる。

「さて、それではまず最初に紹介ビデオを見ていただきましょう」

さあて、と。スイッチはこれだけ?えいや。

～上映中～

なんか「楽しい学園生活、やらないか?」とか聞こえたのは氣のせいだ、きっと幻聴でも聞こえたんだよ。
良かった、ネタに気づいてる人いないや。

「さて、来年の春に来る皆さん。新たな学校生活はとても楽しみかと思します」

てか、さつきから一夏がすげえキラキラした目で見てくるんだが。
千冬さんが真剣な顔でガン見してきてる、正直怖いんだけども。

「是非、並木野中学校で樂じて二年間を過ごしてくださいねー。」

「これは正直な気持ちだ、そのためなら全力で働くことを思つてゐる。どうせなら全員で笑つて過ごしたいじゃない?」

「はい、いらっしゃりで運動着の採寸と注文書書き込んでください」「靴はこいつですよ~」

説明が終わり、ジャージや内履きの採寸などが始まった。ここからが教師の仕事だ、やつと終わつた・・・まあ達成感あるから良いか。楽しんでくれたみたいだし。

「音兄、すげえ!」
「中々だつたぞ」

荷物を纏めていたところに一夏と千冬さんが来た、一夏の頭を撫でる。

「やつぱ言つてもううると嬉しいですよ。一夏、待つてるからな?」「おお、音兄とこつしょの学校だから絶対行く!」「こいつを頼む、また忙しいものでな」

やつぱ姉弟では大変だよな、ましてまだこの年。俺だつてあそこで暮らしてなきゃ無理だしな、まあ、一夏相手ならこいつでもするけどな。

「任せてください。あ、もう手続き終わりました?」

「まあな、もうお前は終わりか?」

「ええ、機材は明日も使つんでこのままで」

「えへへ~」

「うお、あんまし動くなつて。まつたく」

一夏が肩車を要求してきたので、まあ、仕方なくやりながら帰路に着く。笑顔はやっぱ良いものだなあ、千冬さんも微笑みながら見つめてるし。傍から見れば仲の良い家族かもな。

「あ、そうだ。カラミタケ買つちゃつたんで。貰つてください」

「そりゃ、すまんないつも貰つてばかりで」

明日も良い天氣だと良いなあ

16・説明会だつてさ（後書き）

ストック一日目です

次回はちょい飛びます

17・温泉つていいな（前書き）

そのうちにタイトル変えます、執事してる期間短いので

17・温泉つていいな

「ふは～」
「ん～」

お寒い季節になつました。え、飛びすがだ？苦情はひひじやないよ。

「温泉はいいね～」

「そうだね～」

現在、雪が降る12月。近場の温泉に来ている、いや～銭湯が温泉つてのは嬉しいよな。

暖まるなあ、そつは思わないかね？あ～、そつこやセシコアも温泉好きだつたな。

『まつふう～』

お約束でタオルを頭の上に乗せて湯船でくつろぐ、今頃は千冬さんも女風呂でゆづくらしてんだらう。

いや～、温泉に入つてゆづくらができるって良こねえ。誰だ、爺くさ

いつて言つた奴。表に出る。

「音兄～」
「ん～どうした」

そつこや樋無は冬休み中にロシアで特訓つて言つてたなあ、なんでも最近聞いたんだが「国家代表候補生」らしい。もちろんHISの、なんで日本にいるのかつて聞いたり。「早こううに日本に慣れてお

くためよ」「らしい、てかその年で候補生とか凄いな。

「音兄の首のバー」「一ドット何なの?」

「ん、ああ。ちょっと落書きされてな、中々取れないんだよ」

これは嘘だ、流石に普通の子供に俺の身体のことを教えるわけにもいかん。というか絶対に教えられないだろ常考。一回スキヤンしたら「キヤベツ田替わり特価一玉58円」って出てきて凹んだがまあ、右目が関わってるのはわかるけどな。

「あはは、油性ペンドやられちゃってね」

「音兄、油断するからだよ~」

いや~、これは見せないようにならなければなあ。そういうやmk?にメール来てたんだよな。「候補生の養成学校に入りましたわ!byセシリア」って、元気そつで良かつたなあ。

「そろそろ上がるぞ、俺が「コーヒー牛乳を奢つてやる」

「やつたあ~」

「おいおい、走らなくともいいだ~」

はしゃいで更衣室に走る一夏を追いかける、滑るから危ないぞ。俺だつて一回経験がある、あれは痛い。

「ああもひ、ひら、大人しくしろ」

「は~い」

バスタオルで一夏の髪拭ぐ、この年の子供つてのは元気なものだからな。はしゃぎたいのはわかるが風邪ひいたらいかん。以外に体力持つて行かれるからなあ、一人暮らしの場合は致命傷だし。つた

く、動くなつてのに。

「おばちゃん、コーヒー牛乳一つ」

「あいよ」

番頭のおばちゃんに100円を渡し、それを受け取る。他の銭湯は120円だけじこには安いんだよね、しかも温泉だから一石二鳥。身体も暖まつたし、一夏は着替えて俺の隣にいる。

「ほい、あつちに座つて飲めよ」

「うん、ありがとう！千冬姉、音兄がくれた～」

休憩室のソファーに座つている千冬さんへと寄つていぐ一夏、千冬さんも嬉しそうな一夏を撫でていた。

滅多に帰つてこれないし、帰つてきても数日でまた仕事に行つてしまつ。千冬さんも中々の苦労人だ、その分生活スキルが欠如しているのも仕方あるまい。

「いつも済まないな、音羽」

「いえいえ、俺が好きでやつてるんですし。気にしないでください」

「ふは～、美味かつた」

「ふふ、そうか良かつたな。では帰るか」

「そうですね、一夏。荷物纏めておきな、ビン置いてくるから

「うん、わかつた！」

場所は変わり、雪が降る帰り道を三人で手を繋いで歩いていた。真ん中に一夏、右に俺、左に千冬さんだ。楽しそうに話す一夏の話を聞きながら俺達は雪景色の中を帰宅した。

17・温泉つていいな（後書き）

あ、タイトルとか良い案あつたら教えてくださいね！

18・見知らぬ女子には一度会つ（前書き）

短いです、はい

18・見知らぬ女子へ「一度会い

あれから二日、千冬さんはまた仕事へと出かけていった。ドイツから帰ってきても一夏を養つために大変みたいだ。

「う~寒い」

昨日は冷え込んだおかげで道路は凍りついていて転ぶし、それを近くの子に見られて笑われるし。

正直、冬爆発しきな感じ。いや、鍋が美味しいから無くなつたら困る。

「イギリスよりやっぱ日本は寒いわ、あ~冷える」

イギリスは気候の関係で暖かいんだよね、その分日本は四季がはっきりしててからめつさ寒い。

いくら上着着ても慣れなければきついなあ。

「わっ、避ける! 危ない!」

「は? 何?」

いきなり横から同じ年くらいの女子が道路を、滑ってきた。いや、正確には転んで滑つたが正しいか。つて、危ない!

「きやあ!」
「ふぬわあ!？」

真横から来たため、ビックリ受け止めようとするも結構な加速だつ

たためにそのまま倒れこむ。

うわ、背中が冷たい。なんとか受け止められたけど、これ、やばくね？

「む、むう～」

「だ、大丈夫か？」

俺が押し倒されている格好なんだよね、って早く起きねば。誰かに見られたら色々終わる。

「す、済まない」

どうにか一人揃つて立ち上がる、どうやら雪が付いているのは俺だけみたいだ。

怪我も無いみたいだし、まあ、結果オーライか。

「別に、怪我なくて良かつたよ」

長い黒髪、すらりとした肢体。どこか格好良い女の子っていうのがその子の第一印象。

ちなみに俺は髪を切つて短髪だ、って誰も知ったところで嬉しくないか。

「た、助かった。ありがとう」

「いやいや、俺は如月音羽。君は？」

見たことない制服だが、どこの学校の人だろうか？

「私は・・・雅^{みやび}、いきなりぶつかって済まない」

「良いつて、じゃあ俺はここで。雪道は気をつけてな」

慣れないと転んで骨折つてのもあリえるからな、町内会長のおばさんもそれで今病院通いだし。

「ま、待ってくれ。礼をさせてくれないか、流石にあれだけしておいてそれではどうもあれだ」

「気持ちだけで十分だつて、どうしてもつてんなら誰か他の困つてる人を助けてあげて」

善意というか、俺の癖というか。困つてたりしたら誰でも助けに入ってしまう、それこそヤから始まる職業の人が相手だろうが。まあその時は銃だされたけど、軽い脅しに引っかかるつてくれて助かつたが。

さあて、買い物行かねば。

今午後9時、買い物を終えて公園の前を通りかかると、雪がかかつた椅子に座っている雅を見つけた。

絵になるなあ、と思いつつ通り過ぎようとしたら。いきなり雅が目の前で倒れた。

「おい、大丈夫かよ？」

「あ、音、羽……」

それきり口を閉じ、意識を失った。額に手を当てると熱い、これは・

・・まつたくもう。

気を失つた雅を抱きかかえて、俺は一田散に自走へと走つた。

「つたぐ、熱あるなり[[ヨガ]]よなー。」

「む、くう。・・・」
「」

「俺の家だ、熱あるんならなんで歩き回ってるんだよ」

寝言だらうつか、「七国」だのなんだの喋つてたが。というか、親は何してんだ。具合悪い娘を出かけさせやるなんてなあ。

「お前ん家つてどこだ？電話かけて連絡するから」
「私に、親はいない。迎えは1週間後に来るが」

つまりは、昔の俺みたいなもんか。ずっとほほ無理だけ少しへりいなら大丈夫かな？

「だつたら、それまでここで休んでる。その様子だと今帰るとこ無いんだろ？」

「いや、だが」

「病人は素直に言つこと聞きなさい、安静にしてろ。いいな？」

「わかつた、一度もすまん」

その後、おかゆを食べさせ。寝かせた。既に時計は10時を回つて、いた、まあ、着替えさせて薬飲ませてとかやってればこうなるか。さあ～て、俺も寝るか。ベッドに寝かせてるから俺はソファーだが。
「おやすみ」

あ、明日の朝食の準備忘れた・・・
Z Z Z

1-8・見知らぬ女子にほー一度会ひつ（後書き）

オリキャラではありますんよ、しつかり原作キャラです。

ストック・・・やうやうやばし

19・結構落ち着かない

「む・・・朝か」

「おひ、おはよひ」

え、もう8時なのに学校はつて？12月、しかも気づけば27日。冬休みだから別に大丈夫なんだよね、しかも生徒会の仕事は無いし。それ以前に年越しで忙しい、雅がいるがこの時期だし、どうせなら迎え来るんだつたら一緒に鍋でも囲もうかと思つてる。

「具合はどうだ？」

「まあ、なんとかな」

顔の赤みも引いて元気そ�だ、医療用のナノマシンが効いたかな？（錠剤薬型という素晴らしい仕様）

ちなみにこれも暇を持て余した結果だつたりする、暇人つて凄いね。ウイルスや細菌を直接特殊磁場で倒すというもの。海外企業にライセンス生産させたら金が凄い入つて來てるんだよね、まあ余裕で一
人くらい養えるくらいに。

「あ～、こたつは良いねえ。はい、あ～ん」

「確かに良いものだな、つておい」

「まだちゃんと治つてないんだから、ほり」

「む、むう・・あ、あ～ん。・・・／＼」

ふむ、素直でよろしい。なんで顔が赤いんだ、熱はもう下がつてゐはずなんだがな。

まあ、卵かゆでも食べてれば大丈夫だろ。栄養付ければおのずと元氣になる。

「美味しいな」

「やうか、そりやあ良かつた」

料理作つてる人間にとつて、美味しいって言われるのを見るのが一番幸せなんだよね。また作つてあげたいって思つし、嬉しいし。

「さてと、大掃除しないとな」

「ならば私も手伝う」

「そうか？無理しなくても良いぞ」

「無理などしない、せめてそれくらいはやらせてくれ

どうやら、引かないみたいだな。仕方ない、はたきでもやつてもらうか。見せられない物もあるからな。ずつしりと重いあれとか、リンゴとか。炭素に4がつくものもあるんだよねえ。

「じゃあ、これでほこり落としてくれ

「わかった」

それで、さつきから「ふんー」とか「てやあー」とか言つてはたきを振り回す雅。めつや元氣になつてるなあ、良い事だ。

「へへへ

掃除機で落ちた埃を吸い取る、荷物とかもそう無いからすぐに終わるんだけどね。男の一人暮らしなんてそんなものでしょ、俺の場合は工具とかが結構あるけども。

「ふつ、こんなものか」

「そうだな、お疲れ様」

気づけば家の中の掃除終了、やっぱ一人だとすぐに終わるものか。一軒屋に一人で住んでるってのも結構大変なものだろうが、ああ、今は雅もいるな。

「これほどまでに家事は大変なものなのか」

「いや、掃除だけだし。それ言つたら他のどつなるよ」

炊事・洗濯・買い物・税金・家賃・学費・・・・まだまだあるぞ、この程度で大変とか言つたら生活できないんだけども。主に俺が、まああそこで生活スキルを身につけてたから問題無いけどや。

「む、そつか。他にあることはあるか?」

「いや、あ、風呂入る?まだ入つてないだろ」

汗かいてたし、いくら着替たとはいえ身体は洗つてないからなあ。え、服はって?お察しください。

「私と一緒にか?」

「な、なんでそうなる。使い方わからないとか?まさか」

いや、今の時代使い方分からない人はいないと思うが。アフリカの極地でも普通に使えてるご時勢なのに。

「ふつ、そのまさかだ!」

「そこ誇れるとこじゃないからな!?なんでそんなに自信満々なんだよー?」

しかも言い感じのどや顔つていう・・・分からぬのなら仕方ないかつてんなわけあるか！

「はあ、使い方教えるから一人でできませんかね？雅さんや」「残念ながら機械音痴でな、別に襲いもせんだろ」「いや、信用してくれるのは嬉しいけど。それとこれとは違うからな？」

カポーン、ガラガラ

「ほら、動くな
か、かけるなよ？いきなりザバーはダメだぞ？」

無視、あの頭につける皿っぽいのを買う必要なんてないんだ。我慢すれば良いし、それ以前にあの爽快感は捨てがたいからなあ。え、無理な奴は無理だつて？家は家、よそはよそだよ。

ザバー

「ふみや ああ！！！」
「おし、綺麗になつた」

俺自身、偽装のために髪を長くしている分。人の髪を洗うのは結構得意だ、なにせサイドテールにしてるからな。雅も負けないくらい長いが。というか、結局俺が入浴しての最中に入ってきたから結果的にいつしぇだよ。

「ハハハ、やめると言つたのに・・・」

「ハハしなきや泡残るだろうが、少しでも残つてたら大変なんだぞ？」

セシリアもそれで苦労してたからなあ、たまに一緒に入れつて「主人命令」でやらされたが。

「はふう、良い物だな」

「セツだろ、風呂はやっぱ良いよなあ」

一夏も風呂好きなんだよなあ、そのうち温泉巡りでもできたら良いなあ。あいつが高校生くらいになつてからだが。

その後、風呂上りにアイス食べたりしてゆつくり過ごした。だってすること無いんだもの、他にどうしろと？買い物も済ませたし、年賀状は裏ルートでオルゴット家に送つたし。一人でおこたにたれるしかないじゃないか。

「…………」

「ははは、寝つけたか。俺も寝よ…………」

ちなみに今、午後2時である。

19・結構落ち着かない（後書き）

まさかの風呂シーン……こんな頭で大丈夫か？

A・大丈夫じゃない、問題だ。

と言つ話は置いておいて、はい、まだストックです。体調は良くなつてきているので日曜には「ーストも更新できるかと。

あ、タイトル案は募集してるので、良いアイデアあつたらお願ひします

20・可愛い娘にはおしゃれをやめる(前書き)

えへ、リア充爆発しう回です

20・可愛い娘にはじめられをあわせ

「あ、朝？あれ、もしかしておいたでそのまま寝ちつた？」

しかも雅がなぜか抱きついてきてるし、どうじてこいつなった。

おこたの別方向で座ってたはずだが、いつのまにか雅が俺の方に…
・・熟睡してたから良かったが。なあ？

「性欲を持て余す」

まあ、それが言いたいだけだ。と、いうか、動けん。暑いし。うあ～。

「すう、くう
「・・・・・・・・」

しかも俺の白腫のサイドテールを枕にしてるし、動けないんだが。
てか今何時？・・・・・・・・おわあ、一晩あけたのにもう11時
だつてさ、何時間寝てたんだよ。

「お～い、雅。起きる～
「むこう・・・む」

眠そうに手をこすりながら雅が手を覚ます、できればもつと早く起きてほしかった。

といつか息がかかる距離だから、無駄にキドキしてしまつ。俺に某流さんみたいな耐性は無いよー？

「おはよ～」

「ああ、おはよ～。そんな時間では無いみたいだがな

さわひと朝食（昼食と兼用になつた）を済ませて、居間のカウンターに鏡餅を乗せる。

これくらいしか年越しの準備することが無い、あ、雅の服が必要か？いつまでも変装用の服を着せていらぬいし。

「私は要らん」

女の子なのに興味ないとはこれいかに、ジャックや楯無だつて校外の仕事のときは結構可愛いの着てたぞ。まあ、俺は機能性重視だからわからんが。これでも執事をやつてた身だ、仕立てくらいはできるだ。

「ま、それずっとつてわけにもいかないだろ。さあ行こう、今すぐ行こう、もう行こう。どうか、行くぞ！」

待て、いいから、私は……う！」やああああああああ！！！」

雅の手を取り、なんでも揃うと有名な駅前ショッピングモール「レゾナンス」へ向かう。

日用品からアウトドア、ブランドにスイーツ、家具や雑貨まで多種多様な店があるんだ。

昔から言つゞやないか「可愛い娘にはおしゃれをさせひ」つて、違ひへ細かいことは氣にするな。

それ以前に、モノレールの発車時間がギリギリなものもあるけどね。
どこかの借金執事が自転車で車に追いつくなら、俺は生身で追いつ
けるんだよ！気合があれば！

20・可愛い娘に仕事しねれをやがる（後書き）

す、ストックです。それからマジでせば二

21・考察したつていいじゃない、人間だもの（前書き）

明日くらいにタイトル変えます

21・考察したつていいじゃない、人間だもの

あれから2日、え、レゾナансでビッグなつたつて？似合つの買ってあげたけどなにか？

飛んでる？知るか、個人情報に関わるので（「」）

「イエーイ、ハッピー」「ゴーイヤー！…」

「い、イエーイ！」

なんか雅もノリが良くなつてきた、まだまだ硬いけどもね。といふか、引っ越してから初の年越しじゃね？

まさか見知らぬ少女と迎えることになるとは誰が予想できただろうか、俺は無理だ。

「ふむ、これが雑煮というものか

「そうだ、といつても俺流だけどな」

そういうや、同じ雑煮でも地域で違つちじいな。餅の形からだしまで、ちなみに俺は塩味にしてる。

餅と塩が合うと思うんだが、なぜか一夏は好かないらしい。ジャックは美味しい美味しい言って10杯くらい平らげていたけども、それを見て楯無と苦笑いしていたのは忘れられないな。

「塩か、なるほど。せっぱりして丁度良いな

「だろ？他の家では白味噌だったりするみたいだけどな」

調味料は基本的なものから地方のものまで揃つてたりする、もし転居することになつたらなんて考えていないくらいに。もしさうなつ

たらどうしようとしてるんだらうね。

そういうや、俺が訳ありの身体のはずなんだがここに来てからもう二ヶ月過ぎたんだよな。

「うへん、まあ良いか」

「？」

まあ、今はこの平和な時間を享受できれば良いか。

「おかわりを要求する」

「普通に言えば良いんじやないか？別にいいけど」

たまに軍みたいな言い方を雅がしてくる、一体どこに所属してんだ
こいつは？仲間とやりを一度見てみたいものだ。まあ、野暮な真似
はしないけども。

「もうこじで仲間と待ち合わせなんだ？」

「あの公園だ、財布を落としたのは不覚だったがな」

だからなのか、ってしつかりしてゐるイメージだつたけど以外につつ
かりなんだな。

「何か失礼なことを考えていないか？」

「いや、何にも……ひとまずその拳を下ろしてくれないか」

俺、何もしゃべって無いんだがなあ。たまに一夏も考へてると読
まれてるけども、俺も顔に出てるのか？このポーカーフェイス（自
称）は意味無いのか……今はやつてないがなー。

「自称では意味無いと思つが」

「俺つて顔に出やすい?」

「ああ、見事にな」

まあ、仕事モードに切り替えないとそりやそりや。だって普通にしてたら思考垂れ流しだもの、まあ困らないけどな。

「それはそれでどうかと思つがな」

なんか雅が言つているが、だつて常時仕事モードだと疲れるんだもの。たまには休みたいじゃん、今は仕事モードになるときは少ないけどさ。

「せういや、雅は俺的に理想の女性かもな

「はひー・ビ、ビツコウ」とだー?」

「いや、最近の勘違い女みたいじゃなくて対等に接してくれるからだ」

なんでそこで顔を赤くするのかわからん、最近は多いからなあ。ISを動かせる女性が偉いわけではなくて、ISが動かせる性別だから優遇されているだけだし。

まあ、世界中にたつた467機しかない兵器のおかげで女尊男卑社会になるのもおかしいが。

60億超えた人類の半分、その中のたつた467人しか乗れないんだ。しかも研究用に使われてるコアが多いから実働数はもつと少ない。それなのに女性だからって偉ぶる人が多い、百歩譲つても優遇されているならばそれなりの行動も求められるはずだ。

「なんだ、そういうことか。ドキドキして揃した

「ん?なんか言つたか

「な、なんでもない」

まあ、なんでもないなら詐索はよそう。余計な追求をするのは良くない、俺だって色々聞かれたら困るしな。さあて、する事が無いぞ

〜〜!!

21・考察したつていいいじゃない、人間だもの（後書き）

さあ、飛びます！飛びます！

22・早い別れ（前書き）

ふうへへへ～い、完全復活！

22・早い別れ

「ん、あの人気が仲間さん？」

「ああ、なにかと世話になつていてる人だ。不器用だがな」

1月3日、雅が言つていた「仲間が迎えに来る日」。彼女を助けたあの公園のベンチに新社会人くらいのロングヘアのスーツを着た女性が缶コーヒーを傾けながら座つていた、女性なのに堂々と足を広げているのはどうかと思うが。しかもスカートなんだし。

「礼子、来たぞ」

「あら、早いのね。ん、その子は誰？」

この人が雅の仲間か、というか何故俺が着いて来ているかと雅に「方向音痴でな、案内してくれないか?」と言わたんだ。まあ、ここの辺は地図見ても入り組んでわかりにくいからな。最初にぶつかつたときも片手に地図持つてたし、俺だつて最初にここに越してきたときは迷つたんだよねえ。

「ああ、命の恩人だ。倒れてしまつたところを助けてもらい、今日まで世話になつた」

「ふふふ、お優しいのね。礼を言つわ」

そう言つて名紙を差し出してくる、えと・・・・IS装備開発企業『みつるぎ』の涉外担当の巻紙礼子さん。まきがみ れいこ企業の人か、道理でスースがビシッと決まつていてるわけだ。さっきの大股開いてた人と同一人物とは思えないほどに。

「あ、いえ。当たり前のこととしたままで、これ名紙です」

名紙を出されたら交換するのが一流のビジネスマンの常識だ、自然にできるようにならなきや後々の商売にも影響が出るからな。ちなみに俺が出したのは海外の企業にライセンス生産させている医療用ナノマシンのオーナーの証明書を兼ねていてる。ちなみにオーナーとしての俺に手を出すと、委託先の企業の私兵が地の果てまで追いかけてくる。

「まあ、あなたが！人は見かけによらないわね」

「案外そんなものですよ、さてと。それじゃあ俺はこのへんで」

あんまし長い時間も居られないでしょ、企業の人だったし。どうやらいつしょに鍋を囲むこともできないだろ、企業は24時間365日止まらないからね。個人経営ならば別だろうけどな、まあ中学生程度が社会人を誘うのもおかしい話だから自重しよう。

「お、音羽。その、これ
「ん？」

なにか恥かしげに雅が青い菱形の宝石が付いたペンダントを渡してきた、これって雅がずっと身に着けてたものじゃないか。なんでそれだけ大切にしているものを俺に？

「私の、感謝の気持ちだ。受け取ってくれないか」

「・・・・・わかつた、元氣でな」

「勿論だ、それではな」

「おう、さよならは言わないぞ。またいつか会おう」

まさか俺が見送る側になるとはな、いつの間にか公園の入り口に横付けされていた高級車（あんまし詳しいの知らないんだよね）に雅

が先導されて乗つていいく。礼子さんが何回も頭を下げている、中学1年に頭を下げる社会人つて……俺も返しはするけどな。

「ありがとうございました、それでは」

雅が車内から名残惜しそうに見つめてきていた、なに泣きそうになつてんだか。いつもみたいに気が強そうにしてるよな、そんな顔されると調子狂うよ。仕方ないので笑顔で手を振る、どうせなら笑顔で分かれたいじゃないか。

「（音羽、ありがとう。絶対にお前のことは忘れない！）」

「（俺だつて忘れないさ）」

読唇術で最後の会話を終えた瞬間、雅を乗せた車が発車する。短い間だつたけど、俺は楽しかったぞ雅。
走り去る車を見送り、俺は踵を返して家路へと向かった。

22・早い別れ（後書き）

さあや、飛びますよ~

23・中学生生活についてやんなもの（前書き）

飛びました、以上、報告終了

そういえば氣づけばもう中2である、中学は早いと聞くが本当だつたな。転校してきたと思つたらすでに一年経過している……、いくらなんでも早くね?とは思つが、そんなものだひ。まあ、一夏や鈴音ちゃんが入学式で可愛かつたとだけ言つておひ。

「でだ、なんで俺が生徒会長になつてんだ?お前だろ参考」「まあ、投票結果がそつだつたんだし。良いじゃない」

そひ、並木野中学校の生徒会役員はどうぞの私立学園のように一般生徒の投票で決められる。もちろん自分から立候補することもできる、俺はしなかつたけども。だって、面倒だもの。それに教師からの要請で生徒会在籍も一年の間という期限付きだつたからな、それが過ぎたのだから特に用事は無いし。

「それなのにお前が他薦することあ、俺、お前に立場説明してるよな?」

「そうね~、でもただの一生徒を他薦しちゃいけないなんて規則に無いわよ」

こいつは何かと穴見つけて俺に向かやらせようとしてくる、ちなみに楯無は副会長だ。ついでにジャックは書記……なぜ一年のときと同じメンバーなのかまったくもつて不思議である。といふか、一夏がフラグメーカー過ぎて困る。今は関係無いか。

「(、・・・)」
「三九(>^>)」

AAで表示したら余計イラついたが、いつものことでもあるため諦める。某炎の天使が言っているが人生諦めも大事だと思うんだ俺はすでにこいつが何か笑っているときは特に。今までそれで何回も巻き込まれた……なんか数年後に今と同じようにため息ついてる未来が見えた気がする。そんな未来幻想、俺が打ち砕く！無理っぽい気もするけども。

「まあ、良いんじゃない？身の安全は確保されてるし」

「そりゃあ、な」

生徒の長になつたことでもし何かしらの組織が俺を襲撃しようものなら、委託企業から極秘に派遣されている屈強な兵士さんが見事なまでに撃退してくれる。まあ、警備員が丁度配置換えのときに入ってきたわけなんだがな。もしかしたらEISでも使わないかぎり無理かもしけんな。

「さあて、書類も書き終わつたし。帰るか」

「ホントに作業早いわね」

楯無が呆れた顔で言つてくるが仕方ないだろ、イギリスに居たときは書類20枚分とかを5分で片付けるとかしなきやいけなかつたらな。今となつては役に立つ技能だけど、習得するための地獄は思い出したくない。

「そうだ、今日は五反田食堂月一サービスの日だ！じゃあなーふぎや」

「どうせなら私も連れていかなさいよ、私だってお腹空いたんだかい？」

「ひ

楯無は何かと俺に着いて来る・・・・・別に悪い気はしないが、と
いうか窓からダイブしようとした人間の首を片手で掴むつて。く、
苦しい。

「わ、わかつたから。ぐ、ぐるじー」

いくらなんでも首を掴まれてぶら下げる状況ではどうしようもない、く、苦しい・・・酸素が足りない！酸素・・・

「そ、そりゃやつたあ・・・・あ」

卷之三

ちなみに生徒会室は、三階である。嬉しそうに両手を樋無が合わせたと同時に音羽が落下していったのは言うまでもない。

「・・・お前なあ・・・」

生徒会室から突き落とされた後、奇跡的に怪我することもなく復活した俺は仕方なく桶無の手を引き歩いていた。確実に18mは落ちたと思うんだ俺は。

「お前絶対反省しないだろー!」「『』めんね」

まあ、今から飯だつてのに本氣で怒ることも無いけどさ。それに楯^{いっ}無^なのイタズラ好きは今に始まつたことではないし、その度に俺が被^こ

害こうむつてるがな。本気で人が嫌がることはしないから嫌いでは無いがな。

「親父イ、業火野菜炒め定食」一つ頼む」

「あいよう、ありや。彼女かい？」

「学校の友人ですよ」

何故そななる、てか櫛無はどうして顔を赤くして・・・なんだろうか？まあ良いや早く丁度いい席に座ろうか、ちなみに月1のサービスディには全てのメニューが30%増量という素晴らしい日だ。まあ、それ以外の日でも良く来るけどな。何気に雅はかぼちゃ煮定食が大好きだったんだよね。

「あ、音羽さん」

「ホントだ！音兄～」

声がしたほうを向くと座敷席で一夏と弾が丁度夕食を食べていた、仲良いなお前ら。弾つてのは一夏の中学でできた友人で、俺が気に入っているこの五反田食堂の長男である。家族揃つて綺麗な赤髪である、弾は将来有望だな良い旦那さんになれるはずだ。

「おう、お前らは飯か」

「音兄も飯？櫛無さんもいつしょなんだ」

「まあな」

そのころ櫛無は

「櫛無さんもしかして？」

「そうなのよ弾くん、でも、ねえ？」

「あ～、頑張ってくださいね。応援しますよ

なんか一人が揃つてため息をついていたが一体どうしたんだろうか、一夏も俺と同じく首をかしげる。

まあ、さつさと配膳されたこれを食べるとしまじょつか。冷めるといけないしな。

何故か弾が俺と楯無をなにか優しげな目で見てくる・・・・?

「いただきま・す」

「いただきま・す」

なんで楯無は俺の隣に座つたんだか、向かいの席で良いだろ?」
お、やっぱ美味しいなこれは。

24・王確認騎士（前書き）

初……なにがかは？」自身で確認ください

ちょいグロ注意

P
L
L
P
L

とある平日の放課後、居残りで会計事務をしていた俺・・・別に何かしら狙つてるわけではないが・・・こういうのって男の仕事だろ?あ~エクセルめんどい、便利だけめんどい。

四庫全書

そりやあ、与えられた命令しか実行できないから自分で操作しなきゃダメだもんなあ。まあ、mk?はアメリカの軍事衛星乗っ取れるくらいの性能あるけども・・・ああ、疲れた。

卷之三

「ああせんせいからなんだよ!! もしもし?」

電話ボタンを押し込み耳に当てる、このものつそい大変な時間に楣あ
無は何の用なんだよ。

いやまあ、死んでた仕事を引き受けたのは俺なんだけれどもね、はて

更識櫃無は預かづて

ツ一

さて、作業再開するか。
えと遠征の費用は野球部とサッカーな、
バス代が一人……。

ＰＬＬ　ＰＬＬ

「だからなんだよ、仕事の邪魔すんな。くだらん冗談言ひ暇あつたら通常業務に戻れ」

『冗談では』

ブツツ　ツー　ツー

あいつは何してんだ、更識の使用人に演技させるなんてな。暇なら簪ちゃんと遊んであげろつての、あ、簪ちゃんつてあいつの妹な。同じ水色の髪で、女子には珍しくヒーローアーメが大好きな子だ。IS／VSで引き分けたのは記憶に新しいことじやねだ。

ＰＬＬ　ＰＬＬ

「ああむづーいい加減に『パーンシーキゃああーー』……何？」

電話越しに聞こえる銃声、演技でもなんでもない樋無の本心からの恐怖が込められた悲鳴。反響して響く音、錆びつこっているのだろつか、換気扇の動作音が聞こえる。

『早く来ないと嬢ちゃんの頭の風通しが良くなしちゃうよ~』

『どいだ、金はいくらいでも出す。教えろ』

どうやら、ガチであいつは誘拐されたらしい。不意打ちでもされたんだろうか、それといふら更識の者であつてもあいつはまだまだ発展途上だ。銃まで持ち出されたら下手な真似はできないだろうしなあ。

『8億だ、東野第三倉庫に来い、サツには知らせるなよ?』
「わかつた、約束するから手を出さないでくれ』

まあ、交渉相手が俺だつて時点で結末は見えてるんだがな。すぐさま窓から飛び降り、一路、自宅へと走った。渡すわけないが、一応持つていく必要はあるからな。

「來たぞ」

場所は東野第三倉庫、昔はかつての大企業の製品流通の拠点のひとつだつたらしいが今ではその面影も無くさびれたただの建造物に成り下がつている。目の前の貨物出入り口の大きな鋼鉄製の扉がところどころ腐食して穴が開いているのが証拠だ。

「おや、マジでこいつ來たぜ。よし、金寄越しな」

「先にそいつを返してもらおうか、10億持つて來たんだ。それくらい良いだろ」

テンプレないかにもな格好の男が5人リーダーの女が1人か、その内の2人の間に手足を鎖で拘束された樋無が涙目で居た。

一人がアタッシュケースを開き、確認していた。下手に動けば俺も危ないか、流石にMP7を4挺向けられてたらきつい。

「リーダー、マジで10億入つてるつす」

「やつが、なうもつ「用事は無いってか?」な、ぐあつ!」

右腕に巻いていた時計から、軍用対物ライフル「バレットM82」を召還し視界に入る全ての銃器を撃ち碎く。その間、2秒。

「交渉相手が他の奴だつたら良かつたのにな、その作戦」「てめえ、こいつがどうなつても良いのか!?」

銃器が使用不能になり恐怖のあまり手下らしき奴らは走つて逃げていつた、誰が逃がすかよ。

まあ、俺のこれがばれるのはダメだから手下は逃がしてやるか。流石に弾の無駄撃ちはしたくないからな。

「音羽あ・・・・・」

見たことのないほどに怯えている楯無の頭部にデリンジャーが当た付けられていた、リーダーと呼ばれていた男の顔は勝ち誇ったような顔をしているが・・・・・どうするといふのかねえ。

得意げに俺にデリンジャーを握つていた右腕を向けてくる女。

「残念だつたな小僧、少しばかりヒヤツとさせられたぜ」

「ああ、右腕はもつとヒヤツとしてるんじゃないか?」

なにせ肘から先は既に無くなつてているのだから。

「・・・・な、ぎやあああああ!—」

「王座から騎士の称号貰つたのは伊達じやないんでな

倉庫の奥、塗装が剥げて見る影もないコンテナにデリンジャーを握つたままの腕が深紅の液体が床のコンクリートを染め上げていた。

なんとか楯無に血はかかるつてないらしいな、そう狙つたからだけだな。

「動くなよ」

楯無が領いたのを確認し、枷となつていた合金製の鎖を撃ちぬく。いくつかは短い鎖が残つているがこれで動けるはずだ、もつとも派手に金属片が弾けていつたがな。

「音羽……怖かったよ、うう……」

「まったく、怪我は無いか？俺が来たからには大丈夫だ」

泣きながら楯無が走つてくる、まったく、心配かけやがつて。てか、俺より身長上だろうに・・・。

更識の17代目がこれでいいのか？さて、仕上げ行くか。弾装を入れ替え、銃口を女に向ける。

「お前の負けだ、大人しくお縄になりやがれ」

「ふざけるな、男に負けるだと！？しかもガキに・・・んなことあつてたまるかああ！？」

瞬間、視界が閃光に包まれた。思わず危険を感じ楯無を抱き寄せる銃口は向けたままだ。

光が拡散し、目の前には一機のIISがあつた。この世界最強と言われている、元宇宙用マルチフォームスーツ・・・その日本製第二世代の最高傑作「打鉄」が居た。防御力、汎用性の高さによりラフアールと並ぶ量産機だ。

「へつ、どうよこいつはーああ？」

面倒なもの持つてやがったなこいつ、そりゃあ生身でE.S.では普通なら勝てないからな。

製作者も言つてやがる「E.S.に勝てるのはE.S.だけ」ってな。とはいへ、最強なだけであつて完全では無いんだよね。それに見てみればどこのどの部位が緩んでいる、勝機は・・・ある。

「音羽あ・・・」

「なんて顔してんだよ、まあ、少し待つてろ。すぐにカタつける」「み

そう言つて俺は、いつもかけている赤縁の眼鏡を外して投げ捨てた。

24・王座認定騎士（後書き）

どうでも良〜い作品情報

音羽の現時点の資産は億単位

25・死神の瞳（前書き）

音羽キタ━━━━な話です

25・死神の瞳

「^{リバーズアイ}
死神の瞳起動」

イギリスでセシリアと共に誘拐されたときに発現した、空間展開型擬似ハイパー・センサー。

起動すると顔の前面右半分が黒い影に包まれ瞳^{ヴォーダン・オージェ}が紅く発光する、理論上はドイツで試験的に使われている越界の瞳と同じで動体視力の強化による相対的な反応速度上昇による戦闘能力強化である・・・らしい、実際は良く分からんがな。ひとまず「解雇」の理由である・・・。

「てめえの腕も貰うぞ！」

「残念ながら、渡す気は更々無いんでね！」

女が一人はあらうかと言うほどの近接ブレードを呼び出し、空気を切り裂きながら迫つてくる。その刃には女の歪んだ笑みが夕日に反射して映りこんでいた。

「・・・・・」

ガキイン

振り下ろされた凶刃は横から蹴り上げられ、音羽の身体を数ミリずれて地面へと突き刺さる。その一撃生身の人間に逸らされたことに驚愕の表情を浮かべてしまつた。それが今の音羽には貴重なチャンスであるといふのに。

「なつー？ つあぐうあー。」

首筋に冷たい感触を感じた途端、痛みを感じた。血は出でていないがシールドエネルギーが大量に減少していた、思わず腕を振るう。しかし、既に離脱していた首羽に拳が当たることも無く空しく空を着る音を響かせえるだけ。ハイパー・センサーで視認したのは大型のチーンソーを両手で構えた自らの腕を奪つた憎い少年。もはや、プライドなど消え去り音羽への復讐しかなかつた。それに致命的な損傷を負つていてることにも、既に打鉄のPICOは半数が損壊しているのだから。

「だったら、これはどうなんだよあーー？」

空中にIIS用サブマシンガン「メルティ」が光の粒子を形成しながら現れる、瞬間、銃声。

音羽の居た地点一帯が着弾により煙幕に包まれた、女は狂ったように歓喜の声をあげる。

「お、音羽あーー！」

楯無の悲痛な叫びが響いて反響する、女の銃口が楯無に向いた。

「残念だつたなあ、彼氏を追いかけていきな！」

「な、彼曰かな、が覚えは無いんがかれまあそれも悪く無いかも？」

瞬間、女の身体が地面に叩きつけられる。その後ろには工事用の小型パイルバンカーを両手でどうにか抱えた音羽が立っていた、音を立てて杭を撃ちおろしたそれには大量の銃創があつた。パワー・アシスト用のケーブルが切断され、只の金属の重しに成り果てる。

ズガソッズガソッ

「あ～あ、これも使い物にならなくなつたか・・・」

絶対防衛のエネルギー・シールドを突き続け杭先が曲がつたパイルバンカーを投げ捨て、女の上から飛び降りる。既にISは強制解除され、気絶した女がISスースを纏つた姿で倒れていた。それを見た音羽はどこからか注射器を取り出し、女の失った腕の切断面へ針を刺す。中身の液体が注入される。

「それは？」

「再生促進医療用ナノマシン、こいつの腕も半年で元通りだ」

流石に人の腕を奪うのは嫌だからな、とはいえ苦しい思いはしてもらうがな。さて、と。早めに失敬しないと警察が五月蠅くなるな。わざと証拠隠滅してこいつをどうにかしなければいかないな。

いつもはやる気の無い顔で渋々仕事をしているような音羽が、自分の命も省みず助けに来てくれた。

それこそ犯罪者に怖気づく」と無く、華麗に撃退して。

「ほひ、帰るぞ樋無」

手を差し出してくる彼は今、この世界の誰よりも格好良く。そして、一人の少女に淡い恋心を抱かせた。

「うんー」

「ははっ、そう来なくっちゃー。」

この日、17代目更識樋無は人生で初めて恋をした。

「…………っく、ああ？ 生きてるのか」

目を覚ました女が最初に感じたのは左手に握られた紙切れだった。それを倒れこんだまま聞くとそこにある一文と住所が記されていた。

『アレンティア薬品 生活には困らないだろうからココ行け。話しあは通したから手下といつしょにな、右腕は半年すりや治るからそのつもりで。サツには通報しないから安心しつけ see you ..』

「あん？」十一寧に包帯まで巻いてやがる……けつ、お節介な男だぜ。不思議と嫌な気分じやねえけどよ

25・死神の瞳（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽の腕時計^{ダニー}は擬似量子化格納領域装置、ある程度の物は仕舞える。ライトな四次元ポケット、カツプラー・メンから対物ライフルやお湯が入ったやかんまで入っているらしい

26 特別な存在（前書き）

最後の台詞の意味が分かる人は居るかな？

「あの〜、なぜ俺がここに呼び出されているのでしょうか」

誰もが眞面目に授業を受けている平日火曜日、ある夏の日。見知らぬリムジンに「更識の者よりお話が」と言われ任意と言う名の強制でとある大豪邸へと連れて来られた。目の前には16代目権無が鎮座していらっしゃる、放たれる気迫でさつきから手汗が止まらない。できるだけ平静を装っているが・・・多分、いや、確実に見破られている確信があった。

「ふふ、別に緊張しなくても良いわ」

「は、はあ。わかりました」

やつぱり見破られていた、分かりきったことだが実際に言われると結構悔しいな。こういう分野に関しては向こうがアドバンテージ大きいけども、なにせ対暗部用暗部なのだから。17代目は全然だつたがな、まあまだこれからだろう。

「いえね、娘を助けてくれた騎士にお礼が言いたくて」

イギリス王室で10年に一度極秘裏に選ばれる優秀な人物に与えられる国民栄誉賞のガチ版みたいなもの、特に戦闘能力や頭脳・電子機器技術などイギリス版マルチ分野ノーベル賞みたいなものもある。団長や衛兵など分野それぞれに様々な称号があるのだが、その中でも単機での戦闘能力が認められた人間に与えられる。たかだか小学生程度が、と内密に騒がれたらしいが俺がそれに選ばれた。与えられた人間は軍で言う中佐階級レベル権限があるそうな・・・何かあつたときに限るが。

「そこまで知っていますか・・・」

「裏では有名よ?今は所在不明で死亡説まで出てるらしいけどね」

死亡説つて・・・そりゃあ痕跡消して日本に来たけどさ、向こうの戸籍も別人になつてるし。まあ、当たり前っちゃあ当たり前か。セシリ亞には年賀状とか裏ルートで送つてるから大丈夫だし、死亡扱いのほうが助かる。

「それでね、お願ひがあるの」

「な、何でしようか。無理なものは無理ですが」

息を一度吸い、16代目がはつきりと喋つた。その驚愕の内容とは・・・・・!

「あの子を住ませて守つてくれないかしら、勿論バックアップはするから」

「あの、俺が訳有りの身体とか狙われてる可能性があるとかそちらへんの事情分かつて言つてます?」

うなじにあるバーコードに、発見時の大怪我に右目のこれ。中二過ぎる感じがするが、ミリアさんが正体不明の組織から俺を守つてくれていたことからもわかる。確實に俺は厄介な存在だと、それに裏の更識がそんな簡単に言つて良いのか?

「安心しなさい、更識が全力で協力してあげる。といつか、死亡したつて流れてるから裏でももう安心できるわよ?まあ、日本にいれば大丈夫だし」

「はあ・・・ひとまず考え方させてください」

「いや、どうだとしてもすぐに返事できるわけがない、といふがこんなのが暗部に対抗できるのか?とか思いながら帰路についた、時計を確認すれば既におやつの時間を過ぎていた……うわあ。

「それでは音羽様、お待ちしてありますとのことです
「は、はい」

燕尾服を着た若い男の人が頭を下げ、リムジンを運転しあっていく。思わず癖で自分も腰を曲げて礼をして見送った。

「どうじよつかねえ

考察しながら空中に召還したヤカンからカップに紅茶を注ぐ光景はシユールだったに違いない、一杯飲みながら考える。「うむ……。
。

「どうしたの?」「いや、樋無を住ませるのは困らないんだが。俺にメリットもあるし、でもあいつが嫌がるだろうし。年頃の女の子がいくら知り合いとは言え男と一つ屋根の下に居るってのもなあ

「別に困らないよ?」

「そうか、本人が良いなら良いいかなあ……つておわあ!？」

突然肩に回される華奢な腕、首筋にかかる吐息。聞きなれた声、これは……。

「お前が、驚かすなよ」

「ふふん、それが見たかったのだあ」

「こいつは・・・・・・まつたく、心臓に悪いっての。まあ、嫌な気持ちにはならんけどや。

「で、どうする?」

「もちろん、お世話をになります!」

ビシッと敬礼する樋無、もとい新たな同居人。まあ、頑張りますか。毎日が騒がしくなりそうだけども。

「あ、そうだ。音羽」

「あん?」

そおっと樋無が耳元で囁く。

「更識美月、さらしきみづきそれが私の名前。覚えてね?」

この日、俺は彼女の真名を知った。

26 特別な存在（後書き）

どうでも良い作品情報

どうでもできたての紅茶が飲める音羽、お茶菓子も常備しているとか

27・思いを馳せたら良い結果にならなかつた（前書き）

なんと、PV700000越えにユニーク600人越えてました。な
にお祝いしたほうが良いですかね？

27・思いを馳せたら良い結果にならなかつた

「いやー、新婚夫婦みたいね」

「お前の将来の夫に同情するよ、大変そうだ」

上機嫌で本家から送られて來た絶好のスニーキングアイテム、もといダンボールの荷を解く美月（一人のときはそう呼べと言われた）。出てくるのは某蛇さんでは無く、服や下着にティーカップから女の子らしい熊の人形まで。

「荷物多く無いか？」

「音羽が少ないだけよ、あれだけの荷物なのになんで一軒屋借りてるんだか」

えーと、俺のは家電一式に服や銃器・・・あと工具だけ。確かに一軒屋借りなくとも良いような量だな、実際は一階の一部屋が銃器で埋まってるんだが。それでも空き部屋が一つある、もう一部屋は俺の寝室だが。

「うん、二階の部屋が一つ空いてるからそこド良いか？」

「良いよー、あ、タオルはそっちにお願い」

「了解です」

脚部のタイヤを回転させ、ワイヤーホームでそれを持ったm-k?がウインウイン言いながら美月が指した方向へとタオルを持っていく。音羽は食器棚にティーカップなど割れ物を仕舞つていた。

それから一時間、荷解きし片付けが終わった。居間のソファーに座り音羽は寄りかかつたまま燃え尽きていた、心なしか色が無い気がする。まあそこはギャグ補正ということだ。

「夕飯何が良い?」

「なんでも~」

それが一番困るんだが・・・と良いながらマカロニーを茹で始める音羽、しつかり青いジャージの上にオレンジのエプロンをしていた。菜箸を片手にホワイトソースを作り始める、美月はそれを見て色々諦めた。

「どれだけ手馴れてるのよ・・・」

「ん、ああ。厨房でも少しあつたからな、さあて今日はグラタンでもやろうかな」

慣れた手つきで器に盛つていき、最後にチーズを乗せオーブンに入れる。少しすると香ばしい匂いが部屋の中に広り始める、音羽はそれを横田に食卓の準備をしていた。

「私も負けられないわね・・・」

「できたぞ~」

できたてのグラタンが湯気を昇らせる、チーズが溶けて丁度良く広

がっていた。食欲をそそる香りが鼻をくすぐる。「う、本家で食べたのより良い匂い。音羽って何でもできるのね、といつかこの悔しさが半端ないわ。

「さあ、召し上がり！」

「い、いただきます・・・・・はぐう！」

いきなり人の作ったグラタン食べて「はぐう！」とか何だ、そんなにまずかったかな？美味しく作つたんだが・・・・一時期は化学兵器やダークマターできたこともあるんだよなあ。それが今はしつかりした奴を出せるようになった、セシリ亞・・・なんかまだ化学兵器作つてそうだなあ。

『クシュン！・・・誰か噂でもしてるのでしょうか？』

『またこの化学兵器を作つたことではないですか？ いまだにこれでは音羽さまも泣きますよ』

なんか、相変わらず手料理を作つてるような気がする・・・・・。
チエルシーさんも大変そうだなあ、いつそのことメニュー送るかなあ。オルコット家人間がアレなものしか作れないったら大変だ・・・・考えたらすげえ心配になってきた。

「どうしたの、いきなりそわそわしだして」
「いや、ちょいと元主人のことが心配になつてな」

「なに、そんなにたよりないの？」

「いや、ただダークマターを作つて無いかと思つてな」

「…………そんなにひどいの？」

「ああ、見た目は最高なんだけど。その分味がぶつ飛んでて」

いつだか食わされたオムライスは見た目はもつ高級レストランのそれでしかも半熟だったんだ、でもチキンライスがタバスコや唐辛子で色付けされてて（「）

一通り説明すると、美月が顔を引きつらせながら苦笑していた。まあ、そうなるよな。

「なんか、音羽がそうなったのがわかつた気がするわ」

「そうか、そうだったら嬉しいよ……」

はあ、とため息をつきながらも談笑しながら楽しい夕食の時間は過ぎていった。翌日の朝、一夏に冷やかされたのはまた別の話だ。

27・思いを馳せたら良い結果にならなかつた（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽のオーバースペックはほぼ必要に駆られた結果

お知らせ 24話と25話少し修正しました。

28 · 生徒の長は大変なんだよな（前書き）

へーい、お祝いで何しようか迷ってる作者です

28・生徒の長は大変なんだよな

「おはようーはー、おはようー。
おはよハジマモーす！」

とある朝、校門前で俺と美月にジャックの生徒会三人で朝の挨拶運動中。なんで風紀委員がやらないんだ?

ちなみに遅刻者には生徒会長から嬉しい特別指導→近接格闘編へらしい、なにその壮大な物語っぽい感じ。
というか俺に許可とらずにそういうの決めるなよ、なんで副会長のほうが権限あるの?ああつ、なんでギリギリだからってそんな顔で走るんだ!

「だつて、ねえ?
「え、いまだに初日のあれが響いてるわけ?
「そうだよ~」

転校初日、学校内の嫌われ者教師を組み伏せたのだ。教育的指導で組み手をさせられて、勝てたら終了というルールで・・・勝つたんだよね。しかも不意打ちされたのも癖で反撃したし・・・まあ、逆の立場だつたら俺もそうなる。

「まじか~」

そのせいで、交番から警官呼んでの講話では俺が生徒代表で本職の人と手合わせさせられて防犯教室じゃなくて生徒会長VS警官の試合に成り果てたし。付き添いの警官一人は上司であろう警官を応援して、生徒や教師は俺を応援すると言つシユールな状態になつたし。まさかの教育委員会の人まで巻き込んだ2時間に及ぶ白熱した試合

だつた・・・・・この学校大丈夫なのか？

「まあ、良いじゃない。発言権が上がったし」

「そりゃあ、それは助かるけどさ」

もしかしたら国内では生徒の要望が一番通りやすい学校なんじゃないか、教師側も生徒が問題起こさないから話し合いもそれなりに開けるし。というか、学校内では男女平等な感じになってるし・・・。まあ、就任演説でそういうことを言つたのもあるのかもしけないが。

「そういや、音羽の夢つてそれだっけ？」

「まあな、早い話が一人みたいな理解ある女性が増えて欲しいってこと」

「あはは、それには賛成だね～」

放課後・・・・生徒会室で要望書を吟味していた。もちろん全員で。

「『『消えろ、イレギュラー！』』『匿名希望』・・・・却下、てかネタに走るな」

「『『アイス！アイス！』』『青いマフラー』』こつちに要望されてもねえ・・・却下」

「『『ネタが浮かびません』』『G』自分でどうとかしてよ～」

緩い分、じつこつとこでふざけてくれる愛すべき生徒たち。別に怒らないけど、要望じゃなくて相談になってるじ。てか、関係ないのも混じってないか？

「『エアーマンが倒せない』『匿名希望』俺だつて無理だつたわ、頑張れ」

「『3分間だけ待つてやる』『某大佐』どう考えても3分過ぎます、ありがとうございました」

「『起動してもらえませんか』『ネギ』待つしかないよ～」

『はあ・・・・・』

まともな要望が無いぞこれ、てかふざけ過ぎだろ。ネタばっかりとかいい加減にしろ、もう少ししまともな要望は無かつたのか。この学校の生徒にまともな奴はいないのか、どうなんだ。

「『友人が他校の生徒にいじめを受けてるみたいなんです、私は無理でした。どうか助けてあげてください！』『西本愛美』いじめだと？ぐだらんことをする奴がいるもんだなあ」

まあ、勿論動くけどな。じつこつ時のために要望書を受け付けてるんだからな、明日にでも本人に聞いてみるか。

「つまり、相手は高校生だと? ふ~む」

いじめられているといつ少女、陣内良子さんに事情を聞いていた。なんでもハーフらしく、金髪碧眼だとついで会つたびに空き缶は投げつけられ、あまつさえ先日は小石を投げつけられて頭を少しきつたとか。ひどい人種差別だこと、しかも相手は日本人の女子高校生。そいつらが言つには珍しいからって可愛がられるのが気に入らないらしい。

「で、そいつらは有名な不良グループの頭だと……厄介だなあ」

「しかも、明日の午後6時に川原に呼び出しされていて5万持つて来ればやめるつて……」

そういうタイプの輩つて後からまた要求するんだよなあ、てか、親はどうしてんだ? 娘がそういうことしてるんだつたら氣づくだろ、ただでさえそういうことしてれば田立つの!」

「しかも、そのリーダーの人の親はヤではじまる職業らしいよ? 「……なんて厄介な、そう簡単に手が出せないじゃんかよ」

後が怖いつてやつだよねえ、一般人だつたら殺されるだ。しつかりした証拠なきや警察に突き出せないし……どうするかなあ。あ。

「おし、じゃあ良子さん。その日、約束どおり待ち合わせ場所に行つてください」

「え、ちょっと。音羽! ?」

「まあ、安心してください。どうにかして見せますよー。」

28・生徒の長は大変なんだよな（後書き）

もし原作までぶつとんでも気にしないでね

どうでも良い作品情報

音羽は普段姿は男の娘（黒髪サイドテールに赤縁眼鏡）

29 結果 (前書き)

後半がつきました . . . orz

午後6時、とある川原。

「おし、約束の5万だ」

「な、ないです・・・・・」

陣内良子は音羽に言われたとおりに来たは良いが、中学二年に5万の金額など用意できるわけもなかつた。
もちろん、相手の女。この付近では有名な不良グループのリーダー、
版内芽衣子が納得するはずもない。

「ああ？ 無いって、はいそうですかってなるわけねえだろ？ がよー...」

「まあまあ、そこはどうにか勘弁してくれませんか？」

良子のポーテールに手が触れる瞬間、その腕が何者かに押さえられる。

「そこまで、つてどこか。ギリギリ間に合つたな」

「てめえ、何者だ。邪魔すんじゃねえぞ！」

腰まで届く黒のサイドテール、見透かすように赤縁の眼鏡の奥に鋭い瞳があつた。まだ若い、並木野中の生徒であることしか制服からはわからない。

「いえ、うちの生徒が虐めを受けているところじとじで。」
「じとじで。してゐつて言つたらどうなるんだよ？」
「次第です」

「へつ、『苦労な』つて。してゐつて言つたらどうなるんだよ？」

瞬間、その少女の顔から笑みが消える。

「しかるべき処置、この場合は恐喝と言つ」とで法に訴えますかね」

「させると思うか?」

「まあ、これでも言えるでしょつか。ね? 権三さん」

少女の背後から出てきたがつしりした体格の男性、いかにも親父イ
ミたいなこの人は版内権三。版内組の組長であり、芽衣子の父親で
ある。ちなみに表では版内建築の会長である。過(こ)しやすく、安価
だと評判だ。

「親父! ? なんでここに」

「この坊主が教えてくれたんだよ、お前がちょいと人様に迷惑かけ
てるつてな」

「髪の色がなんだ、目の色がなんだ。お前だつて昔は友達にも居た
じやねえか」

「いたさ、でも、裏切られた。所詮外人なんてそんなもんだ」

権三さんに話に言つたときに聞いた。なんでも、親友とまで呼べる
ほどだつた友人。そいつに言葉巧みに誘導され強姦まがいのこと
をされそうになつた。それがいまだに心に傷として残り、異常なま
でに外人に拒否反応。特に金髪碧眼、聞くに堪えなかつたが・・・。
そういうのがあるからって許されることじやない。

「そ、そつだつたんですか・・・」

「ああ、そつや。第一、あたしに近寄つてくる奴も気に入らねえ」

「なあ、芽衣子さん。あなたは、やつやつしたとやうじつ逃つた？」
「…………」

「芽衣子、俺が来た途端に田を逸らしたよな？それが答えか？」

沈黙、ただそれだけがその場を埋め切へす。

「ああ、自分でもわかるわ。ただの八つ当たりだつて」とひりこ、
でも、無理だつた

「くつ、わかつてひついたなんてなあ。まあ、仕方ねえ。四千せ
ん、じれで許してやつてくれんか？」

芽衣子の頭を押さえつけ、親子ともども頭を下げる。世間一般には
土下座と言われるものだ。

「あ、いえ。芽衣子さんのが自分でわかつてゐなうそれでいいです」「
…………、今まで済まなかつたー」「それで許してもううつむかへ
思わん、何でも命令してくれ」

芽衣子がさきほどまでのきつこ田ではなく、一人の少女としてまつ
すぐ良子さんを見据える。

「じゃあ、私とお友達になつてくんだぞ」「
あれだけの！」としたあたしが？」「
ええ、もつ一回、信じてみませんか？」

良子をさきこ女である、と悟ったのは俺だけではなかつたはず。

「ひとまず、
一件落着か

29・結果・・・・・(後書き)

えへ、あともう一回更新できるかと、ついでに

30・夏ならぬ（前書き）

相変わらず季節感の無いGです、もつ現実は秋ですが氣にせぬH
ぞ

「音羽さん、このまではコンロの準備終わりました！」

「おう、じゃあ遊びに行っていいぞ簪ちゃん」

今は夏、季節感無いつて言われてもここは夏なんだ。現在、美月・一夏・簪・鈴・千冬さんと俺のメンバーで海に面したキャンプ場にいる。なんでも一夏と鈴が髪のことで弄られていた簪のことを助けたそうな、男らしいねえ。鈴音ちゃんは女の子だけど。

「すまないな音羽」

「いえ、いつもお忙しいみたいですし。このまことに相手してあげてください」

久しぶりに休暇で帰ってきた千冬さんを一夏と一緒にしてあげるつもりも目的なんだよね、もちろん夏だからってのもあるが。

「音兄、終わつた~」

「あたしも~」

二人に頼んだのは水汲みだ、貯蓄しておかないと使うときに一度手間だからな。ちなみに俺はテントを千冬さんと美月で組み立ててる。もちろん部品状態を量子展開したがなにか？

「おし、じゃ三人で遊んできていいぞ。怪我はするなよ?」

はーい、という元気な声を受けながらロープをくぐり付けたピックを地面へと打ち込む。これをしつかりやっておかないと風で飛んでしまう。流石に寝床が無いってのは困るでしょ。というか、千冬さ

んの方向からガスツ！とか聞こえる……どれだけ力入れてるんだ……。

「終わりました？」

「ああ、深めにしたから大丈夫だわ」

「オッケーだよ」

テントの建設……間違つてはないな……も終わり、あとはまあ……遊ぶ？というか急遽これを企画したのも理由がある、俺と一夏しか知らないが鈴音ちゃんの家の空気が変わったからだ。だから気分転換も含む、どうせならジャックもと思つたがあいつが「夏はドイツで妹分をね～」とか言つていたから無理。

「さて、俺はビーチするかなあ」

なんか千冬さんが残像残して走つていったんだが、しかもご丁寧にキヤストオフして……もちろん水着は着てたぞ？若干、鈴音ちゃんと簪ちゃんがびっくりしてたが。ひとまずブラコン。いくら滅多に居れないからってそこまでか。シャツとズボンをご丁寧に畳んであるから余計に。

「俺も泳ぐかな」

「じゃあ私もそうしようかな」

え～と、服を格納して同時に水泳用の海パンを展開する。自分でやつといてなんだが、便利だなこれ。

美月はなぜか俺の後ろで着替えてますが、見ないよ……紳士（変態ではない）の行動じゃないだろ。

まあ、紳士のしの字もおれには無いけどな。

「お、似合つてゐるじゃんか

「ふふ、この日のために新調したのよ」

中一とは思えないほど発育の良い身体を髪と同じ水色のビキニ・・・で良いのか?を纏っている、まあいいんぢやないか。特に俺はどつといふことは無いが、ちなみに雅から受け取ったペンドントは外している。

失くしたらいけないからな。

「さてと、俺はモーターボートでも借りて「私も乗るわよー」どうなつても知らん」

「いーいーやつはああああああああああああああああああああーーー！」

「いやああああああああああーーー！」

時速80kmで海面を滑走する状況に、美月が泣き叫んでいるが気にしない。俺は、ただ、走る!ー!

日が既に海中に没し、夜空には月が昇っていた。口からは香ばしい香りと肉と魚が焼ける音が聞こえる。昼間一杯に遊んだ俺達、千冬さんが三人を相手に笑顔で水のかけあいなどしていたしつつ、まあ、良かつた。隣で串に刺さった肉を齧りながらぐでーと美月が寄りかかっているが。

「久しぶりにはしゃいだな」

「千冬姉、途中からめちゃくちゃ水かけてきたもんな」

「まさか飲み込まれるとは思わなかつたわよ」

「でも、楽しかつた」

うんうん、企画した甲斐があるつてもんだな。美月は高速で滑走したからのびてるが・・・すまん。

「さてと、そろそろだな。空を」覗あれ!」

パチンと指を鳴らす、その途端、夜空に大輪の花が咲いた。

「すげ~」

「わああ

「綺麗・・・」

ふふふ、ここから見える小島にはタイマーを仕掛けた自動花火発射装置が置いてある。当分は大なり小なり綺麗な花火が打ち上げられる。量子化つて便利だよね。

「ほお・・・」

「うふふ、用意が良いのね」

「どうせなら、楽しみたいでしょ」

その間も様々な花火がこれでもかと光り輝く、どこぞの花火大会にも対抗できるぞこれ。ちなみに費用はライセンス料と売り上げからだから問題無し。綺麗だな。

こうして、今年の夏も過ぎていく。あいつらにも良こ悪い出になつたでしょ、もちろん俺らもだけ。

30・夏なれば（後書き）

どうでも良いくて作品情報

そろそろ飛ぶ

3.1 キャラクターまとめ（前書き）

それ以上でもそれ以下でもない

3.1・キャラクターまとめ

メインキャラ紹介

更識樋無（女）

音羽が並木野中学校で最初に出会った生徒、一学年生徒会長を務めていたこともありとても有能。

対暗部用暗部「更識家」17代目当主、になつたばかり。16代目が先陣切つてるので実力は・・・お察しください。並木野中学校一学年生徒会長。少しの殺氣で泣いてしまうなどまだまだ普通の女の子、自身を助けに来てくれた音羽に惚れたらしい。本家の意向で音羽と同居中。本名は美月（音羽にのみ教えた）

ジャクリーヌ・ウェルキン（女）

音羽に決闘を申し込み見事惨敗した残念な人、しかしその身体能力は素晴らしい！

音羽の強さに惚れた女（自称）普段はほわ～っとしているが、本気になると色々すごい。

たまにドイツ語を話すことがある、m.y財布には黒つさぎの紋章がある。

並木野中学校生徒会書記。愛称はジャック。

岸川頼子（女）

音羽たちが在籍する一年三組の担任、熱くなると松修二なみにな

つてしまつ。

女尊男卑の社会には珍しい男女平等をモットーに生きる新任教師。ただし、初対面にはきつく当たつてしまつ癖がある。（本人は改善したいが現時点ではまだまだ）

雅（女）

冬の公園で倒れたところを音羽に助けられた少女。音羽と同じ年らしいがその素性は一切不明、引き取りに来た人物は彼女曰く、IIS装備開発企業の人物だった。家事スキルが壊滅的で、口調もところどころ男っぽい部分がある。日本人らしいが雑煮を知らなかつたりする、しかしレゾナンスで音羽が買った服を笑顔で着るなど女の子らしい一面もある。音羽が身に着けているペンダントは雅がお礼として渡した物である。

3-1・キャラクターまとめ（後編）

それでは、次回は……お楽しみに

どうでも良いく作品情報

次回やつと飛ぶ

32 · 不幸な一人（前書き）

さあ、原作開始···

32・不幸な一人

三月、真面目に受験勉強をして藍越学園に入学し一年が経過。美月はロシア代表としてE.S学園に入学、中二の終わりにロシアに渡つてからは滅多に会えない。俺の護衛もそこで終わつた。少し寂しいが仕方ない。

まあ、学園祭には招待されたからその時に会えたが見違えていた。それから鈴音ちゃんが中三になるまえに中国へ、寂しくはなつたがなにか一夏と約束をしていたらしく。

ちなみに今日は入試の日である、なぜか去年行われた不正によつて電車で四駅行つた場所で試験なんていう変なことになつている。俺のときは校舎でだつたのになあ、ちなみに一夏が受験する。

「音兄、俺頑張つてくるよ」

「おう、行つて来い。まあ、俺も仕事あるんだけども」

並木野中で連續で生徒会長やつた因果か、藍越でもやることに・・・一学年のだが確實に来年やらされる。しかも俺の前に入つた先輩が全員指名という状況、普通あんたらどうと言いたいが面接官にまで「ああ、君が！」とか過剰な反応されたし。

「受付だっけ?」

「ああ、そうなんだが・・・場所がわからん」

「音兄、多分ここだ」

一夏が指差したのは受験会場の立て札、おお助かつた！

「はい、時間押してるから早く着替えてね」

「こっちも見すに女性職員が言葉をかける、せめてこっち見ようぜ。まあ、これで大丈夫か・・・つて着替える?なんだ、今年から不正防止で持ち物検査じゃなくて服から変えるのか。厳しくするとは言つていたが・・・」ここまでとは思わなかつたな。

「おー、一夏さわりと着替えちまえ」

「あ、ああ、つて着替えるのか？」

「やうやうじこな、厳しくすねつて言つてたじじやあ俺は行くぞ」

そう言って移動しようとした矢先、後ろから悲壮感たっぷりの一夏の助けてが聞こえた。

「お、音兄！」

「あん、なり・・・・・は！？なんでエス、てかなぜに乗ってる？」

そこには、かつて俺がボコした打鉄を装着した一夏がいた。え、ど
ゆこと。えと

I S

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想
定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目され
たが、「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な
性能が世界中に知れ渡ることとなつた。ただし、女性しか起動・装
着できず。そのために今の過度な女尊男卑社会ができた。

・・・・・重要なのは女性しか使えないと言つ事だ、で、目の
前で一夏が動かしてゐる。状況が飲み込めていないらしく、さつきか
ら腕を動かしてゐる。どう考へても災難の匂いしかしない。

「い、一「え、男子が動かしてゐる！？」あぢやー

気づかれないうちに降ろそうかと思つたんだが、無理だった。頑張
れ一夏、俺は知らん。

「無責任！？」

「俺じやどうにもできん、大丈夫だ楯無もいるし

「楯無さんがいるからって問題じやないつて！」

「ひとまず降りろ、そのままじゃいかんだろ」

「あ、ああ」

どうとかコックピットが開放され、一夏が降りてくる。以外に高い
ので俺が抱きかかることになるんだが・・・でかくなつたなあ一
夏も。まあ、今はそこは重要じゃないが。

「ふう、これからが大h・・・うお！？」

一夏を降ろし、騒がしいので打鉄によりかかりパニックに陥つた教師陣を横目に紅茶を一人で一口飲む。もちろん紙コップだ。

「・・・・なんか視界が高いなあ、まあ良いや・・・・・・・つ
てあれえ！？」

「お、音兄まで・・・」

なにかが頭の中に流れ込んできたと思つたら、俺まで打鉄を身にま
とつていた。一夏は驚きのあまり空になつた紙コップを落とす。

「え、一人目！？ ちょ、ちょっと。ほ、報告！！」

なんとも大変なことになつてしましました。

「なんか、俺も頑張らなきゃいけないことになつたっぽいな。これ」「うん・・・・・」

その後、一人揃つて急遽検査をされ、帰宅できたのは日が落ちてからのことだった。

32・不幸な一人（後書き）

どうでも良い作品情報

同時刻、受験会場でなぜかテンションが高い金髪少女が目撃された

33・入学・・・高校一年からやり直し（前書き）

いつもよつサクサク書けた

33・入学・・・高校一年からやり直し

『…………』

IS学園、1年1組教室。一夏は前席センター、俺は窓側の一番後ろ。周囲からの女子の視線が痛い、もし物理干渉ができたら一人揃つて蜂の巣になっているんだろう。というか、まさか高校1年からやり直しとは……。というか、藍越学園の受験会場だつたつて言うね。通路一本間違えてなければ今頃2年の教室にいたのに、今更過去のこと掘り返しても仕方ないが。

『(一夏は……想像以上にきつい)』

なんとか表面上は平静を保っているが、さつきから嫌な汗が止まらない。教室に男が俺らだけってのがもつきつい、なんか一夏の背中に哀愁を感じる。

「はーい、それではSHR始めますよ~」
「ショートホールーム

教壇に歩いて来た緑色のショート髪の女性は山田麻耶先生、どうみても背伸び感が満載です。このクラスの副担任である、そしてある一部が異様に大きい。肩こるんだろうなあ、というか服が大きいらしくだぼつとしている。愛玩動物に思えてしまうのは仕方ないことだと思うんだ!

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね~」「よろしくお願いします

え、返事したの俺だけ?挨拶と返事は大事だぞ、それもお世話にな

る人ならば余計だ。というか、俺だけとか寂しい。返事したのが一人だけという状況にうろたえる山田先生、不憫すぎるぞおい。

「じゃあ、自己紹介をお願いします。出席番号順で」

なんとか持ち直した山田先生が無難なものを提案する、まあ、入学式終わって最初のSHRってそんなものだよな。今のうちに何言つか考えておかねば、何も言う事が無いってのは恥ずかしいからな。
第一印象は大事だぞ。

「

順調に進み、一夏の番なんだが。なんか様子がおかしい、む窓側。
・女子？知り合いか。そっぽ向かれた、ひとまず返事しようぜ。さ
つきから山田先生が何回も呼んでるぞ、もう軽く涙目だし。

「織斑君、織斑一夏君？」

「つは、はい！」

いきなり大声で呼ばれて驚いたのか、声が裏返った一夏。クラス中で笑いが巻き起こる、逆の立場だつたら俺も恥かしいなこれは。まあ、自業自得だ諦めひ。

「お、大声出しちゃってごめんね。怒ってる？怒ってるかな？『ゴメンね、ゴメンね。でも、自己紹介』『あ』から始まって『お』なんだよね。自己紹介してくれるかなあ、ダメかなあ？」

どこだかの伝統工芸品の『じく頭をペコペコ下げる山田先生、何回もしているためにサイズが合っていないらしい眼鏡がずり落ちてきている。どう見ても年上には見えん、『子供が背伸びして大人っぽ

くして『い』つていう感じ。一夏も軽く焦つてる。

「いや、その。しつかりやりますから、安心してください」

「ほ、ほんとですね！約束ですよ？」

顔をがばっと上げて心底嬉しそうに一夏の手をとる山田先生・・・。すげえ注目浴びてるな二人。俺に向いていたであろう視線が一つ残して全部移動したぞ。あ、一夏が決心したような顔で立ち上がりつてこちらを向いた、一瞬固まつたが自分に向けられる視線に驚いたんだろう。なにせ約30人ほどの視線が向いているんだから。

「え・・・・・えへつと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

無難にまずは名前から、うんはつきり聞こえる。で？

「・・・・・」

動きが止まった、で、次は何言つんだ？・・・俺に助けを求めるでもなあ、さあ何を言つ?まさかそれだけで終わるとかはありえないだろう、そこはわかつてのはずだ。多分、マイビー、おそらく。なぜか自信が無くなってきた。

「・・・・・以上です（キリッ）

ゑ?

ガターン ドテツ ズルツ

十人十色のリアクションを取りながら一夏と俺以外の女子がずつこける、俺はどうにか机に踏みとどまつた。座つてるけど、てかm_j

k。言うのそれだけかよ、あ。

スペアアン！！

「ザドルノフツ！」

なんか一夏が変な声上げて頭抱えて蹲つてる、出席簿を振り下ろした人物とは！・・・・千冬さんでした、こここの担任か。あのあと試験ですげえ嬉しそうに笑顔で近接ブレード持つて突進してきた人と同一人物とは思えないくらいビシッと決まってる。もはやあのだらし〃

ズガンツ！

「FOXDIE！」

出席簿が俺の額目掛けて飛んできた、命中した途端にブーメランみたいに戻つていく・・・それ本当に出席簿ですか？

「くだらんこと考えるのもそこまでにしておけ」
「はい」

千冬さんがクラス全体を一瞥し、言葉を紡ぐ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物にするのが仕事だ、私の言う事は良く聞き理解しろ。出来ない者には出来るようになるまで指導してやる、私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛えぬことだ。逆らっても良いが、私の言う事は聞け。いいな」

無論、世界最強の言葉に大勢が歓喜した。一部に淑女が含まれていた気がするが・・・。

もちろん、その熱狂的な言葉の乱射に対して根っからうつとうしがつていてるのが千冬さんらしい。

「で、お前はまともに血口紹介も出来んのか」

「いや、千冬姉。俺！」

スパン！

クラスに姉弟であることがばれ、今まで一夏の脳細胞が一万個死んだのはまだではない。

33・入学・・・高校一年からやり直し（後書き）

どうでも良い作品情報

クラスメートに変更アリ

34・再会・・・・・したせ良こかむ(前書き)

音羽のおかげでセシリ亞良い子

34・再会・・・・・したは良いけど

「さて、時間も無いのでな。如月、自己紹介しり」

「はい、織斑先生」

一夏はまだ痛みに耐え切れず蹲つてゐる、のた打ち回らないだけマシか。てか、千冬さんが言つた途端に俺に視線が集まる。うお、これはそりや動きが止まるわな。ビシビシ視線が突き刺さる、圧倒されるつてこいつこいつとなんだな。

「えへ、藍越学園から転校して来ました。如月音羽です、趣味はサイクリングです。年上ですが気にせず話しかけてください、ひとまず一年間よろしくお願ひします」

これで良いはず・・・なんか一人だけ視線を叩きつけてくる奴がいるが誰だ?今はまあいいか。

「これでSHRを終わる、授業の準備をしておけよ?」

や、やつと終わつた・・・・もう既に疲れたんだが。廊下を見てみれば終わつてから数分も経つていないので人にだかり、そうか、これが動物園の動物たちの状況か!ひとまず動物たちよスマン、君たちの気持ちも知らずにいてごめんなさい。

「ちょっと良いかしら?」

なんか最近ずっと「無沙汰な声が聞こえる・・・・」、これはもしや!

「セシリア？」

「5年ぶりですわね、まさかこいつなるとは思つてもいませんでしたけど」

まあ、そうだわな。まさか同じ学校の同じ教室で再開とは・・・嬉しいような悲しいような。

「ここにいてことは、候補生に？」

「ええ、オルゴット家も安心ですわ。約束通りに」

「おお、良かつた、良かつたああ」

「きやあ・・・もづ／＼」

思わず立派に成長したセシリアを見れて安心した、といふか嬉しくてつい抱き締める。

「うんうん、元気そうで安心したよ」

「私もですわ、久しづりですわね。音羽に抱かれるのって」

まあ、最後に抱き締めたのってイギリス出る前日以来だからなあ。これでミリアさんも安心だ、俺は勿論安心だ。俺は！今！猛烈に！感動している！

「つと、ギャラリーが騒がしいな」

「あ・・・そうですね」

さつき一夏が見た少女がこっち見て羨ましそうに見ながら一夏を引つ張つていった、一夏はなんか勘違いしてるみたいだが。というか廊下の人だからがキャーキャー五月蠅いな、家族と抱き合つくらい別にどうつてこと無いだろ。

「ありや、もう時間か。じゃあまた後でな」「ええ、また後で」

予鈴が鳴り、一夏が出席簿アタックを食らったのは言つまでもない。流石ブランク、弟には容赦が無い。

ちなみに俺はすでに教科書とノートを用意し終わつている、予習はしたから大丈夫なはず。いやまあ、なにせ急だつたからなあ。まあ、セシリ亞が同じクラスつてだけでも安心できる。というか、どうせならもつと早く分かつてれば良かつたのになあ。なにはともあれ頑張るしかないか。

「で、あいつは何で怪しい動きをしてんだ?」

さっさから山田先生が授業をしているんだが、一夏は関係ない教科書の関連性の無いページを開いている。そこは実習でのIRSの飛行軌道の応用だぞ・・・・・あんなんで大丈夫なのか?

「いじまでわからないといじりますか?」

「・・・・・」

一夏だけがびくっと肩を震わせる、わからないんですねどうもありがとうございました。そこへ教室の後ろに立つていた千冬さんがつかつかと歩いていく、その手には出席簿が握られていた。一夏・・・・・なる。

「・・・・・織斑、入学前に参考書は読んだか?」

「古い電話帳と間違つて捨てました」

ズゴム

「・・・！」

「必読と書いてあつたうつが馬鹿者、あとで再発行してやるから1週間で覚える。いいな」

「いや、あの厚さを1週間でとか無理が・・・」

「やれと言つている」

「・・・はい、わかりました」

あれを1週間か、どうみてもあなたの街の電話帳、もしくは百科事典くらいの厚さなのに。しかも一ページが透けるよつなくらこのペラ紙・・・普通に無理だよなあ。それをやらせたりとするのが千冬さんらしいけど。

「HISはその機動力・攻撃力・防御力、その全てが既存の兵器を凌駕する存在だ。その『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起ころ。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚えろ、そして守れ。規則とはそういうものだ」

正論、一夏も納得したような顔で千冬さんの顔を見る。まあ反論できないわな、まだ一夏がなんか考へてるみたいだが。おそらくしうもないことだろう、望んでここにいるわけじゃないとか・・・。

「貴様『望んでいるわけでは無い』とか考へているな

一夏がまたビクリと震える、図星かよ。結局どこへ行つてもその場所で生きていかなくちゃいけない、それが嫌なら「人であることを辞めることだ」ってわけだ。相変わらず辛辣だねえ、まあ現実と直面して生きるしかないからな。俺の場合は諦めが混じってるきがしなくもないが・・・。

「え、えっと織斑君。わからないところは放課後に先生が教えてあ

げますから、頑張つて！ね、ね？』

山田先生が一夏の手をとつて詰め寄つてゐる、あいつ・・・まあ視線が行くのは年頃だから仕方ないか。あ、逸らしたつまらん。

「じゃあ、放課後によろしくお願ひします」「はい、頑張りましょうね！」

心なしか山田先生の顔が赤い、確實に変な妄想してゐなあれ。本当にエジ操縦者つて男に免疫無いのか、あ、転んだ。本当に大丈夫なんだろうか、すごい心配だ。

「お、音兄・・・・

「やつれてんなあ、俺もそんな感じだが・・・・

『はあ・・・・』

周囲の女子が観察するような視線が集中するなか、暗くため息を吐く男子一人・・・・なんてシユールな光景だろうか。ああ、弾なら「羨ましいですよ！変わってください！」とか言うんだろうなあ。できたら変わりたい・・・・まあ、心労が耐えないと困るけども。

「ところで音兄、さつき抱き締めてた子つて誰？」

「ん、ああ。お~い、セシリア」

は~い、と返事をしてなぜか嬉しそうに（当社比30%増し、基準は知らん）駆け寄つてくる。

「どうかしまして？」

「いや、こいつが聞いてきたんでな」

「この方がもう一人の？」

「ああ、織斑一夏だ。よろしくオルゴットさん」

「ええ、期待していますわ。一夏さん、セシリ亞と呼んでくださいって構いませんわ」

うんうん、初対面でも良い感じだな。もし俺が居なかつたらここで二人が喧嘩してるような気がする、うん。

「そういうや、二人つて付き合つてるのか？」

「え、そ、そんな／＼」

「んなわけねえだろ、家族のスキンシップだつての」

少なくとも俺はそう思つてる、あれ、セシリ亞がなんか残念つて感じで肩を下げる・・・・？一夏もなんか苦笑いしてると、一体なんだつてん爪先に鋭い痛みがああああああ！？

「頑張つてくれ、セシリ亞」

「ええ、心遣い感謝しますわ」

だから、なんで俺を見て残念そうな顔をするんだ。セシリ亞ならともかく、一夏にまでそういう顔で見られるのは納得がいかん。ま、またため息・・・・俺つて何かしたか？

『はあ』

な、なんなんだ一体！そ、そうだ話題を変えようといつかそうしなければ俺のガンダニユウム合金ハートに輝が入つてしまう。

「そういうや、一夏を連れてつた女の子って誰？」

「ん、ああ。俺の・・つてやべ時間だ。あ、後で話す」

「おひ

時計を見れば本鈴、ギリギリ、時間を過ぎてしまった数人が出席簿の
餉食になってしまったのは言ひまでもない。

34・再会・・・・・したは良じかひ（後書き）

どうでも良い作品情報

まだ寮の部屋の相手が決まっていない（ライ

35・気疲れつて結構きつい

キーンゴーン カーンゴーン

音が外れていたのに数人がずつこける、なんで外れてんだよ。普通どこも同じはずなんだが・・・ひとまず授業が始まるから置いておこう。多分こういうものなんだ、そうに違いない。そうやってなんとか自分に言い聞かせながらノートを開いた。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

さつきとは違い、今の時間の担当は千冬さんらしい。なんで山田先生まで机に座つて板書のスタンバイをしているのか不思議だが、どうかどう見ても制服着てたら生徒で通じるでしょ。ひとまず年上には見えんな！っと、千冬さんの授業ということはサボれない・・・いやまあ、誰の授業でもサボる気は無いけども。

「ああ、忘れる前に。再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めなければいけないな」

クラス代表・・・確かに一つの話では、「生徒会の開く会議や委員会に出る、つまりはクラス長よ」うんわかった、面倒くさいことはのはわかっただ。俺はやらないぞ、絶対に、何があつても。天地がひっくり返ろうが世界中を敵に回そうがやらん。あ、セシリ亞は別な。

「ちなみに、クラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。現時点では対した差は無いが、競争は向上心を生む。

一度決まると一年間変更は無いからそのつもりで……自薦他薦は問わん」

決められたら大層面倒なんですね、わかります。よし、ここはそれとなく一夏に押し付けよう。うん、そうしよう。というかクラスが騒がしいし、視線が俺と一夏に向き始める……やばいぞこれ。嫌な予感がすげえする、主に男子一人に降りかかるのを。

「はい。織斑一夏君を推薦します！」

「私も織斑君を推薦します！」

いいぞ、もつとやれ。と言つてもそれは上手くいかないのが世の中だよなあ、何人か並木野の生徒見つけたし。まあ、やるつて決まつたらやるけど不可抗力でない限りやらん。せめてここでくらいゆつくりしたい、某ゆっくり程度くらいには。あいつが居る時点で無理な感じがしてきたが。

「私は如月音羽君を推薦します！」

「あたしも如月君を推薦します！」

某宇宙がキター！な人がいるのか！？いや、俺だつた。というかエスなら宇宙余裕で行けるじやんか、まあくだらん話は放つておいて。

「私、^{わたくし}セシリ亞・オルゴット立候補させていただきます！」

ああ、そうだ。ほとんどの場合は候補生がクラス代表になるんだつたか、まあ当たり前の措置だよな。国背負つて来てるんだもの、実力見せて活躍しなければいけない。それにセシリ亞の場合は家も背負つてるんだ、余計に頑張らなければいけないだろう。

「ふむ、候補者は織斑に如月。オルゴットか、さてどう決めるか」「ちょ、ちょっと待つてください！俺はやらないです！」

「うふ、うふ」と待つてください。俺はやらないです。

「自薦他薦は問わないと言った、他薦された者に拒否権は無い。選

ばれた以上は覚悟しろ」

ですよね、とまた空気がクラスを満たす。まあ、当たり前だな。

「おまえで音記は平然としてゐるがよ……」

「ほんの今に始まつたことじやないしな」

中学転校一回目に始まり、中学三年に続き。高校一年・・・ここまで続けばもう慣れるつてものだ、慣れたくなかったがなあ。まあ不可抗力にはどうしようもないし、俺も良い経験になつたから結果オーライだ。

さ。 てか、俺を推薦したの全員並木野出身だし・・・・・良いんだけど

「ああ、じつせなり織斑に専用機が来ることだし模擬戦で決めるか」

え、マジで。普通國家代表候補生でも数人しか与えられない物を・
・・ああ、男子つてことでデータ取りか？それなら納得、じゃあ俺
はどうなるんだ。無いなら無いでいいけど。てか、一夏が専用機？
なにそれ美味しいの状態に・・・お前なあ、呆れる通り越して尊
敬するぞ。

「ああ、如月の場合は遅れるそうだ」

「わかりました」

思い出したら震えてきた。ひとまずあのことは黒歴史に指定しておひつ、じゃないと精神的に色々大変だ。

「では、一週間後にクラス代表決定戦を行う。三人とも異論は無いな細かい連絡は後でする」

「真剣勝負で決めるなら良いか、問題ありません」

「はい、大丈夫です」

「わかりました」

ちなみに、一夏、俺、セシリアの順番だ。まあ頑張ってみるか。

放課後、俺はともかく一夏が机にぐでーと情けないぐらーに伸びていた。気持ちはわかるがなあ、もう少ししゃきっとできないものか。昼休みにあの女の子、篠ノ之箒ちゃんと話をした。一夏、お前は小学生のときからフラグメーカーだつたんだな。なんかここでも増えそうな気がするんだが。夜道は気をつけろよ。

「ふう~」

俺は絶賛ティータイム、召還した紙コップに紅茶を注いで休憩して。さつきから誰かが教室に向かって歩いてきてるし、それに移動する気力も無い。初日をどうにか耐えられたんだ、これくらい許されても良いと思う、ちなみに一夏は番茶だ。昼休みは大変だった、セシリ亞にはエスコートしろつて腕からませられて落ち着かないし後ろに女子が大勢並んで追いかけてきたし。一夏も同じ感じだった、

お互に苦労するな。

「あ、お一人ともまだ居ましたね丁度良かったです」

ファイルを小脇に抱えた山田先生と千冬さんが教室に入ってきた、予想はある程度できるがな。てか、マジで小柄なんだな。平均じゃが、やっぱり年上には見えない。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言つて部屋の書かれたキーを渡してくる山田先生。ここは学園は全寮制なんだよな、しかも寮で生活することが義務付けられている。将来有望な生徒を保護するつていう目的もあるけどな。

「え、1週間は自宅からつて聞いたんですけど」

「やつぱし、俺らの保護ですか？」

はい、すみませんね急で。と山田先生が謝つてくる、いや先生が悪いんじゃないんだけどもね。まあ、一人しかいない男性操縦者ってことで外部から狙われやすいだろう。実際、家にマスクミから研究所の人間まで押しかけてきたし。それから開放されるのが早まつたんだしどっちかって言つと嬉しいな、俺は。

「で、キーが番号違うことは別室つてことですね」

「はい、部屋割りを急に変更したので分かれてしましました。一ヶ月もすれば一緒になりますので我慢してくださいね」

それくらいなら問題ない、なにせあいつと一年以上同居してたんだ。今更女子が同室つてことで狼狽しないさ、天文学的確率で。

「それってほんとダメじゃねー? ってそれは良いや、荷物持つてきてないんで今日は帰つて良いですか?」

「あ、いえ。荷物は」

山田先生が言いかけた途端、ずっと黙つていた千冬さんが口を開いた。BGMはMGSの戦闘時のビデオ、ちなみにずっと警戒体制だ。

「私が手配してやつた、ありがたく思え
「ど、どうもありがとうございます」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器で十分だろう」

日々の潤いは大事だと思うんだ、俺は右腕のこに格納してあるけど。ひとまず一夏にいくつかは貸しておこう、何も無いのはきついぞ。特に年頃の男子は。

「じゃあ、時間を見て行つてくださいね。夕食は6時から7時、寮の一年生用食堂でとつてください。ちなみに各部屋にはシャワーがあります。大浴場もありますが、今のところはお一人とも使えません」

なん……だと、風呂使えないとは……仕方ない外出許可を貰つて銭湯に!

「そのような理由で外出許可は出ないぞ如月」

「はあ、わかりました」

「え、なんで使えないんですか? 頭頂部に突き刺されるような痛みがあ

あ…！」

ひとまず頭の回らない馬鹿の頭に拳を振り下ろしておく、普通にわかるだろ。男子は俺らだけなんだから。

「お前は女子に入るつもりか、バカ」

「ああ、そつか。そういうことか」

山田先生がなんかおかしくなりはじめたが、気にしたら負けだと思う。なんか、色々腐女子的ワードが聞こえたが知らん。俺にも一夏にもそういう趣味は無い、廊下の女子が攻めだの受けだの言つてるとが俺は何も聞いてないぞ！一夏は苦笑いしていたがな。

「じゃあ、私たちは会議があるので行きますね。道草食っちゃいけませんよ？」

校舎出たら50㍍くらいしかないのござりやつて道草食えとこうのか、まあ、言われなくても休みたいからまつすぐ行くけども。一夏は1025、俺は1026だ。俺だけ嫌な予感がするのは気のせいではないはず、昔から嫌な予感だけは当たるんだよな。嬉しくないこと。

「まあ、今日はもう帰ろう。疲れたよ俺は」

「そうだな、なんか嫌な予感がするけども」

ははは、と一夏が笑う。それで済めばいいけどなあ。

35・気疲れって結構さつこ（後書き）

さうでも良さ作品情報

あいつって、あいつのことでしょ

36・疲れは溜めないことひしておしゃり（前書き）

あれ、 どうした？

36・疲れは溜めないよつじよまじょう

ガチャリ バタン！

トイレに寄つて遅れた俺を出迎えた寮では、一夏の部屋の前に人ばかり。なぜか穴が開いている扉に寄りかかつてとてつもなく焦つている一夏がいた。ああ、周りが下着の上に薄手のシャツくらいだから。うお、扉から木刀が突き出てる・・・誰が直すんだこれ。

「篠さん、篠さん。入れてください、じゃないと色々と危ないです」

「ガンバ」

「音兄・・・」

さあて、俺は俺で部屋に入るか。なんか半年振りの気配を感じるが、よし、普通に開けよう。いちいち動いてたら余計疲れる、どうにでもなれ。

ガチャ バン！

「お帰りなさい、」飯にします？お風呂にします？それとも、わ・た・し？」

バタン！

きつと疲れてるんだ、そうに違いない。あいつが学園にいるからっていう理由ですごいリアルな幻覚を見るんだ、絶対そうだ。そうだと言つてくれ！裸エプロンの格好であいつが飛び出でくるなんて、俺はなんなんだ。溜まってるのか？そつなのか！？しかもあいつで？

「お帰り。私にします？私にします？それとも、わ・た・し？」

「選択肢が一つしか無いだろうが！」

スペアン！！

俺のmソハリセンが火を噴くぜ、って感じに一閃。言い終わったのを確認したと同時に召還、振り下ろす。紙製と侮ること無かれ、たとえISの絶対防御があつても衝撃は貫通するといつ無駄な技術の塊だ。

その証拠にうつ伏せで倒れた特徴的な水色の髪をした少女が倒れている、痛そう？こいつに手加減は必要ない。さて、荷物置こう。もちろんこいつを掴んでベッドに放り投げる。

「いつまで倒れてるつもりだ、風邪引くぞ」

「少しくらい心配しても良いと思うけどなあ？」

「学園最強を心配してどうすんだ、てか早く着替える。美月」

既にドアは閉めてあるため、部屋の中には一人しかいない。俺はベッドに腰掛けているが、こいつはいつまでうつ伏せのつもりだ。いい加減起きろってんだ。そう考えながら着替えや荷物を展開していく、まあダンボールに入れて運ぶのが面倒だつたつてのがあるが。出てくる出てくる、シャツから鍋から包丁まで・・・・ちなみに小型ジエットパックもスペアのベルトバックルに格納されてる。わからない奴はググれ。

「う～む、今日は食堂行くか

「そうだね～」

「まず着替える、話はそれからだ

半年振りになるのか？前に会つたのが学園祭のときだし。ちなみに一夏と並んでニコースになつたときにメールで『（^_ ^）つて送つてきやがつた。 そうだよ、馬鹿やつたさー一人して。思い出したら腹たつてきた。

「まあ、久しふり」

「ふふつ、やうね。ようこそエラ学園へ！」

ビシッと決めたのはいいが、スク水着用エプロンだから締まらないなあ。まだ着替えてないし・・・・田のやつどころに困るんだがなあ、ただでさえスタイル良いんだし。俺は某流さんみみたいに耐性ないし、ひとまず視線を外そう。見るとそれきつかけに弄られる、主に俺の理性を削るようなことをしてくるから困るんだ。

ノンコーン

なんだ、一夏か？ちよつと良いや。

「音羽、居ますか？」

お、セシリ亞だ・・・なぜか後ろから痛いくらいの視線が突き刺さつてるんだが何故だろ？おし、制服に着替えてるな。だからなぜ睨む、俺何もしてないだろ？がよ。ハリセンで叩いたけど。

「居るぞ、一度いいやまだ飯食つてないだろ。食堂行かないか？」

「ええ、その方は？」

すると、美月が目をキランと輝かせて目の前にジャンプ。俺の上に乗つかつてきた、ぐ、体重かけんな。そしてやわらかいそれを何気

ないよに当てんなバカ、心臓に悪いわ！そしてセシリアが目だけ笑つてない、こ、怖いぞおい。火花が散つて見えるのはきっと俺が疲れているからだと思いたい。

「更識楯無、音羽の中学時代の同居人よ」

「ええっ！？ 音羽、あなた・・・」

「こいつとギブ＆テイクだつただけだ、それに一年ちょっとだけだし」

「そういうことですか、まあいいです。食事と行きましょう？」

「ああ、楯無。ちょっと降りる、動けん」

仕方ないわねえ、と言いながらセシリアとは反対側に腕を絡ませる美月。あ。

『歩きにくい』

「つて言いませんわよね？」

「言わないよね？ね？」

「・・・はい」

二人に挟まれて食堂へと歩く、腕にあれがあたつて落ち着かない。というか、なぜ周りの皆さんは羨ましそうな目で見てくるんでしょうか。セシリ亞はもちろん昔も同じようにやってたけど、美月はなんか同居始まってからやり始めたし。ひとまず精神的にきつい、色々削られるぞこれ。しかも二人とも大きいから余計に・・・・・・ help me! いかん、おかしくなつて英語出た。

「あ、一夏君久しぶり！」

「樋無さん、お久しぶりです」

「お、簪もいつしょか」

「一夏がいたから・・・」

一夏はカツカレー、簪はかき揚げうどん、筍は焼き魚定食（鮭）。どれも美味しいそだな、ひとまず筍と簪の間で火花が散つていらつしゃる。これに弾とあいつが入れば中学メンバーなんだよな、生憎あとの一人がいなければ。どうやら一夏と簪が楽しそうに話してるので見ると、一年くらいの時間の壁は薄かつたみたいだな。筍が空氣になつてゐるけども。『誰が空氣だと?』『ごめんなさい。

「うーん、お」

「あり、やはつこ」にもありましたのね
「どうしちよつかな~」

セシリ亞は迷い無く煮魚定食（味噌汁大）を、俺はカツ丼、美月は味噌ラーメン。他にもウェルシュー・レアビットやナンなど世界中の料理がメニューにある。生徒が世界中から来ているつてのがあるからかもな。これなら毎日飽きないな、全制覇も良いかもしねない。

「さてと、いただきます!」

「いただきます」

「いただきま～す、うーん美味しそうね」

「はあ、結局シャワーかよ」

どうせなら小型の浴槽も持つてくるんだった……入りきらないから無理か。まあいいや、わざわざシャワー浴びて寝よう。今日は疲れたよ、主に精神的に。

「はいはーい、私が髪を洗つてあげましょー！」

「…………頼む」

いつもなら自分でやるんだが、もう結構贅が重い。自分でやる元気も無い、なんか背中に心地良い感触があるがそれに突っ込む気力も無い……・・・・・睡い。

「ほら、起きなさいって。ここで寝たらダメよ」

「う、うん」

「まつたくもひ」

あ、気持ちいい。人に髪洗つてももうのりて気持ちいいよね、ふわ。

「ほら、終わつたから寝ましょ」

「ああ、助かつた。おやすみ」

「うん、おやすみなさい」

なんか額に触れた感じがしたが……………

36・疲れは溜めないよひしてまじょう（後書き）

どうでも良い作品情報

擬似四次元ポケットはスペアが3個、日用品・銃器・小型ジェット
パック

37 災難・・・・鬱だ（前書き）

どうか彼に労わりを

37・災難・・・・鬱だ

日差しがカーテンの隙間から部屋の中に入り込む、ついでに美月も俺のベッドに入り込んでいる。小鳥のさえずりが聞こえる、俺は鴉のほうが好きだがな。そして焼き鳥は皮が好きだ、さえずりが無くなつたが気になつたら負けだと思つ。ちょっと待て。

「ひじゅ、すう・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

気持ちよさそうに寝ているから起こすにも起こせない、俺が逆の立場だったら起こされたくないしな。いや、寝てることに関してだぞ。俺は誰かに抱きつくなんてしないからな、多分。うあー、朝から理性がガリガリ音を立てて削られる。まさかこれが毎日続くとか無いよね?ねえ?

「ああ、いいや。もう一回寝よう」

「ふひゅー・・・・・」

その後、1年1組の教室で出席簿が振り下ろされる音が響き渡つたのは言つまでもない。

「なぜ弱くなつているー。」

「受験勉強してたから・・・・かな?」

IS学園部活棟、剣道場。目の前には床に倒れこんで竹刀を眼前に向けられている一夏と、それを見下ろす侍ガール第がいた。俺は

これから射撃練習しにアリーナに行こうとしていたのだが気になつたので観戦していたところだ。一夏つて剣道やつてたのか知らんかったな、道理で筋肉のつきが普通と違うわけだ。と言つても練習してるところなんて見たことないけどな、千冬さんも忙しいから家事で一夏はそういう暇も無かつたし。仕方ないって言つたら仕方ないか。

「 なおす」

「 え？」

「 鍛えなおす、 IIS以前の問題だ！」

まあ、なんといふことでしょう。一夏の表情が呆けていた状態から一瞬でわけが分からぬという表情に・・・なんか面白いことになりそうだし。さて、俺は俺で始めるかなあ。恋する乙女を邪魔するのも無粋だからな。

「 つぐ、オート制御だと照準ブレるなあ」

IIS学園第二アリーナ、IISでの模擬戦・実習・装備試験などが行われるだけあって半端なく大きい。反対側の観客席が豆粒に見える。しかもこの大きさのアリーナがあと4つ、高機動実習で使われる第六アリーナはもつと広い。まだ行つたこと無いけども。

それより、オート制御だから生身で使うときよりやつてく。ああもう、面倒なもんだなこれ。

「 つだあああああああ！」

「ああ、痛い」

アリーナで2時間ほど動かしたは良いが打鉄がなかなか上手く動かずイライラ、別の練習しようとして飛ぼうとしたら姿勢崩して頭から転倒。保持していた近接ブレードが手から離れて立ち上がった瞬間に後頭部に直撃、自分の武器に切られるというギャグマンガみたいな事故発生。悶絶しているところを見られて同じアリーナでISを動かしていた女子にクスクスと笑われ、なにくそと起き上がつたらP.I.Cが誤作動起こして今度は後方5連続回転をして地面へと叩きつけられる。諦めずに起き上がつたら、流れ弾のグレネードが目の前に転がってきて爆発。体勢が整つていなかったために後ろに転び、アンロッカーホルト非固定部位が地面に突き刺さって立ち往生。どうにか力ずくで引き抜き素振りを始めたら刀身だけが抜けてアリーナの壁と防護バリアーにぶつかる、ドリフのあれみたいにあちらこちらで跳ね返りながらなぜか最終的に俺の股間に直撃。女子には永遠に理解できない痛みに苦しみながら仕方なくアサルトライフル「ヴェント」を展開して撃とうと引き金を引くとジャムり、取り出そうとレバーを引くと暴発。怪我は無かったものの顔が煤で汚れる。タオルでふき取り、仕切りなおそとピットから再度飛行。カタパルトが急停止し、ロックは普通に外れるものだからピットから墜落。終わろうと装着解除したらステータス画面に「整備中」の文字。そのままため息をつきながら崩れ落ちた。

「俺つて誰かに恨まれてんだろうか」

「あ、あいら。まあ、無理はしないでくださいね」

セシリアの心遣いが嬉しい、ああ、そういうや。

「セシリアつて可愛いなあ」

「な、なななあ!? いきなり何をーー」

「いやあ、昔もそつだつたが可愛くなつたなあと思つて」

「なぜ平氣でそういう言葉が言えるのか、不思議でなりませんわ。

嬉しいですけども」

なんか今のが声小さくて聞こえなかつたな、なんて言つたんだろう?
ちなみに美月は生徒会の仕事でない、虚に注意されて無理やりやら
されてるらしい。生徒会長が仕事サボつてどうするんだ。俺だつ
てしつかりやってたんだから美月なら簡単だろ? やる気だせば。

「あれ、音兄はセシリアといつしょなのか。樋無さんは?」

「虚に注意されて仕事中、つてボロボロだなー夏」

「あはは、簞に散々倒されてさ。明日もだよ」

「一夏さん、剣道やつてらしたのですか?」

「ああ、小学生のころに道場に通つててさ。その時からの友達なん
だ簞は」

『(簞(さん) 頑張つて』

こつ思つたのは俺だけでは無いはず、といふか俺とセシリアが向か
い合つて頷く。幸い一夏はなにか理解していないよつたが。こ
の鈍感m爪先に針で傷口を刺すような痛みがああああああー! 俺が
何をしたんだセシリア、俺は悪いことした覚えは無いぞ! 一夏は哀

れんだよつな田で見るなよ、なにその残念な物を見る感じ。そりやあ、鼻に絆創膏だけじさ。

「わうこえは音兄はなんでボロボロなんだ？」
「ああ、いやな

長いの上で参称

「なんという・・・」
「まあ、これくらいでめげないけどな。負けないぞ俺は」
「ふふっ、それでこそ音羽ですわ」
「そうだな、それでこそ音兄だ」

その辺

「うえー、まだあるのこれ？」
「サボった分は取り返してもうこりますよ、ただでさえ溜まっている
んですから」
「うー・・・音羽あ、助けてえ・・・ん、メールだ」

『断固断る自業自得だ。おにぎり二個と味噌汁あるから食べておけ

よ？俺は先に寝る　ｂｙ音羽

「うふふ、優しいなあ音羽は」

「いやけるのはは良いから早く終わらせてくれださー」

「ぶう～、けちんぼ～」

「・・・・・音羽に愛想つかされても良いのならどうぞ」

その後、文句を言しながら書類にサインを書き続ける楯無が田嶋されたそくな。

クラス代表決定戦まで、あと5日。

37 災難・・・・鬱だ（後書き）

どうでも良いく作品情報

原作と違い、更識姉妹は仲良し。簪はサード幼馴染、空氣をトマジ
第

38. 試合場（試験場）

良い切っ掛けだったので、短いである

よだ 得 誰 て ん な 景 風 訓 特 の 男

IS学園、第三アリーナ。東ピット一一番格納庫前、俺は缶コーヒー片手に壁に寄りかかっていた。流れるようなサイドテールはところどころザラザラ、一部は焼け焦げたような痕・・・・せつかく苦労して手入れしてたのにIS訓練で台無しに・・・・ちくしょう。なんとかまともに動けるようにはなったがいまだに何か起こりそうで怖い、またPIC誤作動起こさないよなあ????ちなみにセシリ亞が候補生ということで俺ら一人と試合、その後俺と一夏という組み合わせ。

「それなのにお前の専用機は来てないのか」
「うん」

そこなんだよな、早めに来る予定だった一夏の専用機が当日になつてもまだ来ていない。あと5分で試合始まるぞ？もし過ぎたら俺が先になるつてことですよねえ、技量はともかく訓練機で勝てるだろうか。性能差は埋められないしなあ、一応速度特化にチューンしてもらつたけども。つてもうあと2分だぞ、間に合わないんじやないかこれ。あ、山田先生が走ってきた。なんともよたよたして頼りない感じだ、今にも転びそうとはこれのことを言つのかも知れないな。実際目の前で一回躊躇いたし、ある意味期待を裏切らない人だな。

「大丈夫ですか山田先生、慌てなくて良いですから落ち着いてください」

「は、はい。そ、それでですね来ましたよ織斑君の専用機！」

「おお、やつとか。結構待ちくたびれた……あと30秒でよい。
初期化と最適化は間に合わないな。だからつて時間は限られてるし、
もしかして試合中に済ませるのか？聞いたことないぞ、戦闘中にだ
なんて。いくら自動でやってくれるとはいへんな無茶な、それをやら
せるのが千冬さんですけども。」

「流石にきつないですか？」

「ふん、できなければ負けるだけだ」

そう言った千冬さんの視線の先にあった格納庫のエアロッドが音を立ててスライドする、暗がりの中から一機のE.I.Dがせり出して来る。工業的なデザインではあるがどこか力強さを感じさせる。

「山」がそこに居た

この瞬間を待ち続けたように、今、この時ためのようこそそれは鎮

座していた。主を待ち続け、迎えるためにその「シクリプトを開け放っている。正直に言おう、カッコいいと。

「織斑、早く乗れ。そうだ、座るような感じで良い。あとは自動で最適化する」

「一夏、正々堂々やつてこい」

「ああ、分かつてる……なんか気持ち悪いな、前見てるのに全方位見えるなんて」

あ〜、ハイパー・センサーか。前方を見ているのだけどもそれによって360度全方位を見ることができる、そのためには死角からの攻撃を感じできるって奴だ。本来は航行中に飛来する隕石を避けるためなんだけども、他には望遠機能とかな。早く宇宙に行けないものか、某おにぎりに見えるライダーさんは単独で毎週行つてゐるのに……なぜ兵器でしか使わないんだ。今はスポーツだけでもさ。ちなみにこのHISの名前は『白式』だってや、読みが某宇宙世紀の金色のあれじやねえかつてツツ「ミ」はしてはいけない。

「じゃあ、行つてくるよ」

「ああ、勝つて來い一夏」

幕が応援したとこで、カタパルトに乗つて一夏が発進していく。反対側にはセシリ亞が居ることどうり、どうなるこの試合、結果が楽しみだ。

38・試合前（後書き）

「も良こ」作品情報

戦闘描[かたわざ]手とこひこひて今風[ふう]へ

39・蒼の翼・白の翼(前書き)

—夏バソセシリヤ

「つおつとと、こじや特訓しなきやな

発進した反動で前に仰け反りそうになつた一夏が、セシリ亞に向かい立つた。相対するセシリ亞はイギリスの第三世代ES「ブルー・ティアーズ」を起動している。腰部には4枚のフィンアーマー、右手には六十七口径特殊レーザーライフル『スター・ライトmk?』が握られていた。その出で立ちはまるで中世の騎士のようであった。

「ふふふ、これからが楽しみですわね」

「そりやどうも、つとそろそろだな」

広大なアリーナに試合開始のアラームが鳴り響いた。

「手加減しませんわよ！」

「真剣勝負、当たり前だ！」

スタートライトmk?の青いレーザーが銃口から迸り、回避行動に移つていった白式の非固定
アンロックユニット
部位の左側の一部を吹き飛ばす。着弾の影響で加速していた白式」と一夏が後方に押し出された。

「つおつ！？」

絶対防御は適用されなかつたが代わりに左のウイングスラスターが一部破損した、シールドエネルギーが0にならない限り負けでは無

いが機体の破損は後の戦闘行動に障害をもたらす。最悪飛行できなければ中距離射撃型のブルー・ティアーズには勝てない。

流石、代表候補生。俺が移動した先を狙つてライフルを上手く撃つてくる、武器は無いのか？えつと一覧・・・・・・・・一覧！？一個しかないのに一覧とはこれいかに。仕方ない、何も無いよりマシだ。

「ええい、ままよ！」

「・・・・・一夏さん、本気ですか？」

「どうか、これしかなかつた」

「そ、そうでしたか・・・・」

セシリ亞がなんとも驚いた表情でこちらを見ているのがわかる、俺だつて驚いたさ。なにせ『近接ブレード』一本しか無かつたんだから、「普通は剣と銃くらいは入つてるんだぜ」とは音兄の言葉だ。まさか剣しか無いとは、そりやあ俺には銃なんか使えないけどさ。経験的な意味で、だからって射撃メインにこれで戦えつてのはなあ。文句言つても現実は変わらないけどもさあ。

「では、ここからが本番ですわ！」

瞬間、4機のフインアーマーが独立してそれぞれがまるで生きているかのように襲い掛かってくる。細い先端が青い光を称え独特的の音を放ちながら青いレーザーを撃つ。四方八方から三次元で攻められるためにガリガリとシールドエネルギーが減っていく。どうにか一つを避けても残りが当たるという状況、どう考へてもこのままじゃジリ貧だ。

「右足、頂きましたわ！」

「や、りせるかよ、でやあーー！」

一瞬動きが止まった後方のブルーティアーズ・・・機体名と同じとは紛らわしい、試験一号機だからそうなってるらしいけども。面倒なので以下ビットを一機蹴り飛ばし、セシリアへと肉薄する。金属が捻じ曲がるような感触を右足に感じながら、自身に向けられていたライフルを近づいた瞬間に左手で殴り銃口を逸らす。

「なあつ！？ やりますわね！」

「俺にも譲れないものがあるからな！」

すぐに上下からのビットによる牽制で引き離されるが、一撃入れられた。素人同然の俺が、候補生に一矢報いたのだ。嬉しくならないわけがない。

「あの、馬鹿。一撃くらいで調子乗ってやがる」

「まったくだ、変わらんな」

「え、どうこいつことですか？」

まあ、なあ？

「あいつは調子に乗ると左手を閉じたり開いたりする、大抵その時は単純なミスをする」

「今までそれで失敗したの何回だったかなあ・・・・」

正直数え切れんな、その度に俺が出向いてたし。一夏は氣づいてな

「いや、後始末は大変だつたよ？そんなんだから『最強の生徒会長』って影で言われてたんだから。そういう言つていいに、一夏がビットを近接ブレードで叩き落しての暴行を加えて使用不能に陥らせていく。対するセシリアは……無茶苦茶な一夏の動きに驚いていた。ビットが真ん中で捻じ曲がつて可愛しがた。

「おし、貰つたあああ！！」

「生憎様、ブルー・ティアーズは六機あつてよー！」

重い音を響かせてファインアーマーの左右から突起が分裂、高速で俺に近づいてくる。回避は……間に合わない。さっきまでのレーザー射撃ではない「ミサイル弾道型」だ。

赤を越えて、白い爆発に飲み込まれた。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

「なんといつ」都合主義・・・・

着弾の煙を見つめながら、俺と千冬さんの言葉が重なつた瞬間。その中から、それは現れた。

『初期化・最適化完了・確認ボタンを押してください』

「な、さっきまで初期設定で戦っていましたの！？」

「ああ、やつと俺の物になつたみたいだ」

視界に映る確認ボタンを押すと、金属音を響かせて白式^{ホワイト}がその姿を変える。工業製品のような直線的な形から生物的な曲線を描き、角ばつた非固定部^{アンロックコネクト}位は受けた傷が無かつたのように消えて一対の翼に。完全な『白』へと変化した。

『近接特化ブレード「雪片式型』』

先ほどまで握っていた無骨なデザインのブレードは、刀身が割れてそこから光の刃を放出。スライドした元刀身はそれを握る右手を守るハンドガードへと変形していた。見覚えがある、かつて姉を世界最強へと導いた刀に型名す刀。

ああ、まつたく。つぐづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

だからこそ、守られるだけの関係は終わらせよう。これからは、いや、今この瞬間から。

「俺も、俺の家族を守る」

「・・・覚悟、ですわね」

「ああ、まずは千冬姉の名前を守るぞー。」

一気に上空へと加速、背部ウイングスラスターから尾を引きながら上昇する。その間もレーザーが幾筋も付近を貫いているが、さつき

とは格段に動きやすくなつた白式が俺の通りに動く。そして、全てが見える。

「うおりやあ！！」

「鋭い一閃、見事ですわ！」

残っていた一機のビットを急加速しながらの一振りで切断、高硬度金属を切断する衝撃が雪片を握る右手に伝わる。刹那、通り過ぎた瞬間に後方で小爆発。砕け散つたビットの破片が慣性を残したまま四散していく、気にも留めず最後に残つたスター・ライトmk?を構えるセシリアに高速で接近する。

「わたくしにも、譲れないものがありますよー。」

セシリアがスター・ライトmk?の後方レバーを引く、するとショルダーストックが上下にスライドし持ち手に変化した。銃口からは蒼穹を映すかのような真っ青のレーザーの刃が伸びる、それを腰溜めに構えなおしたその姿はかつてヨーロッパに名を馳せた名騎士のようであった。

「はあああああ！！」

「やあああああ！！」

突き出される蒼の槍と白銀の剣がぶつかり合つ、加速を呑えた一撃だつたからか雪片の輝きがレーザーの刃を切り裂く。上段に振りかぶつた一閃が真っ直ぐにセシリアへと振り下ろされる。

『試合終了 勝者 セシリア・オルコット』

「え？」

「はい？」

向き合いながら同じように訳が分からないように顔をしている俺とセシリ亞、いつのまにか雪片の光刃は消えていた。・・・・・・
・何が起こったんだ？

「良くもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこのまま大馬鹿者」

ランクを下げるが千冬さんらしい、大馬鹿者だつてさ。おめでとう一夏。一応スポーツドリンクを時速60kmで投げてあげる、優しいだろ俺。

「ほふわあ！」

どうにかキャッチして転んだ一夏が届るけども、ちょっとばかし気になることが・・・あるんだよねえ。どうみてもあれは一夏の勝ちだつたはずなんだがいきなりシールドエネルギーが0になつて一夏の負け。まあ、初心者が候補生にあそこまで迫れたのははずじいけどもな。

「雪片の特殊能力だ、『バリア無効化攻撃』という（ryy）

早い話、自分のシールドエネルギーを使って相手のシールドエネルギーを切り裂いて攻撃。その際に絶対防御の発動によつて相手のシールドエネルギーを喰らい尽くす。それをするまでのダメージと残

馬鹿

り少ないシールドエネルギーでの使用だつたためにいきなり〇になつたと。つまりは

「武装の特性を理解してない一夏の自業自得だと」

「その通りだ、さて如月。お前は30分後だ、準備しろ」

「サー、イエッサー！」

「ふざけているのか？」

「サー、イエッ、ああ！」

突然俺の眉間を狙つて音速で振り下ろされる出席簿、どうにか紙一重で回避する。あ、髪が少し切れた・・・直撃してたらどうなるんだよこれ。一夏はまだ普通に見てるけども、隣で箒が色々困つてる。まあ、そぞうづよ。それよりも俺の出番だな。

「さてと、じゃあ俺のターンだな」

「訓練機で大丈夫なのか音兄」

「銃器くらいは良いが、またなんかありそつて怖い」

股間にブレードぶつかるとか、股間にry・・とにかく怖い。何の心配を俺がしているのかわからんがな、さてと誰もいなはずのピットで学園最強さんが見てるし。良ごとに見せよつか、一夏もやつてたからなあ。

「それで織斑先生、ラファールは？」

「全機整備中だ、打鉄で我慢してくれ」

「・・・・・・・・（〇〇）」

39・蒼の墨・白の翼（後書き）

どうでも良い作品情報

ブルー・ティアーズ色々変更

40・蒼穹の狙撃手 漆黒のバトラー（前書き）

セシリア～S音羽！

「あー、心配だ。これ整備完全ですかねえ？」

「当たり前だ、F装備で良かつたな？」

- 1 -

あれから30分後、俺は打鉄（速度重視のF装備）を装着していた。さきほど一夏が山田先生から「IIS起動のルールブック」を受け取つてげんなりしていた。なんせ厚さは某電話帳、一ページはペラ紙・
・・・一週間でそれを完全制覇。ざまあww

「はあ、なんでここにいるんだろうなあ俺」

『水石の東洋』

11

「負けられない戦いが、ここにある」

「な、なんか音兄が達観してる！？」

「何かに怯えているように見えるが……む？」

ピットの影に音羽をじーっと見つめる金髪の女性が見えたとは後の篇の話である、その曰は「負けたら、わかってるわよね」と語っているようだつたそつだ。

「（ビクシーニ）……………！？」

いかん、なんかミリアさんに見られてるような感じがした。絶対、近くに居るつてこれ。・・・・・どうやら緊張で頭がおかしいようだ。落ち着け俺、きっとミリアさんが幽霊になつて見てるだけだ。十分怖いぞそれ、ちなみに俺は幽霊とかの怪談話は嫌いだお化け屋敷も。まあ、それは誰にも知られていないけどな！

さて、時間か。
お嬢様の成長した姿でも見に行きますかね」
バトニー マスター

力タパルトに打鉄の脚を固定する、後方に反射板がせり上がり脚部ごと後ろに下げられる。蒸気力タパルト特有の発射準備だ、今だに現役なのは優秀だからに違いない。F-35（確かC）に乗つたときも世話になつたからなあ。なんで乗つたかつて？コネですよチミイ。

「じゃあ、行きますか！」

良い！一気に前方に押し出される、対G制御は効いているが。この感覚は、

音兄が、急停止したカタパルトから落つこちていった。真っ逆さまに、それも頭から・・・・・結局なのか。どれだけ運が無いんだ音

兄、向こうのピットに居るセシリ亞の顔が引きつっているのがわかる。山田先生は状況が掴めていないのか口をポカーンと開けている、千冬姉は傍目からは分からぬかも知れないが軽く苦笑していた。筆は心配なのかピットから下を見ている、あ、起き上がった。

「痛てててて、ちくしょう。なんでこいつ時に限って締まらないかなあ・・・」

「大丈夫ですか？」

「ひとまず、な」

同じ高度に上昇し、向き合う。元・執事バトラーと主人マスターの戦いが、始まった。

「うおっ、のわあ！」

「隙ありですわよー！」

し、四方八方からピットによる牽制射撃。さつきから回避しても着弾ばかりで埒が開かない、そして避けきつたと思えば静止した途端にスター・ライトmk?による的確な狙撃。やはり、見た目は簡単だが実際は・・・というやつだ。しかし、三次元機動つてのはなんとも慣れないな。ジェットパックと違つて急旋回できるし、P.I.Cでホバリングできるし。世界最強の兵器つてのは納得だなホント。

「せええつだああああんん！..」

^{アンロックユニット}
非固定部位の物理シールド裏に搭載されたスラスターを噴かして、勢いに任せて、ビットを一機両断。今度は刀身抜けなかつた俺に勝てないものなどいない、多分！F型^{タイプ}の最大の特徴、物理シールド裏に搭載された大出力ブースターのおかげで速度だけならば第三世代にも追いついていける・・・はずのスペックを持つ。しかも傍目にには通常型と見分けが付かないという鬼畜仕様。

サブマシンガン「ネフェルテム」を二挺展開して、高速で接近する。

「す、すげえ音兄・・・」

「格段に動きが良くなりましたね、音羽君すごいです！」

管制室の空中ディスプレイにはセシリ亞に追いすがる音羽の姿が映し出されていた、現在は互いに円軌道を描きながらライフルによる攻勢。一歩も譲らずただひたすらに距離を保ちながら相手を牽制している。

「確かに、F型^{タイプ}って速度特化の失敗作ですよね？ほとんど静止ができないために使い手は今ほとんど居ないって言われている・・・教師の中でも使いこなせる人はいませんよ？」

「まあ、そこをどうにかしてしまうのがあいつだ。中学時代に街中上空を飛んでいたからな、それも関係しているんだろう」

「ああ～、あれかあ

『え、』

そこには姉弟揃つて思い出したように語る一人とそれについていけない一教師と生徒がいた。

「やつとわかつたぞ、ブルー・ティアーズの弱点が…」いつを動かすときにお前は他の動作ができない、そつだらうセシリア…」

歯噛みしたセシリアがお返しとばかりに青いレーザーの雨を降らせてくる、フルオートつて…銃身焼けるぞ。対策してなければ、熱で溶け落ちるがな。ちなみに俺はエネルギーの効率や使用経験から実弾のほうが使用率が多い。というか、今装着してるF型はエネルギー兵装を載せるほどエネルギーに余裕が無い。それほど速度重視らしい、エネルギー・パック式にすれば可能だけども面倒だ。

「そおい…！」

加速したまま、身体にかかるGを無視してビットをスナイパーライフルで順に撃ちぬく。クロスグリッドターン三次元躍動旋回での高速機動は照準に入らせないばかりか、反撃も織り交ぜて来ているために少しずつセシリアが押される。なにせ相手は、日常的に時速400kmで飛行をしていた人間なのだから。

「なつ、身体が持ちませんわよ！？」

「譲れない戦いがあるんだああああああ…（ミリアさん的意思で）」

至近距離まで肉薄し、高加速ブースターを解除。ページ近接ブレードを振り抜き、スターライト~~m/s~~を破壊する。ランスへの変形が間に合わなかつたために容易く銃身が切断されて使用不能になる、収束部が壊れても射撃は可能だが収束して威力を上げているために威力はほぼ無いに等しくなつてしまつ。爆発する直前にセシリアが投げてくれるが蹴り上げて懷に入り込む。ここからは、俺の領域だ。

「失敗作と名高い F型の真髄、見せてやる！」

一番の特徴は、その軽さ。そして、ほぼ専用と言われている悪趣味な近接装備。誰が考えたのか今では分からぬが威力だけは半端無いというブースターが刀身とは逆位置に並列に取り付けられた物理刀、その名も鋼の心^{スティール・ハーツ}。持ち手部分にはリボルバー式の薬室があり、そこに装填された二種混合式の気化燃料を爆発させ刀身を加速。目標を一太刀のもとに切り伏せるというものだ。その威力は第二世代機の武装の中でも三本の指に入る。しかも機体自体の驚異的速度も加算される。

持ち手の引き金^{トリガ}が押し込まれ、鋼の心臓^{ブースター}に燃料^血が送り込まれてブースターが火を噴出して加速する。瞬間、爆発的な速度で振るわれた横一閃は蒼穹の機体のシールドエネルギーを削り取つた。

『勝者　如月音羽』

「な、なんとか勝つぞぶへはあ！」

蹴り上げたスター・ライトmk? だつたものが俺の頭部に不時着、そのせいで一桁だつたシールドエネルギーが0になる。あ、危ないな、今度から蹴り落とそう・・・などと考えていると目の前に人の手が？

「流石ですわ、音羽」

「ギリギリだつたがな、まあ、こうじやなきや元執事つて言えないからなあ」

そのまま空中で握手する、全力で戦つた二人を歓声が包み込んだ。

40・蒼穹の狙撃手 漆黒のバトラー（後書き）

どうでも良い作品情報

出てきたオリジナル武器は・・・お察しください

10/4 戦闘機の機体名、修正しました。

カタパルトは作者の趣味で蒸氣で行きます、好きなんこそは

4.1・結果がこれだよ（前書き）

短いです

41・結果がこれだよ

あ～、うん。画面の向ひの皆、おはよ～・・・時間がわからん。おはいんばんちわ・・・どこか遠くの世界で誰かが言つてる気がする。まあ、いいや。電波なんて受信しても気味が悪いだけだ。ちなみに俺VS一夏は俺が勝つた、5分間ストーカーも真っ青になるくらい追いかけながらステイール・ハーツの連撃を食らわせた。バリア無効化攻撃なんぞ、当たらなければどうってことは無い、スポーツの剣技と実戦の剣技はレベルが違うってことだ。けして、「三日連続戦闘なんてめんどい」と言つ^{作者}馬鹿の陰謀ではない。

翌日、火曜日。朝のSHR・・・でそれは起きた。

「では、一組クラス代表は織斑君に決定です。一つながりで良いですね」
『ね～』

クラス全員（一夏を除く生徒）が声を揃えて顔をそれぞれ見合わせる、教室の前で一夏が散々なくらいに慌てていた。暗い顔をしているのは一夏のみ、ふうははははははははははあ。

「先生、質問です」
「はい、織斑君！」

質問は手を上げて元気にしよう・・・基本だな、何を聞くかは無論わかりきっているけども。

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になつてる

「んでしょうか？」

「それはですね」

ガタツと立ち上がる、勿論セシリ亞も同時だ。腰に手を当てて指を指す、標的は一夏に決まつてゐる。

『俺（私）が辞退したからだ（ですわ）』

「どや顔で一夏を見据える俺達、なんどや顔つて質問はしてはいけない。一夏が心底嫌うな顔で見ているが無視、細かいことは気にしてたらいけない。『細かいことじやねえよ！』知るか、俺にひとつでは細かいことだ。

「ええ、一夏さんが負けてしまったのは当たり前ですしだが、伸びしろがあるのでことで経験積ませるためにだ。お前言つてたる？」「まあ、そうだけども

「なら、頑張れ一夏」

「ああ、俺がやつてやる…………で、本音は？」
「めんどういので馬鹿な一夏君に押し付けて樂をしそうと」

「本音と建前が逆だ！？」

まあ、千冬さんに説明したし。実際一夏には頑張つてほしい、覚悟があるならそれ相応に力も付けて欲しい。めんどうなのも45%くらい入つているがな、ここが藍越だつたらやつてるが生徒会長があいつつて時点で却下だ。うん。わざわざ面倒」とこに首は突つ込みたくないからな！

「それでは、織斑君がクラス代表で決定です。良いですね～？」

『はい！』

IS学園一年一組、今日も今日とて平和である。ついでに俺は副代表・・・解せぬ。

4-1・結果がこれだよ（後書き） (書き)

やさしさとマジック活動（予定）

（定められた題材で作品情報を発表）

「おくれる……！」

「なあつ！？ 音兄、俺も乗せてくれ～」

「残念ながら一人用だから～、ごめん」

男子に宛がわれた更衣室から実習が行われるグラウンドまでは結構な距離がある、なにせ軽いマラソンくらいには・・・遅刻した場合は織斑先生からのありがたいお仕置きがある。・・・ので着替えが終わつた俺は開け放たれた窓からダイブ、小型ジェットパックを召還して時速200kmでまだ着替え終わつていな一夏を尻目に高速移動中。無断のIS展開は許されていないがこれの許可は取つているため咎められない、まあ、委託企業の資金提供がされてるからそのツテでと言つのが正直なところ。ちなみにこれの操縦はライセンスが必要、本当は緊急のために取得したものなんだがな。どんなんのかわからない？ JET MANってググれ、画像検索で。それに普通のゴーグルとISスーツ着た状態だ、色はブルーな。ついでに言えば俺のISスーツは半袖ハーフパンツの密着型だ、汗でべたつかないって良いよね！

「とおおおおちやああああく！…っせい！」

一端着地してから、軽くジャンプしてジェットパックを格納。ベルトにはできないので腕輪にして完了と同時に再び着地して列に並ぶ。クラスからはおお～という声が上がつたが・・・なぜかセシリ亞だけじとーと睨んできていた。だから俺が何したよ、前に聞いたら俺が悪いらしい・・・理由は教えてくれなかつたがな。それだと直しようがないと思うんだがなあ・・・あ、一夏がやつと来た。

「遅いぞ織斑」

「すいません・・・（音兄H・・）」

四月下旬、そろそろ遅く咲いた桜も散つて緑が増え始める・・・やべ、桜餅食い損ねた。頃・・・少し授業にはとうてい関係ないことを考えながら今日も今日とて鬼教官と言ひ名の織斑先生のありがたいお言葉を聞いていた。ハイパー・センサーのおかげで良く聞こえる。

「早くしろ、熟練した操縦者ならば展開まで一秒とかからないぞ」

IISは一度、最適化フィッシュティングをしたらずつと装備者の体にアクセサリーの形状で待機している。俺の場合は貸し出しのために仮最適化だがな、セシリアは左耳のイヤーカフス。俺は眼鏡・・・一夏はガントレットだ、どこがアクセサリーだよ一夏の場合防具じゃないか。

「集中しろ」

次は出席簿で叩かれるな、あのブラコン教師ちふ～ゆのことだから。流石ブラコン、容赦無いぜ！え、なんで俺が叩かれないって？ボーカーフェイスだからに決まってるジャマイカ。それでも軽く睨まれてるがな！

「・・・」

一夏が右腕を突き出して左手でガントレットを掴んでいた、あえて言おう、中二くさいと。いやまあ、それでゆっくり展開されていくから面白いんだけども。0・7秒の展開時間、その後には白式を纏つた一夏がそこに立っていた。人のやり方には

「よし、飛べ」

言われてからのセシリアの行動は早かった、俺は一気にブースターを噴かして急速上昇。F型の速度はやはり良いなあ、一夏がのろのろと飛んでくる。スペックはブルー・ティアーズより上なのに勿体無い。それに出力全開だと追いつけるF型もどうかと思つけどな。

「打鉄がその速度と言つのも、面白いですわね」

「まったくだ、といつかこのままいつが専用機でも良いんだがな」
それにしても俺に専用機つてどんなのが来るんだろうなあ、クライシング・ウルフみたいな四脚でも良いぞ。・・・・・つて一夏、遅い！見てるこっちが心配なくらいにぐらぐら揺れながらやつと並んだ。別に前方に角錐があるイメージなんてものは正解じゃないし。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を摸索するのが建設的でしてよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚 자체あやふやなんだよ。なんで浮いてるんだこれ？」

「どこの毎回マミるあんばんと違つて機械なんだから「そういうふうにできる」で良いんじゃないかな？」

どうせ流動波干渉だ反重力制御だ説明したつて理解できないだろうし、あれ、IFSの技術流用すればBB部隊の装備再現できそうじゃね？それよりもREX乗つてみたいけども。まあ、今は関係ないか。

「織斑、オルコット、如月。急降下と完全停止をやって見せる、目標は地表から10センチだ」

お～、地上で話している千冬さんの顔のしわまで良く見える。まあ、機能制限外せば何万キロ離れた場所も見れるんだけどな、流石宇宙開発用マルチフォームスーツ！一度開発者と話をしてみたいものだ。でも、なんか人格破綻者という噂も。興味無い人間にはとことん冷たいらしいよ、どうやって生活してんだろうか。

「では、お先に！」

お～、流石候補生。見事にやつてのけた・・・・うん。さて、次は俺か・・・・・せめてここくらいは良い」とこ見せられなければいけない。代表決定戦で年上の威儀を簡単に失ったために俺は負けてられないんだよね、まあ、無理はできないけどさ。

「つせい！！」

地面へと姿勢変換、そのまま一枚の物理シールド裏の高出力ブースターによる爆発的な加速で移動。地表近くでP.I.C全開と逆噴射で急停止。つふうつ、スリル有るなあ。まあ、こうできるのも毎日セシリアが練習に付き合ってくれてるからだな、感謝しなければなあ。

「ふむ、9センチか。なかなかだ！・・・なんだ？」

後方で一夏がクレーターを作つて犬神家をやつていた・・・・なんだこれ、強制解除してるしある意味すごいわこれ。一夏にはギャグのセンス・・・無いな、日常的にそう面白いしないの考えてどや顔してるだけだし。それを考えたら今回は面白いほうか、ついにリアクション芸人目指すのか？違うだろうけど。

「好きでやつたんじやねえええ！！！」

無理やり頭を地面から引っ張り抜いて一夏が立ち上がった、一瞬、一角の白い何かが見えたような気がするが気のせいか。そうか。ってセシリ亞は普通に心配してるので、篠さんがIS付けてるから大丈夫発言……あなた一夏のこと好きなんですかね？ひとまずなんか言い合ひてるのを横目に一夏回収、わ～なんか火花が見えるよ。

「馬鹿者、誰がグラウンドに穴を開けろと言つた」「…………すみません」

一夏の醜態にクラスの女子がm9状態、ISはどうやら一夏のハートは守ってくれなかつたようだ。

「情けないぞ、一夏」

篠が一夏を田尻上げて睨んでいるが、篠の教え方はスーパー擬音タイムだった。理解できる人はおそらくこの世界に一人といないう、某ドモンなら理解できそうだが。「くいって感じ」とか「ズガンつて感じ」とか……うん、わからん。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいはできるよつになつていいだろつ」「は、はあ」「返事は『はい』だ、馬鹿者」「はい！」
「よし、では始めろ」

その途端、一夏が再び右腕を掴み瞼を閉じて集中を始めた。右手のなかで徐々に光の粒子が姿を結び始め、0・7秒。白式唯一にして最強の刀、雪片が現れる。頑張ったんだよな一夏も、こうなるまで1週間かかった。まあ、普段の生活で手元に刀が出てくるイメージ

なんてしないからなあ。

「遅い、0・5秒で出せるよ！」
「なれ

やつぱ厳しいなあ、少しくらい褒めてやつても良いのに。一夏も軽くつなだれてる、頑張れ一夏。って次は俺か？

「次、如月」

「サー、イエッスねわあ！」

「返事は『はい』だ（ふざけるなよ？次ふざけたら『ヨ』）」

「はい！（いかん、目が怖い。本気だ）」

出席簿の衝撃で痛む頭をさすりながら軽く右手を振り、加速する刃をイメージして刀を抜き放つ動作をしてスティール・ハーツを展開する。勿論、薬室にカートリッジを装填して安全装置を解除した状態で。青い空にはこれの青も合つたな。ちなみにスティール・ハーツは？から現在も開発中らしい。噂では？まであるらしい・・・機体は失敗なのに。

「ふむ、次。オルコット」

「はい」

左手を肩の高さまで上げて、真横にズビシッ！と突き出す、見事なツツ「ミアクション・・・良いセンスだ。そしてそれが終わつたころにはスター・ライトマーク？が握られていた、視線を向けるだけですがに発射態勢へ。流石代表候補生、セシリ亞サイコー！！（セシリア分が毎日補給できるため幾分かおかしくなっています）

「ただし、そのポーズは止める。横に銃身を向けて誰を撃つ気だ、正面に展開できるように！」

「で、ですがこれは「直せ、いいな」……はい

ああ、千冬さんの前では伝統の構えもダメなのか……今度時間あるときに相手しよう。俺が銃の展開を迫られたら必ず「うするが、どうやらセシリアには抵抗はできなかつたらしい。あの睨みはまつりからなあ。

「まあ、気にするな。今度にでも一緒にやろう、懐かしいし

「はい、是非！」

「なにイチャイチャしている。オルコット、近接武装を展開しろ

「は、はい！」

イチャイチャって……俺がセシリアと?そんなことあるわけ。
……こちらに突き刺さるような視線が来てるからやめよつ、精神的にきついわこれ。俺つて何か悪いことしてるのかなあ……謎だ。

「音兄……セシリアが可愛そつだ」

「一夏、お前が言える立場か

セシリアはスタートライトmk?（正確にはランサー・カスタムって言うらしいよ）で慣れているのか、すぐに手元に近接武装である「インター・セプター」を展開した。どちらかと言つとコンバットナイフサイズ、近づかれた場合の緊急装備みたいだ、あまり丈夫そうでもない。まあ、中距離型だからなあ。

「ふむ、では時間だ。今日の授業はここまでだ、織斑、グラウンド

を付けておけよ? 「

さて、一夏は自業自得だし。ささつと着替えて昼食へ、助けを求める声には答えるが自業自得はお断りだからなあ。今日は何食べようかな~、それとチーズケーキも忘れてはならん。あ、セシリアも誘うか。

「セシリア、昼一緒に食わないか?」

「はい、是非とも」

4.2・はじめての実習（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアさんスペック上方修正

4.3・祝賀会だつて（前書き）

ちよこ 今回のは出来が悪いです

「ふうん、じこがそうなんだ」

日も沈み、夜。IS学園の正面ゲート前に小柄な体には不釣合いなボストンバッグを脇に抱えた少女がいた。

「つまりすんなこの泥棒猫〜〜！」

「少しじゃないのよ〜！」

その前を高速で水色の髪の少女と後ろをサイドテールのコック服を着た女子が走つていったが、声をかけようとしたころには既に遠くへと走り去つていた。通り過ぎた際に起きた風に特徴的なほど鮮やかなサイドアップテールがなびく、それを留める金の留め金が月光に反射して輝いていた。

「受付つて〜〜〜行つちやつたわね、どれだけ速いのよ

仕方なく上着のポケットからくしゃくしゃになつてしまつた一切れの紙を取り出す、その扱い方から少女の性格が窺える。大雑把・活発・ツンデレである、最近の悩みは体のある部分のことであつたりする。

「・・・まつたく、本校舎一階総合事務受付つてどこよ」

文句を言つても返事をするわけがない、多少イライラしながら紙を上着のポケットに仕舞う。また中でぐしゃりと聞こえるが気にも留めない、遠くから「邪魔すんなコラ〜〜」とか「いや〜〜〜！」とか聞こえるが気にしない。今は目的の場所へと移動するのが先決なの

だから。ちなみに思考より行動なやり方である、悪く言えば「良く考えない」である。

「だから・・・つまり・・・という感じでだな」

「いや、それ分からないうて」

聞き覚えのある懐かしい声、歩きながらふと聞こえたそれに少女の胸は高鳴る。予期しなかった再開に思わずガツツポーズをとつてしまふ、しかし聞こえたのは意中の相手だけでは無かった。

「くじつて感じってなんだよ」

「・・・・くじつて感じだ、理解しろ一夏」

「あのなあ・・・」

影から覗いて見えたのは見覚えのある男子と今まさにすたすたと立ち去る少女の姿だった、知らない女子と親しそうに話している・・・。さきほどまでの高揚は嘘だったかのように消え、ひどく冷たい感情が胸の中を埋め尽くす。苛立ちが沸き起るがどうにか押さえつけて歩く。

「時間に間に合わないって言つてんだらうがーー」

「とおつー！」

「あ、また逃げやがった・・・つたぐ」

総合事務受付の看板が見えたところに丁度、先ほどの「ツク服を着た人物が一人の女子を逃がしてため息をついていた。黒の左サイドテール、特徴的な優しげのある声に高めの身長。頼りがいのあるその背中、かつて実家の常連であり世話になつた人物。

「まだ、30分はあるか・・仕方ないメール送信つと

「もしかして・・・音羽？」

「・・・・・ん？」

なんか懐かしい声を聞いたような・・・どこからだ?見回してもどこにもいないな、俺も幻聴聞こえるようになったのかなあ・・・シヨックだ。さて、気を取り直して食堂行くか腕によりを振るったから全員満足なはず。盛り付けがまだ終わってないんだよね、某美月さんのおかげで。

「ちょ、ちょっと。無視しないでよ。」

「また幻聴か、疲れてるのかなあ・・・・・・お?」

なんか下から聞こえたので視線を向けてみたら・・・・どこかで見たことあるようなツインテ少女がいた。あれ?

「もしかして鈴ちゃん?」

「そうよーなんで氣づかないのよ、嫌がらせなわけ!?」

「ああいや、悪い。もしかして転入か?おそらく一夏田当てか

「まあね、本校舎一階総合事務受付ってあそこで良いのよね?」

「ああ、あそこだ。一夏は一組だから・・・ひとつとせべ時間だ、じゅあな

「うん!ありがと」

後ろで「クラス代表変わつてもうおうと思つて」とか聞こえたが、

俺には多分関係無いだろ。どうせクラス代表は一夏だし、つと就任祝いパーティーの準備しなければ！！腕時計を確認し、俺は全力で一学年食堂へと走つて飛んだ。どうせなら祝い事は派手にやりたいじゃないか。

「というわけで、織斑君クラス代表。如月君副代表決定おめでとー！！」

『おめでとう～！』

パン、パーンと景気良いクラッカーの音が鳴り響く。俺と一夏の頭の上に乱射されたクラッカーのテープが大量に着地して結構重い、ついでに火薬の匂いがすごい。まあ、祝つてもらうのは誰だつて嬉しいよね一夏はいまだにどよ～んとしてるけど。ここは一学年食堂、時間は夕食後の自由時間を貸しきり。一組のメンバー勢ぞろいで飲み物片手に並べられた料理をつまんでいる。

「これ全部如月君が作ったの～？」

「おう、特製ダレに付けて食べてな」

この、後ろの横断幕にも書いてあるが「織斑一夏・如月音羽就任パーティー」は一組女子と料理担当の俺で企画されてる。というか、小耳に挟んだから俺も協力することにした、こういう祝い事は楽しくて意味があるからな。つて、一夏がまだ暗いなおい。

「これでクラス対抗戦も盛り上がるよね～」

「ほんとにね～」

「ラッキーだつたよね、同じクラスで」

「ほんとほんと」

「俺も楽できるし、一夏は良い力試しになる。ホントに良かつた」

今相槌打つた娘つて2組の人だつたと思うんだが、いや、居ても良いんだけどね。てか、一組の人数余裕で超えてるなこの状況は、クラスの垣根越えても別に良いじゃないか。確実に40人越えてるような感じがするけども。

「人気者だな、一夏」

「・・・本当にそう思つか?」

「ふん」

「素直じゃないねえ、篠も」

「ええ、もう少し素直になれば良いですのに」

「まつたくだ」

ちなみにセシリアが俺に腕を回して右側に座つてゐる、動きにくいんだが。当たつて落ち着かないし、まあ、前にそれ言つたらなぜか怒られたからもう言わないけどもさ。あれだよあれ、傍目から見ると羨ましいけど実際は大変なんですよつて状況。・・・そういうセシリ亞も女の子から女になり始めてるんだよね、成長したのはちょっと嬉しいけど寂しくも感じる。これが親の気持ちなのかなあ・・・。ハツ、不穏な気配!

「どうも～、新聞部です。今話題のお一人に取材を・・・あれ音

オーと歓声が沸き起る、俺はオーな気分じゃないんだが。音っち。
・・音兄のことか？ホントだ、いない。

「まあいいや、新聞部副部長の黒薫子よ、よろしくね～」
『ハイハイ～～』

名紙を受け取る、書くとき大変そうだなあと思つた。|画数多すぎる
つてこれ・・・あ、音兄が観葉植物の陰に隠れてる『教えるな！』
わざわざプライベートチャネルで話すなよな。そこまで嫌なのか、
とこづか音兄をそこまでさせんつて何者ぞ。

「ではズバリ織斑君、クラス代表になつた感想をビハッヂ～！」
「え・・・・えーと」

いきなりボイスレコーダーをずっと出せれども、言つ事なんて決
まってないんだがなあ。うーん、どういえば良いんだ？期待のこも
つた視線がたくさん突き刺さつて大変なんだが、むーん。

「まあ、なんとか頑張ります」
「えへ、もつと良いコメントうちゅうだいよ～。『俺に触れるときけ
どわかるザー』みたいにセー～」

そんなこと聞われてもなあ・・・あ。

「俺だつて、やれる！」
「おお～、かつこじいぢやない。じゃあまあ、あとほ良い感じに捏
造しておぐね」

そんなので良いのか新聞部、ここに現代の報道の腐敗を見たような気がする。いや、大げさか……というかこいつことなのか隠れてる理由は。コクコク頷いてるし、いつもの頬りになるあの面影はどうやら。セシリアはなんとも言えない顔でため息ついてるし。

「あ、音つけに言つておくれど。取材拒否したら”あの”写真ばら撒くから」

「させるかああ！…つていうか、脅すな薫子」

「あらら、まあいいや。はいはい、譲った理由は？」

突然飛び出てきた音兄、一体どんな写真なんだろ？か・・・聞かないほうが良いだろ？なあのは慌てぶりからすると。なぜかセシリアが顔赤くしてるし、うん、俺は何も聞いてなかつたことにしよう。それが一番だ。

「利害一致で押し付け・・・任せた」

「うんうん、よしオッケー。じゃあお礼にたっちゃんにあの写真見せておくね～」

「大丈夫だつて、一枚だけだから セシリアちゃんも良いよね？」

「はい」

「俺に味方はいないのかよ・・・・」

〇一二状態になつてゐる音兄、なぜ今日は貴重な姿ばかり見れるんだろう。明日は雨でも降るのか？

「じゃあ、ほら音つけちも並んで。[写真撮るから]

「わあつたよ、俺真ん中で良いのか？」

「（合法的に）アピールですわ！」

「専用機持ちだから良いの！」

「（肩組んでつていうのも久しぶりだな）」

カメラを向けられる、薫子つてのが心配だ。いつだかも転んでセシリ亞を押し倒しちゃったように見える[写真]を撮られたらし、あれってこれのことだよちくしょう。まあ、セシリ亞との[写真]なら良いか。俺がいたころの[写真]は残つてないし。

「じゃあ撮るよ～、 $35 \times 51 \div 24$ は～？」

「あ、2か？」

「ぶふ～、74・375でした～！」

パシャっと音がした[写真]はフレームにクラスの皆が入つていましたとさ、なにいまのみんなの移動速度。人のレベルじゃなかつたぞ・・まあ、十代乙女には物理法則や常識は通用しないってことか。

「なんで入つてこらつしやるのかしら～？」

「まあまあ、大勢のほうが良いだろ。なあみんな

「そうだよ～」

「抜け駆けなんてさせないもんね～」

そんな楽しい宴は11時[写真]まで続いたとせ、俺はすぐに帰つたけどな。十代女子のスタミナ悔つてたよ。

4.3・祝賀会だつて（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽の総資産（作者のガチ計算結果）

薬品企業の年収からライセンス料3%×5年

約200億円なり

（本人と一部企業関係者しか知らない）

44・記憶の断片（前書き）

少し動くかな、短いです

44・記憶の断片

夢を見る

どこか暖かく

どこか寂しい

最初に目に入るのは透明なチューブのようなもの、液体が満たされた中に幼い男の子が見える。隣には同じようにチューブがありその中に同じ言のように女の子が入っていた。腕を動かしても温度を感じない液体しか触れない。外を見れば白衣を着た研究員らしき人ばかり。

「・・・・だ・・エク・・ド・・」

「・・・マシン・・・調整・・・」

「・・・DNA・・・L3・・・設定・・・」

とぎれどぎれに言葉が聞こえる、どこかの研究室のようなのだが。
それ以上はわからない。

『生体部品生成開始』

『D 8 筋繊維にエラー自動修正開始』

チユーブに繋がれた機器を操作する白衣の男性、女性。若い者から、白髪の年寄りまで。ときどき、身体に痛みを感じる。中身から弄られているかのような不快感、でも嫌にならない。むしろ心地良い。それを感知しているといふことはこの男の子の視点で夢を見ているのだろう。

場面は変わり、同じ場所。でも、研究員たちの顔には焦りが見え隠れしていた。

「強制・・・・コア・・・・埋め込み・・・」
「不可・・・・耐久・・・・エネルギー・・・」
「失敗作・・・・100体・・・・もう・・・」
「・・・・IS・・・・無理だ・・・・」

血眼になって機器を操作する研究員。近くのモニターには数式や複雑な設計図のようなものが大量に羅列され、延々と流れていった。

再び場面は変わる・・・・視界に映るのは、廃墟。輝が入ったチユーブ、血が付いた右手、銃声。

「成功体・・・・させるか・・・」
「撃ち殺せ・・・・逃がすな・・・・披検体・・・」

なぜか左手には赤い液体の付着したナイフ、右手にはハンドガン。

足元には息絶えた人間だったもの、床はそれから流れ出す液体に染められて小さな水溜りになっていた。後ろには女の子、怯えたような表情で蹲つていた。

「大丈夫、 は俺が守るから」

「ホント?」

「うん」

ふと見上げたそこには自分が入っていたであろう大きなチューブ、下には小さな金属プレートが貼り付けられていた。ところどころ赤いなにかがこびり付いているが、かすかに刻印された文字が見える。この夢の主役であろう少年の存在を示す名前。

『一 戰鬪特化遺伝子強化披検体N - 35』

「・・・・・んあ?・・・・」

何か懐かしいものを見ていたような気がする、幼き日の思い出のようだ。それしか感じないが・・・まあ、所詮夢か、それにしてもなんだつたんだろうな。

「ほり、起きろ。朝食食いそびれても知らないぞ」

「うにゃ~」

「うおわあー馬鹿、なんで下着だけで寝てるんだよー。」

中々起きないので布団をめぐると、最初に見えたのは紫の・・・所謂勝負用とかって言われそうなブラとパンティー。正直言つと、とても艶やかです、こいつも体型は結構良い方というか良いので。俺だって普通の男子高校生であり思春期ですよー朝からはダメだってこれは、前屈みになっちゃうから。

「ん、誘惑ですけど。なにか？」

「せんでーい、早く着替える。俺は向こう向いてるから」

「中学のときは普通に着替えてたじゃない、もしかして・・・」

あー、この後ろから聞こえる布擦れの音が落ち着かん。落ち着け俺、後ろにいるのはただの幼馴染・・・で会ってるのかわからんけど。幼馴染に反応してどうする、ただの節操なじじゃないかよ。早く男同士の部屋になりたいです、むしろセシリアと同部屋だつたらもう少し落ち着いていたかもしけん。

「わひやあー? な、な、にやにを・・・」

薄手のシャツ、感じるのは暖かくて柔らかいなにか、こ、こいつ・・・わざと当てて反応楽しんでやがる。よく知った相手とはいえこいつらのができる女子っていないよね、普通は、こいつが特別なだけかもしないが。

「そういえば、クラス対抗戦頑張ってね」

「俺は副代表だから関係無いだろ」

「さて音羽分も補給できだし、私は行くわね〜」

「説明してけー!・・・行つちまつたし」

音羽分つてなによ、そんなことを疑問に思つた朝だつた・・・。

44・記憶の断片（後書き）

ところが、どうもかと云つて、筆者との出番でした

さうでも良こそ作品情報

今作品で打鉄は結構バリエーション多い

45・つねぺたシントレ中華娘登場（前書き）

IUSガチャでお嬢様が一発で当たりテンションがヒヤッハーしています

予約投稿の日時間違えてしまっていました、すみません

「おはよー！」

朝の挨拶は元気にしよう、勿論笑顔で。最近は挨拶ができる人が減っているらしい、人との付き合いは挨拶から始まるんだ、しつかりすれば良い人間関係が築けるぞ。

「おはよー如月君。転校生の噂って知ってる~？」

「おう、おはよう。ああ、中国からだつたつけ」

遅く起床したために今日は朝食を一人で済ませた、もとい栄養ドリンク。時間が時間だつたから遅刻するわけにもいかなかつたんだよね、すまん俺の体。千冬さんの出席簿のほうがダメージ大きいから優先させてもらつた・・・転校生ねえ、無粋だから言わないけどね。

「しかも代表候補生なんだつて~」

「へえ、ほお。ふうん」

代表候補生と言えば・・・・。

「あら、わたくしの機体データでしようか

「どつちかつて言つと俺らのデータだろうな、タダではやらなければ」

いつもも増して腰に手を当てるポーズが似合つてゐる、一夏が考えているようにイギリス人全員が綺麗にできるわけでは無い。これも威厳と嗜みの一つである、俺は一応できるが特に使う用事も無いからやつてない。ひとまず、今日もセシリ亞は可愛いとだけ言つておこ

۸۰

「このクラスにでは無いのだから、ならば譲り受けの」とでもない

卷之三

さつきまで遠くの自分の席にいた箒がいつの間にか一夏の席へと移動してきていた、もしや忍者か？違うか、そうか、「空気なだけか」「誰が篠ノ之空氣だ馬鹿者」だそうだ、まあいいけど。なんか一波乱起こりそうな予感がするなあ、原因は主に一夏とか一夏とか一夏とか。

「」

「氣になるのか？」

「候補生」ということですからお強いのでしょうか？」

つまり・・・優勝景品の「食堂スイーツ一年分フリー・パス」が手に入りにくくなるということか、確実に候補生機体データとかでこういうイベントには出る。というかデータ取りのために来ていると言つても過言ではない、ちなみにセシリ亞もそんな感じである。ついでに言うとクラス対抗戦とはクラス代表同士による、本格的なIS実習が始まる前の・・・え、と・・・スタート時点での実力指標を作るためにやるらしい。やる気出すためにフリー・パスとかが景品にされるらしい、粹なはからいをするものだ。え、そっちの説明が重要だつて？俺にはスイーツのほうが重要なんだよ。

「対抗戦は負けられないぞ」夏木

「あ、やれるだけやつてみる」

やれるだけでは困るなー夏！男たるもの頂点を目指してしかねは意

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよ」

「今のところ専用機持ちは1組と4組だけだから余裕だよ～

いや、仮にもクラス代表だから油断できないと思うんだが。専用機持ちじゃない候補生だつているんだから、機体性能が勝利の絶対条件じゃないんだぞ。どこかの池田声の仮面彗星も言つてたじゃないか、え、分からないつて？ *agogos*

「その情報、古いよ」

突然教室の黒板側の入り口から昨日ぶり　ああ、一夏には1年ぶりか　の声が聞こえる、その懐かしい声に一夏が振り返る。俺は最初からそっちを向いていたので問題ない。あ、筈の視線が真剣を抜いた侍のように鋭くなつた。いや、元からが余計に鋭くなつただけか。つて鈴ちゃんそういう風にすると

「2組も専用機持ちが代表になつたから、そう簡単に優勝させないから」

「鈴・・・？お前、鈴か！」

「ううよ。中国代表候補生、鳳鈴音。^{ファンイン}今日は宣戦布告に来たつてわけ！」

「おお、なんというカッコつけ。まあ、カッコよく決まつてるけどボーリッシュコツてこついうのを言つのか。うん、勉強になつた、いつ役立つか知らないけど。今日もサイドアップテールが陽光に反射して輝いている、健康的つてのは良い事だな。ちなみに鈴ちゃんも一夏のことが好きである、この女泣かせ！」「音羽・・・それ、あなたが言えることですか？」どこがだよ、俺のどこが鈍感でビン・カン奴だつて言つんだ。

「何格好付けてるんだ? すげえ似合わないぞ」

「な、なんてこと言うのよー台無じじゃないー!」

流石KYOUキング、せっかくのシーンを根底から破壊してくれた、おれ『ディケイドオオー!』まあ、某10周年はどうでもいいが、といふか、何時になつたら一夏はまともな男になるんだろうか。まさか、ここからまた増えないよな一夏ハーレム。一瞬、金髪貴公子と冷水つて単語が思い浮かんだが関係ないよなあ! ?まあ、昔から嫌な予感は当たるから・・・まあ、一夏のことだからもはや驚かないけどな。

「一夏H・・・・まつたく、お前は・・・」

いかん、新たな犠牲者が出でてしまつ。『』は伝統のやり方で伝えねば、一夏と一瞬視線を交わし鈴ちゃんの背後を指差して叫ぶ。

『志村づるり、づるりーー』

「え? びざやア! ...」

無慈悲に振り下ろされる剣刀『出席簿』、その迷い無き一閃は鈴ちゃんの額に吸い込まれるように命中した。振り返つたら視界から外れなくちやいけないだろ千々きよ! 吼くのはまだ早い、ああ、でも千冬さんがなんか堪えてるよつてじてゐる。DIRTYGEEEEE

EE! -!

「鳳、もうSHRの時間だ。さつと戻れ」

「は、はいー一夏、また来るからね! あ、音羽も」

そう言ってチャームポイントのサイドテールを握りこみ、身を翻して

去つていぐ。その身軽さはさながら猫のようだ、そういうや猫つて可愛いよね。まあ、セシリ亞のほうが何倍も可愛いがな！！それは譲れん、あ、ＳＨＲ始まる。ってか、俺はついでかよ、まあ別に良いけどね。

「さつさと戻れ」

「はいーーー！」

結局今も千冬さん苦手なのか、昔からだよなー。懐かしい、つと席に戻らないと大変だな。一夏はどうせ自分に迫る危機に気づかないで「なんで格好つけようとしたんだ？」とか考へてるんだろ、目の前に武神が立つていいけどもシラーネ

「あいつ、ＥＳ操縦者になつたのか・・・」

「一夏、あいつは誰だ！」

あ、あ、あー・・・・・どんどん他のクラスメイトも一夏の元へと質問しに行つてしまつ、数人は俺の動きと表情と時計を見て自重したがな。

ズバンズバンズバンズバン！！

『・・・・・！』

「席に着け馬鹿者共」

スライドしながら残像を残して振り下ろされる出席簿が火を噴く、並んで頭を抑えて蹲る女子とその中心にいる一人の少年という不思議な構図が出来上がつた。なんだこれ。

ちなみに鈴ちゃんのことが気になつて仕方ないのか、篠がその後の授業で6回叩かれたのは不可抗力でもあると思いたい。

45・つねぺたシント・中華娘登場（後書き）

どうでも良〜い作品情報

セシリアと樋無にしてほしいコスを作者がこいつそり教えて欲しがつ
ていたりする

4.6・通常営業の回数（記載用）

ネタ余裕がある程度で

「お前のせいだ！」

「なんでだよ・・・」

昼休み、昼食をとろうと食堂に向かつたところ。一夏が箸に理不尽な説教をしていた、いくらなんでもそれは無いだろよ。自業自得だし、よりによつて千冬さんの授業で考え事して話聞いてないでいたらそりやあ叩かれるわな。しかも6回も、見てるにつづからすれば年頃の乙女らしいんだが、タイミングが悪かつた。鬼の・・・いや、鬼神の居る前ではそういう行動はそれこそネイキッド（ナイフ縛り）でBB部隊同時相手にしてるようなものだ。この例えが分かる奴がいるかどうか知らないけど。

「まあまあ、話は飯食いながらでいいだろ。な？」

「ずっとここに立つてゐるわけにもいかないしな」

「ええ、座つてゆつくりお話するのが良いと思いますわ」

三人による自然な口撃に箸がわかつたとでも言つように頷いて歩き始めた、あ、向こうで鈴ちゃんが仁王立ちして待つてゐる。心なしかイラつていよいよ見える、右足の爪先を何回も上下させてゐるからなんだが。そういうえば俺はカルシウムを過剰と言えるまで摂取してゐるのにイラつくことがあるんだが、誰だろうね「イライラするのはカルシウムが足りないからだ」とか言つたのは。まあ、そのために俺は味噌カレー牛乳ラーメンなるものを注文したけど。美味しいのかこれ？

「待つてたわよ、一夏！」

それぞれの昼食をおばちゃんから受け取り、席に着こうと視線を食堂に巡らした先に鈴ちゃんがどーんと構えていた。さつきからずつそのままだつたのか、心なしかラーメンの麺がスープを吸つて延びてるように見えるんだが。「ラーメンに限らずできたてが美味しいんだぞ、てか、結局カツコつけするのか。似合つてるけどさ。

「まあ、とりあえず座ろうぜ。あと空いてるし、鈴も早く食わないでダメだぞ」

「わ、わかってるわよー。」

ともあれ、一夏が先導して空いていたテーブル席に座る。田形のテーブルを囲むようにしていつものメンバーが座る、順番は一夏・第・鈴。一度鈴が一夏の隣に自然な感じで座っていた、俺とセシリアはそれに向かい合つようにして座っている。

「それにしても久しぶりだな、一年ぶりか? 元気にしてたか?」「元気も元気よ、誰かさんのおかげで(チラ)

「……(ブイッ)」

「どうしたんだ音兄?」

「なんでもない」

そうだ、なんでもないんだ。別に用事で一夏の写真をメールで送つていたんだ、とか言えない。しかも涙目+上田遣いのコンボで撃墜されたから断れなくてとかも言えない。まあ、好きな人に突然会えなくなることになるなんて悲しいからな。まあ、並木野で生徒会長やつてたときからの癖というか、「いつでも、どんなときでも生徒会長は生徒の味方」っていうのが固定観念であるといつかなんというか。まあ、それはいいや。

「俺が良く行つてた料理屋の娘さんなんだ（ボソリ）」

「やはり・・一夏さんのことを？」

「うん、結果はこのとおりだけども」

目の前では一人の少女が互いに火花を散らせて睨みあつていた、一夏、幼馴染にファーストとかセカンドって付けるなよ。ついでに言えば一夏曰く、簪ちゃんはサードらしき。だから幼馴染にファーレイ

「付き合つてるのか一夏！？」

「つ、付き合つてるなんてそんな・・・／＼」

「なんでそんな話になるんだよ、ただの幼馴染に決まつてるだろ」

『・・・・・』

「なんで睨んでんだ？」

「なんでもないわよ！…」

一夏エ・・・・・・・ぢづしてそこでわからないんだ、そこで！諦めんなよーできるできる絶対できる・・・・・わけないか。まあ、そういうことはお構になしに俺は味噌k（「ソラーメンを、セシリアは煮魚定食を食べる。おお、結構美味しいなこれ。（作者も食べた経験あり、美味しかったよ）

「鈴音さんですね、わたくしイギリス代表候補生のセシリア・オル

ゴジトと申します。よろしくお願ひいたします」

「・・・・・誰？」

「なつ！？同学年の候補生も把握しておりませんの？」

「うん、興味ないし」

「なつ！？な、ななあ！？」

セシリ亞の「メカミ」に四つ角が見える、突如言られた驚愕の事実に
よろめきそうになるもどうにか抑えたその顔は真っ赤になっていた。
まるでマンガのゆだこのようだ……喋つたら超速で撃ち抜か
れるから言わないけど。ひとまず落ち着かせよう。

「言つておきますけど、あなたには負けませんわ！」

「あつそ、まああたしが勝つけどね。悪いけど強いもん」

ふふんと強気な鈴ちゃん。相変わらずだな、妙に確信的だし嫌味
には感じないんだよね。素で言つてるからなんとも言えない、素で
思つてそのまま口に出すからなあ。嫌味じやないからむけりん怒る
人もいるよ？

「言つてくれますわね……」

「変わつてないなあ、鈴ちゃんは」

俺がしみじみと昔を思い出して懐かしんでいると鈴ちゃんが一夏に
クラス代表か否かを聞いていた、ああ、2組の代表になつたつて言
つてたな。確かもう決まってたと思うけど、おそらく候補生つてこ
との措置か？専用機持つて言つてたし、中国も第三世代機でき
たつて聞いたけどどんなのだろう。某ナタクみみたいにクローが付い
てて伸びるんだろうか、それはそれで強そうだな。

「音羽、そんなのなわけ無いでしょ」

「じゃあ、隠し腕」

「氣味が悪いでしょ」

「N-T-D」

「ここから出て行け……」

「Hネーハントローラー！」

「右左上下A B…ってできるかあ…！」

『いい加減にしろお（なさい）…』

痛い、人の頭を雪片とスター・ライトで叩くなんて。なんかズガベシツ！…って聞こえたぞ、およそ人体から聞こえてはいけない音だとと思うんだが。え、ギャグ補正？ふざけるな。てかメタネタやめる。それ以前にIS用の特殊合金で作られた装備をハリセン代わりにするな、俺の体内に物理的な突つ込み（誤字にあらず）になるから。

「まあ、いいや。じゃあ」「ゅっくりー」

「では、わたくしも」

昼食を終えた俺とセシリアは背後から聞こえるいつもどおりの喧騒を聞きながら、教室へと歩いていた。ふと掲示板が目に入ったので何か連絡事項などがないか確認する。ちょっとした連絡事項などはここで開示されるために、食事を終えた生徒がまばらではあるが集まっていた、大きな行事の連絡や情報確認もできるんだよね。

「え？」

「あら」

そこには、クラス対抗戦の出場がクラス代表と副代表の二名に変更されたという事項が表示されていた。

美月が言つてたことつて・・・…じつにひとつだったのかよ、m.j.k

4.6・通常営業の監査（後書き）

さうでも思ふこり作品情報報

原作2巻終わるまで音つきの本専用機は出てこない予定

47・当然の報い

IS学園第4アリーナ、その中央には4機のISが展開されていた。無論、白式とブルー・ティアーズに打鉄のF型と貸し出しの一般機だ。

「まさかタッグになるとは思わなかつたよ」

「これも良い経験だらう」

「後で楯無シメる」

「ともかく始めましょう、私と籌さんで攻めますから。お一人で連携してくださいね」

白と蒼、一つの黒が舞い上がった。そういうれば何故か一夏が籌とセシリ亞に追いかけられてボコボコにされるようなイメージが思い浮かんだんだが氣のせいだろうか。それはそれで見てみたいような感じもするけど、言っておくが俺はSでは無いぞ。断じて。まあ、美月の困った顔を見てどこかゾクゾクするようなことはあるけども。

「では、行くぞ！」

「上等！」

「全速全身DA！」

「音羽は危ないネタを使わないでください！」

ちなみに俺はいつもの赤縁眼鏡をかけたままである、右目の抑制も兼ねているからな。じゃないと関係ないと起動して面倒になる、この右目のこと知つてるのは俺とセシリ亞と美月に千冬さんだけ。何かあつたときのために敵を騙すなら味方からを実践しているのだ。事実、俺がIS学園に入つてから裏で動きが活発になつ

た組織があるとか。正体不明だけビ。亡国とかつて名前だったな、イージス？違うか。

「せやあああああーーー」
「やひせるかーーー」

篠が一夏にブレードで切りかかるところをハンドガンで牽制する。もちろんセシリアがスター・ライトの正確な射撃をしてくるのドシリードで防ぐ。

「一夏、今だ！」
「おーっ！」

それから2時間、みっちりとHISでの訓練をした俺達。一夏は汗だくで疲れきっていた、まあ、何も運動していないればそんなるよな。今は一夏と篠が反対側のピットにいるのだろう、なんか鈴ちゃんが上の通路歩いてそっちに歩いていったけど。

「ふはー、HISってのは結構使いにくいいな」
「まあ、慣れなければ大変ですかね。安心してください、私がしつかり教えてさしあげますわ」
「ありがたき幸せでござります、お嬢様・・・つてな」
「やつと様になりましたのね、今更だと違和感ありますけど」

まあそりゃあ、本邸では普通にタメ語つていう暴挙を犯していただけども。良くあんなんで俺やつていれたな、そりゃまあ警護は体に覚えさせられて反射でしちゃうレベルにはなってるけど。執事的スキルは皆無だからな、どっちかっていうと年の離れた妹に今日はをするよ～って教えて連れて歩いたようなものだからなあ。護衛のほうがメインだったし。

「俺の体のことがはつきりして片付いたら良いんだけどなあ」

「何か新しいことは分かりましたの？」

「裏でどこかの組織が動き出したってくらい、俺か一夏のどつちが狙いかも分からぬ」

死亡扱いになつてたらしいけど、世界的ニユースになつたからまた振り出しだ。中々俺自身の情報も出てこないし、結局俺はキャベツ特化56円なのか？近所のスーパーで1玉40円だったぞおい。

「右目のあれを使わなければ大丈夫だと思いますが
まあ、そなんだけども」

「コネ使つてフランス経由でドイツ軍に聞いてみるかな、こんなの造った記録あるか？みたいに、確か遺伝子強化体が部隊配備されてるところがあるって噂程度に聞いたことがあるし。そこらへんでなにかしら無いだろ？か、せめて56円の本当の意味を知りたいです先生。

「は～、厄介な体だこと」

「例えあなたがどんな存在だろ？と、私は傍に居ますわよ

「・・・・（涙目）」

「あ、あら？どうしたの音羽

「いや、嬉しくて・・・ああ、俺は今猛烈に感動しているー」

いかん、嬉しそうに涙が止まらない。何時振りだらうかこんなに泣いたのは、おそらくミリアさんに直々に鍛えられてそれがきつくて泣いた以来か。セシリアは何時の間にこんなに人間が出来上がったんだ、俺は嬉しいよ！あー、涙がやばい。汗みたいにだ～と流れる。

「もう、そんな大げさな」

「ありがとう、セシリア」

「まあ、それは良いですから。夕食にでも行きましょう、ね？」

「そうだな」

二人して笑顔で食堂に向かつて歩いていると、何故か一夏と簫の部屋が騒がしい。またなんかやってるのか、どうせ性もないことなんだろうなあ。竹刀と金属がぶつかる音がするし、どうしてそうなつた。

「またか」

「またですわね」

はあ、とため息をつくと突然鈴ちゃんがドアを蹴破り走つていってしまつた。・・・・・仕方ないので簫に経緯を聞き、なんでも鈴ちゃんが昔に約束した「料理の腕が上がつたら毎日酢豚を食べてくれる？」という「毎朝味噌汁を！」というものを「毎日タダ飯」と勘違いしていたらしい。擬似四次元ボケクト 腕時計からハーフサイズ月光を一機召還して痛みだけを与えるように命令して一夏をボコらせてしまつた。ついでに捨て台詞も。

「牛月光に蹴られて死ね！あ、簫も飯行かないか？」

「ああ、一夏。死ねとはいわん、だが死ぬ氣で反省しろ」

アツーーーーーとか遠くから聞こえたが気にしない、乙女の純情を弄んだ人間に当然の報いだ。え、月光だからシャレにならないって？まあ、そりやあ生体部品じゃなくて電磁人工筋繊維で脚部を作つたからやううと思えばコンクリートくらいは碎けるが。非殺傷、痛覚のみつていう稼動命令だから死にはしない。痛みは半端ないだろうけども。精々ワイヤーアームで痺らせるくらいだし。

「は～、まつたく一夏が将来暗い夜道で刺される未来しか思い浮かばない」

「同感だ、鈴音とやらが不憫でならん。いくら恋敵とはいえないにあまりだ」

「いつから一夏さんはああでしたの？」

篝と俺が向かい合つてため息を吐く、そこからかよ。

「小学生のころからか、道理でなあ」

「やはり中学も変わりなくか、まつたく」

「・・・・一夏さんは一夏さんですのね・・・」

食堂に三人のため息が響くよつと吐き出されたのは言つまでもない。

47・当然の報い（後書き）

どうでも良い作品情報

作中に出できた月光は音羽宅にも一機オリジナルサイズで配備中
(ステルス状態で)

48・番外編 IF その1「幻想入り」（前書き）

息抜きに番外編、時間軸は音羽が高一のとき

本編のIFですので平行世界のことだと思つてください
(作者は詳しくなく、ノリですので細かいシッコツは無しが嬉しい
です)

「あ？」

とある休日の土曜日、銃器などを裏ルートで仕入れてほくほく顔・
・・・それはそれでおかしいか。まあ、例えて言うなら工の8巻
がやつと出て買えたぜ！って感じくらいに嬉しいみたいな感じだ。
例えがメタなんて言っちゃいけない、分かりやすければ良いんだ。
で、なにこの足元の穴は。

「おわあ！？なんだこれ？つてか、落ちるー！」

どうにか飲み込まれまいと道路を掘るも、穴がそれ以上に広がり飛ぼうにもジェットパックが整備中であり手元に無いことを思い出した。あれ、詰んだ？ なにこの状況、え、え？

卷之三

最期の踏ん張りも効かず、その真っ暗な穴に俺は飲み込まれてしまつた。藍越学園に入学して初めての夏休み、初日の出来事である。

「リリード」だ

気づけば見知らぬ森の中、周囲には青々とした森林が遠くまで広がつていて、イオンが過剰摂取できそくなくらいだ。過剰摂取とかイオンにあるかどうか知らないけども、人っ子一人見当たらぬ、動物の気配も感じない。あるのは視界いっぱいに広がる森林、もとい樹海だけである。

「携帯は圈外、GPSも不可。どうこうことなの」

衛星の回線を乗つ取る魔改造を施してあるにも関わらず、携帯の左上にはどや顔で圈外が鎮座している。まだ買って改造してから三日しか経つてないぞおい、すぐに使えなくなるとは何事だよ。せつかく米軍の軍事衛星乗つ取れるレベルにしたつていうのに、あ、身の安全つて意味でね。軍用レーザー砲搭載されてるから。

「まあ、悩んでても仕方ないか」

まずはどこか人のいるところに出て、ここがどこかなど情報を手に入れなければいけない。悩んでいる暇なんてないんだ、早く家に帰らなければ・・・そのままイギリスに墓参りに行く予定だつたけども。ひとまず、現状を打破するために俺は森を歩いていった。風の向きからしておそらくこっちに行けばいいはずだ。

そうは言つたものの、かれこれ一時間。さきからぐるぐると同じ場所を歩いていいるような気がしてならない、田印を付けてきたからそれは無いとわかるが・・・景色が変わらない。このままでは結局遭難してしまつ、すでに遭難してるような気がするけども。

「まいつたな」

諦めて死神の瞳リバース・アイを起動させようと眼鏡に手をかけようとした途端、近くの草むらから何かが動く音が聞こえた。

「リスクか？ 流石に熊は無いだろ？ が」

とつあえず氣になつたので自身が遭難状態にあることも忘れて音の発生源へと近づいていった、できればリスク所望、可愛いは正義である。誰か・・・確かにジャックがそんなこと言ってた、絶対違うと思うが。

「ひねりー？」

突然足元に飛び出てきたものだから、思わず驚きのあまり後ずさり。そのまま後ろへと倒れこむように転んでしまつた、丁度尻が当たつたところに小石が突き出でていたみたいで痛い。まだ痛みが残るそこをさすりながら飛びってきたそれをよつやく見る。白い・・・毛玉？ 田と口はついているみたいだが、何も言わない。じつと俺の顔をガン見している、なにか言つたら言つたで怖い感じもするけど。油で揚げたらおいしそうだなこれ、抹茶塩を少し振りかけてサクッ。ひとまず初見の生物であるのは確かだ、なんだこれ。

「・・・・・・・じゅるり」「・・・・・・（ガン見）」

小腹が空いてるし、捕獲してみるか。新種だつたらおそらく研究所とかから報酬とかも貰えるかもしない、既に総資産が企業のそれを超えてるけど。一昨日に銀行口座の金額見たら大企業の年収数年分になつていたけども、どう使えと? オルコット家には裏ルートで送金したけどもさ、それより今はこいつを捕まえるのが先だ。

• • • • •

今までに手を伸ばそうとした手前で、その美味しそうな毛玉は素早い身のこなし(へ)で遠くへと飛び跳ねて逃げていつてしまつた。ああ、貴重な不思議生物兼食料になりそつだつたなにか・・・。名残惜しくそれが居なくなつた方向を見ると、いくらか明るく見えた。どうやらその先は開けているようだつた。

5分ほど歩いていくと、見渡す限りが広大な草原になつていた。まあ、濃い目の霧がかかつていて地平線が見えないんだがな。それでも森の中で過ごすようなことにならなくて良かった、持つてる食料なんてカロリー・メイト食いかけの一本しか残つてなかつたからな。流石に寝袋無しで野宿はきつい、いくら大丈夫なように鍛え上げられてしまつたとはいえ。

「どうするか、」のままで立つてゐるわけにもいかないし

ここから人が住んでいそうな集落は見えないが、森と反対側になら
人里くらいはあるはずだ。というか、無かつたらマリアナ海溝なみ
に深いため息を限界まで吐くことになりかねない。ジェットパック
が手元に無い以上、上空から飛行して調べることもできないし。・・

・・・歩くしかないか。

歩き始めて既に10分が経過した、どこにも集落なんて見えないし水田のようなものも見えない。心地良いそよ風が俺の顔を優しく撫で付けるだけ、あゝ静かだなあ。まあ、まさかこんな場所で迷子とは夢にも思わなかつたわけですが。平原で迷子とかどうやつたらで起きるんだろうね、俺がなうな感じでそれだけど。

俺のチタン合金ハートが傷ついてため息をはあと吐いていると、どこからか声が聞こえた。

「どうして迷子になつているか知りたい？」

「ん？」

頃垂れていた顔を声の聞こえた方向に向けると、そこに青い服を着た小さな女の子がどしどと構えて立つていた。軽そうなのにどつしつとはこれいかに、帰れたら一夏にでも教えておこう。で、迷子の理由だつて？

「道に迷うのは妖精のせいなの」

「・・・・厨二？邪氣眼でも発動した？」

ところが、このエリツっていう科学技術の塊が世界の中心となつている世の中にそんな非科学的なものを出されても。普通ならばこそう

ですかって納得できるわけがない、というか中一病患者を相手に話している暇など無いんだが。見たところ小学生っぽいし、ひとまず人里まで案内してもらおう。

「違うわよ！いきなり失礼ね」

「ああ、すまん。ところでどこか近くの人里まで案内してくれないか？君はどこに人が住んでるか知ってるかな？」

「もちろんよ！」

「おお、助かった。元気に返事をしてくれたってことはもう安心だ、無事に人里に行ける。

「じゃあ、案内お願ひしても良いかな？」

「道を教えてほしいの？それじゃあ・・・」

「勿論お礼はするよ、できる限りだけど」

俺が言い終わった瞬間、両手をこちらに向けてくる女の子。なにするんだろう、おんぶでもすれば良いのか？気の強い子みたいだから、それは流石にありえないか。以上、セシリ亞を相手に頑張った俺の経験による考察終了。

シュパン

「え？」

視界を埋め尽くすとまではいかないものの、多数の小さな氷塊矢のように放たれて。そのうちの数個が俺のすぐ真横を通り過ぎていった。当たりはしなかつたものの、サイドテールに少し掠つた。体に命中しなかつたものの、掠つた髪が少々散らばったことから相当の威力を持つことがわかった。体に当たれば怪我だけでは済まないと

直感で理解した。

「いきなり何しやがる！」

「案内してほしかつたら最強のアタイを倒してみなさい！…！」
「は！？」

一体何がどうしてこうなった、道案内を頼んだら何故か戦うことになつたし・・・それ以前にあの女の子手から氷の弾撃ち出したぞ。教えてくれないか、ジャック。ここに居ないから意味無いけどもさ。そうだ、良く考えろ俺。きっとこれは夢だ、幼女が手から氷塊撃ちだして俺を狙つてくるなんてことあるわけないジャマイカ。どこのゼビウスでも相手は女の子じゃないぞ。

「あいたたた・・・流石にこんなリアルじゃ夢なわけないか」

が。頬をこれでもかとつねつて見るが、考えるまでもなく非情なまでの痛みが伝わってきた。認めたくないが認めるしか道は無いらしい、これは紛れも無く現実だった。大人しくやられるわけにもいかない

「あんたを冷凍保存してやるわ！」

「詰を置きやがれ……！」

「言葉のキヤツチボールしてくれ！」

いくら氷塊をばら撒いてくるとは言え、相手は女の子。むやみやたらと銃器を出すわけにもいかず、彼女の撃ちはなつてくる氷弾の雨を避けるはめになってしまった。弾薬に非殺傷のゴム弾なぞ入れているわけもなく、対抗もできるわけがない。

「誰か助けてくれ！」help me!!

「あらあら・・・・・幻想郷に来て早々、大変な目に会つてゐた
いね」

さらにそれは言葉を続ける。

「まあ、私が助けてあげるのも良いのだけれど」

悩むよつな声を出しが、気にせず続ける。

「うるさい面倒こいつとこの事を玉手のやあれだし………やつらがみつ
と様子を見ても良いかしらね」

ふふふと笑いながらその光景を見ていた。

「これは一つ、彼のお手並み拝見ね」

48 番外編 IF その1「幻想入り」（後書き）

どうでも良い作品情報

本編に関する情報も一部出る予定

49・「夏が原作読者に恨まれる理由（前書き）

今日は怒りてしまつた感がヤバイです

49・一夏が原作読者に恨まれる理由

一夏に私的制裁を加えてから、一晩。

クラス対抗戦の初戦の相手は・・・鈴ちゃん元一組代表さんであつた。

ついでに言えば、5月に入つたとこに鈴ちゃんは一夏と話すことがなく嫌悪感をオーラとして見えるんじゃないかといつほどに露骨に出していた。小さい虫くらいだつたらその気迫でやられそうだなと思つくらいだつた、一夏、早く謝つてくれ。いくら自分に向けられたもので無いとはいえるの空氣は気持ちが良いものではない。

「IS使つた訓練も今日で最後か、心配だなあ」

いつもどおりの一夏を終え、日が西に傾き始めた放課後。明日からクラス対抗戦用にアリーナが試合用に調整する期間に入るため実質最後のISを使つた実習時間となる。まあ、これだけ大きいアリーナを使うんだから剣道などのスポーツとはする作業が比べ物にならないほどに多くなるので仕方ないことではある。

まあ、ISが飛び回つても端から反対側まで行くのに結構かかるからなあ。

「IS操縦もそれなりに様になつてきたからな
「まだまだ俺は足りないよ」

ちなみにメンバーは俺とセシリア、一夏に空気「空気ではない！」
・・篇である。最近ではクラスの女子が慣れたためか落ち着いてきたために質問攻め（主に一夏が、俺は避けた）や追っかけ（俺は空の旅、一夏は放置）も収まっていた。まあ、俺は見つかる前に逃げたり巻き菱をばら撒いていたから主に逃走手段を持たない一夏が楽になつただけなんだがな。

「せめて助けてくれよ、男は一人だけなんだからさ」

「いや、そういうのは中学で十分だ。月単位のほうがマシだろ？」

思い出すは、生徒会就任後から始まつた俺の追跡劇。校内にいる間はどこからか視線を感じ、カメラのシャッター音が聞こえ、知らない間に生徒の間に俺の写真が広まつていいという状況。IHS学園祭に美月が招待してくれたときは同期の並木野出身生徒による伝言であれこれ追われて女装する羽目になつたりした。黛にはそのときの写真を撮られた・・・・一生の不覚！！

「それにして、音兄の専用機って何時来るんだ？」

「早くても臨海学校こり、遅ければ夏休み終わつてからだつてさ」

なんでも英国王室で、認定騎士だからと現在急ピッチで建造が進んでるらしい。しかも女王陛下直々の命令で・・・まさかの稼動データは機体の性能評価のだけで良いといふ計らい。逆にそれで良いのか？とこちらが心配になるほど、「騎士としての生き方が対価です」と言われてしまつたので・・・じつは無いけど。

「まあ、セシリアのおかげで良く動けるよになつたし。フリーパスのためなら・・・ふふふふふ

「少しどこか結構怖いんだが

「待つてたわよ一夏……」

いつもと変わりなく、第二ニアリーナのアパートのドアを指紋・静脈認証で開けると、そこにとある人物が「立ちで待っていた、腕組みをしているのは良いが一夏を籠絡せるには一部分が足りなかつた。籌がやると威力抜群だらうなーなんて考えながら痴話喧嘩をセシリアとともに紅茶を飲みながら眺める。我ながらどうでもいいことを考えるよくなつたものだ。

「で、一夏、反省した？」

「は？ なにが？」

「…………だから、あたしを怒らせて悪かつたなあ～とか無いの？」

「そう言われてもなあ、お前が避けてたんじやないか

その瞬間、一夏を覗いた空間が凍りついた。ビシッという嫌な音がしたのは氣のせいではない、決して。

頭痛が痛くなつた（日本語がおかしいのはイギリス育ちだからと思いたい）、目の前に原因候補がいるけども。

「あ、あんたねえ。女の子が放つておいてつて言つたら放つておくれわけ？」

「おつー。」

「…………一夏、お前に分かりやすく教えてやる「押すなよー絶対押すなよーーーだ」

「なるほど、勉強になるな

「例えがそれなのはまあに良いとして、やつこ、うるさいよ。」

これで理解する一夏も一夏なんだけどな、いつも面白いかどうかは知らないが洒落を思いつけてるみたいだし。これくらいが丁度良いだらう、うそ。セシリ亞は良く分かつてないみたいだけど。

「謝りなさいよ。」

まあ、一夏が理由を説明しようと言い始めて口喧嘩が勃発。理由を言えるわけがない鈴ちゃんが謝罪をとにかく要求し無限ループ・・・。お前らなあ、もう少しお互いを理解したらどうなんだよ。ほら、鈴ちゃんなんて恥かしくて顔真っ赤にしちゃって、そんな仲裁しないとヤバイかな？

「じゃあ、負けたほうが買ったほうの悪いところへ聞いてみるでさうよ。」

うげ、いきなり巻き込まれた。

「じゃあ、勝つたら理由説明してもいいからな。」

もひやめで、鈴ちゃんのライフはもひよーとこうか、それって死ねつてこととかよ。本念」「って怖いな。

「いや、いや説明は・・・」

「なんだ、怖いのか？恐怖なんか捨ててかかってこーーー！」

負けず嫌いに挑発とか、そんなこと言つたら鈴ちゃんが対抗しないわけないじゃないか。これって俺も巻き込まれたってことだよね、確実に。ねえ？セシリ亞は「頑張つてー」とて顔で笑顔を向けたあ

と視線逸らしたし、筹は頭抱えてため息つこむ。

「い、言つたわねーそつちじゅ覚悟しておきなぞこよ、いの馬鹿!」

鈍感!朴念仁!..

むかつ。

何か嫌な予感、いつこうときは大抵良い事が起いらぬ。といつか起こせない。

「うねこ、貧乳」

『――?』

瞬間、爆発音とともにヒップが揺れた。音の先には、凹んだ壁と右腕が部分展開されたHSを纏った鈴ちゃん。どうやら壁を直接殴つたわけではないことから、とても強い力だということがわかる。え、えへ、どうしてこうなった。つか、酷いな一夏。

「い、言つたわね・・・禁句を言いやがつたわね!..」

あ、HSアーマーがどれだけ強く握られているのかみしみし言いながら紫電を放つてる。これはマジで怒ってるな、昔から気にしてたからなあ、それは一夏も重々承知していたと思つたんだが。おそらく売り言葉に買い言葉つてところか、ガチで焦つてるし。まあ、自業自得だよね!

「い、今のは悪かった!す、すまん!」

「今の「は」?今「も」よ!!対抗戦、覚悟しておきなぞこよ!..」

鈴ちゃんがガチギレして去つてから……

「ひとまず、しっかり謝れよ？」

「……わかってる、はあ」

・・・・・まあ、頑張るしかないよね。プライベート・チャネルで鈴ちゃんが「一対一でやらせて」って言つてたし、本気で痛めつけるんですね、わかります。

49・一夏が原作読者に恨まれる理由（後書き）

どうでも良い作品情報

音羽の呼称

美月・篠・セシリア・鈴音・虚・雅＝音羽

一夏＝音兄

黛・本音・ジャック＝音つち

千冬・山田＝如月

50・クラス対抗戦！－貞操と約束を懸けた戦い（前書き）

だいたい自業自得

50・クラス対抗戦！－真操と約束を懸けた戦い

試合当日、第一アリーナ第一試合。対戦カードは織斑一夏& ;
如月音羽／S鳳鈴音& ;河西愛理、二つの黒い影と赤と白が
向かい合つ。噂の新入生の試合と聞いてアリーナの観客席は満員御
礼、通路で立ち見する人も現れるほど。それでも入りきらなかつた
生徒は中継モニターで観戦するんだつて、風に聞いたところによる
と賭けをしている輩もいるとか。

それにして、鈴ちゃんの専用機「甲龍」だつけるか。スパイクアームーが付いた非固定部位アンロックコートが特徴的である。殴られたら痛そうだが、それ以前に第三世代兵器が搭載されているからそれにも注意が必要だ。白式ならまだしも、こちらは所詮量産機。しかも高機動型だから射撃は避けなければすぐに撃墜ハセキされる。しかも、今の一夏の技量ではおそらく一対一は無理がある。

『それでは規定位置に移動してください』

無常にも考え方をする暇も無くなる、お互いに向き合つ。その距離5メートル、既に試合は始まつた。

「一夏、謝るなら手加減してやっても良いわよ

「そんなの、雀の涙くらいだ。真剣勝負だ、そんなの要らない。
全力で来い」

空気が張り詰める、河西さんもにこにこ笑顔で会話を聞いている。どうやら言わずとも良かつたらしい、話が分かる人でとても嬉しい。鈴ちゃんがいなければクラス代表になっていたことから相当の実力者であることは・・・確実だ。そこらへんを一夏が理解しているか心配もあるが。

「HJSの絶対防御も完全じゃないのよ、シールドエネルギーを突破できる攻撃力があれば本体に直接ダメージを与えることも可能な上」

事実なんだよね、これがまた。秘密裏に操縦者にダメージを与えるためだけの武装も開発されているからな、いつだか実物を見る羽目になつたときはその趣味の悪さに気分を害したこともある。条約違反だから競技では使用が禁止されているがもし戦争になつたらあちこちからそういうのが出てくることだろう。まあ、普通の武装でもやろうと思えばできるんだがな。つまりは。

『殺さない程度にいたぶる』ことは可能である

この事実は揺るがない、代表候補生レベルともなるとそれも容易くできるほどらしい（セシリ亞談）それほどまでに操縦技能レベルが高いといふことの証拠なんだよな。だから、一夏がセシリ亞にあそこまで迫れたのも、俺がセシリ亞に勝てたのも運が良かつたからに過ぎない。俺の場合はほとんど不意打ちだったからな、まあ、だからこそ負けないためにこれまで特訓してきたんだ。奇跡は、自分から起こすためにある。

『それでは、試合開始！！』

同時に開始を知らせるブザーがけたましく鳴り響く、その音が鳴

り終わる前に4機の影が素早く動き出した。

「悪いが、あいつらはあいつらじゃせんやつてくれないか？」

「勿論、邪魔はしないわ。生徒会長さ・ま？」

ビクッと背筋に悪寒が走る、俺をそう呼ぶつてことは・・・並木野出身か！しかも俺が逃走のためにばら撒いた撒き菱用写真の弊害、なぜか息を荒くして迫つてくる女生徒という理解できない事態。楽だからとやつた結果がこれだよ！

「つふふふふ、会長の体をふふふふふ」

「させらかああーー！」

瞬時に大型対物ライフル「レインスピア」を開け、三点バーストでタンクステン合金弾 驚異的な貫通力を持ち対物射撃に良く用いられる、某13なスナイパーもそれで階下から上階の戦闘員を床を介して撃ち抜いていた を全て当てるつもりで撃つ。

「はあはあ、銃を撃つ会長も素敵！ー！」

しかし、普通ならば避けられない軌道のそれをこんな言葉とともに余裕で回避しているのだからす”い。そのセリフが無ければもっと素敵だったと思うんだ、あとそんなに怖い田で息荒く迫つてしまでくれ。まさかI-Sの試合で貞操の危機を感じることになってしまうとは思つてもいなかつたよ、マジで。はあはあ言しながら銃弾を

横にずれて避けるし、スラスター使った三次元跳躍してショットガソ「アンブレラ」を一挺持つて襲い掛かってくる。

「ヒイツハー……」

「でえい……」

銃撃の応酬が延々と続く、これは良い勝負になりそうだ。

「つぐ、重い！」

「初撃を防ぐなんてやるわね一夏！」

試合開始とともに先制攻撃で雪片を振るつも、巨大な青龍刀……もはや大剣と呼べるそれによつて見事に防がれてしまった。しかもそれが一本、バトンを扱つかのように華麗な剣捌きでの連撃はどうにか防ぐので精一杯だった。あまつさえこちらは細身の刀一本、どうにか防ぎきつただけでもマシなほうだった。

「（このままだと消耗戦だ、どうにかして一回離れないと……）

「フッ、甘い……！」

後退しようと姿勢を変えた瞬間、あの痛そうな棘付きアーマーが上下にばかりとスライドして開く。その中に見える球体が光り輝いた瞬間、俺は見えない衝撃に『殴り』飛ばされた。あまりにも大きい衝撃に気を失いそうになってしまふが、ISのブラックアウト防護によつてどうにか意識を保つ。

「今のはジャブよ、貰つたア！！」

にやりと笑つた鈴、先ほどのそれを警戒してどうにか回避行動を取つた瞬間。間髪要れずに権勢^{ジャブ}の後の本命^{ストレート}が一発撃ち込まれた。その結果、着弾の反動と重力の相互効果でアリーナの地面に強く叩きつけられる。すきりという鈍い痛みで立ち上がるのもままならない、見えない拳は言葉通りシールドエネルギーを貫通していた。既にシールドエネルギーが76も削られていることからその威力の高さに納得した。

「なんなのだ、あれは・・・？」

試合管制とモニターのためのピットで試合を見ていた筈が呟く、それが聞こえたのかセシリ亞が答えた。

「『ショックキャノン』衝撃砲ですわ、空間自体に圧力を加えて砲身を形成して余剰で生じた衝撃を強固で不可視の弾丸として撃ち出す第三世代兵器ですわ」

しかし、その説明を筈は聞いておらず。モニターに映し出される一夏を心配そうに見つめていた。

山田先生が「流石、代表候補生ですね」と嬉しそうにしていたのはここだけの話である。

50・クラス対抗戦！－貞操と約束を懸けた戦い（後書き）

どうでも良い作品情報

作者がPV20万・ユニーク3万突破記念話のやつてほしい内容を
聞きたそうにしている

5.1 番外編 IF その2 「冷静にならう」（前書き）

本編のストックが切れていて無理だったので番外編です

5.1・番外編 I.F その2「冷静にならう」

「喰らえつー！」

「のわあつー？」

少女からの弾幕をどうにか避ける、どうして氷が銃弾レベルで襲い掛かってくるのか。どうにか話しかいで解決したいのだが、相手は聞く耳を持たない。耳はあるけども、コミコニケーションが取れない。怒り狂ったブラコン全開の千冬さんでもしつかり話せば和解できると言つのに・・・結局拳骨一発は食らわされるけども。このままだと全身が氷だらけになるのも時間の問題だ、多少力づくで取り押さえるしかない。

「当たりなさいよー！」

「誰が好き」のんて弾に当たるか！』

それにしておどりやつて捕まえようか、あの高速の弾幕をどうにか搔い潜つて彼女に近づかなければいけないのだが・・・あ、使るのは少々気が引けるが・・・仕方ない。怪我したくないし、怪我させるわけにもいけない。いくら氷塊を大量に撃ち放つて来ていようとも、相手は小さな女の子だから。子供を傷つけるのは流石になあ。

「ああもうー！」

「なんなんだよー！」

付近には立体機動装置のアンカーを打ち込んで使えそうな木も見当たらないし、機動隊が使うようなシールドも格納していないから使えない。まあ、ゴム弾でもあれば良かつたんだが・・・生憎日常

で相手するのは実銃を使つお兄さんとお姉さんばかり。いつだかは重機の事故に見せかけて殺そうとしたこともある、俺って何者よ。なんかドイツ語が良く聞けたけどもや。

「・・・お?」

しかし、避け始めてから結構経つてから気づいたのだが。この氷の弾幕には規則性があるみたいだ、右田を使わざともある程度の軌道は読めてきた。接近するのは無理だが、弾速がそれなりにあるので避けるので精一杯つとこころ。

「（I）のまま弾切れとか無いものか、当たらぬから奴さんも焦つてきてるみたいだし」

できればお互い怪我もなく穩便に解決したい、既にそれは無理っぽいけども。弾幕が広がっている時点で・・・なんであるときはISに勝てたんだか。まあ、学園で破損したメーカー修理中のを強奪したのみだったたらしいが。それでも、IS倒しておいて田の前の少女に苦戦してるとつてなによ。

「ひつなつたら並んで見せるわ、凍符『パーフェクトフリーズ』！」

「なあつー？仕方ないー！」

彼女が叫んだ途端、色とりどりの氷弾が俺に向かつて先ほどまでとは比べ物にならないくらいに飛んでくる。さつきのよりも弾速が上だな、色々諦めてデフォルト装備だった眼鏡を龜るように外して死神の瞳を起動させる。同時に鞭型のワイヤーソーを召還して迫り来る氷塊を音速の一閃で弾き始めた。

「せいやあーー！」

「ええつーー？」

なんか・・・うん、結構これ脆いんだな、硬いけどワイヤーソーを振り回して叩きつけるだけで簡単に砕ける。割れた破片がナイフみたいに鋭くて油断できないけども、刺さつたらおそらくその部分は凍りつくだらう。割れたところから異常なまでの冷気が噴出している。

「つて、やあーー！」

しかし、叩き落せるからと言つて安心はできない。その氷塊が白くなつて縦横無尽に動き回つてくるのだからよき見をしようものならすぐに直撃してしまう。ワイヤーソーもある程度休ませないと冷え切つて千切れてしまう可能性もある。持久戦もこのままでは逆転されてしまいかねない。

どうこか持ちこたえるも、そろそろワイヤーが撓りにくくなつてきた。限界が近くなってきた証拠でもある、飛来する氷弾が最初のものに戻つたが。結局近づけずにいる、滅茶苦茶に撃つてくるおかげで弾幕が自然に激しくなっているのだ。例えるならば、子供が両腕をぐるぐると振り回してきたような状況。迫るのが可憐らしい手ではなく氷の弾だから甘んじて受けることなどできるわけもない。といふかしたくない。

「そろそろ止めて」「するわけないでしょーがー」「ですよね~」

そういえば、非殺傷のつて言えば候補があつた。確か、結構前にテ
スト格納つてことでゴムボール（近所の百均にて）を入れていたよ
うな記憶がある。確かにそのままになつてたはずだから今も格納され
たまま眠つてるような気がする・・・・多分。

「おおしゃれ、それい！」

— > > > > —

まさに神速とも言えるほどの速さでそれをイメージし、投げつけ
る。俺の手から離れたそれは放物線を描いて少女の顔に金属光沢を
見せ付けながら・・・・・・・・顔に直撃した。ガツン！-!とか
聞こえたけど、なんか手が軽く冷えてるし、投げたのがゴムボール
ではないことは確かではある。

「アベ」

そのままふらふらとよろめきながら少女は地面へと倒れこんだ、まづった、投げたのは球体ではあるが全然の別物であった。何を投げつけてしまったのかと良く見てみると、見慣れた銃器の特徴的な金属光沢。・・・・・ガバメントアーミーカスタム用の50連ドラムマガジンだった、通称「かたつむり」。一番投げてはいけないもののよくな気がする、主に重量的な問題で。ぶつかって気絶しただけであざなどは見受けられないのがせめてもの救いである。

「キノ」

一
は
あ
・
・
・
「

ゴムボールだからと全力で投げたのが原因だろうか、ものの見事に

気絶してのびていらりしがつた。それはそれとしてどうするか、目を覚ますのを待つてると口が沈んでしまいそうだし。かといってここに置いていくわけにもいかない。

「どうしたものか……」

あてもなく彷徨うわけにもいかないが、だからと言って立ち止まるわけにもいかないという今現在。唯一の頼みの綱は気を失つていてどうしようもなく、八方塞だつた。誰か助けてくれないかなー、主にこの状況から。どうしようもなく、近くの岩に腰掛ける。はあ。

「はい、助けてあげますよ。どうぞ」

「はい？」

「てえいーー！」

嫌な予感がした俺は即刻、その場から瞬時加速もかくやといふほど
の速度で飛び跳ねて離れた場所に着地した。ここに来る前に飲み込
まれた落とし穴に似た空気を感じたからである。

「まあ、上手くこなせ思ひにならざるも。」

着地した場所に、待つてましたとばかりに例の落とし穴がぽっかりと口を開けて待つていたのだから。

「…………」

気がついたころには、先ほどまでいた広大な草原ではなく、見知らぬ家の中にいた。どちらかと言つと伝統的な和風の住宅、掛け軸や生け花が飾りつけられることから客間であることはすぐに理解できた。柱が綺麗に磨かれていて、ほこり一つ無いことから長年大切にされている歴史有る住居であることは理解に容易い。まさにT HE 和室のようである、招かれた記憶が無いことは確実であるのだが。

「あら、気づいたみたいね

背後からさつき聞こえた声がする、まあ、部屋の中をきょろきょろと見回しても結局は俺も人間である。首は180度回らないし、後ろを見る事もできない。ひとまず、振り返ることにした。

「よつよつ、幻想郷へ……とも言つておきましようか」

そこには、セシリア並みの長さの金髪ストレートな女性が立っていた。どことなく不思議な印象を受ける気がする、ひとまず初対面であることは確かである。というか、金髪の知り合いなんて数えるくらいしか居ないよ。米軍のISパイロットとオルコット家くらいだよー。

「如月音羽と言います、あの、どちらさまでしょうか？」

「あら、どうも。私は八雲紫、境界を操る妖怪よ」

・・・・・妖怪？溶解・・・熔解・・・用かい？ヨーカい？まさか、そんな空想上のものが居る分けないジャマイカ、しかもこんな美人な人が？妖怪つてあの某ゲゲゲの人出てくるみたいなのじゃないのか？「この口リコンビもめ！」のあれとかさ。なにも俺の髪はアンテナ立たないよ？

「妖怪・・・ですか？」

「ええ、そうよ」

にっこりと笑うその顔はとてもふっくしい、うん。でも・・・どう見ても妖怪なんてのには見えない、というか今の科学万歳な世の中で生きてきた身としてはにわかにも信じがたい。まあ、さつきまでの出来事を思い返してみればそれを認めるしか無いのだが。

第一、実際にそうだとしても俺の目の前にわざわざ現れたのだろうか。それに・・・幻想郷つてなんだ？東京と京都の仲間か？日本国内にそんな地名なんて無かつたと思うが。わけがわからないよ。

「まだ、今の状況に混乱してるみたいね。・・・・・無理も無いけど」

そりやあ、そうだ。さつきまでの出来事を振り返れば冷静にいられるわけがない、冷静にしてられる奴がいたら見てみたいわ。

「あなたの身に一体何が起つたか、説明したほうが良いかしら？」「是非とも、k w s k」「分かったわ、ひとまず座りなさい」「はい」

「…………つまり、ここは俺が居た世界とは別の世界と……」

「…………」

「ここは幻想郷という場所で、俺は彼女（？）、八雲紫の手によつてこの世界に連れて来られた……ふうん。まあ、一応状況と経緯についてには理解。納得はしないがな。妖怪や能力の存在を認めればこれまでの出来事が説明できてしまつ……から、この話を認めるほかない。

「分かつてくれたかしら？」

「まあ、なんとか。……ただ」

「ただ？」

俺は、今までの話を聞いてきて一番気になつていた疑問をぶつけた。

「紫さんが俺を誘く……ここに連れてきたってのは分かつたんですけど。他の人じゃダメだつたんですか？」

「つ、いなんとなくと言つたら……？」

「泣けるな、確實に。もちろんそんな理由では無いですよね？」

「ええ、一応理由があるのよ、一応」

え、一応ってなに、一応って。一気に心配になつたんですけど、ひとまずどうしようもない事ではないだろうと俺は耳を傾けた。

5.1 番外編 IF その2 「冷静にならう」（後書き）

どうでも良い作品情報

番外編では原作とは矛盾、キャラ崩壊アリ

52・失敗作という名・・・（前書き）

音羽のターン・・・ですね

52・失敗作という名・・・

「はあはあ・・・・やるじやないか」

「うふふ、一次の世界とはいえ最高です！」

だめだこいつ、早くなんとかしないと。え、今どうしてるって？お互いに近接ブレード出して鎧迫り合いでますが何か、河西さんマジ強い。突けば刃の横面を叩いて切つ先逸らすし、ショットガンで牽制しようとなればナイフで破壊するし。本当に一般生徒か？って思うほど、さつきから「神様ありがたいです～」とか「転生とか俺得ｗｗ」とか言つてるのが玉に傷だが。中一病でもこじらせてるんだろうか。

「私のチートボディが火を噴くゾエ！」
「ホントにチートだよ、その技量は！」

大口径マシンガン「ガードブレイカー」を鼻歌交じりに反動無視してぶつ放すくらいには、あれって反動が凄すぎて反動相殺用のスタビライザーが必要つて聞いたことがあるんだが。デフォルトの打鉄で扱えるつて何者だよ、普通の生徒が分からぬまま使つて転んだつて聞くぞ？

「うおらあああ！」「
「きやあああ！..」

しかし、雑な照準だつたために高速機動状態のF型に追いつけるわけもなく。その多量の弾丸は軌跡を描いてアリーナの壁に穴を穿つ、弾跡が俺の一歩後ろつてだけで十分凄い。おそらく、油断した隙に本命をドカンとかます魂胆なんだろつ。狙つているような笑みを浮

かべながら今も引き金を引いていた。

「まだまだ楽しみたいが、決着付けよつぜー。」

「ええ、行きますよー！」

お互に一気に上昇し、俺は「スティール・ハーツ」を河西さんはIS用刺突エネルギー・ランス「白牙」^{はくが}を展開し、同時に音速を超えた加速で接近した。

「よくかわすわね、衝撃砲「龍砲」は砲身も砲弾も見えないのに」

まさに、その通りだつた。砲弾が見えないのは勿論、砲弾も見ることができない。しかも今までの攻撃からあの衝撃砲、砲身斜角に制限がないみたいだ。後ろに回つても不可視の衝撃の拳を食らわされたからわかる、射線が直線状なのがせめてもの救いだが鈴の技量と相まってそれすら弱点と思えないほどだつた。俺はなんとかできてる無制限機動から三次元躍動、全方位の軸反転など基礎のすべてを高いレベルで習得して自分の中にしていた。

「（ハイパー・センサーで空間の歪みと大気の流れを探らせてるけど、撃たれてからじや遅い。どうすれば……）」

不可視の衝撃をすれすれで回避しながら、先手を打つためのタイミングを見計らつていた。決め手は・・・」の手の中にある。

「つらあああああーー！」

「はあああああーー！」

音速の一閃と刺突がぶつかり合つ、反対側では零落白夜の刃を光り輝かせた白式^{イグニッショングースト}が瞬時^{イグニッシャン}で懷に入り込んでいた。なんでも、千冬さんが現役時代に雪片とともに勝ち抜いた相棒とともに言える技らしい。身に付けるにはとてもない特訓が必要だとか。どんなのかって言うと、あれだ。バッタレッグでジャンプして田の前に！って感じだ。

「鈴、貰つたあああーー！」

「な、きやあああーー！」

零落白夜の一閃、それが甲龍のシールドエネルギーに食らいつく。その瞬間。アリーナの中央に極大のビームが撃ち放たれた。アリーナのシールドエネルギーを日々と破つたそれは、競技中だったIS全てに警告を発した。

『警告！未確認機の存在を確認！白式がロックされています！』

「未確認機だと？つぐそ、教師部隊が来るまで抑えなきやいけないか・・・！」

「せつかくの試合の邪魔をするなんて、無粋な真似をしてくれるね～ホントに」

「つたく、一夏。・・どうせ逃げないわよね」

「当たり前だ、つて危ねえ！」

ズガガンツ！

音兄と河西さんの支援の銃撃で奴が注意をそちらに向けた隙に銃を抱いて回避する、煙が立ち始めたままでどんな奴かは分からぬが半端無い火力を持つことだけは確実にわかつた。

『監さん、試合中止です！退避してくださいー』

オープントチャネルで山田先生が通信で伝えてくるが、セシリ亞から送られてきたメッセージによるとアリーナは緊急時のレベル4で封鎖。アリーナ内のITSでは突破は不可能、突入用の入り口はハッキングされて開閉不能。事実上、アリーナ内に馬鹿みたいな火力を持つた不明機と閉じ込められた。

『織斑先生、教師部隊突入までこちらで抑えます。というか抑えるしかないです』

『わかつた、ただし怪我はするなよ?』

なんとか千冬さんに許可を貰い・・・いや、もうえなくともやるしかないんだけどさ。こんな状況じゃ、

たたかう
たたかえ
たたかうしかない

こんなんだし、逃げれないし。というか、さつきから右目が疼いて仕方が無い。眼鏡で抑制してるけどちょいヤバイ、俺自身説明できないし起動すると結構怖い。（鏡で見たら実際そうだった）まあ、

眼鏡かけて良かつたかな、というかこれってフラグっぽいが大丈夫だよな。ひとまず目の前の不明機の相手をしなければ。

「聞いたな？」
「ああ、わかつた」
「当たり前よ」
「ふふふ、りょくかい！」

ひとまず、例の不明機がまさに異形だった。深い灰色の体に特徴的に長い両腕、脚部の爪先より長いそれは手に砲口を覗かせていた。なにより首と捉えることができる部分が見受けられない、肩部と頭が一体化しているように見える。背が高い某ピンク色の悪魔と言えばわかりやすいだろうか、そして I.S.にしては珍しい『全身装甲』^{フルスキン}だつた。頭部らしき部分はセンサー機器が剥き出しであり、その異様さをこれでもかと見せ付けていた。

「一夏は上空で旋回しながらタイミング図れ、俺と愛理で射撃。鈴ちゃんは衝撃砲で牽制。いいなー？」

『了解！』

即席の作戦の指示を出す、おそらくそうでもしなければ4機ではまともに動けないだろう。俺以外はI.Sだからとはいえた実戦は未経験、そんなこと言つ俺もI.Sでは未経験だがな。生身と戦闘機くらいだ、そのときのことは追々話すとして。さつさとあれを片付けなければな。

「一夏、今日はお前がヒーローだ。わかつたな？」「ああ、やつてやる！」

「…………ねえ

「なんだ、鈴ちゃん。言いたいことはわかるけど」

「どうしてあれは上半身ぐるにゅり曲げて避けてるのよ！おかしいじゃない！」

「そうだね～、人が乗っていないみたいだよ～」

そう、コックピットにいるはずの人間の体がくの字みたいに曲がって銃弾を避けたり、保護機能があつても無理なはずの急加速・急停止をさつきからやってのけやがっているのだ。体がいくら柔らかくても肋骨がありながら胸部を90度曲げられるわけないし、どこの蛸さんですか。仕方ないので気づかれない程度に右目を起動させて生体反応を探る……。

「無人…………だと！？んなアホな！納得できるけど……」

「え、そんなことがあるわけ無いじゃない！」

「事実だ、『ありえないことこそありえない』ってことだ……俺だ

つて信じられないけど。聞いたなお前ら」

「ああ、全力でやれるってことだよな？」

「ぬふふ～、本領発揮なのだ～！」

まあ、無人なら全力全壊ができるよな。機械ならばどれだけぶち壊しても文句は言われないだろう、多分後で調べることになるだろう

けども。ひとまずは安全のために無力化、もとい停止させなければいけない。

「アンロックユニットフル
非固定部位完全ブースター モード」

外見はただの物理シールドだつた対照的なそれが中央の基部から横にスライドし内部を支えるフレームが露出する、そこに光の粒子が集結し失敗作と呼ばれる所以の大型プラズマ複合ブースターが一機一対で顕現する。ただ、最高の速さのみを求めたIS史上の幻想とも言えるべき存在。

「打鉄F型。いや、『打鉄・疾風』か」

外見だけは打鉄の特徴でもある防護重視のシールドに見えるが、それは相手を欺くための仮の姿。実際はプラズマ複合ブースターの膨大な重量を支えるため、こじぞの勝負時に真の姿での最速の煌きで相手を切り裂く。疾風と名づけられたのはそのためである、その異常、いや、規格外レベルの速度を扱いこなせる者は全世界でも一人しかいない。その一人が、今この場にその存在を誇示している如月音羽であった。

「さて、サポートは俺に任せな。今なら行ける」

音の壁を越えた翼が、今ここに、舞い降りた。

5.2・失敗作といつ名・・・（後書き）

どうでも良い作品情報

打鉄・疾風の最高速度は第二世代機に追いつくほど、これでも第一世代です（ヨイ

53 決着・・・・！（前書き）

残心つて大事だよね、そんな話も含まれる

53・決着・・・・・!

「はああああああーー！」

疾風の名に恥じない音速の速さでそれを超えるスピードの一閃が無人機の左腕を切り裂き、本体から分離させられた腕が音速の機動で生じた衝撃波で碎かれる。通り過ぎた場所には粉々に砕け散った機体部品だったものが散り散りになつて撒き散らされていた、「打鉄・疾風」と「ステイール・ハーツ」の二つが揃つて初めて繰り出すことの出来る必殺の一撃である。

「愛理、鈴！今だ！」

「待つてました～！！！」

「ナイス！」

左腕部を切り落とされた無人機が左腕部切断による姿勢制御の狂いと衝撃波の二つの阻害により体勢を大きく崩していく、更にそこへ愛理による炸裂チャフ複合グレネード弾の雨あられフルチャージされた衝撃砲による四肢の内部機器へのダメージ。硬い装甲を持つ機体に対抗するための実戦向けの有効的な攻撃方法だ。

「H A H A H A H A H A、こうもなつては無人機と言えど見る影もありませんNE！」

「結局、4対1じゃ勝ち目は無いのよー」

「やつ過ぎでは無いか?」といふか、一夏は何処・・・
「・・・・空氣ですわね」

さきほどまでの真剣な空氣はどいへやら、千冬も少々顔を引きつらせながらモニターを見ていた。

「凄いですね如月君、疾風を使いこなせるなんて」「まさか失敗作をここまでとはな、一夏が兄と呼ぶだけはある」「・・・(ニヤリ)あれ~、一夏って言いましたね?うふふうい~た~い~で~す~!」「・・・・」「・

みしみしと音を立てながら、山田先生が鬼のアイアンクローラーを見事に決められていた。人体から聞こえてはいけないはずの音が聞こえているが、それを見てみぬふりをする一人の少女は全力でスルーしていた。

「このままですると怪我無く倒せそうですね」

「ああ」

「量産機だからって、弱いわけじゃないもんね~!~」

「白牙」を展開して超高速で乱舞のように激しく刺突を繰り出す、

愛理さん。エネルギー・カートリッジが採用され、「量産機の汎用性強化」という一時期の計画で開発された武装だである。機能特化のF型などと同じ思想であるが、「機体の一部変更による対応」と「主武装変更による多彩な対応」という一種類の開発思想である。実際に現行されているのは残念ながら後者である。

「織斑君、今です！！」

「おっしゃああああああ！！待つてましたあああああ！！！」

上空で待機していた一夏が瞬時加速と重力による多重の加速で急降下する、無人機などの弱点。「不意打ちに対応できない」、思考を巡らせることができない無人機などはこれにめっぽう弱い。人間ならば、「多角的な思考」が可能であるが、無人機などの機械は「理解している状況から最善の方法を選択」するだけ、結局は感知しているものだけでしか世界を見ることができないのだ。

そこへ長時間認知されていなかつた存在がボロボロのそれに向かって必殺の一撃を放つとどうなるか？

「でやあああ！！！」

眩いほどに光り輝く零落白天の光刃が無人機のシールドエネルギーを貪欲に、貪るように喰らい尽くした。シールドエネルギーが消滅した無人機は、その巨躯の動きを止め、そのまま重力に引かれて落下していった。

「お、終わったあ・・・」

「ふう、終わったわね。戻るわよ一夏」

「おう」

「人がそう言いながらピットへと戻つてこいつとしている時、なぜ

か違和感を感じた俺は機能停止した無人機を見つめていた。愛理さんもさきほどまでの緩い感じではなく鋭い視線でそれを見つめていた、こちらが驚くほどの威圧感がある。なにか思うところがあるのだろうか？声をかけようとした途端、突然警告メッセージがポップアップする。

『警告！再起動を確認！！！』

見れば、もう動けるはずのない無人機が残された右腕の砲口をピットに着地した一夏に向けていた。表示される熱量が全開出力であることを否が応でも伝えてくる、ここからなら・・・間に合う！！
残されたエネルギーを使って、限界ギリギリの土壇場の瞬時加速で無人機へと飛んだ。こちらを振り返った一夏たちの顔が見えた気がしたが、すぐに視界が真っ白に染まって見えなくなつた。ただ、切り裂いた感覚は腕に伝わってきたのがせめてもの僥倖か。

「・・・・？つ痛うううう・・・・ああ、生きてるのか」

身体に鈍い痛みを感じ、それを切欠に意識が覚醒する。節々からの痛覚を堪えて上半身を起き上がらせる、それに応じて特徴的な長い黒髪が放射状に広がった。どうやら髪留めが外れてしまったのか外されたのかは不明だが、身に付けられていないことは確かだつた。

「起きたか」

「まあ、おかげさまで。心配おかけしました」

近くの柱に寄りかかっていた千冬さんが声をかけてきた、尤もいつもよりも厳しい表情を浮かべていらつしやるけども。まあ、仮定ではあるがあれだけの出力のビームの渦の中に装甲の薄い疾風で突っ込んで行つたのだから当たり前か。良くなき我してないな俺。

「結論から言おう、お前が身体への負荷を考えずに突撃して放つた攻撃により完全停止。怪我人はお前だけだった、まあ、怪我と言つても肋骨の一三本に少しヒビが入つた程度だ。一週間も安静にしていれば治るだろう、お前ならばな」

「まあ、そうですけども。やはりあれは無人機で？」

「お前が見抜いたのだから、分かつているのではないか？」

「そりゃあ、そうですけど。一応、ね」

誰だつてそうじゃないか、確信的な情報を自分で持つていたとしても人に確認したくなるつてことは。まあ、俺以外に怪我人いなかつたつてだけでも朗報か。

「だが、無理はするな。誰かを救つてもお前がどうにかなつてはいかん、泣く者もいるだろう」

「気をつけてはいるんですけどね、それが中々に難しいんですよ。まあ、善処します」

「なら、良い。・・・」ハシをしないで入つたらどうだ?「

千冬さんが保健室の入り口のドアを開け、顔を出して廊下にいたであらう人物に声をかける。

「では、私は戻る。調子が整つたら自室へ戻れ」

「わかりました、まあ当分戻れなさそつだけども」

千冬さんと入れ替わりに入つてきたのはセシリ亞・一夏・鈴ちゃん。
鷹鹿
第・河西さん、あと天災。^{馬鹿}保健室がまるでゲームセンターに入った瞬間にように騒がしくなる、それを見ながら俺は後ろ手に治療用ナノマシンの注射を腰にする。機能が停止すると体内で分解されて排出されるという身体に優しいタイプだ、ちなみにライセンス企業製。今使つたのは骨折治療用の物である、便利だねこれ。ちなみに使用済みの注射器はすぐに格納した。

「音羽、無事でしたの!?

「音兄、大丈夫か? 大丈夫っぽいけど」

「ダーリン、怪我は無い!?

「少しは怪我人の前なのだから静かにしたらどうだ」

「音羽つちモテモテだね~」

一夏は俺を何だと思ってるんだ、美月の夫になつた覚えは無いし、愛理さんは関係ないと言つてるし。まともなのはセシリ亞と第だけか、ひとまず全快したら一夏と肉体言語でちょっとお話ししよう。一度シバく必要がある。

「千冬さんの話だと肋骨につけたビビが入つてて、1週間は安静だつてさ。以上」

「それって、あの打鉄の副作用か?」

「おう、無理な加速の結果らしい。結果オーライだけども」「まつたく、一夏君は変わつてないわね。曲がりなりにも剣道やつてたんでしょう？」

「面白い・・・」

「私がまた鍛えてやる、覚悟しろ一夏」

「えええ！？またあれかよ・・・」

「ISだつたらアタシも手伝うわよ？」

「む、二組のおまえは黙つていろ！！！」

「なんですか〜〜〜！」

「まあまあ、お一人とも落ち着いてよ〜」

騒がしくなつた4人を一瞥し、一人へと視線を移す。

「あ〜、その。スマン・・・」

「音羽も変わつてないわね〜、ホントに。少しは自分のことも考えなさい？」

「まつたくですわ、人を守るなとは言いませんが、自分のことも考えてくださいな」

「・・・・・はい」

女子一人に叱られるというなんとも情けない状況になつていった、あゝ・・・・・。ホントに情けない、この癖も考え方だな、自覚しているが自重したことは一度も無い。この一人に心配かけてしまつというのも申し訳ない気分になつてしまつ、はあ。

「まあ、後先考えずに人のことを思つて動けるのは良い事ですし。
その・・・・・かつこよかつたですわ」

「セシリ亞ちゃん、そういうのははつきり言わないダメよ。ライバルにアドバイスするのもあれだけども」

なんか、後が良く聞こえなかつたが。ひとまず俺は保健室にいる全員を見回して、笑みを浮かべたのであつた。

追記・どうやら鈴ちゃんと一夏は仲直りしたみたいだつた、まあ、めでたしめでたし・・・?なんかまた何かひと悶着ありそうな予感がするけども。

53 決着・・・・・！（後書き）

どうでも良い作品情報

河西さんは・・・・・モブな転生者っぽい存在・・・・のはず。まあ、気が向けばちょくちょく出てくる、フラグは立たないけど友人くらい？

54・アメリカンドリームを実現したつぽじょ（前書き）

まあ、舞台は地球上のどこかです。なんともひどいてしまった

5.4 アメリカンドリームを実現したっぽいよ

「どうもお久しぶりですね、如月音羽博士」

「いや、かしこまらなくて良いですよ。どうせただの学生ですか
ら」

え、せつかくの休日なのに家に帰らないでどこに居るって？米軍の秘匿基地の一つ、「一地図に無い基地／イレイズド」だよ。場所は言えない、いくら国防省に顔が効くからってそんなことしたら消されそうになるからな。ちなみにここの中開発部門がナノマシン技術のライセンスを持っている、その関係で「世界で一人の男性IS操縦者一人」ではなく「一人のナノマシン技術開発者」の扱いを受けている。アメリカにすればIS操縦者とことよりそちらのほうが重要なのだ、たかが数機の世界最強の兵器より。今声をかけてきたのはイレイズドの司令官、はつきり言って嫌いな人間の部類である。さつさと別れて企業の看板が立て掛けられた真っ白な建物に歩き始める。

少し歩いていくとパイプ椅子に座った若い女性が声を上げる、久しぶりの対面である。

「あら、博士が来たのね。みんな、集合〜〜！」
「博士って・・・・」

ちなみに今、目の前で後ろにある大きな工場へと声を張り上げて叫んだのはここに来たから2年で主任の地位へと実力で上り詰めた女はなんとここに来てから2年で主任の地位へと実力で上り詰めた努力の天才である。ちなみに自称機械が恋人の23歳、眼鏡のレンズにナノマシンを使用して双眼鏡にしてしまうなどヨニークなものを作ってしまう人だ、特徴的なブロンドの髪をポニーテールに纏めてい、体つきは一部を除いて所謂モデル体型である、悩みは鈴ちゃんと同じらしい。

「お、坊主博士が来たのか。久しぶりだな！」
「あら、カツ」「よくなつたわねー！」
「ははは、元気そうじゃねえか」
「どうもです、面白いものができたとかって聞いてですねー！」

ぞろぞろと賑やかな開発研究部の面々が作業をしていた手を止めてガラス張りの部屋から出でてくる、ここ「ミクロドクター」の開発部門には年配の方から若者まで幅広い年齢層に加え様々な人種の人があ勤務している。ナノマシンを含めその応用技術を使った医薬品から医療器具まで俺が提供しているナノマシン技術のライセンスをアメリカ国内で唯一持つた世界シェアナンバーワンの企業である。その開発室には、「勉強ができる人」ではなく「科学と化学を使って医療を支えたい」人のみが在籍できる。なぜここにその開発研究室があるのかといふと、ほぼ國家機密レベルである情報を扱う場所であるために適切な場所が選ばれただけ・・・である。

研究室の応接用のソファーに座りながら、提出された計画案を吟味していた。それを喉をぐくりと鳴らしながら見つめる総勢8人の大

人、その視線の先には至つて普通・・・には見えない黒のビジネススーツを着込んだ高校生。非情にシユールであるのは誰の目にも明らかであるが、それに慣れてしまつた俺も大概か。

「おお～、先天性部位欠損の患者の欠損部位の生成か。ふむ、神経組織の代替も必要だね」

「生体タイプを使った癌患者の切除部位の代替か・・・なるほど、患者の細胞への自動最適化があればもつと良いよ」

「視覚障害者用の人工視神経と眼球・・・良いアイデアだけど、どうせならW85で表面を覆つたほうが見た目も良いよ」

「ウイルス用の撃退システム・・・これはもう少し確実性が必要だよ」

「骨髄の正常化か、ファイリングしてからの生成にしたほうが負担も少ないよ?」

出るわ、出るわの大盛況(?) 数年前までの医療関係者が見たら驚愕のアイデアの数々だった、現時点では世界各国の大病院や医学関連施設での試験が必要だが。実用化すればこれまで「治療にかかる日数の短縮」や「再生医療の停滞」、「新薬開発」の三つが爆発的に進歩する。

「よし、じゃあメアリーとジェシーはこれの改良、マックスとジムは手伝つてあげて。ヴェルと主任はこの二つを学会と政府に提出、これはそのまま通しても大丈夫だから」

「わかつたぜ、ほらちゃちやつと始めるぜー」

「おつけ~」

「ほいほい」

「俺の腕の見せ所だな!」

「書類はまとめておいてくださいよ?」

「おお、博士直々のオーケーが出たな。おっしゃー！」

「ふふふ、流石ね如月博士！」

指示を出すとそれが慌しくパソコンを起動せたり書類を出したり、電話をかける者やペンを走らせる者も。かくいう俺もノートパソコンを開いて採用時の工場用の機械部品の設計図をペントラブとCADを併用して描き始める、ほぼここが軌道に乗り始めたころからのいつも風景である。確かに「」の始めか、それまでは自宅からテレビ電話で指示してた。たまにひつひつに来る事もあったけど。

「俺は滅多に来れないんだから、そこのへん考えりよー！」

『はーい』

その後は、キーボードの叩かれる音とペンが走る音だけが研究室に響くのだった。

「おっし、お疲れー。休憩入って良いやー。博士もやんやじやないかい？」

「おお、そうだな。って、だから博士って呼ぶな。名前で呼べって言つてゐるのに・・・」

「じゃあ、音羽っちで！」

「おお、良いんじゃね？」

「あらあら、可愛らしくて良いわね」

「ははは、音羽っち（笑）」

「嬉しくねえー！」

散々呼び名で弄られてしまった、時計を見ると既に帰国しなければいけない時間になっていた。当初の予定の時点ではば顔見せが目的だったので当たり前だが、久しぶりに会った皆が元気そうで良かつた。IRSがどうこうならなければ卒業後にここに正式に就職だつたのに・・・おのれIRSめ。

「そこなのー？」

「まあ、ね。じゃあネーブ主任、後は頼みますね」

「ふふん、任せなさい！」

「次来る時には美味しいケーキでも持ってきます、それでは失礼します」

ガラスのドアを開けて開発研究室を出る、確かに帰りはVIP専用機だつてさ。まあ、今はスーツだし別に大丈夫か。VIP用のゲート通るから騒がれないし、そういう場所ではそれなりの扱いされるし。総資産が中小企業を余裕で買収できるレベルになつてたとかは言えない、そいや俺の追いかけやつてる組織つてドイツのらしいよ？

少年帰國中

「うああ～～～！～帰ってきた・・・」

結局日本に着いたのは日曜日午前10時、丸一日結局経つた。あるええ～？まあ、夜中じゃ なかつたからまだ良いか。腹も減ったし、どこか近くのレストランでも寄るかな？

空腹に勝てず、俺は空港内にある高級（自称）レストランに入ったのだった。懐かしい顔に出会ったのだが、それはまた別のときで も。

54・アメリカンドローイムを実現したつぽいよ（後書き）

「でも良い作品情報

音羽のイメージ落書きがみてみんこ・・・後悔するなよーー。(某王
子風

5.5・前触れ（前書き）

なぜオリジナル展開にするとやがてしまつのか

「あ～っと、今月分つと

現在、午後3時。レストランで懐かしい人物と談笑しながら食事を終えた俺は自宅に荷物を置いて近所の銀行に来ていた、今月分の生活費を口座預金から引き落とすためである。例えるならば給料日に銀行で月分の給料を下ろしに来たってところ、いくらライセンス料が振り込まれるとは言え引き落とさなくては使えない。電子マネーなんてあるがデータが吹き飛んだことがあるから却下、量子化して格納すれば良い話だし。

「」

鼻歌を響かせながらタッチパネルになっているATMの画面を操作する、え～っと当分はこのくらいで良いか。ただでさえ半端無い金額が納められているのだが、使い切れない量なのに光熱費がかからぬI.S学園のために余計使うことがない。某東なMAXみたいにリアルでハンカチに使えるぞこれ、やらないけど。

「うひ、こんなところか」

必要な金額（高校生には似つかわしくない金額だが・・・）をmy財布に仕舞いこみ、銀行を出る。自動ドアが開いた瞬間にこちらへ流れ込む外気の風が心地良い。さて、用事も特に無いしI.S学園に帰るかな・・・家中はm.k.?がやってくれてるだろうじ。警備はガチ月光がステ尔斯で待機してるから完璧だし。民間人の家とは思えないくらい万全だからなあ、I.Sでも使わない限り無理だなHA HAH。

そんなことを考えながら俺はE.S学園行きのモノレールに乗り込んだのだった。

モノレール移動中

ガタンゴトンと規則的な音が車体を通じて耳に響く、ウォーカマンで「STRAIGHT JET」という最近人気上昇中らしいアーティスト（声優さんもやつてるらしい）の新曲らしい。なんでかどや顔で洋上を飛行する一夏が思い浮かんだんだが、なんでだ？まあ、いいや疾風が修理終わったら一夏を特訓という名目でボコろう。なんでかそうしなきゃいけない気がする。

「そういうや、機体マニュアルが届いたんだっけか……めんどいなオイ」

「変わつてないね～、音つちは」

「どうせ俺の性格は変わらないですよ～だ・・・・あ？」

思いもかけず懐かしい声が聞こえたものだから、当時のままの態度で受け答えをしてしまった。声の聞こえた座席の反対側を見ると、沈みかけでの夕日のように燃えるような朱色をしたショートボブの少女がこちらを見てにこにこと笑っていた。着ている服が見たことのない黒の制服ではあるが見間違うことはない、中学転校時に俺に対決を申し込み物の見事に惨敗したジャクリーヌ・ウェルキンその人であった。

「・・・久しぶりだな、ジャック。ドイツに帰ったんじゃなかつたかお前？」

「いや～、本国で仕事を押し付けられてね～」

そういうえば、そんなメールが来てた記憶がある。なんでもドイツのIJA用特殊部隊に配属されたとか、ありがとウサギ隊だっけか？いまいちしつかり覚えてないが、まあウサギであることは確かだ。といつことはこの制服もこの制服か、黒がメインってのはまた汚れが目立たなくて良いな。

「仕事？ドイツ軍がなんでそれで日本に来るんだよ」

「機密だからまだ口外できないんだよね～、まあIJAに關したことではあるよ～」

「お前も大変だな・・・まあ、頑張れ」

「うん、そういうえばたっちゃんは元氣かい？」

「ああ、毎日俺に嫌がらせで抱き着いてくるくらじにはな。俺だって年頃の男なんだからよしてほしいよ」

「あはは、やっぱ鈍感だねえ音っちは」

「あのなあ・・・もし、もしјだぞ？あいつが俺のことそういう方向で思つてたとしても、やり方があるだろ？・・・？」

そうだ、仮にあいつがそういう方向でそういう行動を起こしていたとしても。俺が襲つわけが無いことは理解しているはずだからな、いくらナニが溜まつていようともそういう下種なことは絶対にしない。そういうのは男として最低だからな、そこらのどうじゅうも無い輩と同じになるわけにはいかない。

「わかつてないね～、女心は」

「俺は男なんだから理解できるわけないだろ？、てか理解できたら苦労しないっての」

いちいち「女心わかつてないわね～」りょ鈴ちゃんとか、「はあ、

戦術と経営の前に男として「ヨーロッパセシリアとかつてなるんだよ。流石にどうやらのマンティスさんみたいにリーディングできないからどうしようも無いし。一夏に言われたときは凄いショックだつたけど、上手ことと思つよ? 「女心は秋の空」とか、あ～あ。

「まあね～、でも少しは努力しなきゃ」

「してみつもりなんだがなあ、それが中々上手くいかないんだよ・・・」

わからないからって聞くとはたかれるし、呆れられるし。じゃあどうじりと詰つね、理不尽じやね?そこは一夏も共感していた、まことに残念である。

「はあ、まあなんとかやつてるよ俺は」

「そうみたいだね、あ、私の上面がお世話になるから」

「ほあ、それは気になるな。強いんだろう?」

「うん、まあ、それだけ・・・じゃあ、また明日ね~」

停車したモノレールから、ジャックがひょいと飛び降りるよつて降車する。身のこなしさは昔よつこくらか引き締まつていた、もしかしたら油断すると負けるかも、と思わせる動きだった。・・・え、また明日?どうことだ、おいー?どうしようもなく、ジャックを見るが時既に遅し。モノレールは走り出してしまつていた、ちくせつ。

「・・・まさか、転校なわけないよな・・・?」

まあ、EDSに関係することつて言つたらそれくらいしか思いつかないわけですが・・・三・四

55・前触れ（後書き）

どうでも良い作品情報

ラウラには一種のフラグ建築予定

56・三人目だつてさ（前書き）

短いです、すみません

とある月曜日の朝、と言つても一晩明けただけだが……。ジャックのことを話したら美月が笑っていた、おそらくいつものように「サプライズって良いわよね~」で言わなかつただけだひう。まあ、困りはしないがな。

「ふわあ～、あー眠い」

あれこれジャックのおかげでナニ（と書いて性欲）が鎌首をもたげてしまつたのだ、それを知つてか知らずか美月はいつもどおりに抱きついてくるし。そのおかげでまともに眠れなかつた、俺の貴重な睡眠時間を返せ！と言えるほどの元気は無かつたよ。ただでさえ飛行機での移動中は揺れた状況だから寝れるわけないし、現時点では2時間しか寝てないぞ俺。漫画家曰指せるんじゃないかこれは、なる気はさらさら無いけども。

「うぬ・・・・・・・・

教室に入り、ぼや～つとした状態で自分の席。窓側最後尾に座る、のどかな陽気に誘われてついうつかり眠つてしまつた・・・のだろう。仮定的なのは途中から記憶が無いからである、く、寝落ちかよ・・・

「ルル・デュノアです、こちらに僕と同じ境遇の人が」

何時の間にやら寝てしまつていたようだ、奇跡的に千冬さんにはバレていなかつたようだが……まあ良しとしよう。で、転校生だつて？ほうへ、可愛い女の子だなセシリアと同じ金髪だが短めにしてるのか似合つているが……どうしてズボンなんだ、スカートじゃないのか？そりや制服は改造オーケーだし個人によつてほぼ別物みたいになつてるけども、女子がズボンか。ミリアさんを思い出すな、あの人いつも「スカートなんてあんなの寒いじゃないの！」って言つてズボンだつたからな。

「居ると聞いて本国より転入を」

あれで男…………だと!? 言われてみれば確かにどこか大人しそうな少年に見えなくもないか、俗に言つ美少年というやつなんだろう。いや、ジャックが言つていた男の娘というものだつたか？まあ、今はいいか、男一人だけつてのは一夏も俺もきつかったし嬉しい限りだ。それに男の操縦者つてのも一人居たんだからもう一人出でてもなにもおかしいところは無い、「ありえない」ということはありえない」正にその通りだな。つと、耳を塞がなければいけないな、あ、セシリアもニコニコしながら耳に手を当てるな。一夏は

『キヤアア――――――!』

遅かつた、後方からのバインドボイス（超）をまともに受けて目を回してゐる。お前のこととは多分2分くらいは忘れないぞ！「（短けえよー）」そりやすまなかつた、ナイスツッコミだ。と、あと二人いるのよ・・・・・・・・

「男子、三人目の中だよ！」

「しかも守つてあげたくなる系の！」

「地球上に生まれて良かつた~~~~~!!」

おおげさだな、いや、箱入り娘みたいな状況で長い間過ごしていれば「こういつものなのかな？」経験が無いから良くわからないが、まあ、ひとまず最後の奴はネタが古いと思うんだ。うん。ネタは鮮度が命つて黒がいつだかどや顔で豪語していた、ネタ違いだと思うが間違つてはいないと思う。

「で、あと一人は……ドイツだろうな。こつち見てニヤニヤいやがつて」

見知らぬ銀髪の眼帯少女と知らないわけがない昨日ぶりの朱髪の少女、同じクラスつてのは各国の思惑が非情に感じられるな。・・・・・ジャックが付けてる眼帯がソリッドアイに見えるのは気のせいだろう、うん。世の中気にしたらいけないこともあるんだよ。

「あー、騒ぐな。まだ終わってない」

その瞬間、さきほどまでの喧騒が嘘だつたかのようにクラス内が静まり返る。ここ最近見慣れた「リアル鶴の一聲」である、自己紹介をした少年が少し狼狽してしまっているのをジャックが落ち着かせていた。気が利くというところはやはり変わっていないな、できれば前もって知らせるとかに気を利かせてほしかったが。

「ジャクリーヌ・ウェルキンです、ドイツから來ました。國の都合で年上なのに一年生からですが、気にせずに話しかけてくださいね！」

そこで俺にウインクをしてきたことによりクラスが再び沸いたのは
言つまでもなかつた。

56・三人目だつてさ（後書き）

どうでも良い作品情報

ジャックの眼帯はソリッドアイのデザイン

57・一般人と俺とルーキー（前書き）

2巻が終わるころには驚きの展開を予定しています

57・一般人と俺とルーキー

「あと、並木野のみんなはお久しぶり～！音づちの写真は私がバツチリ撮るからね～」

おい、待て。

「流石ジャックさん、わかってる～！」

「向こうで随分と鍛錬されたんですね～！」

「ジャックお姉さま～！素敵～！！！」

倍率が一万越えてるのに一中学から三人つてのは凄いなよな、今はそこに感心してる暇や余裕が俺には無いが・・・中学時には撒き菱用の写真をジャックがちゃっかり撮影していたからなあ。その一部が高値で取引されているとか聞いたときはそりやあビビッたがな。俺ってそこらの雑誌モデルみたいな身体はしてないぞ？鍛えてはいるが見た目には細身でもやしつぽいし、どこに馬鹿みたいな身体能力があるのか不思議でならない。ムキムキのゴリラみたいなのはイヤだがな。

「まだ、終わつてしませんから。皆さんお静かに～」

しかし、千冬さんのときのようにはならない。山田先生、頑張つてください、俺は応援しかできませんが。今ここで何か言おうものならば、息を荒くしてこちらを見つめる視線が3から増えるだけだ。つて、ああ～！いつだかの例の写真を回してやがる・・・やはりあの逃げ方は失敗だったのか。

「・・・・・・」

ああ、山田先生がうつむいてふるふる震えてる。流石にこれは助け舟が必要だよな、見てるこっちも悲しくなってきた。しかしそれを気にせず騒がしく会話する生徒のみなさん、やめたげてくれ。もう山田先生が不憫すぎるし、教師スルーは良くないぞ、しかも高校生が。話に花を咲かせるのは良い事だが生憎今はホームルームの時間である。

「お前ら、静かにしきりて聞こえなかつたんか？ ああ！？」

ゑ？

「返事は…ナメてんじやねえぞ小娘共！ 教師の言葉は聞け、良いな！」

え、え～っと。眼鏡を外し、ギロリといつ擬音が似合つほどに睨みつけるような目でクラス全体を一瞥する、山田先生。いつものだぼつとしたサイズの合わない服が今は風になびく特攻服に見えるほどだった、普段の優しく真面目で頑張り屋さんな面影は無く、そこにはレディースの総長の姿があつた。

『はいー。』

「（。 。 ）・・・・・」

クラスの騒いでいた女子は勿論のこと、あの千冬さんでさえ傍目に分からぬがぽかんとしていた。これが山田先生の素だというのか、あのほわ～とした感じからは想像できない変わりぶりだった。一夏に至つては固まつていることからその衝撃の大きさが良くわかる、最後の転校生は軽く冷や汗を流してこむように見える。

「スマンな、この空氣で悪いが自己紹介してくれ」

山田先生がそのままの状態で「The軍人」という印象を受ける長い輝くような銀髪の少女に話しかける、その左耳は機械的な眼帯に隠されて見えないが、深紅の右耳からは冷たいような空気が放出されているように思える。同じような眼帯を身に着けているジャックとは印象が魔逆である。どう考へても仲良くなるには大変そうだな、流石にこういう子に一夏はフラグ立てないだろ。多分。そんなことを考へていると、その少女がおもむろに口を開いた。

「ラウラ・ボーテウイッヒだ
「…………終わりか？」
「は」

いつもの山田先生ならば「え、それだけですか?」とか言つていそうなのだが、どうやらあの状態では違つらしい。どうしてこうなつた、あれ、ボーテウイッヒが一夏に向かつて歩いていく。どうしたんだろうか?まさか、既に一夏に落とされていたとでも言つのか!?
?くう、やはり一夏は一級フラグ建築士なのか、これだから弾君は。
・・弾君も結構イケメンだと思つけどなあ。どうしてこうも違うのが、やはり世の中は平等では無いのか。そーカ。

「貴様が織斑一夏か?」
「おう、よろしくなボーテウイッヒさん
「ふん」

うんうん、挨拶は「う・・・うむ?思い切り右手をボーテウイッヒさんが振りかぶつて、振り下ろしたあ!?仕方ない、ここで銃を撃つこともできないし・・・手取り早くこれしかないか・・・!」

織斑教官のモンド・グロツソ一連霸を台無しにした張本人である織斑一夏を精一杯に叩こうとした途端、教室の後方から今までに感じたことのないほどの殺氣を感じた。訓練でほとんど動じないはずの私が、そのあまりにも深く濃い殺気に思わず後ろに飛びのいてしまつた。この場には軍に身を置く人物など、私とジャクリーヌしかいないはず。ましてジャクリーヌがこれほどの殺氣を出したことも出せるとも思わない、確かにその明確な殺氣は私に向けられていた。その凍りつくような感情が叩きつけられるように放たれる場所へと視線を移すと、そこには笑顔を絶やさない一人の男が肩肘を突きながら私を見つめて、いや、睨みつけていた。

傍目には優しげで素敵と称される笑顔なのだろう、その結果誰も違和感を感じず突然飛びのいた私を不思議がるような視線で見つめてきていた。しかし、今の私の心中は「恐怖」で埋め尽くされていた、明確な「確實に殺してやる」という強烈なその視線によって。当初ならば妨害があるうとも一度この織斑一夏を叩いてやろうと思つていたのだが、怯えきつた兎のごとく私は「失礼」と切り上げ、宛がわれた私の席に着席したのだった。

「私は認めない、貴様が教官の弟であるなどと……！」

だが、これだけは譲れなかつた。

「どうやら、成功したみたいだな名づけて『殺意のスナイプ』。腕力が足りない俺がいつの間にか身につけていた『実戦』用の脅^{ブラフ}しスキル。ただ一点、標的とした相手に本気の殺意を込めた視線を笑顔で突き刺すように叩きつける。あまりにも強すぎる殺意のために関係ない人物は露ほども気づかないというほどである。向けられたのが一般人ならば2秒と持たずに氣を失つてしまつだろう。軍人だからと思って強めにやつたらすぐに怯えてしまった。まあ、ナイフを首筋に突きつけられているような感覚に陥るらしいが、軍人がこの程度で引き下がるなんてなあ。もしかしたら大した奴じゃないのかもな。

「…………？」

「どうやら一夏はあのよろにされる原因に心当たりがあるのか、少し思案顔だ。まあ、そつとしておいてやるか。一夏の問題ならば自分で解決するものだ、関係ないならば徹底的に協力するがな。まあ、後で千冬さんに叱られる覚悟でもしておこう。主にこの一般人には到底不可能なレベルの殺気について。

「あ～、ゴホンゴホン。ではSHRを終わる。各人はすぎに着替えて第二グラウンドに集合、今日は一組と合同でIS模擬戦闘を行う」織斑君と如月君は、デュノア君の面倒を見てあげてください。お願いしますね」

いつの間にか眼鏡をかけていつもの山田先生が帰ってきていた、さ

つきの訳を知りたいがおそらく教えてくれないだろう。まあ、某本田さん現象だとすることにしておこう。

「わかりました、一夏。準備は良いか?」

「ああ、万全だ。いつでも行ける」

「?」

何のことか分からぬデュノア……デュノア? デュノアってあのデュノアか、ふうん。まあいいや、今は移動だ。説明をしたら時間と出席簿がハハツ! してしまう。それだけはどうしても避けたい、自己紹介は後でもできるから今は着替えるために遙か彼方更衣室の安息地へと急がなければいけない。

「I can Fly!!!」

一夏とデュノアを小脇に抱えたまま、集結しつつある武家の家来らしき動きを見せる女子生徒を尻目に窓を開け放ち飛び降りる。

「キャア————！」

瞬間、ガクンと揺れて俺の背中に大きな機械の翼が現れる。言わずと知れたジェットパックである、ジェットエンジンを火を噴き、俺たちを前方へと押し出す。あまりにも豪快な「教室移動」であつた。

57・一般人と俺とルーキー（後書き）

どうでも良い作品情報

「殺氣スナイプ」は人を氣絶に追い込むことはできるが虫は落とせ
ない

58・携帯刃物は便利ですね

時速100kmでの空の旅with一夏&アリーナを終えた俺達は、アリーナの空いていた更衣室に到着した。

「よし、着いたぞ……大丈夫かデュノア？」
「だ、大丈夫……シャ、シャルルで良いよ」
「わかった、じゃあ俺は音羽で良い。如月音羽だ、よろしく」
「俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ。よろしくな！」

いや～、うん。どうからどう見ても女の子に見える、そりやあ、女子っぽい男がいてもおかしくは無いけどな。しつこいと思うが、如何せん変装をして侵入したりしてきた輩が多くたオルコット家の経験から今でも警戒してしまつ。いかんいかん、保身のために警戒をすることは良い事だが、こいつらといふまでピリピリしてたらどうしようもない。

なんとなくだが、やはり気になつていつの間にかシャルルを見つめてしまっていた。

「へ~どうしたの音羽」
「いや、シャルルって女の子みたいだなあと思つてさ」「!/?そ、そんなわけないじゃない!」
「ははは、だよなあ。わりいな、変なこと言つて」

なんか、ビクッとしてたけど。そりゃあいきなりそんなこと言われたら驚くしかないよな、いかん自重しなければ。早く着替えなくては鬼神・チフーゴの邪剣「シユツセキボウ」が振り下ろされてしまう、あれって絶対防御を余裕で発動させて来るから怖い。絶対おかしいだろ、いつぞやのチーンソーならまだしも市販品があれだけの威力とか。

「まあいいか、よ~いひとつ」

制服上下をすぐさま脱ぎ捨て空中に放り投げる、瞬間、制服と下着の格納と同時にI.S.スース（小口径ならず対物も防ぐ）を開拓する。専用機持ちの特権である「パーソナライズ」を行うとI.S.の格納領域にエネルギーの多大な消費と引き換えで今俺がやったことと同じことができるらしい。一夏ならまだしも俺は「貸し出し」の域であるために仮フィットティングだけであるために不可能だがな。まあ、どっちにせよ某仮面を付けた風都のライダーさんみたいに光って変身つてところだ。いや、この場合古代の戦士のほうか？まあ、そこは良いや。

「うお！？シャルルも着替えるの早いな・・・つくぞ、引っかかる

「ひ、引っかかる？」

「おう、まったく。なんでこんなぴっちり密着したやつなんだよ・・・

・

確かに、引っ掛かるとは言つてもナニがではない。I.S.を動かすために通電しやすいきつめに作られているため、無理やりにでも身体を通すしかないのだ。俺はすぐに量子化しての変身で着替えているから今ではむしろ気づかれないレベルで一瞬涼しくなる感覚が気になるがな。制服と下着が一瞬消えて一瞬でI.S.スースが展開される、

ほんの「ノンマ〇〇〇〇〇・レベルの時間全裸になつてしまつのである。いや、システムの理論上仕方の無いことなのだがな……どうにかならないから余計にきつい。

「お前用に作つてやるうか?」

「いや、良い。これ以上イメージが必要な道具とかは要らない、工Sで十分だ」

「なにそれ?」

「ん、ああ、俺が作つた量子化応用の擬似四次元ポケットだ。ちなみに非売品

制作費は・・・・失敗作も含めてそれなり。市販したいが、俺自身が使つていいように武装を格納しての兵器転用の可能性が多いにあるために予定は無い。空港の手荷物検査でも引っ掛けからないから、やろうとすれば暗殺にも有効的な機能だ。冷藏・保温・加熱もできて便利だから俺は重宝しているが、便利な道具は必ず兵器にされてしまう、人間の歴史はずつとそんなものだからな。俺が火種になるわけにはいかない、といつかなりたたくない。

「じゃあ、早く行こうぜ」

「そうだな、一夏、これに調理道具一式詰めてやるうか? イメージもそれならしやすいだろ」

「おお、それは助かる!」

「よし、じゃあ一週間ほど待つてる」

一夏がひやつほ~いとでも言いつたうなほどにテンションが引くほど上がつて走つていった、そこまで嬉しいのか主夫よ。まあ、なんでもすぐに使いたい調理器具が手の中に出てきたら便利だよな。料理の効率化は良いぞ、うん。

「さて、俺らも行こうか

「そうだね」

残像を残しながら疾走していく一夏を追いかけながら、一人してグラウンドへと続く長い廊下を走ったのだった。

ズドム！

ひとまず、遅刻はしなかったものの。変などや顔をしていた一夏が魔剣シユウセキボウの餌食になっていた、どうせ大して面白くもないシャレでも考えてたんだろう。それにしても良く思いつくものだ、俺にはとうていできない。できたいとも思わないがな。ひとまず、今の音は出席簿から発せられる音ではないと思うんだ。田に口に強くなっている気がするよ。

「さて、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

『はい…』

一組と二組の一クラス合同での実習のために普段の人数の一倍であるために聞こえてくる返事も千冬さんがということもあるかもしれないが、やる気に満ち溢れていた。まあ、一般生徒にとつてはこれが結構重要であるために外せない授業もあるんだよな、放課後の自主訓練以外だと実習時間くらいしか使えないし。そこが専用機持ちと一般生徒の大きな差か、そういうや俺の専用機は夏の臨海学校のときに入るっていう確定情報。書類が束でマニュアルに挟み込まれていたからな。

「・・・今日は戦闘を実演してもいいつか。鳳、オルゴットー。」

「・・・」「ううう」とかって教師がやるんじゃないのか?というか、いきなり戦闘かよ、そりゃあ国家代表候補生同士の試合から学ぶことは多いとは思うが。それでも急じゃないか?まあ、いきなり見せて格を見せつけようつてどこか。千冬さんならそうやるだろうよ、それにしても相手は誰だ?なにか嫌な予感と同時に背筋がぞくっとしたんだが・・・。

「こさか、早いよくな気が致しますが・・・」

「まあ、千冬さんらしいけどさ。・・・相手は、セシリア?」

「わたくしは構いませんが」

「まあ、待て・・・来たようだな」

千冬さんがそう言って空を仰ぐように見上げる、それに釣られて生徒もそれぞれ見上げた。うん、なにか緑の物体が風切り声を響かせながら降下・・・いや、ふらふらしてゐから落下か?ブレーキかけましょよ、山口

ズドガッシャーン!~

俺はひらりとかわしたが、どうやら前にいた一夏が山田先生の墜落地点から逃げ切れなかつたようだ。辺りに落下の影響か、軽いクレーターが出来上がり砂埃が巻き上げられて視界を掠める。咳き込みながら爆心地を覗き込むと何故か下敷きであるはずの一夏が上になり、山田先生の素晴らしいメロンの一つを驚掴みという状況になつていた。さつきから一夏は状況が上手く飲み込めていないのか動かさないが、汗を滝のように流している辺り焦つてゐるのだろう。

焦つて動こうとした結果、山田先生がアレな声を上げてしまつているが。どこのギャルゲーの主人公だよ、と突つ込みたくなるくらいにラッキースケベをやらかしていた。正直見ていられなくて視線を逸らすついでに横に軽く飛ぶ、瞬間、一夏の前髪を軽く焼き青いレーザーが掠めていった。

「うおお……？ なあつ！？」

それに追撃をかけるように連結された青龍刀がフリスピードのように高速で回転しながら、一夏の首を狩ろうかというほどの的確な軌道で迫つていいく。「一夏ああああああ……！」とか憤怒の感情が込められた声が聞こえた、おお怖い。どうにか一夏が背筋を反らせて回避するが、悪手だ。

「……！」

一夏の声にならない叫びが聞こえる、なにせ双天牙月はブーメラン状の形態をとつていい。投げられた地点へとヒターンして再び一夏に迫る。反らせた状態ではまともな動きができるわけもなく、自身に迫り来る凶器を見つめて絶望の表情を浮かべる一夏。自業自得（？）だ、ガムバレ。

「ハアツ……」

そこへ力強い声と同時に金属同士の衝突音が聞こえた、小型のコンバットナイフ I.Sの装備だから大きいが、が巨大な、それこそ一人分くらいの大きさ。連結してくるから二人分のサイズのそれに投げつけられて地面へと弾かれて突き刺さる。跳ね返ったナイフも近くの地面へとザックリ刺さっていた。

「大丈夫ですか、織斑君？」

「は、はい。ありがとうございます」

ナイフを投げたのは、さきほどまで押し倒された体勢だった山田先生その人だつた。小型のナイフ投げて弾き飛ばすとか、どういう腕してるんだよ。普通なら、ナイフだけが弾かれて不可能なのに・・・一瞬ナイフを投げたときの山田先生の表情が怖かつたことでも関係してるんだろうか。やはり、昔はヤンキーだったのだろうか、投げ方がその筋の人ものだつたんだが・・・マジで何者なんだ？

『・・・・・（ポカーン）』

離れ業をいきなり見せ付けられた驚きか、それともホームルームのときの例のあれの再来か理由は分からぬが、ほぼ全員が唖然としていた。ボーデウィッヒとやらも、この時ばかりは同じように口を開けたまま驚愕の表情を見せていた。そりやあ、そうなるよな。そんな、固まつた俺らに千冬さんが補足を入れる。

「山田先生は元代表候補生だ、これくらい造作もない

「いえ、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし・・・」

それでも僅差で候補生の中では2位の実力だつたんだとか、山田先生凄いな。まあ、過去が余計気になつたが。その間に投擲したナイフを回収して腰部のストックに収納していた、ああ、だからすぐに取り出せたわけか。

「さて、いつまで呆けている。さっさと始めるぞ」

58・携帯刃物は便利ですね（後書き）

どうでも良い作品情報

山田先生は原作改変

59・疾風のひづく・・・・(前書き)

サブタイは某借金執事とは関係ありません

流石に数で攻めるといつて一人とも抵抗があるようだ、いくら「お前らならすぐ負ける」と言わても簡単な挑発にのるセシリアではない。鈴ちゃんは・・・うん、セシリアが抑えてる。泣る二人に痺れを切らしたのか千冬さんが一人に何か耳打ちした。

「あいつらに良い所を見せられるぞ？」

何を言ったのか分からなかつたが鈴ちゃんは一夏を、セシリアは俺をちらつと見てなぜか微笑んだ。俺も一応微笑み返したらなぜか顔を真つ赤にしてなにか蒸気っぽいものを噴きながらそっぽを向いてしまつた。どうしてだ？

「ここには私、イギリス代表候補生セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「あたしだつて居るわよ、中国代表候補生。凰鈴音がね！行くわよセシリア！！」

「もちろん！」

いきなり名乗り口上を始めてやる気が一気に上がつた一人、一体なにをしたんだ千冬さん。というか、突然やる気上がりすぎだる。いや、意欲無きやダメだけどさあ。極端すぎるぞ、いや、かの有名な千冬マジックか？って、そんなこと考えてたらシユツセキボウによる一撃を食らつてしまつた。自重しよつ。あれ、でもsyusse kibowって書くとカッコいいなんか。

「では、はじめ……」

千冬さんが笛代わりに手を叩く、それを合図に空中へ三機のISが飛翔した。

「さて、デュノア。山田先生が使っているISの説明をしてみる」「は、はい！」

ふむ、まあ俺はIS情報はある程度合法非合法合わせてそれなりに知つてるから聞く必要があるのは一夏か。俺はセシリ亞の華麗な戦いをこの田に焼き付ける！

「え？」
「なあつ！？」

序盤はそれなりに動けていた一人だったが、徐々に山田先生の鬼畜とも言える弾幕によつて誘導されて空中で衝突。衝撃から回復しきつていなままの二人に無常にもグレネード（炸裂弾）が6発全弾

撃ち込まれて綺麗な花火にされて現在進行形で落下している。しかもＩＶが解除されて生身で落下して、山田先生はそれに気づかず高笑いして見てないし・・・・・。つたくもうー。

「一夏！」

「わかつてゐー！」

修理が終わった疾風を展開し、落下を続ける一人の下へ白式を同じく展開した一夏と共に飛ぶ。リミッターの部品が事実上の製造不可のため常時「疾風」状態。失敗作所以の製造用金型廃棄でしたとさ、でも俺がこれでそれなりにデータ集まるおかげでもう一度やつてみよつぜ的話が持ち上がつてゐるらしい。そういえば簪ちゃんが作つてる打鉄式も機動力重視だつたよな、データ使えるんじやないか？今は先にセシリアをキャッチするのが先決だー！ー！ー！ー！ー！

「イグニッショーン、ブーストオオオオーー！」

叫んだのはおそらく気分だと思う、余裕で白式を追い越して残像を残しながらセシリアの下へと接近する。詳細スペックによると「疾風」形態では最高速度時速3000kmオーバー、追加工エネルギーパックの装着が必要らしいが、単体でも第三世代に速度は追い越してしまって、製作者はスピードジャンキーだつたんだろうか？

「つと、ふう・・・・間に合つた」

3m地点で逆噴射による急ブレーキをかけて真下に位置する場所で停止、抱きとめるようにして優しくセシリアを受け止める。反対側を見ると一夏も鈴ちゃんをしつかりキャッチしたようだつた、上空ではいまだに高笑いを山田先生だつたものがしているが・・・・・丈夫だろうか（頭的意味と教師的意味で）

ひとまず、一人を抱きかかえたまま（所謂お姫様抱っこ）といつやつか、一番安定するからな）地上へとゆっくり降下する。地上から見上げる他の生徒がキャーキャー騒いでいるがどうかしたのだろうか「羨ましい」とか無言で鼻から赤い何かを噴出す者までいるぞ。どうしてそうなった。

「お～い、起きろ～」
「…………う・・・うん？ 音羽？」
「生身で落っこちたから助けさせてもらった、怪我は無いか？」
「え、ええ・・・大丈夫です／＼」

ふむ、怪我が無いなら良かつた。どうやら鈴ちゃんもなんともないらしい、良かつた良かつた。ひとまずそのうちに山田先生とお話しなくちゃいけないな、待つてろよ！ ひとまず実習の続きだな、セシリアをエスコートしながらクラスの場所へと戻った。

ひとまず、千冬さんの指示で専用機持ちがリーダーになつての訓練機を使用した実習をした。ほぼ三等分で男子に最初集結してしまつたのには少し引いてしまつた、まともに教えられるわけ無いだろ。効率悪すぎるし、いくら男子が三人だったとしてもそこはしつかり分かれてやろうつよ。まあ、名簿で振り分けられてボーデウイッヒの班になつた人はご愁傷様しか俺は言えない。なぜかジャックと俺の班がとても賑やかだった（並木野中の意味で）

「ふう、いや～疲れたな」

「さうか？もう少し鍛えたほうが良いぞ一夏」

まあ、訓練機を載せたカートを一夏と違つて俺はmk?に押しても
らつているんだがな。こんな小さいのに動かせるなんて凄いな、作
つたのは俺だけどもさ。ちなみに一夏は自分で押している、俺が横
に並んで押すのを手伝つているがな。なんでかシャルルだけ「デュ
ノア君にはやらせられない！」とかつて体育会系女子数人が運んで
いたが・・・・どこか解せぬ。

「確かに午後は整備実習だったか、さつさと上がるか

「そうだな、シャルル、早く着替えに行こうぜー」

「あ、いや。僕は少し微調整してから行くよ」

「別に少しくらい待つても大丈夫だぞ？」

「いや、結構時間かかるから先に行つてて良いよ」

「別に待つのは慣れてるから大丈ぶへつ！」

「じゃあ、行ゆつくり~」

・・・・・しつこく連れて行こうとする一夏の頭を掴んで整備
室を後にした、しつこい男は嫌われるぞ。友人としても、ストー
カーだとしても、命を狙うにしても。最後のは違うか、まあいいや。
昼だし今日はあれがあるー！

59 疾風のいとく（後書き）

どうでも良い作品情報

今作品では山田先生が元レディース総長です

60・ダブル引越しです（前書き）

そういうことです、はい

60・ダブル引越しです

「…………申し訳ない」

「すみません、篠さん」

「いや、大丈夫だ。二人は悪くない」

昼休み、ボーデウィッヒ以外の専用機持ちが屋上にいた。とはいえたジヤックの姿が見えないが……？

普通の高校ならば屋上への立ち入りが禁止されているものだが、藍越学園のように自由に開放されている。

どうやら、一夏と二人でいたかったみたいだが、一夏が変に気を利かせてしまったようだ。それを知らずに呼ばれてしまった……なぜ氣づけなかつたし。

「はあ……一夏エ……」

「まあ、今に始まつたことでは無いですわね……残念ながら

あーだこーだ言つても意味が無いといつか、のれんに腕押しがうかどうしようもないでの仕方なく弁当を広げる。なんと、セシリ亞の手作りなんだよ。羨ましいだろ？え、全然……あ、そう、後でやつぱ欲しいとか言つてもやらん。それにしても腕はどうなつたかなあ、チエルシーさんはメールしてもばぐらかすし。なにか一ヤニヤしてそうな氣がするが。

「いただきます」

「ええ、召し上がれ」

ボックスを開けると、カツサンドにベーコンレタス、卵とダブルベリーなど色とりどりのサンドイッチが華やかに鎮座していらしゃつ

た。美味しそう……だと！？イギリスにいたころはどう見ても化学兵器だったのに……頑張ったんだなセシリア、これでどこにお嫁に行つても問題ないぞ！……流石に早いか、まずは一ついただこう。

「はむ・・・・・

「（ハクリ）」

最初は卵のを一口、いつだかはバーラエッセンスとか投入してめつさ甘くなつていていたりしたが……。おお、しっかり卵の甘みも残しつつスマートネーズと塩コショウがむりぱりとした塩味を舌に感じさせる。

「美味しい！セシリア、美味しいよ

「うふふ、頑張った甲斐がありましたわ」

「す」い見てるほうが恥かしいんだけど、音羽つてあんなんだっけ？」
「いや、全然。見たことないぞあんな顔した音兄なんて」「どうみても付き合つているようにしか見えないのだが……」「え、あれで付き合つてないの！？」

竇の言うとおり、経験が無い俺でもそう見える。あれ、やつぱり音兄つて自覚無し……？セシリアは太陽以上の眩しさの笑顔で「は

い、あ～ん」をしてるし、音兄もまんざらでもない様子。樋無さんには言わないでおこう、HIS学園で血の雨を見たくはない。シャルルの言うとおり、恋人同士みたいに音兄とセシリ亞が見えてしうが、断じてそういう関係ではない。

「まあ、いいか。邪魔するのも無粋だし」
「ううね、はい、酢豚」「おお、久しぶりだな！」
「ほら、一夏。お前の分の弁当だ」「ありがとな篤、助かるぜ」「じゃあ、僕らも食べようつか」

二人から離れて、俺たちもそれぞれ昼食を食べ始めたのだった。なぜか音兄が鼻から忠誠心を噴出していたが、何かあったんだろうか？ひとまず、鈴の酢豚も、篤のからあげもとても美味しかった。

「お引越しです！」
「あ？」
「ふえ？」

いつもどおりの一日の授業を終え、夕食を済ませた俺は同じく仕事を終わらせた美月とそれのベッドの上でくつろいでいた。といつてもだら～っと伸びながら俺は支給される専用機のマニュアルを読んでいたところだ。説明書は熟読する派だから。

「あの、山田先生。シャルルは一夏と同じ部屋ですよね？俺は必要無いんじゃないですか？」

「そりなんですけど、部屋の調整がついたので一人部屋です！」

「そんな『マジですか先生！待つてましたあ…』・・・・・」

これでやっと理性を毎日ガリガリ削られる心配もない、美月には悪いが俺も今となつては普通の男子なんだな。あれこれ思うところがあるんだよ、毎日理性が削られてもどうにか耐えたんだし、一ヶ月つてことだから一度だしな。頑張つて耐えた甲斐があつたというものが。

「・・・・・私が移動なんですか？」

「はい、やはり年頃の男女が何時までも同じ部屋のはいけませんし」

「生徒会長権限で『ダメです、約束は守つてくださいね！』・・・・・はい」

一瞬、山田先生の背後に禍々しいオーラが見えたよつた気がしたが、氣のせいだと思いたい。てか、そういうところで会長権限使うなよ、もつと他にやるべきことがあるんじやないか？ひとまず、山田先生には感謝だな、心が晴れ渡つているんだぜ！え、喜びすぎ？知らんなあ。

「わかりました。音羽、絶対トーナメント優勝しなさいよー！」

「あ、ああ。善処する」

他にもつとあれこれ言つんじや無いかといつ予想をしていたのだけど、それだけ言つと荷物をささつと纏めて部屋から出て行つてしまつた。なんか妙にあつさりしてゐなとか思つたが、まあ気に留め

てもどうせ重要なことならばすぐに俺に伝えてくれるだろ？」
ことも無いので再びマニコアルを俺は読み始めた、なに、ビット兵器
つて・・・俺に使えるかどうかわからないだろ。システム適正試
験も受けたことないのにさあ、あ、でも高機動型か。

「いやー、シャルルが来てくれて助かつたぜ。男一人だけだつたし
「そう？ あはは」

簫とシャルルが部屋移動になり、やつと本当の意味で落ち着ける。
いや、簫と同じ部屋だつたことがイヤだつたわけではないけども、
やつぱり少し意識してしまったものだつたからな。やっぱ男同士つて
のは気兼ねなくて良いな。

「そういえば、一夏つて放課後I.Sの練習してるんだよね？」
「ああ、そうだぞ。いつも簫とセシリ亞にやられっぱなしだけど」

ちなみに音兄には零落白夜があるからたまに勝てているだけ、ほと
んどの場合はあの「スティールハーツ」とかいう剣でガリガリシリ
ルドエネルギー削られて終わる。もしくは銃器で蜂の巣、あまりに
も銃の使い方が上手すぎるから前にどうしてか聞いたら「H A H A
H A、偶然だつて」とあからさまにはぐらかされた、こういうときは「詮索するな」っていうことを暗に示しているときなのでそれ以
上は聞かなかつたが・・・とにかく基本三人にボコられる。

「た、大変だね。僕も専用機持ちだから協力できると思うんだけど
仲間に入れてもらつて良いかな？」

「ああ、歓迎するぞシャルル！」

「うん、ありがとう！」

思わず、シャルルのちょっとした仕草にビキリとしてしまつ。男子
だってことはわかっているが、なんというか、人懐っこい印象だか
らか驚いてしまつことがある。いや、けして俺はアレな趣味は無い
ぞ。俺だって普通の異性に興味がある男だ、恋愛とかそういうのは
今はそこまででは無いけども。ひとまず、毎は砂糖を吐きそうにな
つたとだけ言つておひづ。うん。

「さて、と。今日はもう遅いし寝よければ

「そうだね、おやすみなさい」

「おひ、おやすみ」

そして、それぞれの寝床に入り眠りに付いたのだった。

60・ダブル引越しです（後書き）

「えりでも良くない情報

この「訳有り」がなんとお気に入り登録200件を突破してしまいました、まさに嬉しく思います。みなさんありがとうございます！

とまあ、そんなわけで近日こでもお祝い記念をしたいと思つていますのでお楽しみに！

6.1 オリ設定（機体・キャラ編）（前書き）

今更感満載ですが

6.1・オリ設定（機体・キャラ編）

打鉄機動力特化タイプ「F型」機体名「疾風」

機動力を重視というコンセプトで、マジキチの無名開発者が設計・製作した「量産機の汎用性強化」の打鉄再開発計画案の一つ。機体カラーパレットは原作の打鉄通り黒。

計画の「機体の一部変更による対応」《機体の機能特化》「武装の特化」《主武装変更による多彩な対応》二つのうちの前者の一つである。評判は悪く失敗作と言われているところを音羽の要望により眠らされていたところを助け出された。一部部品は生産が終了しているため、後述のF型形態には戻せなくなってしまっている。

秘匿形態（打鉄F型）

一対の物理シールド内に、巧妙に高出力ブースターが内臓されている。秘匿形態でも全開での出力は第三世代に追いつくほど、専用武装の「スティールハーツ」と相まって攻撃力も十分。勿論、その機動力を求めるために物理シールドは防御性能がほぼ犠牲に。

疾風形態

物理シールドが基部を元にスライドして一基一対のプラズマ複合ブースターが展開・装着される。通称「アンロックゴーッフル完全ブースターモード。

この形態では速度のみ第三世代を追い越す、現時点で世界最速のエス。その異常とも言える規格外の速度により、乗りこなせる人物は世界に音羽を合わせても一人しかいない。

偽装物理シールドは巨大すぎる四基のブースターを支えるためだけ

に存在しているため、F型形態よりも防御が格段に薄い。本来は「ここぞの時の一撃用」だが、前述通り一部部品が生産不可能のために形態が戻せなくなっている。スペックデータによると最高速度時速 3000 km/h オーバーであり、高感度ハイパー・センサー搭載により高速戦闘に装備換装無しで対応できる。はつきり言えば速度では怪物レベル。

専用武装「ステイールハーツ」

刃の背部分に小型ブースターが装着された「加速する剣」、回転式弾装に気化燃料が込められたエネルギー・カートリッジを消費して刃を加速させる。その威力は、第一世代兵器の中でも三本の指に入るほどであり機体の加速も追加された場合はそれも加算されるため規格外である。F型・疾風用に開発されたほぼ専用武装であるため、他の機体では耐久力などの要因により使用ができない。元ネタは某グラール太陽系が舞台の4人で進むアクションRPGから。

IS用刺突エネルギー・ランス「白牙」

前述プランの後者であり、現行計画の中で開発された近接武装。機体からのエネルギー供給ではなく、専用のエネルギー・パックからのため機体エネルギーを心配する必要がない。（後者のプランで開発

された武装はほぼ全てが機体からのエネルギー稼動ではない）

刺突時のみ、高出力のエネルギー刃が展開されてピンポイントで相手のシールドエネルギーを削り取るといつコンセプト。どちらかと言つと競技向きの武装である。

オリジナルキャラ

河西愛理
かさい エリ

二組元クラス代表であり、並木野中の後輩である。音羽を真似てかどうか不明だが、右サイドテールの腰までほどの長さで茶髪。身長は165cm、体重は不明。原作でいう「鈴ちゃんに代表の座を奪われた娘」である。IS原作知識を持った転生者だが、大きく干渉することもなく音羽（の写真を求めて）を追いかける淑女。神さまにチートボディを貰うが自衛程度にしか使わないためほぼ目立たない。一次創作の世界と気づいているが自由気ままに一度目の人生を面白おかしく過ごしている。音羽の認識は「中二病をじがらせた殘念な少女」であり、貞操の危機を感じている。

6.1・オリ設定（機体・キャラ編）（後書き）

どうでも良くない作品情報

jonthereさん話合いで相手になつていただきありがとうございました、ここでお礼させていただきます。

「一夏が凰さんやオルコットさんに勝てないのは、単純に射撃武装の特性を理解してないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかつてゐつもりなんだがなあ・・・」

シャルルが転校してきて5日、今日は土曜日。今週はイレイズドに飛び用事もなく、午前の授業時間が終わった午後。自由時間となり、アリーナも全開放と言うことでほとんどの生徒がISの鍛錬に励んでいる。知識や技術面でまだまだため、俺もその一人である。一夏とシャルルの練習に付き合つ形であるがな、やはり一般生徒とは知識・技術面でも遅れているため貴重な時間を無駄にはできないのだ。

「うへん、知識としては知つてゐつてところかな。さつき僕と戦つたときもほんと間合いを詰められなかつたよね？」

「う、確かにそうだな。イグニッシュンガースト瞬時加速も読まれてたし」

「お前のISは格闘オンリーなんだし、他の人以上に射撃武装の特性を理解しておかないとけないな」

「それに、一夏の瞬時加速つて直線的だから反応できなくて軌道予測で対応できちやうし。それに音羽の『疾風』ほどの速度じゃないから余計にね」

まあ、疾風の場合は予測射撃したころには既にそこを通り過ぎてるつてレベルだからな。それこそ大振りに動かさないといけないからその前に接近されるか撃たれる。シャルル曰く「ある程度近づかれなきや射撃は当てられないよ」とのこと、どれだけ速度が規格外かが良くわかる。代表候補生にそこまで言わせるつてどれだけだよ。

「あ、一夏。瞬時加速中に急制動かけて曲がりつとすると機体も身体も変に負荷かかつて骨折とか怪我するからな」

「むう・・・・・」

「あんまり無茶な動きはしちゃだめってことだよ、わかった?」「おう、なんとか」

まあ、実際。操縦者保護機能があるとはいって、完全ではないし、死にはしなくとも限度を越えれば怪我はする。そうならないように上手く立ち回るようになるのが大事なんだよなあ。お、一夏がうんうんと頷いている。まあ、確かにシャルルの噛み碎いた説明はなんともわかりやすいものだ。個人的に教科書をそれでやってしまえば良いのではないかとも思つ。

ちなみに

『うひへ、すばーんとやつてからじやきんつて感じだ』

『なんとなく分かるでしょ? 感覚よ感覚、はあ? なんで理解できないのよ!』

『防御時は上半身を上へ5度、回避の場合は後方へ20度反転ですわ』

・・・・順番は第・鈴ちゃん・セシリ亞の順番である、個人的にはセシリ亞の説明が一番分かりやすい。数字で動き方が示されるんだ、擬音語や感覚だけの説明より理路整然として良いだろう。なんで一夏がそれを理解できないのか不思議でならない、それを言つたら第と鈴ちゃんに「ええ~」つて言われたし。う~む。

バンッ!!

「うおつー!?」

いつの間にか深く思考の海に浸かっていたらしく、突然実弾銃特有

の発砲音が聞こえた。どうやら、シャルルが自身の機体の一つに使用許諾を発行して一夏に使わせているらしい。ちなみに許諾を操縦者とエスに出されない限り他の機体の武装は使用できない。例外もあるらしいけども基本はそうなっている、射撃系のものは実際にそうだし。事実上のエド武装つてところか、まあ、後付武装^{バストロット}が満杯だとしても実際に使つた経験は後の糧となる。

「やっぱ、速いな」

「うん、だから軌道予測さえ合つてれば簡単に当てられるし外れても牽制になる」

「だから、簡単に間合いが空くし、続けて攻撃されるのか」

「そうだよ、あ、1マガジン続けて撃つてみて」

「わかった」

規則的な銃声が響く、どうやら白式には射撃補助用のセンサー・リンクが搭載されていないらしい。武器が雪片だけだからだろうか、普通はどんなタイプのエスにでも入ってるはずなんだがな。そのため一夏は補助無しにマニュアルで撃つている、オートで調整されると相手にロック警告が出されたり細かい調整ができるから俺は基本使ってないが。

シャルルの専用機「ラファール・リヴァイブ・カスタム?」の搭載武装が20とかいう驚愕の事実に驚いたり、一夏とシャルルが再び軽い模擬戦したりとゆっくりしていた。勿論、俺はセシリ亞にご教授願いながら高速でお空の旅をしていた。一段落付けようかと、一度俺が降下したとき。にわかにアリーナが騒がしくなった。なんだ?

「ね、ちょっとアレ……」

「ドイツの第三世代型よね、まだトライアル段階っていう」

ちょうど、一夏も1マガジン撃ち終わったところらしい。騒ぎの原因べと視線を向けていた・・・ジャックはなんか授業終わってから即効でシエスタと洒落込んでいったが。あんなんでもドイツの候補生だつてさ、データとか取らなくていいのかあいつは、まあ、本人が「眠いから寝る、以上！」って言つてたから別に気にしないけども。

「・・・・・・・・」

そこに居たのは転校初日に一夏を叩こうとして俺の殺氣スナイプで見事失敗したドイツ国家代表候補生、ラウラ・ボーデウイッヒだつた。ちなみにクラスでは一切会話無し、部隊の仲間であるジャックとは事務的な話のみという孤高の少女である。そして、昨日だが食堂で一人「ぷりん」を頬を染めながら食べていたのを見かけた、ドイツ軍のIS配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」隊長であり階級は少佐だつてさ。ついでに言えば、ジャックは大尉、副隊長。HAHAHA、俺は英國王室認定騎士だから軍では中佐レベル・・・らしいすっかり忘れていたがな！

「おい」

ISの開放回線オープン・チャネルで一夏が話しかけられていた、まあ、初対面があんなのだから誰だつて忘れないだろう。

62 特訓と乱入（後書き）

どうでも良い作品情報

ここらへんからちょい改変

63・偽りの仮面は今宵割れる

「…………なんだよ」

張り詰めた空氣の中、刺すような視線に射抜かれた一夏が渋々といった感じで返事を返す。まあ、初口に叩かれそうになつてしまえば応対がそくなつてしまつても仕方ない。誰が自身をいきなり叩こうとした人間と誰が仲良くできるだろうか。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い、私と戦え」

一夏が言い終わるかどつかのタイミングで言葉を紡ぎながら飛翔していく、こいつ、何を考えてやがるんだ？普通に模擬戦ならば、普通に頼めば良いのだろうがやはり一夏になにかあるようではつきから世界に一夏しかいないかのように見つめている。

「嫌だね、第一理由が無い」
「貴様には無くとも、私にはある」

どこか思い当たる節があるのか、一夏がなにか思い出したような表情を浮かべて拳をギリギリと握っていた。どこか、自分への悔しさや情けなさに腹を立てているかのようだつた。まあ、後で説明してくれるだらう、無理やり聞くほいど野暮な真似はしたくない。

「貴様が居なければ教官が大会一連霸を成し遂げていただろう」とは容易に想像できる。だから私は 貴様の存在を認めない

「どうやつ、『教官』と呼んでいることから千冬さん絡みの内容である」とは良くわかつた。ドイツに行つていたからそれ関係……お

そらくボーデウイッヒはその時の教え子だらう。一連覇といふとエス世界大会のモンド・グロッソのことだらう、おそらくそのときの千冬さんが辞退ということに関連する内容か。しかし、何があつたかは知らないが存在を認めないとほひどい言い草だな。

「また今度な、今はよしてくれ」

「ふん、ならば 戦わざるを得ないよひにしてやる……」

言つが早いが、ボーデウイッヒは即座に戦闘態勢に機体をシフトさせる。火器が使用可能になつた瞬間、右肩に装着されている大型実弾砲が火を噴いた。

ガキンッ！　ドカーンン！！

「軍人が拒否をした一般人に攻撃するとは、お前の頭は正常か？」
〔二〕
「こんな密集空間で戦おうとするなんて、ドイツの人はビールだけじゃなく頭もホットなのかな？」

即座に一夏の目の前に黒と朱の二つの影が立ち塞がる、言わずもがなISを纏つた音羽とシャルルであつた。ラファールの物理シールドが高速の弾丸を弾き、音羽が展開した対物ライフルがほぼ同時に実弾砲を真っ直ぐに撃ち貫く。即席のコンビネーションが見事に決まっていた、それを傍観していたほかの生徒からは歓声が上がつていた。

「・・・貴様とは問題を起こすなと言われている、今日は下がらせてもらおう

音羽を一瞥すると、さきほどまでの気勢はどこへ行ったのか踵を返して立ち去つていった。管制室から教師の声が響いて聞こえるが、

おわりへのボートウイッシュの」とある、結局は馬の耳に念仏である。

「・・・た、助かった。ありがと、音兄、シャルル」

「いや、気にするな」

「怪我がなくてなによりだよ」

まったく、いきなりぶつ放すなんてふざけやがって。といつも、俺と問題起こすなってどういうことだよ、え、もしかしなくて、ドイツの一企業にもライセンス生産とかあるからそれか？そりゃあ、大企業だから国としても大事な税収入源だろうがさ、ここまでかよ。まあ、こうじうぶつにされたからってライセンス取り消しとかはないけど・・・なんだかなあ。

「まあ、もう四時になっちゃうじ。今日も上がるつか」

「そうだな、あ、銃サンキュー。助かった」

「じゃあ俺も上がるかな、まあささつと着替えやがってか」

また一夏がしつこいシャルルと一緒に着替えようしたり、セシリアが俺と一緒に着替えるても良いとか言い出したりしたが鈴ちゃんと第の説得（物理）によつてなんとか解決した。・・・・まさか、一部の腐った女子のBでしな薄い本みたいな趣味なのか一夏つて？

「違うわ！」

「大丈夫だ、俺は否定しないから。あ、俺は対象にするなよ？」

「だから違つて……」

「え、一夏……」

いやあ、一夏を弄るのは楽しいね。む、山田先生がなにか急いでいるようで走っていた、転ばなければ良いが……やつぱり転んだ、すぐに起き上がったがもう少し落ち着いて歩いたほうが良いと思つんだ。

「あ、丁度良いとこにおり一人いましたね！」

「先生、おかえりはあちらです」

「ええ、それではまた来ます……つて用事があるんです！」

ふむ、ノリッジ「ミミ」が大分板についてきたな。最近の密かな楽しみであるのだがな、千冬さんにあとで叩かれてもいいや、面白いし。で、用事つてなんだ？

「いえ、織斑君は「白式」の如月君は「疾風」の書類をちょっと書いてほしいんです。すぐに終わるので職員室に来ててくれませんか？」

「ああ、そういうことですか。わかりました」

「じゃあ、すぐに来てくださいね！」

「シャルル、じゃあ先にシャワー使つてくれ」

「うん、わかつた」

再び慌しく走り出した山田先生、あ、また転んだ。ひとまず職員室に行こうか。

「すぐつて言つたのに・・・」

「まさか、書類10枚もとは思わなかつたな」

ただ単に機体の書類上の装備者の登録で名前を書くだけのものだつた、まあ、管理用の名簿と言つたところなんだが、それが10枚もなんだからそりやあ20分もかかる。臨海学校ころにはイギリスから専用機が正式に来ることが確定していくもやはり貸し出しどは言え必要らしい。あ～しんどかつた。

「一夏、ちょい紅茶飲ませてもらつて良いか？喉渴いてや」

「ん？ 音兄、いつものあれじゃないのか？」

「いや、丁度お湯が切れててさ。少しば男子同士三人で話もしたいし」

「わかった

いや～、一夏が淹れる紅茶つてなんか知らないが美味しいんだよね。こう、シャルルシーさんが淹れてくれたのとはまたちょっと違つんだが、説明しにくいが実際そんなんだよな。お、着いた着いた。

「あ、シャルルはシャワー浴びてるのか。音兄「椅子は自分で出した」だつたら良いか、ちょっと待つてくれ」

「おひ

ふかふかのクッショングリーンみたいな椅子を展開して、そこへもふ～っと座る。身体に合わせて形を変えてくれるから結構良いんだよねこれ、しかも緊急時用に自爆機能付きという男のロマンも詰まってる。まあ、浸かつたことは一度も無いし使う予定も無いけどさ。ふわ～

「ああ、シャルル丁度良かつたボディーソーポ・・・・・・・・

「い、一夏。ああ、ありがち・・・・・・・・

ボディーソープが切れてたらしく、一夏がシャルルに渡しに行つた。
どうやら一度出くわしたらしい、まあ、男同士なんだし手渡しでも
問題無いしな。なんで途中で静かになつたのかわからんが。

「「」、「」、「」

「「」、「」

なぜそんなに歯む、遂に二ワトリの物真似でも始めたのか…? どうし
て戻ってきた一夏の顔が赤くなっているのか知らんが…?

「ははは、どうしたよ。シャルルが実は女子でしたとか?」

「うん」

「そりゃあそうだよな、そんなわけ無いよな…

は? 今ナンテイツタコイツ? 「うん」これは肯定の意味だよな日本
語で、運勢の「運」でもくもんの「雲」でもある。で、俺はなんて質
問した?

Q・シャルルが実は女子でしたとか?

A・うん(ゅえ)

「マジ?」

「え、音羽も?」

「ふへ?」

声のした方向に振り返ると、そこには金髪の貴公子ではなく一人の
少女が居た・・・・。おいおい、どうこういとだよ!?

63・偽りの仮面は今宵割れる（後書き）

「どうでも良い」作品情報

一夏はシャワールームのドアを開けて渡した……どうしたことかわかるよね？

64・知る者、知られる者（前書き）

キヤー、またひさつた

「…………」

「…………」

「（気まずい）」

シャルル（女）がジャージ姿に着替えてシャワールームから出てきてから既に一時間、誰とも無く口を開かず沈黙だけがその場を窮屈なほどに埋め尽くしていた。正直、こういう状況はあまり経験が無いために俺もどうしようもなく無言でいるしかなかった。心地いい静寂は嫌いではないが、こいつのことはあまり好きではない。

「あ～、ひとまずお茶でも飲むか？」

「（口クコ）」

「やつやら埒が開かないため空氣を変えようと一夏が立ち上がった、俺は頷きで返したがシャルルはびっくりと身体を震わせる。まあ、いままでのを考えればそろはなつてしまつか。

「う、うん」

「わかった」

まあ、やつと会話なのだが。すぐにまた沈黙へと戻る、淹れ終わるまでがまた想像以上にきつかった。俺はどうすることもなく、なにか茶菓子を持っていなかつたか少し調べた・・・・あ、ドーナツがあるな。よし、甘い物があるならば少しあは良いか。ひとまずドーナツを皿と一緒に展開してテーブルに置く。

「もう大丈夫だろ、ほい
「あ、ありがと もやつ」

一夏が湯飲みを渡すときに手が触れたからか、シャルルが慌てて手を引つ込める。思わず落としそうになつた湯飲みを無理な体勢で取つたために反動で中の熱い茶が一夏の手にかかつてしまつた。うわ、火傷するじゃないかよ。

「わあ、じじめん！」
「あち、あちちちちー！」
「つたく、初々しい奴らだよまつたく」

蛇口を捻り、水を勢い良く流す。手招きして高温のお茶がかかつて騒いでいる一人を近づかせる、すぐに冷やさないとダメージが深くまで行つちゃうからな。一気に空気が和やかになる、なんといふシリアルスプレイカーだよこいつは・・・そのほつが良いけどさ。

「シャルル、しっかり冷やしてやれ。俺は冷却シート出すから
「わかつた、ほら一夏。しっかり手を出して」
「うう、すまん」

え～っと、冷却シートは・・・確か部屋の入り口の棚の中に何枚か常備されてるんだよな。保健室や医務室などは寮よりはアリーナからが近いという場所にあるために軽症程度ならば室内に薬品などが常備されているのだ。ちなみに薬品棚の奥にはナノドクター製の火傷用塗布薬と冷却シートを見つけた。ナノマシンによる効果の底上げがされているんだよね。ちなみに生分解型の使用により人体に

影響無し。やつたね一夏、2日で治るよ！

「つたぐ、ほれって一人で塗れないか。シャルル、すまんがやつてくれ

「オッケー」

「すげえ情けないんだが俺

シャルルに塗布薬の小さい容器を投げ渡し、冷却シートのパックを開いて冷却開始まで振る。丁度カイロをぐしゃぐしゃやって発熱させるのと同じだ。うんうん、シャルルもしっかりやってくれてるし良いかな。塗り終わった患部へシート（小）を貼り付ける。

「はあ、俺つて奴は・・・・」

「はいはい馬鹿は安静にしてろ」

一夏の治療も終わり、今は三人して紅茶を飲んでいる。さて、と、そろそろ良いかな。

「なんで男のフリをしていたんだ？無理には聞き出さないけど」

「それは・・・その、実家の方からそつしろつて言われて・・・・」

「実家つていうとデュノア社か、だが、どうしてだ？デュノア程の企業なら俺が誰かわかっているはずだろ」

「うん、そうなんだけど。経営不振で焦つてたんだ社長・・・僕の・・父さんが。それで直々の命令で」

一夏が？マークをひょこひょこ浮かべているが、まあ、後で良いや。だが、自身の父のことだと呟つのにそこから表情が曇りだした、どうしたことだ？罪悪感とは別の・・・嫌悪？

「命令つて・・・親だらう？じつしてそんな・・・」

俺の疑問に一夏が代わりのよひに口を開いた、じつも表情が優れない。どうことだ？

「僕はね 愛人の子なんだよ」

一夏は絶句していた、そりゃあ15にもなればそういう言葉の意味も分かつてくる。俺も企業人としてそういう話は嫌でも聞こえてくる、あくまでも自身の子を「愛人の」というだけで使いやすい「駒」として道具のように扱う。正直反吐が出ることだが、これは古来から行われてきたことでもある。今に始まつたことではないが、自分がライセンス許可をしている企業では厳しく禁止をしている。それほど俺個人としては嫌なことであるからだ。

「それでね、引き取られたのが2年前。丁度お母さんが亡くなつたときだつたんだけど、父の部下がやつてきたの。連れて行かれて検査されたらETS適性が高いことが分かつて、非公式だけどテストパイロットをやることになつたんだ」

おそらく、話すことも苦しいのだろう。俯いたまま、今にも掠れそうな弱々しい声で健気に話してくれていた。心が痛むが、聞き逃すまいと耳をしっかりと傾ける。

「父に会つたのは2回くらい、会話は数回だけ。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度本邸に呼ばれてね・・・。本妻の人によ

「この泥棒猫が！」つて殴られたよ。あの時はひどかったなあ

あはは、と無理やりといふことがわかる愛想笑いに俺らは返すこともできなかつた。一夏が怒りを抑えて拳を強く握り締めていた、血が出るのではないかと思つほどの強さのため爪が食い込んでいた。

「それから少し経つてデュノア社は経営危機に陥つたの

「なんでだ? ISのシェアは世界3位じゃなかつたか?」

「言つちゃなんだが、結局ラファールは第二世代。今は世界中が第三世代開発に動いてるから開発がままならないデュノア社は状況が厳しいのさ。歐州連合の統合防衛計画「イグニッショング・プラン」からも除名されてる、切羽詰つてるんだよ」

「うん、音羽の言つとおりなんだ。実際に、政府からの援助もこの先危ないし

現在、それを理解した投資家たちがデュノア株を売り出したおかげで株価は現在暴落。どうにかラファールの利益と関連産業で生き残つてゐる状態。企業としてはとても危険な状態である。

「それでね、次のトライアルで選ばれなかつた場合は援助カットとIS開発権の剥奪が言い渡されているんだ」

「でも、それがどうして男装に繋がるんだ?」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔、それに

シャルルが堪えるように息を吸い込む、どこか苛立ちと申し訳なさが感じられるそれが言葉になて吐き出された。

「同じ男子なら、日本で確認された特異ケースと接触しやすい。可能であれば機体と操縦者両方のデータも取れるだろうってね」

「俺らのデータを気づかれないように盗めつてことか、気に入らん

な

どうやら話を聞いた限り、罪悪感など微塵もなくもはや娘ではなく、唯の「使える道具」としてしか考えていないらしい。まったくもつて胸糞悪い、やはり実際にその田で耳で感じると余計にイライラつぶ。

「聞いてくれてありがとう、少し楽になつたよ。でも、バレちゃつたから僕は強制送還かな。今までウソをついてごめん」

『・・・・・』

深々と頭を下げるシャルル、そこには心からの謝罪が表されていた。遂に我慢ができなくなつたのか一夏ががしつとシャルルの肩を掴んでいた。

「いいのか、それで」

「え・・・・・」

「それで良いのか？良いはず無いだろう、そりやあ親が居なければ子供は生まれない。だけど、だからと言つて親が自分の子に何をやつても良いはずが無い！自分の人生は、他人に決められるものじゃない！自分で決めるものだ。それを親がどうこう言つ権利は無いはずだ！」

「一夏、落ち着け。シャルルが驚いてる」

「あ、ああ。スマン、シャルル」

「い、いや。大丈夫、どうしたの？」

「俺は・・・俺と千冬姉は両親に捨てられたからさ・・・」

「あ、う、『メン』

「いや、良い。別に今更会いたいとは思わないし、俺の家族は千冬姉だけだから良い」

おそらく、書類に書いてあつたであろう「両親不在」の表記の意味を理解したであろうシャルルが謝る。俺も書類上は「両親不在」になつてゐるが、実際は「不明」、うなじのバーコードから親がいるかどうか怪しいが。まあ、実際はどうでも良い、ミリアさんが俺にとつては親代わりだったからな。感謝はしてもしきれないが。

「で、だ。一夏の言ひことはごもっともだが、どうしたい？」

「う、うん。できればここに居たい」

「そんな一夏に問題だ、特記事項2-1の内容を答えよ」

「え？・・・ああ、そういうことか。学園に在籍する生徒は全ての組織・個人からの干渉はされない！つまり3年間は大丈夫なんだな？」

「後は・・・それまでに俺がフランスに支社を建てて買収してやれば良い」

「え？ 音兄が？」

「あ、あ～そこからか」

音羽説明中

「ナノドクターって大企業じゃんか、そのライセンス提供者って・・・」

「おう、だからこれでシャルルも大丈夫だ。安心して良いぞ？」

「え、でも音羽にはメリットが無いよ？」

「ん？ おかしなことを言つたな、こいつあはエリス関連に産業を伸ばせる収益は上がる。そゆこと、オーケー？」

「あ、ありがと」

「感謝は一夏に言つんだな、俺は企業人として動くだけだ」

さてと、これで良いか。腹も減つてゐるだろうし、飯食いに行くか。シャルルも気が抜けたような感じだし……」「ドンドン」「誰だよ？」

『一夏さん、音羽がどこに居るか知りませんか？』

げ、一夏にジョエスチャーで「知らない」と伝える。今ここで返事をすればセシリ亞がドアを蹴破る勢いで入つてくるのは確実だ、シャルルの正体がバレるのは何がなんでも避けたい。

「セシリ亞か？ 俺は知らないけど、食堂にでも行つたんじゃないかな？」

「そうですか、すみません。それでは

「お、おひ」

ふう、さてと。俺は窓から脱出でもしよう、その後に適当なところから行けば良いだろ。

「・・・・行つたか、じゃあ、シャルル頑張れよ。アデュー」

窓からダイブしじョットパックで俺は夜空をバックに飛び去つたのだった・・・・・。後でセシリ亞に見つかり自室で「はい、あ～ん」をする羽田になつたのは言つまでもない。

64・知る者、知られる者（後書き）

どうでも良い作品情報

ライセンスの金額は喋っていない

「そ、それは本当ですか？」

「学年別トーナメントで優勝したら音羽か一夏とけんか合戦のつてやつでしょ？」

「へへ、それは面白そうだね」

「ふふふ、これは俄然やる気が出てきましたね」

月曜の良く晴れた気持ちの良い朝、男子3人（一人女装だが）で教室へと入ろうとしたらなにか女子勢が騒がしく会話に花を咲かせていた。そういうえば女子ってなにかと噂話好きだよね。

「おひはよ～」

「おはよう

「よっす

それぞれの挨拶を終わらせ教室に入ったのだが、なぜか『きやあああ！』とか叫んであちこちに焦つて散つていった。いきなりそんなリアクション取られると俺の超合金ハートが傷つくんだが、ひとまず訳分からん。

「なんか名前が出てた気がしたがどうかしたのか？」

「い、いえ。なんでもありませんわ！」

まあ、別に『じうつ』とは無いけど。セシリ亞が妙によそよそしいが・・・多分聞きますうとしてもこれは無理だな。俺の場合はそれ以前にセシリ亞に嫌われたくないが優先されるが、多分そうなら俺は生きていけないと思う。

「まあ、座りつか

「そうだね」

「だな」

「（どうしてこうなった）」

一夏に思いを寄せる侍ガール、篠ノ之箇は校内に広まつた噂に頭を悩ませていた。先日、部屋を移動する際に「トーナメントで優勝したら付き合ってくれ」と約束を交わしたのだが、なぜか「優勝したら織斑一夏・如月音羽・シャルル＝デュノアの誰かと付き合える」というものに変わつて広まつていたのだ。

「（これは私と一夏だけの約束のはず、なぜ音羽とデュノアが巻き込まれているのだ！）」

原因としては一夏に伝えた際の余計なまでの大きな声だったのだが、恋する乙女にはそれに気づくほどの余裕があるはずもなかつた。それで聞かれた結果、尾ひれが付いての結果である。本人は「二人だけの秘密」にするべきだったのだが、こうなつてしまつた以上優勝するしか道はなかつた。

「（だが、今度こそ私は道を誤らずに戦えるだらうか・・・）」

過去、EISによつて一夏と引き離され、日本各地を保護といつ名田で駆け回られ、連絡を取ることもできず、気づけば親とも引き離

され一人になってしまった。その時の負の感情を叩きつけるようにして剣道をしていた自分の姿が思い返される。それはもう、醜いものであった、今では克服したと思っていたがやはり心配であった。なにせ、心に付着したそれは簡単に洗い流せるほど単純ではないのだから。

「（いや、あの頃の私ではないのだ。やれる）」

そこには、自身の信念に従つて進もうとする剣士が居るだけだった。

「あ
「あら?
「あ

二人揃つて相手は違うが恋する少女が放課後、目的のための鍛錬に来ていた。

「あら、鈴さん。私はこれからトーナメントに向けて訓練しますの」「そう、奇遇ね。私もよ

二人の間に火花がバリバリと散る、お互い目的は同じためにライバル視していた。

「ねえ、音羽は譲るから優勝させてくれない?」

「いえいえ、一夏さんはどうぞ。私は優勝して音羽を貰いますので」

どちらも負けず嫌いといつことが災いしてか、どちらとも無くメイントウエポンを展開する。一触即発の空気の中、お互にエラを全身に展開してアリーナに降下する。

「じゃあ、勝った方が優勝ってことで良いわよね？」

「ええ、異論はありませんわ」

「では

セシリ亞の言葉を遮るかのように突然、超高速の砲弾が目前に飛來した。セシリ亞が鈴を抱きかかえて後方に回避するが、それを追いかけるかのように2発目、3発目と続く。そこまで来ると、左右に分かれてセシリ亞はライフルを、鈴は衝撃砲をそれへと向ける。視線の先には、先日の漆黒の機体。『シュヴァルツェ・レーゲン』専属操縦者

「ラウラ・ボーデウイッヒ・・・」

「いきなりぶつ放すなんて、何考へてるのよー」

ガシンと大型の青龍刀「双天牙月」を連結させ、一門ある両肩の衝撃砲を準戦闘態勢にシフトさせた鈴が威嚇するように睨み付ける。

「鈴さん、その程度の挑発に乗つては思ひ壘ですわよ

「そ、そつね・・・ありがとセシリ亞」

キツとラウラを見据えてセシリ亞が言葉を続ける、右手は後ろに立つ鈴を抑えるかのように上げられていた。

「それで、一体何の用ですか？私たちはこれから大事な予定がある

のですが

「ふん、中国の「甲龍」にイギリスの「ブルー・ティアーズ」か。データで見たときのほうがまだ強そうであつたな」

あまりにも挑発的な発言に一人の類がつり上がる、武器を持つ手に力がこもるがどうにか息を吐き出すことで落ち着く。

「何よ、やるの？ わざわざドイツくんだけから来て結構な物言いね、常識を疑うわよ？」

セシリ亞が「鈴さん」と声をかけるが、既に本人の心は沸点を通り越し今すぐにでも飛びかかるうと双天牙月の切つ先をラウラに力を込めて向ける。既にセシリ亞の腕を押しのけて睨みつけてしまい、セシリ亞の制止を振り切ろうとしていた。

「ほう、一人で十分か？ まあ、訓練機に負ける程度の輩に私が倒せるとは思っていないがな」

「そんな児戯のような挑発に乗ると思つたら大間違いですわよ？」

「ふん、そちらはやる気のようだが貴様は傍観するだけか？ とんだ腰抜けだな」

「言いたければどうぞ」勝手に、模擬戦のお相手はしますけどもね」

それを言い終わるかどつかのところで、堪忍袋の尾が切れたのか、鈴が地面を蹴り飛ばしてラウラへと加速して突っ込んでいった。

「はつ！ 来い、数だけの国でも足搔いて見せろ！」

65 · 淑女と冷水（後書き）

どうでも良い作品情報

セシリアは原作より良い子＆冷静

66・傷つく翼、舞い降りる春（前書き）

作者は「ウラガ嫌いなわけではありません、あしからず

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、勿論だ。確かに今日使えるのは

『第三アリーナだ』

『わあつ！？』

なんだ、いきなり口を開いたらそんなに驚くなんてひどいぞ。まあ、いきなり横から見知っている声とは言え聞こえてきたらそりやあ驚くかもしれないが……そこまでか？まあ、篠はともかく俺は癖で足音と気配を消していたが。なぜか篠が「お前は忍の家の出身か？」つていうはずれた質問されたときは面食らったがな。

今時忍者って残ってるのか？

「まつたく、驚きすぎだぞ？」

「本当にな、少しばかり気に配れ一夏」

「お、おお。スマン」

「ごめんね、突然だったからびっくりしちゃつて」

「ああいや、責めてるわけではないぞ」

シャルルがこっちが驚くほどにペニンと頭を下げる、流石にこっちが悪かつたと非常に思つてしまい少し言葉をつぐんでしまう。篠も同じらしく、ごほんと咳をして気分を切り替える。

「ま、まあ。第三アリーナに行くとしよう。今日は空いているから時間があれば模擬戦もできるだろ？」

「やついえばセシリ亞と鈴ちゃんが走つてたし、丁度良いだろ？」

丁度良ければ相手を頼めるだろうしな、最近は接近しても切り裂かれることが多いがな。やはり候補生は格が違うってことだよね、決定戦は運が良かつたんだよきっと。ああ、でもどうせなら専用機でやりたかったなあ。学年別トーナメント。

「じゃあ、早く行こうぜー！」

セシリアは鈴を抑えることを早々に諦め、アリーナ後方からじつくりと一人の戦いを解析していた。相手が軍籍の人間であるから情報を集めるためである、別に模擬戦程度であるから怪我をすることは無いだろうという常識に当てはめた考え方からの行動であつた。それに、軽い挑発に易々と乗っていては偉大な前当主の母に申し訳がない。それに本人は隠しているつもりのようだが、去つてからも裏で支え続けてくれた音羽にも申し訳ない。

「それにしても・・・AHCの完成度は素晴らしいですわね」

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー、「慣性停止結界」とも呼ばれるそれはドイツが開発途上のIIS用第三世代兵器である。目標とする物体を放ったエネルギー波による拘束で動きを止めてしまうという、サポート系統の武装である。無論、鈴の放った衝撃砲は10にも及ぶがその全てが見えない壁によつて防がれていた。軍人であるからか、小型の腕部プラズマブレード一振りで重量のある青龍刀の猛攻を裁ききつていることから戦闘能力自体も高いレベルであることがわかる。

「つーの、当たりなさいよ！」

「そう言われて易々と当たる馬鹿ではないのでな」

既に戦闘を始めて20分、不可視の弾丸の雨は同じく見えない城壁に遮られて意味を成さず。ならばと青龍刀での連続の突き払いを繰り出すも全てが的確な角度、力でいなされる。そして、生まれた隙を狙つて実弾砲が火を噴く。ぎりぎりで避け続けているが、こう長時間の集中にさらされてしまえば流石の代表候補生も疲れが出てくる。今では回避もままならずギリギリ掠つてしまっていた、このままでシールドエネルギーが全滅するのも時間の問題である。

「どうした、もう疲れたのか？」

「うつさいわね、いい加減に、やられなさいよ……！」

そう叫ぶと同時に連結させた双天牙月をブーメランのように力を込めて投擲、同時にそれに対しても言えるのか衝撃砲をピンポイントで撃ち込み更に押し出す。大気を音立てて切り裂きながら進むそれはもはや命を今にでも刈り取ろうかといつほどに刃を輝かせていた。

「何つ！？」

「ついでに食らいなさいよ、こんちくしょーー！」

ボーデウイッヒが防ぎきれないと思つたのか両腕をクロスさせて防御体勢に移った途端、迫る双天牙月の隙間を通して衝撃砲の連射をばら撒くように撃ち込み続ける。周囲に着弾した流れ弾が地面で爆

せて土を掘り返し、視界を煙幕代わりに埋め刃くす。

「まあ、良い手だつたな。褒めてやる」

しかし、その土煙の中から双天牙用が投げ返され、同時に黒く細い何か。いや、5本ものワイヤーブレードが鈴の四肢、そして首にぎりと鈍い音を立てて強く巻き付く。そして・・・上空へと持ち上げられ、そのまま地面へと突き落とすかのように吊きつけられる。まるで、幼子が無邪気に小さなスコップで虫を叩き潰そうとするかのようだ。・・・意図に気づいたセシリ亞が向かうも時既に遅かつた。

「つがー！」

「鈴さん！」

その瞬間、ボーデウイッヒの首筋を青いレーザーが怒りを込めて掠めるように通り過ぎた。

「そこまですわ、ボーデウイッヒさん。ここからはわたくしがお相手しましょう」

「ほう、ならば来い。ここにはもう用はない」

要らなくなつた物をゴミ箱に投げ入れるように過剰なダメージについて気を失いIDSが強制解除された鈴をセシリ亞に投げ寄こす。容態を軽く確認したセシリ亞はアリーナの端に鈴を横たえ、キツと睨みつけるようにレーザーライフル「スターライトmk3」の銃口を向ける、その目はかつて子を、家を守るために戦つた母に重なる。既に、セシリ亞の頭の中には「容赦」という選択肢は存在していなかつた。

「覚悟なさい、ボーデウィッシュさん！わたくしを怒らせたこと、後悔させてさしあげますわーー！」

今この場所に、新たな戦いの火蓋が切つて落とされた。

66・傷つく翼、舞い降りる雲（後書き）

さうでも良こ作品情報

セカン党の顛末をさじめんなさい

67・^書、その先へ（前書き）

あんまり上手くセッサー無双書けませんでした

「なんか騒がしいな、遂に鈴ちゃんが青龍でも召還したんだろうか
いや、鈴なら白虎だろ。猫っぽいし」

ちなみに今現在、第三アリーナに近づくに連れて廊下を歩く生徒がなんか騒がしい。なんかアリーナ内で候補生同士が模擬戦をしているらしい、心当たりがありまくるんだが・・・主に衝撃砲とかお嬢様とか。また一夏のことで騒いでるんだろうか、まあ、あの二人なら仲良く喧嘩していることだろう。周囲への被害が半端無いけどもね。

「なんか、一組の代表が怪我だつてよ?」

「え、あの一組の転校生が行つたの?」

「大丈夫かなあ・・・」

あのさ、良いかな?

「音兄

「わかつてゐる、急げ」

一夏の手を掴み、地面を強く蹴る。ISの操縦方法にも通じる徒手格闘での移動方法であり、体格差を覆すことのできる移動系の技術である。通常時の高速移動では実際スタミナの減りを無視すれば最速の域になる、なぜなら子供が大人の懷に入り込み攻撃に移れるよう作り出されたものだから。

「悪い、先に行く
「わかつた」

「うん、すぐに僕らも行くよ」

一声かけるのも忘れない、俺がこれで移動を始めると普通に一般人が追いつけなくなる。いやまあ、これはセシリ亞を助けに入つたあの日もお世話になった。これが無かつたらおそらく今ここに俺もセシリ亞も生きていなかつたろう。・・・・・ひとまず、なんか走り際に見えた赤いスースイ姿でこっちは微笑んだ見覚えのありまくるブロンドの女性に手を振つて通り過ぎる。一夏が「何に手を振つたんだ?」て顔をしていたがスルーする。

『娘をお願いね』とか聞こえたので咳くように「任せひ」と返事をし、更に廊下を更に強く蹴り飛ばす。床へ落下する勢いをそのまま前進する力へと変えるため、景色が後ろへと流れしていく。一夏がうわう悲鳴を上げているが今はスマン、急がなければいけないような感じがする。

ダンッ!!

「くつ、久しぶりだからきついな

「首がががががががーー!」

ダンッ!!

「え、如月君?」

「織斑君もー?」

ダンッ!!

そして、1分後、普段ならば20分の距離をありえない速度で移動

し終えた俺は気絶しかけている一夏の頬を軽く叩き意識を覚醒させるとすぐにアリーナ内を見れる観客席へのゲートをくぐった。

アリーナ内を縦横無尽に青と黒の影が対照的に円を描きながら向かい合つて銃撃の応酬を繰り返していた、実弾砲が火を噴けば放たれた弾丸をレーザーが撃ち抜き、逆にレーザーが放たれればプラズマブレードで弾かれる。そんなイタチごっここの状況が延々と続いた。

「流石、軍属ですかね」

「ふん、貴様がここまでとは思わなかつたぞ！」

AICでビット型のブルー・ティアーズを止めるも、その意味も無くレーザーの制射が襲い掛かる。接近すればミサイル型とビットが牽制に織り交ぜながら的確に射撃でシールドエネルギーが削られる。それを見つめる生徒の目には、徐々に押されているボーデウイッヒの姿が映っていた。

「行きなさい、ブルー・ティアーズ！！」

「邪魔だ、消えうせろ金属板！」

激高したラウラがワイヤーブレードを武装の耐久限界ギリギリで射出し、目前に迫っていた2機を破断し残りの2機に2本のブレード部分を叩きつけ地面へと無理やり弾いた。そこにはもはや効率を考

えた行動などは無く、ただ目の前の物を破壊するという素人同然の動きだった。そんな隙を見逃すセシリアではなかつた、すぐさまスターライトMK3をセミオートバースト（3点バースト分のエネルギーを使う）にモードチェンジを済ませて精密狙撃用モードに機体を切り替える。任意の位置に滞空し、射撃系の操縦に集中できる形態だ。機体操縦ができなくなるのが玉に傷だが、その分射撃精度が格段に上昇するためロングレンジでの戦闘に適している。

「はああああああ！」

「あなたこそ、冷静に対処することをおすすめ致しますわ！」

直線的にプラスマブレードを開いたまま突っ込んで来るラウラ、セシリアはふうと息を吐くと再びスコープを覗き込み照準をラウラの頭に合わせる。標的が自身に向けて真っ直ぐ迫つてくるのだから狙うのも造作はない、それに今は狙撃重視の状態、外すわけがない。セシリアが今こそと引き金を引こうとした途端、なにかの影が一人の間に入り込んだ。

ガキンッ！

「そこまでにしておけ馬鹿者、自分を見失えと教えた記憶は無いぞボーデウイツヒ」

「・・・ハツ！・・・はい、申し訳ありません」

「そこまで勝負をしたいのならトーナメントで決着を付ける、オルコットも良いな？」

「はい、問題ありませんわ」

「了解しました・・・」

ISを待機状態のイヤーカフスに戻し、アリーナを出て保健室へと

向かう。プライベートチャネルで音羽から「鈴は保健室に連れてくぞ」と先ほど伝えたからだ。

「わい、ヒ。鈴さんは何無事ですかよね?」

「つたく、無茶はよしとけつての」「仕方ないでしょー?その、あの、うひゅう……」「?」

「あはは、一夏は鈍感だなあ」

保健室から鈴たちの元気な声が聞こえる、どうやら無事なようだった。ひとまづノックし声をかける。

「鈴さん?お身体の具合はどうですか?」

「あ、うん。身体は少し打撲だつてさ、『めんねセシリア』

「いえ、早く助けられなくて申し訳ありませんわ」

「いやいや、気にしなくて良いわよ。おかげでこれで済んだんだし」

音羽が言つことは、HSがダメージレベルがD寄りのこらしくトーナメントへの出場は事実上不可能。機体の稼動データを取るためにもあるため、候補生の身としてはとても危うい。本人は自業自得と苦笑しているが、そつまでさせたラウラが許せずにいた。それに気づいた音羽がぽんぽんと頭を撫でてくる。

「まあ、今はゆっくり休め。それが一番だ」

「うん、ありがとね音羽」

「運んだのは一夏だ、俺は・・・まあ、特に何もしてない」

「な、治療の手もが」

「まあ、ゆつくりしどけ。じゃあ、俺は行くか・・・なんだ

?」

なぜか、地面が揺れる。それも徐々に大きく、それにつれて多数の足音が響いてきていた。音羽が訝しげにしながらも保健室のドアノブに手をかけた途端。そのドアが吹き飛んだ。

「なにガツ！－ほふふわあ！－」

なにか人体から鳴つてはいけないような、べきぐしゃという音声と同時にドアに押されて反対側の窓の間の柱に叩きつけられる音羽。それと同時に視界を埋め尽くすほどの女子・女子・女子。目前に差し出されるなにかの書類を持った大量の腕。その気迫に氣圧されてしまったのか、一夏とシャルルは軽く後ずさりしていた。ベッドに座る鈴は目を見開いてぽかんと口を開けたままだった、ちなみに変わらず音羽は柱とドアのサンディイッチ状態である。

「織斑君！」

「デュノア君！」

「あれ？如月君は・・・まあ良いか」

『私と組んで！』

一夏の目の前に差し出された何かの申込書、一夏が軽く領きながら読み上げたところタッグ戦へトルールが変更された学園別トーナメント戦のタッグ申込書であった。困り顔のシャルルと一夏が視線を

交わし一夏が口を開く。まだ音羽は「

「あー、じめん。俺はシャルルと組むからさ」

「・・・まあ、他の女子よりは良いわね」

「男同士つてのも絵になるげふんげふん」

「じゃあ、じうなつたら残るは如月君よ。行くわよーーー！」

おー、と元気な、もとい騒がしい女子が再び地面を揺らしながら嵐が過ぎ去るかのように走って出て行く。途端、静寂に包まれる保健室、ついでに音羽は「

「じゃ、じゃあ俺たちは行くぞ。頑張れセシリ亞」

「んな、なあつ！？い、一夏さん！？」

言い返そうとするも既に一人は気づいた頃には部屋から出て行つており、ベッドに座った鈴からは温かい視線が向けられていた。

「ぐ、うお・・・・げほつ、げつほ・・・・ああ、つたく

「あの、音羽？」

「な、なんだ？」

「トーナメント、わたくしと組んでくださいましー！」

「・・・・あ、ああ良いぞ・・・・なんで飛び回つてるんだセシリアは？」

「音羽も大概ね」

「え？」

その日、大浴場で普段は見られないくらい浮ついた状態のセシリ亞が見受けられたとか。

67・~~未~~、その先へ（後書き）

どうでも良い作品情報

ブルー・ティアーズは原作とはもう別物

まあ、それだけの話

さて、ドアと仲良く壁に平行ダイブ（強制）させられてからセシリアにタッグの相手を申し込まれてから1週間。5年の時間があつたにも関わらず、あの頃のように以心伝心で動けるようになつた。え、そのころの話が聞きたいって？良いぞ、ミリアさん（幽霊）に許可取れたらな。

「で、今日に至ると」

「誰に言つてるの？」

む、どうやら久しぶりになにかしらの電波を受信してしまつていたようだ。まあとにかく言えることはセシリアとまた肩を並べて戦えると、それにしても相手は初戦誰になるんだろうな。一夏とシャルルがタッグらしいから油断できないな、それ以前に鈴ちゃんをあそこまでやりやがった駄兎をとつちめたいが。ちなみにジャックに報告したところ、「三ツ下」とだけ返事をして寝やがつたので御礼にスタングレネード5個の詰め合わせ（ピン抜き済み）を置いてきた。その後に汚い花火と悲鳴を背景に紅茶を飲んだのは記憶に新しい。ついでに言えば今俺ら男子三人組みがいるのは男子に宛がわれた更衣室である。

「それにしても……一体女子はなにで騒いでるんだろうな？」

「あ～、そうだね。なにか聞いても教えてくれなかつたし。優勝したらなにかが手に入るらしいけど

「へ～、それは気になるな」

できればセシリアと添い寝権だったら個人的に嬉しい……なんでお前らはそんなに微笑ましいね～みたいな感じの目で見てくる

んだ? なんか一夏が「セシリ亞、あと一步だぞー!」ってはしゃいでいるが、セシリ亞がどうかしたんだろうか。ハツ! まさか一夏はセシリ亞を狙っているのか!? お前には世界が許しても俺が許さん、むしろ俺お・・・・・どうやら色々疲れてるんだな俺は。

「ま、まあ今はトーナメントに集中しよう。うん」

「そうだな、音兄に勝てる自信が無いけど……」

「お前なあ、俺は一応普通のＩＳ動かして数ヶ月の高校生なんだが」

事実、候補生相手ではなんとか勝てているという状況だし。油断すれば一夏に普通に負けるし、生身ならば余裕のような気がするが結局ISでは変わってきてしまつ。今回は色々生身で覚えさせられた技を試していく予定だけども。

「あ、そろそろ組み合わせ結果が出るんじゃないかな?」
「お、そうか」

急にタッグ戦にルール変更されたため、今まで使つていたシステムが正常に動いてくれなく急遽運営係によるアナログ抽選会での試合組み合わせの決定になつた。それが一からの手作り作業をタッグ分、組まなかつた人の分と大量になつてしまつたために予定ギリギリにまで食い込んでしまつたのだ。今は第一試合の開始予定時刻まで20分、本当にギリギリだなオイ。まあ、一学年全員分を手作業でやつていればここまで遅くなるのも仕方は無いことであるのだがな。そりやあ約300人ほどなのだから・・・俺だつて無理だわ。

「所変わつて女子更衣室ですわ！」

「お前は何を言つてゐるんだ……」

「むう・・・・・なにもボーデウイッシュさんとタッグを組む」となつてしまつたからとは言えそこまであからさまに態度に出さなくてよいしきのでは無くて、まあ、私が同じ状況だとしたらどうならない自信はありませんが。ですが、それはそうとして5年ぶりに音羽と共に戦えるとは……嬉しいものです。一度と会えないと思つていましたが、今はEISに心から感謝ですわ！…………一番は鈴ちゃんの仇取りですが、音羽も静かにキレしていましたし問題無いでしょ？。

「さて、やひそろ組み合わせの発表ですわね」

「そうだな、どうなるつと。真剣に勝負だ！」

「望むところですわー。」

そして、遂にその瞬間がやつて來た。

「なんてことだ……」
「まさか、そんなことが」
「フン」

三者三様の驚きを示す6人、その視線の先には抽選結果が大きく映し出されていた。

第一試合「如月音羽&セシリ亞・オルコットVS篠ノ之箒&ラウラ・ボーデウイッヒ」

68・接戦の行方（後書き）

どうでも良い作品情報

本当は番外の予定だった

69 · 番外エフ その3「新生活」（前書き）

今回は中途半端なところで番外編です

ひとまず、紫さんに俺が選ばれた理由を聞く」とい。

「で、真意のほどは？」

すると、困ったような申し訳ないようなよく分からんがとにかく明るい方向ではない表情をする。ちなみに食うためとか言つたら全力で逃げさせてもう。確實にスキマで無理だろうけど、この年で妖怪の食料にはなりたくない、それに美味しいと思つぞ？血中に医療用ナノマシンが流れてるから、無機物飲んでも味は保障できん。

「実はね、少し、いや正直困つてることがあるのよ……」

「困り事？金銭的な物ならすぐに融資はできますよ」

「いや、お金では無いんだけどね。あなたの力が必要なの」

「はあ……それで困つた事とは？」

「あなたは、式つて知つてるかしら？」

「式？」

なんだつたか、確か陰陽師とかの使役する使い魔みたいなものだつたと思うが。有名なものには十一神将だつたか、だが今ではそれも廃れてしまつていて陰陽師も数えるほどしかいないと聞くがな。

「まあ、そこそこには」

「そう。それで私には藍式神とその式神の橙という式神がいるのだけれど……」

なぜかそこでその先を躊躇つ紫さん、どうしたんだろうが、まさか

そこまで言ひにくるとなのかな？これは真剣に聞かなければいけないな。

「…………その…………とあることがあつて……一人に……俗に言つ……家出をされちゃつたのよ」

「………………what？」

「それで……あなたにはその一人を探してきてほしいのよ……

……」

「…………つまりは家出入探しつてことでオッケー？」

「まあ…………そうなるわね」

「…………その仕事って俺である必要性が全くと言つて感じられないんだが、それこそ幻想郷の知り合いとかに頼めば良い話じゃないか？」

「それができないからあなたに頼んでるんじゃない」

「んな、どこに不可能な点があるんですか、俺には全然見当たらないんですけど」

「知り合いは誰も面倒くさがりでそんなことに構ってくれないのよ、……それにね」

そう言つて紫さんがギリギリまで顔を近づける、うう、免疫無い俺には心臓に悪いんですけど。凄いドキドキしゃうんですが（心臓的意味で）

「式は主に対して絶対服従なのよ。主のためなら例え火の中、水の中厭わない」

「まあ、そりやあ従者は確かにそうですが。（俺は無茶な命令は即刻無視してたが）」

「それに、私は一応妖怪の賢者と呼ばれてるのよ。その妖怪が自分の式に逃げられたなんて言つたら……」

「…………まあ、それはまずいな色々と」

「やつなのよ・・・・・はあ」

そつ言つと紫さんが頭を抱えて困つたよつにため息をつく・・・・・まあ、賢者と呼ばれているほどなのならばその大きな威厳が崩れてしまつよな。一度崩壊したら元に戻るまで多大な時間がかかる、やらかしたら2代、3代もかかりてしまうといつ事実があるしなあ。元従者としては・・・・・まあ、なんとかしてあげたいがなあ。

「だけども、その一人はどうして家出したんですか？訳もなく家出するなんてありえないでしょ」

「それには深い訳があつてね・・・・・」

「深い訳・・・・・それは一体？」

「えつと・・・・・それは・・・・・」

すぐにはつたりと言えば良いものの、言葉を濁す紫さん。そこ今まで深い訳なのか？それならば躊躇つてしまつのも頷ける、そういうえばセシリアは元気かなあ～、頑張つてるかなあ～。最近雅にも会えないのでしなあ、ドイツの秘密組織さんも忙しいし。俺の家は大丈夫だろうかなあ。

「うつりつて・・・基本家事は藍がやつてて・・・それで私はこの幻想郷の結界の管理をやつてるんだけど・・・・」

「けど？」

「ここ数年間・・・・・いえ、もつと前からその仕事を藍に任せっぱぱにしてて・・・・・」

「・・・・それで？」

「あと、お使いとか細かい仕事は橙に任せてて・・・・」

「じゃあ、紫さんは何をやつてたんですか？」

「私は・・・基本寝てるか遊んでるか宴会に行つてるかで・・・・・

「・・・・・・・（ダメだこいつ）」「（ひつ）」

「それで先日……神社の宴会から帰つてきたら手紙が置いてあって……。その手紙を読んだら『家出します、探さないでください』って……！」

「確かに日本の言葉に『自業自得』っていうのがあってだな」「はうっ！」

笑符「積紙の祝福」
ハリセンストライク

「そんな扱い受けたら当たり前だボケエ！」「なんで教えてもないのに使つてるのはよーー！」

breakするまでお待ちください

はあ、まつたく。なんか知らんが

「うう……だつて仕方ないじゃない。宴会には必ず出席するのが義務でしょう！？」

「初めて聞くな、それ。日本来てまだ2年と少しだがそんなの聞いたことないぞ」

「幻想郷ルールよ！」

「……いや、普通に嘘付くな。目が泳いでるぞ」「むう……」

「せめて家事くらいやりましょっ！」

「それはそうなんだけど……」

「家出の理由聞いたらどの俺である必要性が余計感じられないんだが、というか、自分で探してください」

「だつて、私が探して見つけたつて絶対帰つてきてくれないもの」

「……俺が仲介役をしようと？」

「平たく言えばやつなの・・・」

「マジか・・・」

「こんな不思議な世界に連れて来られてきた理由が家出入の搜索、橋渡し・・・・なんとも理不尽な気がしないでもないが、呼ばれた以上やるしかない。戻る方法なんて無いし。

「ところでの二人が居なくなつてから食事とかはどうしたんですか?」

「そこは・・・ほら、博麗神社のお菓子をスキマを使って・・・ね?」

「お菓子かよとか、人様のところから盗むなとか良いたいが・・・」

馬鹿か

「まあ、最近じやもうそれも無理になつてきたけど

「だつたら何が適当に作りましょうよ・・・」

「だから・・・その、ね?」

「・・・俺に料理もしろと?」

「だつて、結界の管理ならともかく一人で家事なんか無理だもの

むう・・・まあ、一人暮らし長い間続けるから家事は一通りはできるが・・・ミリアさんだつて全部一人でてきてたぞ?メイドと一緒に談笑しながら皿洗いしてたもの。でも・・・やらないわけにはいかないな、元の世界に帰る前に飢え死にとかは避けたい。

「分かりました、引き受けましょウ

「ホント!?

「やりなきや俺が終わるからな・・・」

「ありがと、じゃあじばりくの間ようしきね?」

「はい、よろしくお願ひします」

こうして、高校一年の夏。幻想郷という不思議な世界での生活が始

また、もう就職は決まってるようなものだし・・・・もう良いや。吹っ切れなきややつてられない・・・・ああ、セシリ亞分が足りない。

69 · 番外 I-F その3「新生活」(後書き)

どうでも良い作品情報

作者の東方知識は一次創作と某笑顔百科のみ

70・風と雲、刃と雪の伝義（繪畫也）

『武田芭翁作品中で一番長かった

「どうせなら一夏にやらせてあげたかったんだがな」「ふん、ならばこいでやられておけ」

「残念ながら、俺も後輩やられてキレてるんだな。悪いが、駄兎は狩らせてもらひ」

「ならば、『騎士』の動き、見せてみろ

「お、それを知つてるとほ嬉しいねえ」

お互にEVAを纏つたままで睨み合ひ、殺氣には嫌と言ひませぬ。されからこれくらいじゃ怖くもないな。いや、殺気に慣れちゃうつてのも悲しいような気がする・・・もし俺が普通の行き倒れだったとしても普通の子供ではないな。実際はどうでも良いけど、あ、試合終わったらボーディウイッヒにキャラシル6田のこと聞いてみるか。

『呪き潰すーー』

「・・・・」「やあああーー」

お互に相手に向かつての加速、音羽は近接用ブレード一本、ボーディウイッヒは両腕に装備されたプラズマブレードを起動して切りかかる。確かに、攻める方向性では目を見張るものがあるが、逆に言えば、守りに徹した攻撃で返されればどうか?それも、護衛

を生業にし、返しと往なしを主としての複雑難解な技法で。

「良い攻撃だな、流石軍人だよ。まあ、それだけだが」

プラスマ刃を滑らせるようにして振られた近接ブレードが、音羽の喉元を狙つた一閃を地面へと叩き落す。それに追撃するように0距離からのサブマシンガンによる正確すぎる銃撃、抵抗するように残つた左腕の刃を突き出すも、返しの刺突で押さえつけられた。

「・・・・・ハツ、静かになつたな？ほら、後ろががら空きだぞ」「何？ぐあつ！」

蒼穹のレーザーが背後からボーデウイッヒを貫く、その先にはストライトmk3を構えたセシリ亞が威風堂々とたたずんでいた。しかも、片手で横から襲い掛かる打鉄を纏つた箒をビットによる牽制で引き離して。

「この試合はいつから2対1になつたんだ！！」「このおー！」

瞬間、音羽の身体が空間に縫い付けられたようにその躍動的な動きを止める。かすかにボーデウイッヒの周囲の大気が揺らいでいるのが慣性停止結界「AICO」の発動した証拠であった。

「なるほど、こう止められるのな？凄いなボーデウイッヒ
「お褒めに預かり光榮だ、礼をしてやろう！」
「そりゃあ、嬉しい限りだな」

ボーデウイッヒの専用機、シュヴァルツェア・レーガンの右肩部に搭載された80口径リニアカノン「ブリッツ」が砲口から雷を幻想

的に噴出す。最大出力時に発生するオーバーステークの兆候である、しかも装填されているのは対IS用徹甲弾、訓練機、装甲が薄い疾風ならば一撃の下に葬り去ることができるほど。しかも最大出力ならば、汎用的な物理シールドすら貫く。正に絶対絶命の状況であった。普通ならば、それこそ絶望に沈むが……生憎、音羽は色々と普通ではなかつた、機体も然りと言つたところではあるが。

ズガン！！ ドカーン！！

「おお、こわいこわい」

「AICの拘束から逃げただと！？」

「ふふん（どやあ

まあ、簡単なこと。AICのエネルギー波での抑制より大幅に大きな力で無理やり動けば良い事なのだ、抑えられたら強い力で押し返す。疾風の規格外な出力のブースターがあるからこそその力技ではあるが、その結果、操縦者にもそれなりのダメージが行ってしまう。それこそ、ISで考えればシールドエネルギーの多大な消費として。

「じゃあ、こっちからも行くぞ」

何時の間にか格納されていた二振りの近接ブレードの代わりに、疾風専用武装「スティール・ハーツ」が力強くその右手に陽光を眩いほどに反射して輝いていた。

「ぐ、やはり候補生は一筋縄ではいかないか……。」

打鉄の基本装備である日本刀型の近接用ブレードを自身の剣道で培つた技术で手加減無く振るう。無論、剣道をしたことすらないセシリ亞には有効であるのだが、生憎、機体の相性が悪かつた。基本形

アンロックポート

態の打鉄は一枚の物理シールド非固定部位を装備した防御重視の近距离対応型。盾で防ぎ懷に入り込んでからが独壇場であるのだが、対するブルー・ティアーズは中距離射撃型。それも全方位からのビットによる視覚外からの射撃に、無慈悲なまでに正確なレーザーライフルによる射撃。どうにか物理シールドと持ち前の反射神経を生かして避け続けているが、それも時間の問題になってきていた。物理シールドは幾回もレーザーに焼かれてボロボロ、ビットを2機叩き落したとは言え数が減つただけ。

「なにおおーー！」

「つく、強引ですわね！」

先日、音羽がアリーナへの移動の際に使っていた移動法「跳歩」。

実際はステッピングアクセルというらしいが今はそこは重要な事項ではない。どれだけ接近できるかであるのだから。

「やああああーー！」

「ぐう、ああっー！」

機体の重量さえも斬撃へと転化し、一撃必殺の一太刀を浴びせる。袈裟懸けになつたその一瞬の隙を見逃さず続けて二の太刀、三の太刀へと刀を振るう。嵐のように間を置かずに放たれる煌めきはそれを受けているセシリ亞でさえも魅了した、鮮やかに円を描くような切つ先。しかし、そのまま黙っている者などいるはずがなかつた。

「素晴らしい剣技のお返しですわ！」

途端、セシリ亞が携えていたレーザーライフルが持ち手の形を変え、銃口がスライドしレーザーの奔流が流れ出す。これこそ、セシリ亞が不得手としている近接戦闘への対応策として開発させた光の槍。通称「スター・ライトmk3・ランサー・カスタム」である。

ところで、近接戦に限らず。武器には得意とする間合いといつものが存在する、そして、それは同時に一番攻撃力が高いという位置。刀剣ならば懐など、そしてその間合いを制したものが攻撃を加えることができる。剣は懐に入らねばならず、反して槍ならば離れた場所からの攻撃が可能。槍に限らず、弓や銃などもそうなる。間合いが長い武器は同時に相手からの攻撃から自動的に引き離されるのだ。

「くうっ！！」

「やああああ！」

洪水のように荒れ狂うような連續の突き・振り・払い、力があれば刀で抑えることも可能ではあるのだが、運悪く槍先は全てを焼き切るレーザー。一度横へ振られてしまえば意図も簡単にレーザーの弾丸が自身を貫く。だが、だからと言つて諦めるようなことをする女でも、理論的に打破する方法を考える女でもなかつた。

「ならば、ただ突き通す！！道理などいらん！！」

「なあ、笄さん！？」

レーザーに碎かれる物理シールドを知らぬと機体制御下から切り離し、そのままの加速のまま投げつける。そして、刺突の体勢のままでセシリ亞へと全力の加速で・・・上空から、それこそ捨て身で突っ込んでいった。その一閃はセシリ亞のシールドエネルギーを大きく削つたのだが、同時に打鉄が糸の切れた人形のようにその動き

を止める。見れば、腹部にレーザーの刃が突き立てられていたのだから。

「・・・・くう、無茶を致しますわね篠さん」

「こういうのが柄でな、いや、スッキリしたぞ。礼を言ひつ

「いえ、わたくしこそ」

「どうやら、残りはお前だけみたいだぞ？」

「最初から数になど入れていない！さつやと落ちひるーー！」

アリーナ内に響き渡つてゐるのではないかと思つ程の叫びと同時に、合計4本のワイヤーブレードがそれぞれ意思を持つかのようにバラバラに今すぐに食らいつこうかとも言つよつに音羽へと先端に禍々しく感じる鈍い光を讃えて縦横無尽に襲い掛かる。いくら、機体の速度が速くともここはアリーナといつ限定的な閉鎖空間。挟み込むように上下左右からの噛み付くような斬撃が逃げ場を失つた疾風へと切りかかつた。

「まだ、終わつてない！」

「小癪な奴めええええ！」

独楽のように刃を外へ向けて回転しながら、アリーナの外壁を蹴りつけてそのまま4基のブースターを限界まで噴かす。三次元軌道での跳躍加速であつた、それも音速を易々と超えた証拠に円錐状に衝撃波を出しながら。連續で吐き出されるリニアカノンからの砲弾を物とせず、周囲に迫るワイヤーブレードを回転しながら振るうス

ティール・ハーツで微塵に文字通り切り裂きながらボーデウイッヒの目前へと迫る。

「 goo do n.e gant !」

「・・・・・つぐ、ああつ！！」

エネルギー・カートリッジを5本全て消費したステイール・ハーツの衝撃波という武器を付加した音の壁を越えた一撃必殺の一閃、リニアカノンがその巨体を碎かれ、腕部プラズマブレードはその意味も無く児戯だと言わんばかりに衝撃波で四散し、機体を散々に切り裂かれて満身創痍の身体で反対方向のアリーナの特殊合金壁へと叩きつけられる。奇跡的にシールドエネルギーは雀の涙の5が残つていたが、既に機体各所からは強制解除の兆候である紫電が暴れるように迸つっていた。

「へつ、やまあみろつてんだ」

すぐ傍にはどうにかステイール・ハーツを杖代わりにして立つている音羽、機体各所には衝撃波の脅威をありありと示すように線状に細かい傷が大量に走つていた。攻撃時に自身もシールドエネルギーを大量に消費してしまったために、こちらもボロボロ。両者慢心相違であるが、音羽が有利であつた。ボーデウイッヒはいまだ立ち直れずに、動きを止めて壁に倒れ掛かつたまま。すぐに音羽が銃器を展開して一発でも入れることができれば勝利であつた。操縦者保護があるとはいえ、全身に痛みを感じるために行動に移せないでいるが・・・。

如月の最後の一撃を食らった途端、私の心を悔しさが覆い尽くしていた。鉄の子宫から生まれ兵器としてそだてられ、ISの登場とともにすぐさま今度はIS用の操縦者としての毎日。それまで部隊内トップだった私は、ISの適正を上昇させるためとのことでの左目への補佐用ナノマシン移植を行われた。その際に、絶対に失敗しないと言われたそれが私だけ常時稼動状態、制御不能。それにより、実績は転落するかのように最下位へ。出来損ないの烙印を押された私はある日、世界最強「ブリュンヒルデ」に出会った。

「安心しろ、私の言つどおりにしていれば一ヶ月でまた元に戻れる」

その言葉通り、教官に従い日々を過ごして行つた結果、前以上に力が実感できるほどに身についていた。それこそ、部隊内で名実共にトップへと。教官は私を闇の中から引きずり出し、光の中へと出してくれた。教官がいたから今の私がいる、だからこそ、あの弟とやらが気に入らなかつた。教官の榮誉ある一連覇を無に返してしまつたあの男が。そして今、あいつに一矢報いぬまま兄と言われている男に倒されようとしている。

『力が欲しいか？全てを破壊できるほどの力が』

ああ、欲しい。この男も、あの弟とやらも倒せるだけの、力が！！

『ならば、与えよう。その力を振るえ！』

寄越せ、力さえあれば。力さえ！！

M i n d C o n d i t i o n · · · U p l i f t .
C e r t i f i c a s i o n · · · C l e a r .

『V a l l k y r i e T r a c e S y s t e m』 · · · · ·
b o o t .』

「これで、俺らの勝ち」「うあああああああーーーーーーーんだよ、奥の手か？」

やつと痛みも和らいでサブマシンガン「ネフュルテム」をどうにか展開し、両手で構えて照準を合わせた。引き金を今この瞬間引こうとした途端、ボーデウイッヒが奇声を上げて機体から紫電をばら撒くように放つ。ギリギリのタイミングで空へと回避したは良いが視線の先ではありえない光景が繰り広げられていた。

ボーデウイッヒの専用機「シュヴァルツェア・レーゲン」がその漆黒の装甲をどろどろに溶かして装儒者であるボーデウイッヒをその中へ飲み込む。まるで高温にさらされた蠍人形のように形を変えるそれはもはや面影を失っていた。流動的なそれは徐々に人の形を取り、一つの固体へと姿を変えた。その仮定はISでのフィットイングやファーストシフトとは違い、形そのものを作り変えていいるようなものだった。確実に、異常事態だった。

「これは・・・暮桜！？」

体躯はボーデウイッヒを拡大したかのような形、その右手には千冬

さんが現役時代に使つていった雪片、こちらを見下ろす顔には不気味な赤いラインアイセンサーがあつた。そして、異様なまでに巨大。歩き出したかと思ったら既にその場には存在していなく、軽々とその刀を振り、俺の身体をエレ^レと吹き飛ばしていた。その衝撃で眼鏡が外れてしまう、それに応じてか普段は停止状態の「死神の瞳」^{リバーズアイ}が強制的に起動する。どういうことだ！？

「っく、くそ、どうなつてやがる！」

『緊急事態発生、試合参加生徒は即座に退避してください！』

「もう簡単に言われてもなあ、困るんだよ！」

唯一新品同様の最後の近接ブレードを開幕し、構える。セシリ亞もスタートライトを構えて頷いている。

さあ、第一ラウンドを行こうか。

70・風と雲、刃と墨の合奏（後書き）

どうでも良〜い作品情報

次回に持ち越しです、すみません

71・△なんとかシステム

「ああもうーのうわあつ、へぶつ！」

さつきから灰色の巨人*i-hobo*デウイッヒの剣の猛攻に防戦一方である、セシリ亞の援護射撃のレーザーを剣で切り裂いて拡散とかしやがつたときには凄いビビッた。今も、重い一撃をブレードで受けて転んでしまった、もう疾風のシールドエネルギーはゼロ、機体稼動のエネルギーをブースターからのバイパス接続で動かしている状況。そのために空は飛べない、教師の増援はまだか？ 篠は先ほど俺の顔を見て驚いた表情を見せるも急いで管制室に報告に行つた。あ、これは説明会の開催決定ですね、わかります。

「つねおおおおー！」

「あ？ 一夏！？」

「一夏さん？」

見れば威勢の良い声を上げながら、ピットから白式を展開して飛び出してきた一夏の姿であった。どこか、あの灰色に対しての強い怒りが感じられるんだが・・・武器が雪片に酷似しているとからへんのことだろうか？ まあ、自分や家族関係のことに関してのことならば俺が介入するべきことではないか・・・弾いた後に跳ね返されているのが無ければの話だが。

「いいいちかあああ、無事かああああ？」

「お、おづ。・・・どうしたのその顔？ 新しい変装か？」

「まあ、それは後で。アレ、やるんだろ？」

向こうで「王立ちのまま」ちらを睨みつける（表情が窺えない）でわからぬが、殺氣っぽいものは感じる）それを指差す、まったくもって趣味の悪いシステムだな。なんか噂に聞く？・・・いや、Bか？ああ、どれでも良いや。ちなみにビタミンCって単体だと凄い酸っぱいらしいぞ。そんなことを考えていると灰色のそれがずっこけたように見えたが気のせいだろう。

「決まりましたわね？ でしたらわたくしは後方から援護しますので、お一人で止めてくださいな」

「了解。一夏、お前が決めるよ？ お前のしたい」と、なんだろ？

「ああ、ありがとう」

セシリ亞はブルー・ティアーズを精密狙撃モードに変形させ、脚部関節と姿勢制御が自動に切り替わり、セシリ亞のヘッドセットが右耳へと光学照準機を開く。

同時に白式が握る雪片式型が刃先をスライドさせてエネルギーを消滅させる最強の光刃を伸ばす、俺もスティール・ハーツの薬室に5本の予備カートリッジをスピードローダーで装填する。奇跡的に1セット残っていたことに感謝だ。あれ、でもさつき残弾0って表示されてたような・・・まあ、いいや。

「じゃあ、やあつとやるか

「ええ！」

「ああ！」

「な、あれは・・・!?

「く、VTシステムか・・・よりによつて」

国際条約で禁止され、今では開発・研究をしている機関はどこにも無いはずのIS用内臓型兵器。IS世界大会である「モンド・グロッソ」での部門優勝者であるヴァルキリーの戦い方全てを鏡写しにトレス、状況に応じて対応した攻撃を自動で行うというもの。起動時には搭載しているISの装甲をトレス先のISに擬似的な作り変えを強制的に行い、可能な限り近づける。その際に操縦者はISを起動するためのキーとして扱われるため、VTシステム起動時には装備者の安全など考慮されない動きをする。ISが動くために生きてさえいればいいのだから。

「試合中止、アリーナから退避しろ! 山田先生、教師部隊の準備を!

「は、はい! え、織斑君! ?」

見ればアリーナへと入るピットの一つから一夏が飛び出していったのだ、それも白式を展開して。確かに、あのVTシステムはかつての専用機「暮桜」に酷似している「雪片」まで真似ている。確かにコピーとはいえ、あのころの私の「コピー」だ、生半可な技量では簡単にあしらわれるのは確実だ。

「一夏・・・」

ただ、弟の無事を祈りながら私は作業へと戻った。頼むぞ、如月・オルコット。

「なんとかと幾数回も切り結び、大振りになつたところにセシリアの関節を狙つた正確な射撃で翻弄する。どうやら、やはり機械らしく変則的な射撃に対応しきれず、数発も受けていた。加速したステール・ハーツの刃で受けている。そして、最後の一発で思い切り切り上げる、弾かれた雪片が空を仰ぎ、胸部ががら空きになる。そこへ疾風の残存エネルギーを込めた蹴りをお見舞いして後退させる。

「一夏ああーー！」

「任せろおーー！」

サークルのように地面に垂直にジャンプし、その降下時に雪片を握る右腕を切断。その勢いを殺さないまま、最大の零落白夜の刃が灰色の偽者を一太刀に切り伏せる。ばくりと割れてその中から助けを請うような弱弱しい目をしたボーデウィッヒを一夏が抱きかかえている。

「・・・殴るのは我慢してやるよ」

まあ、ここにいるのは誰も非情に追い討ちをかける人間はない。あ、俺だけは時と場合によるがな、害成す存在が相手ならば手加減しない。だから財政界では裏で悪魔って言われるんだが・・・お前らだつて今まで散々やつてただろうがつて話になるんだがね？別に、そう待遇は悪くないところに左遷したりグループに取り込みしてるだけだし。現場の意見を反映してるだけだしなあ、って気づけばじじじよ？

なんだ、ここ? 無駄に眩しいのはわかるんだが……。あ、向こうに一夏とボーテウイツヒがいるな。

『強さつ一つのは心の在処。まあ、自分がどうしたいかつていう信念だと、俺は思う』

そう、なのか?

『そりゃあ、そうだる。自分がどうしたいかも決めていないんじゃ、強さ以前に歩き方も知らないだろ』

歩き・・・方・・・

『どいへ向かうか、どいへ向かうか。そ』

『つまり、やりたいことはやったもん勝ち。つまんねえ遠慮なんかしないほつが儲けものだぜ』

『やりたいようにやらなきゃ、人生じゃねえよ

では、お前は、なぜ強くあるつとする?

『強くなりたいから、それに強くなつたらやりたいことがあるんだ』
やりたいこと?

『ああ、誰かを守つてみたい。俺の全てを使って、ただ誰かのために戦つてみたい』

あの人のようだな・・・

『だから、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデウイッヒ』

あ、あいつ、またフラグを建てやが（〃）

気づけば一夏は手を振って退場、何時の間にかスッキリした顔のボーデウイッヒと向かい合っていた。

「で、どうよ。色々人の意見知つて」

ああ、どうやら私は嫉妬していたのだらうな。

「そりゃあ、また。千冬さんも言つねえ」

まったくだ、教官も一人の姉だったのだと理解していれば・・・

「今、しつかり分かつたんなら。それで良いんじゃないかな?人間誰だって間違いはあるぞ!」

そうなのか?

「おー、あの千冬さんでさえ緊張すればコーヒーに塩を入れるしな。まだ若いんだし、間違いがあつてもいい良いのさ。一個上の俺が言え

「ひとじやないがな」

「う、うあ・・・・・」

気がつけば見知らぬ天井の部屋、そのベッドに横たえられていた。近くの窓からはオレンジ色の陽光が流れ込み、淡い朱色に床を染めていた。どうやら、長い時間眠っていたようだつた。

「目が覚めたか」

「は、はい」

ベッドの傍にある椅子に座つていたのは、敬愛してやまない教官。その声を間違つことなどない。

「全身に無理な負荷がかかつたことによる筋肉疲労と打撲がある、しばらくは無理しないでおけ」

「了解しました」

「おこつす、ラウたん元氣かい?」

突然ドアをバシンと音が響くほどに開けて部隊内騒がしいGP一位のジャクリーヌが入り込んできた、相変わらず騒がしい。正直このテンションは苦手である・・・が、どことなく嫌いではない。

「ウェルキン・・・丁度良い、アレの件は説明任せる。まだ仕事が残っているのでな」

「あいあい s ヘブンツ ! !」

「教師には敬意を持つて接しろ馬鹿者」

幾度も聞いた出席簿の振り下ろされる音が鳴り響く、思わずそれを見て笑ってしまった。

「ああ、ボーデヴィッシュ。言つておくれ」とがある

「は、はい！」

「お前は私にはなれないぞ、じつ見えて心労が絶えないものでな」

その後、終始騒がしいジャクリーヌの説明によるとレーゲンに V-T システムが秘密裏に搭載されていたらしい。それも、私の心が引き金となって起動したと。今になつて後悔しても、もう遅い。事は重大で近々にドイツ軍に IJA 委員会経由で調査が行われるらしい。

「そうか、わかった」

「おら、素直だねえラウたん？」

「ああ、『音兄』とやらに教えられたからな。次は無いようにするぞ」

そう、一度と今回の過ちは犯さない。次へ生かせと、教えられたからな。

71・▽なんとかシステム（後書き）

どうでも良くない作品情報

一夏のフラグ立てが無理やりになってしましました、すみません

72・事件の後は（前書き）

なぜか、この作品お風呂シーンが無いんですね

「……まあ、つまり俺自身良くわからないと」

「音兄が調べてもわからないんじゃないじゃどうしようもないか、でも、身体に害は無いんだろう?」

「おひ、全部調べたがそういうのは無かつた」

現在、右田のアレを見ちゃった一夏に説明にならない説明中（結局これってどこのだよ？）知つていてる限りの情報を確認の意味も兼ねてだが、5年前からほぼ進歩無し。名前が「死神の瞳」っていうのとドイツの越界の瞳に比較的に機能が似ているといふくらい。製造IDも無かつたから事実上不明、正直はつきりしてほしいといふであるのも事実だ。

「なるべく不確定情報を人に言いたくないんでな、スマン」

「良いよ、何も無いように黙つてたんなら責めやしない」

「まあ、何事も無くて安心ですわ」

まあ、セシリ亞の言つとおりか。平和に過ぐせるのならば身体のことなんて細かいこと気にしなくても良いものな、おや、山田先生が走つて来て・・・・転びましたね。慌てて走つて転ぶ程度の能力でもあるんだろうか？なにその役に立たない能力。

「あ、丁度良かったです。今日は男子の畠さんに朗報があるんです

！」

む、朗報か？はて、なんだろうか・・・まだシャルルが（女）つてことはバレてないからそれは違うとして、部屋割りは今で問題ないし、一体なんだ？

「今日から毎週一回はお風呂に入れようになりましたー！」

—
•
•
•
•
•
•
•

「あれ、音兄？」

• • • • • • •

「いいいしゃつはああああああああああーー風呂だつてえ、よしじやあ早速ーお先に一番風呂貰つむー夏ー」

あまりの嬉しさに色々忘れている気がしてならないが、細かいことなど気にせず俺は地面を蹴つて風呂用具を取りに自室へと向かつた。まあ、凄い重要なことをすっかり忘れてしまっているような気が壮大にするが・・・まあ、大丈夫だろう。一夏が後ろでなんか焦つていたがどうしたんだろうな?

「お、音兄・・・・行つちやつたし・・・・」

「やはり風呂好きは変わつてないのですね・・・・・」

どうやら、音兄はイギリス在住時から風呂好きらしかった・・・。そんなセシリアがなぜか「今がチャンスですわ!」とか言っていたのは気にするなどい本能が言っていたのでそうしよう。まあ、何をするかはわからないが頑張れセシリア。

カポーン

IS学園一学年用大浴場、その第一を一人で豪勢に貸切状態で総ヒノキの浴槽に浸かっていた。一度に100人が余裕で入浴できるというほどの広さであり、声が良く響く。しかもこれが一つもあるのだから驚きだよなあ、あ～癒される～

「～」

IS学園にほぼ強制的に入学されて早くも2ヶ月、その間ずっと毎日シャワーだけの生活だったのだからテンションが上がって歌も歌っちゃうというものだろう。銭湯で近所のおっちゃんとわいわい今でもやつてるがな、は～、疲れがとれる。

「あ、そういうえばシャルルはどうしたろ？・・・・・・第一に力スタム？」の反応、間違いないシャルルだ（キリッ）

まあ、別に一夏ならいかがわしいことなんてしないだろう。あのへタレなら、誘いどころか据え膳すら食わないだろう。まあ、俺もないが。今はこの貸し切り状態を楽しもう。風呂は命の洗濯とかのレベルじゃないよな、うん。

カラカラカラ

あ～、そろそろ銭湯でもだけこの戸が開けられるときの特徴的な

音。これもまた一つの癒しである、しかも浴場が広いから良く響く。ぴたぴた綺麗な足音がするが、誰だろ？ 一夏は……違うな、シャルルも……うん、第一に反応あるから違うな。……えーと、HS反応がするのはわかるんだが、専用機持ちつてことはわかった。

「湯加減はどうですか？」

「…………ガフツ！－！」

濃い湯煙の中から突然現れたのは、髪をほどいてその身にタオルを軽く巻きつけただけのセシリ亞だつた。制服を着ているだけでも美しかつたそのボディラインは薄いタオルのおかげで際立ち、どこかドキッとする。そんなものがいきなり視界に入ってきたものだから、思わずビクンのメイド長みたいに少し鼻から忠誠心を出してしまつた。

「な、なんで？ 今日は男子だけのはずだが」

「いえ、お背中流してさしあげようかと思いまして」

「マジか、それは是非とも頼む！」

まさか、念願の夢がここに叶うとは……初めて神とやらに感謝したよ。シャワー台に移動すると、早速セシリ亞がボディーソープを適量付けたタオル……にしてはどこか柔らかいような気がするが。まあ、そういうタオルもあるんだろう、いつだかスーパーで「ふわふわバスタオル！」とかいうのがあったことだし。はあ、幸せだ。

「はあ、はあ。どうです？」

「うん、気持ちいい、ありがとうなセシリ亞」

「いえいえ」

その後、浴槽に並んで浸かる。セシリアが寄りかかってきたので優しく受け止める。

「それにしても、いつやつてゆつくりできるのも久しぶりかもなあ」「そうですね、音羽はいつも動き回つていましたもの」

執事兼護衛としてオルコット家に仕えていたことは、毎日のようにセシリアを狙う襲撃者を本邸で一回・出かけ先で三回・やりかけを未遂で終わらせるのに5回と慣れてはいたが傍目から見れば忙しい日々を送っていた。それこそ、セシリアと二人で話をしたりしてまつたりできるのも1週間に一回あるかどうか、神経張り詰めての毎日、だつたから一日の仕事が終わればすぐ就寝。我ながら良くやつてたなあ……。

「まあ、またかっこで再会できるとは夢にも思つてなかつたからなあ」

「それは私だつて同じですわ、喉と呑えないと思つていたのですから。……今はこいつしていても良いですか?」

俯いてはいるが、涙を流しているのを俺は見逃さなかつた。ああ、俺が思つていた以上に寂しかつたんだろうな、俺だつて寂しかつた。……つて、俺まで泣いてやがる……こんなに、安心して。やつぱ、セシリアの存在は大きかつたんだな、俺にとつて。

「ああ

セシリ亞が体を俺の胸に預けてきたのを強く、強く抱き締めた。二度と、どこへもいかないと離れないでここに居ると言い聞かせるよう。恩人の娘だからという理由だけじゃない、俺が一番守つてやりたい大切な人として。

今は、この小さな幸せをしつかりと享受しよう。

72・事件の後は（後書き）

どうでも良い作品情報

第一浴場で例の二人は原作通り

73　・波乱の終幕・・・か？（前書き）

後半が 終り てしましました

73・波乱の終幕・・・か？

まあ、あの後ゆつくりしたよ。今まででおそらく一番、ジャックがすれ違いざまにニヤニヤしていたんだが・・・まさか、混浴状態だつたこと見られたのか？俺の裸体なぞ、見られようがどうでも良いが例えジャックとはいえセシリ亞の見たのならば生かしておけん。見れるのはお互いに心に決めた者だけ・・・あれ、それだと俺もだな？

あれから一晩明けて、何時もどおりの朝がやつてきた。普通にセシリ亞と並んで登校、一年一組の教室へと入る。なぜか自然に腕を絡ませてきたが、そう気にも留めず歩いていたのだが・・・それを見たらしい周囲の女子がキヤーキヤー騒がしかつた。普通女性をエスコートするのが男の役目だったと記憶しているが、なにか間違つていたんだろうか？

「おはよう一夏。あれ、シャルルはまだ来てないのか？」

「おお、おはよう兄兄、セシリ亞。なんか先に行つてだつてさ」

「はい、おはようジャロコモズ」

そういうえば、なんかセシリ亞が昨日。正確には風呂上りからテンションが高い、変なものでも食べたんだろうか、そういうのを食べはないだろうが・・・心配だ。あれ、ボーデウイッヒもない。まあ、全身に筋肉疲労だったか、しかもあれだけの攻撃食らつて普

通にするのが難しいか。さて、そろそろHSR始まるし席に着くとするかな。

「ふう、窓側ってのは落ち着くな

なにせ、広大な敷地を持つHSR学園の自然満載な景色を一望できるんだものな。どことの高層ビルの上階にある高級レストラン（2流）の夜景より綺麗だぞ、田が沈んでから一杯杯を傾けたいものだが生憎俺は未成年。あれ、でもHSR学園つて治外法権だからもしかしてオッケーじゃね？よし、そのうちにでも千冬さんや山田先生でも声かけてみるか。

「ふむ、そうなるとワインと日本酒の調達が必要だな。よし、白と赤一本ずつにチューハイ一ケースでもも、つー！」

瞬間、頭にマグナム弾でも撃ち込まれたかのような衝撃が襲った。視界が回復したころには田を描いて出席簿が世界最強でブランの鬼の厳しさを持つ我らがクラスの担任、千冬さんの手元にパスッと音を立てて収まっていた。絶対に出席簿の正しい使い方じゃないと思うんだ、頭に当たったときに音が鳴らなかつたし。どこまで違う使い方を極めるんだろう・・・？

「貴様が教師を無視するからだ、馬鹿者」

「はい、すみませんでした」

ナノマシン配合整髪剤で整えたサイドテールを揺らしながら本気で謝罪する、ちなみにこの特殊整髪剤を使えば約十日間手入れをしなくても良い。忙しい朝にも化粧を欠かさない世の女性の髪の手入れの味方だ、まあ、忙しいからっていう理由で自分のために作ったのを化粧品会社が商品化したいってやつたやつだがな。近所のスーパー

ーで500mlのボトルで1200円だ、キャッシュ・オンペイは「働く女性の味方、誕生！」だったつけか。まあ、今はどりでもいい。どこまで産業進出するんだとかいう声が聞こえるが気にしない。

「さて、今日は転入生を紹介します。いや、もう皆会っているというか、紹介済みと言いますか・・・」

いや、紹介済んでるんなら転入生とかではないと思うんだが。日本語おかしくないか?というか、会ってるって、それだとしたらこれは一体何よ。クラスの大半が状況を理解していないらしく、あちこちで「どういうこと?」とか「どういう状況!?」とか聞こえる。俺だって知りたいがな、まあ、その転入生が出てくれば全部解決だろつ。

「それでは、どうぞ~」

凄い山田先生が疲れきってるんだが、ようようという擬音語がピッタリなくらいに。良い温泉でも後で紹介してみるかな、ひとつその話題の転入生が入ってきたな・・・。

「改めてよろしくお願ひします、シャルル・デュノア改め、シャルロット・デュノアです!」

あ、あ~、性別本来ので再転入つてことね。思つたより早かつたな、まあ、別に何時でも俺にはそう影響は無いから良いけど・・・クラスの女子が騒ぎ出したな、昨日の男子の浴場利用に話が移り始めて視線が一夏と俺に刺すように集中する。痛い、痛い、睨みつけるような視線がズキズキ痛い。遂に視線も物理干渉ができるようになつたのか、全然嬉しくないぞ。

ドカーンツー！

すると、突然教室前方の扉が爆発、そこからE.S「甲龍」を展開した鈴ちゃん（怒りモード）が侵入してきた。扉が「解せぬ」って言つて吹き飛んだ気がしたが、修理はどうするんだろうか。というか、学校の施設を壊すなよ。

「いいいちかああああああああーー！」

「な、わ、やめ

衝撃砲が上下にスライドし、空間が歪む。やべ、不可視の弾丸がみんな2、3歩の距離で撃たれたら一夏が赤いシミになつてしまつ。後の掃除が大変だ、即刻止めなければーー！」

「そつち！？」

「鈴ちゃん、それはダメだーー！」

しかし、聞く耳もたず。一夏へと弾が

届かなかつた。

「間に合つたな」

「あ、ら、ラウラか。助かつた」

「礼には及ばん」

「いや、ありがむぐうーーー？」

残っていたスペアパーツで組みなおしたレーゲンを展開し、ラウラがA.I.Cで一夏を衝撃砲から守つた。あの状況からの即座の展開と目標捕捉、流石だな。なんで一夏の胸倉掴んで見てるこっちが恥かしくなるようなディープなキスをしているのかは知らんが・・・。

一夏はパ一ツクで動きが止まつてゐし、その後ろでは腹を空かせた金魚のよつと口をパクパクしている鈴ちやんがいた。

「お前を私の嫁にする、異論は認めん！！」

「・・・ボーテウイツヒ、そこは婿じやないか？」

「ツツ」「所はそこでは無いと思ひますが・・・・・」

あれ、一夏を抱きかかえたままボーテウイツヒが俺の方へ歩いて来た。ひとまずエスは待機状態にしようか。脚部パ一ツが接触した机がビビ入つてるから。

「音羽お兄ちゃん呼ばせてください」

「はー？」

「いえ、あれこれ調べた結果。お兄ちゃんであると判明いたしました！」

「・・・・・・あ、そつ。そつなら良いんじやないか？」

クラス中の視線が突き刺さる、ズキズキビビンガガリガリになつて。え、といつか、お兄ちゃんつて、調べたらつてどうこいつこと！？

「・・・・お前ら全員吹き飛べやあ！――」

「ふふふふふ（ギロリ）」

「くへ、キスしちゃうんだ？」

「どうこいつ意味か、教えてくださいますね？」

ひとまず、考える暇もなく少女4人にボコボコにされたとだけ言っておひづれ、あとお兄ちゃんの意味つて何？教えて、妹（仮）よ！――

73・波乱の終幕・・・か? (後書き)

どうでも良いく作品情報

お兄ちゃん(仮)の説明は次回に

74・シリーズはあたり消化（前書き）

あとがきにしっかりとした要約があるので、ほぼ飛ばしてもおk
説明回です、そういうのがダルイ方は普通にスクロールしてあとが
きで

74・シリアスはあつたり消化

「…………で、調べたらお兄ちやんってどうこういふと？」

「はい、これを……」

現在、俺の部屋でベッドに腰掛けてラウラ・セシリ亞・俺が座っていた。丁度、ラウラが「お兄ちゃん」発言をするにいたつた理由が記されているらしい書類を手渡してきた。あ？ これって遺伝子強化体の開発計画書と系譜……へ。

「私は、遺伝子強化体ですが、その計画の前身がこれです」

そう言つてラウラが指差したのは『抹消済み』の印が押された一つの紙の束……『戦闘特化^{エクスペシヤンデッド}遺伝子強化披検体計画』という物、抹消済みとかつてことはこれ持ち出して良いものだったのか？ そして、ラウラが淡々と説明を始めた。

兵器開発、それは戦乱が起こるときに必ずと言つていいいほど一番発展する分野である。それ以外には軍備増強による外交・国防を有利化するため、人類の歴史にそれが載らないことはなかつた。

そして、それはここドイツに置いても例外ではない。しかし、兵器開発は世界中で停滞期を迎えていた、銃器は基本構造はほぼ変わら

ず、新たなシステム・機構も開発されず。戦闘機は高速化にも限界があり、艦船は基本部分は変化無し。索敵装備も技術の限界、兵器と名の着く物は発展を止めていた。

そんな時、ある科学者が言つた一言がそこへ希望の活路を見出してしまつた。

「使う人間を高性能化すればいい」と。

そこから人体の一部機械化、感覚・運動神経の光ファイバー化による身体能力の上昇など。およそ、人道的ではない悲惨な研究が始まりた。ある者は脳内にコンピュータを埋め込まれて異常な計算能力を、またある者は全身の筋繊維を人工の物に置き換えられて異常なまでの筋力を、さらには当時実用化されたばかりのナノマシンを使って身体への負荷を考えずに入外の能力をもたらされた者。

そんな、人の命を弄ぶような実験・開発・研究が幾年も一度も日の目を見ないまま続けられた。失敗作は殺処分、成功体は研究用のモルモット。それも、死刑が決まった囚人だけに留まらず、浮浪者から、捨て子、育児放棄され施設へ預けられた子供まで。必ずと言って良いほど、実験に使われた者は誰一人として人の形を残していなかつた。

しかし、それも長く続かない。実験材料の人間を調達することが難しくなつてしまつたのだ、そしてそこで新たに提唱されたのが「人間を造る」方法。後天的にやらず、最初から求めるスペックを持つ人間の形をした物を作れば良いと。

そうして持ち上がつたのが戦闘特化遺伝子強化披検体計画、要望さ

エクステンション

れるスペック通りに世界中からサンプリングしたDNAを組み合わせて培養液内で人の形に造りあげる。視覚を強化したければ、視力が良い人間のDNA配列の部分を組み込む。反応速度が欲しければ、神経のパルス伝達速度が早い配列に組み換える。

「欲しい機能を選んでコーディネートする」

それが開発計画の目標であった、しかし、そこで一枚の大きな壁にぶつかる。いくらDNAの配列がしっかりと完成しても、その通りに細胞が定着、成長しない。設計図が仕上がつてもその通りに製品が組みあがらないのだ、人として出来上がりつても能力設定が反映されない、能力が反映されても奇形で生まれて使い物にならない。スペックが希望通りに定着しても、培養液から出した途端に大気圧で細胞の結合が崩れて即死など日常茶飯事であった。

「そこで、再び一人の開発者が禁忌に手を出したんです」

「禁忌？」

「はい、最初から基本的な細胞が定着している胎児を素体に使つたんです」

ほぼこれから人になつていく胎児、それも中絶されて排出された物を大金を積み口封じして手に入れた。成長途中であるそれの遺伝子

配列をこれまでのデータから最適な設定にして、人工子宮で通常の胎児のように育てる。これまで以上に無いほどの設定の定着に、開発者たちは狂喜した。

それから、10ヶ月、無事に生まれた35番目の披検体。^{完成し}要望された高い身体能力と自然治癒能力、人間の1・3倍に設定されたそれは兵器運用とすれば十分な範囲であった。しつかり感情を持ち、思考して自身の意思で行動する。計画が持ち上がって8年、やつとの成功体一号の誕生であった。

そして、それに味を占めた研究者たちは平行して進めていた二体目を同時期に製造。36番目の披検体も同じく成功、しつかりと成長し実用化可能なレベルまで二体が育つた。本当の兄妹のように育つた二体が配備されるというその日、上層部からの命令があった。

「ISに対抗できるように作り直せ」

そう、そのころは既に白騎士事件によりISが普及しはじめた頃。強化兵士ではなく、高性能なIS操縦ユニットを欲していたのだ。それにより、成功したうち、女性体である36番が性能調整のために調整槽へ。男性体35番は、当時の技術を使用した擬似ハイパー センサーを移植。

しかし、非人道的な研究が政府の表組織に露呈。外交への影響を懸念し、研究所を秘密裏に処分。エクステンデッド計画は事实上の消

滅、奇跡的に一体の披検体は事前に察知した善意を持つた新人研究者につらられて兵士を迎撃しながら移送された、その後消息は途絶える。

残された開発要項などが後に遺伝子強化体の開発の骨格として流用された。アドヴァンスド

「・・・で、その35番田が俺だと? 確かに右田のこれはそういう類だが」

「ですから、最終確認です。うなじの管理コードを見せてください」

仕方ないので、制服を上着を脱ぎ捨ててうなじのバーコード(キヤベツ56円)を見せる。セシリアが沈鬱な表情だったのが一気に瞬間湯沸かし器のように沸騰して真っ赤になる、昨日風呂入ったんだからそれくらいで恥かしがられても困るんだが。

「では」

「頼む」

ラウラが研究所から回収された識別用端末のリーダーをかざす、スパーで良く聞く読み取り音がピツと聞こえる。画面に表示されたのは「N-35」の文字列だった。良かつたあ、キヤベツじゃなかつたよセシリア。

「はあ、じゃあドイツの謎の組織がたまに遊びに来たのは・・・」「国益になる存在ではないですから抹消のためかと、しかし大きな

影響力を持ったから

「手出しを止めたと?まあ、何も無いにこしたことはないか」

「あ、まあ、そりやあアナログ媒体で無い事にされてれば調べても
わからないわけだよ。

「まあ、これではつきりしたあ」

「ええ、長年の胸の悶えが取れましたわ」

「・・・・・お義姉さまは気にしないのですか?」

「はい、何だったとしても受け入れる。それに、音羽は音羽ですわ

!」

「心配」無用でしたね、でも、良かつたです」

心から安堵しているのが良くわかる、まあ、普通は嫌悪されるか差
別されてしまうかだからなあ。え、正体があつさりしすぎだつて?
世の中そんなものだらう、十分深い気がしなくもないがな。

「まあ、これで一件落着・・・か」

「はい、私が政府に正式に書類を送ればお兄ちゃんはもう大丈夫で
す!」

「うふふ、可愛い妹ですわね」

「じゃあ、その可愛い妹連れてご飯行こうか

「はい!」

まあ、読者向けに分かりやすく要約すれば「生まれた順番的な意味
で実質のお兄ちゃん」らしい・・・・・読者ってなんだ?また俺は
電波でも受信したんだろうか、どうでも良いか。

「ところで、嫁つてのはじから来たんだ？」

「部隊の部下だ、クラリッサという頼りになる仲間に教えてもらいました。日本では好意を持つ相手にそう宣言するものだと」

ひとまづ、お兄ちゃんとしてやる仕事が増えた・・・。

74・シリアルはあつたり消化（後書き）

補足

ラウラのような遺伝子強化体の計画の前身で生まれたのが音羽、前身の計画のノウハウが生かされたために実質、妹のようなもの。

腹違いの兄妹のようなもの、と考えればわかりやすいです
(不謹慎な説明のしかたですが、作者の説明力の限界です。申し訳ありません)

生かすため、その過程に音羽はイギリスへもう一人は・・・

75 · 来ないと思つたら···（前書き）

運の悪さスキルが久しぶりに発動です

ギャグにしようとした結果がこれだよ！

75・来ないと思つたら・・・

たゞらゞらゞりらゞ（ネクロファ「y） ガスッ！

目覚まし時計のボタンを叩き、永遠に音を止めてあげた。身体のことを俺を知る人物、一夏・鈴ちゃん・美月・千冬さんに説明したところ、「そうか」だけ言われて普通に流された。一夏に至つては「良かつたじやないか、家族が見つかって」だとさ、リアクションが薄すぎてこっちが驚いたよ。いや、あからさまに相手の仕方が変わつたらそれはそれで嫌だけどさ。で、この状況は何？

「・・・・・んう・・・・・んふう・・・・・

「はふう？

いやあ、シャルル・・・・・シャルロットが本来の性別を明かしたために一夏と同室になつた、のは良いのだが・・・・・。一夏がもぞもぞ動いたのと俺が目覚まし時計を粉碎したので誰かの声が聞こえたぞ。しかも女の、いや、男だつたら怖いけど。俺にも一夏にもそういう趣味はない、というかE.S学園に俺ら以外に男子はいない。

「・・・・・・・・・なあ、一夏」

「・・・・・なんだ、音兄」

「俺は今、非情に幸せだ」
「死ね」

だ、だつて、あのセシリ亞がなんかネグリジエで乱れちゃつてるけどがつしり抱きついてくるんだぞ？」これ以上の男の幸せがあるものか、つて・・・・一夏のほうはラウラ・・・・パジャマとかちぢ

んと着ておこしうね、風邪引いちゃうから。身体の健康管理は大事だぞ、今の頃にお腹を冷やすと将来子供を産むときに良い事が無いからな。俺だって妹の子はしっかり健康に産まれてほしいからな、そのためにもちゃんと服を着て欲しいぞ？

「うん？ もう、朝か・・・・・

「ば、馬鹿！ 隠せ！」

「しかし、夫婦は何事も包み隠さないものだと教わったぞ？」

「ラウラ、将来良い子を産みたいなら裸は止めなさい。あと、それは物理的な意味じゃない」

「・・・・・はい、わかりましたお兄ちゃん！」

うふうん、しつかり言いつ」と聞いてくれる妹が俺は大好きです。え、たつた一晩でなんでそこまでって？ 家族だぞ、家族、時間なんて関係無いのさ。ただ、ラウラがセシリアをお義姉ちゃんと呼んでいたのが気になる、満更でも無さそつだつたから別に良いけどな。・・・・・ひとまず、セシリアを起こさない限り俺が動けない。

「セシリア、朝だぞ。起きろ~」

「ん、んう・・・・んにゅ、音羽あ？」

「はうぐああ！～」

ギリギリと音がするほどに抱き締められるのは正に本望なんだが、如何せん場所が間違いだつた。首に手をかけてられているために息が出来ない、く、空気が、酸素が足りない。つぐお、緊急時用のナノマシン

まで起動しやがつた！ つて、時間稼ぎ以外の何物でもないつての・・・

「――― きゅう」

「わ～！…姫兄！…」

「お兄ちがやん…お義姉さま、お放しください…。」

「うぐ、朝から酷い目に会つた…。」

「う、すみません…。」

早朝にセシリアが抱きついた状態という幸せの絶頂（大げさか？）に遭遇していたにも関わらず、そのセシリアに抱き締め（首的意味で）を食らい、緊急時用のナノマシンまで起動する事態になるも時間稼ぎにしかならず酸素不足で気絶。始業時間ギリギリに目を覚まして今、教室へ向かつて飛んでいるところ。

一夏とヨシスターは置手紙とおにぎりを残して先に行ってしまった、いやまあ、仕方ないだろう。遅刻したら鬼の洗礼を受けることになる、逆の立場だつたら俺も先に行く。

「ぬおづああああああああああああああ…。」

まだ寝ぼけているセシリアを着替えさせるのに手間取った、おにぎりを「はい、あ～ん」として食わせるのに時間がかった、まあ、何が良いたいかつていうと。時間が半端なく危険域つてことだ、ISを展開しようにも先日にトーナメントの中止が決まったと同時に疾風は返却、まあ、事前にトーナメントが終わつたら返却予定だったのが早まつただけなのがな。

「ブーストオオオー！」

まあ、正確にはジェットパックのアフターバーナー装備ってだけだけどな！？その速さは、時速450kmに相当する。しつかりゴーグルを装備しているから問題もないし、こうこう速さには生憎慣れている！…間に合え、あともう少しで着くんだ！！

音兄は大丈夫だろうか、もう始業時間まであと30秒。千冬姉が珍しくまだ教室に来ていなければ、まだチャンスはあるかもしれないが、いつ状況が変わるかも知れない。さつきからラウラがせわしなく、小型無線機で音兄に連絡をとるつとしている。急いでくれ音兄！

「くっ、応答しないな…・・・お兄ちゃん…・・・」

「いや、諦めるな。まだ時間はあるー！」

「フツ、そうだな。嫁の言つとおりだ、もう一度！」

俺はどうとかかるひとはできないが、祈ることはできない。

そして、始業5秒前、奇跡は起きた。

「つだああああ！到着ウ！」

う。

覚醒（起床的意味で）したセシリ亞を勢いそのままに席へと放り投げ、俺もジエットパックを格納して床を蹴り跳ね上がる。そして、放物線を描きながら自分の席へとストンと着席。この間5秒。フツ、この程度の動きなんぞ朝飯前だ、もう朝食食べただけど。というか、執事時代に泣いたセシリ亞を笑わせるために無茶をし続けた結果だがな、そしておそらくミリアさんのありがたい教えのおかげだと思

「おお～！」

「凄い、凄いわ音羽君！！」

流石音兄だ！」

「アーヴィー、ハント、ミラードの助言

アレって人間にできる動きなのか？訳有りの身体だとかの問題じやなハミが・・・

「流石、音羽。私の鍛え方は間違つてなかつたようね」

なんか、最後に良く見知ったゴーストさんがいらっしゃるような気がするがスルーしないと色々大変だからスルーしておこう。と
いうか、最近出すぎじやないか?シリアルがシリアルビックルか「メ
ディになつてるぞ、いくらなんでもおかしいだろう。

「む、揃っているな。SHRを始める」

千冬さんがいつもどおりに入ってきた、何故か山田先生がない。話を聞くには臨海学校の現地の下見に行っているらしい、帰ってきてたら温泉の感想でも聞かせてもらおうかな。山田先生も温泉大好き

つて言つてたし、仕事とはいえ一風呂入つてくるだらけ。といふか、もつ今週末か早いな。

「あ、すると水着を買ひにいかなければならぬか……むう」

ひとまず、今日も一年前に修めた普通科目か……単位は藍越のが引き継がれているから参加はしなくても良いのだが……他にすることも無いから惰性で受けている。まあ、ノートに書いているのはナノマシンの新案とかばかりで仕事モードになってしまっているんだがな。

「さて、始めるぞ」
『はい!!』

まあ、今日も頑張ろうか。

75・来ないと思つたら・・・（後書き）

どうでも良じ作品情報

身体能力が基礎的に高いことによつて、アさんで鍛えられたことは
うが影響は大きい。w

76・お買い物（前書き）

わい、短いや

「いやー、天気良くていいお出かけ日和だなあ

「そうだね、お兄ちゃん」

「そうですわね、せつかくですし今日は昼食もどこかで摂りましょ
うか」

今日は臨海学校に合わせての準備期間、前日であるが臨時の休日とされてくる。三人で来た駅前のショッピングモール「レゾナンス」にはちらほらとヒル学園の生徒の姿が見える。持つて行く物などはほぼ全てが揃ってしまうだらう、なにせ「レゾナンス」に無いのなら市内どこにも無いとまで言われるほどなのだから。まあ、一般的な物に限られるがな。ついでに言えば、セシリ亞の「はぐれないと」の一言で三人して手を繋いで歩いている。

「つ～む、水着というのも選ぶのは難しいな

「そう悩まなくて、気軽に選べば良いのですよ?」

季節に合わせてなのだろう、どこの衣服店もショーウィンドウに色とりどりの水着を惜しげもなく店の前を通る人々に見せ付けていた。ほぼ女性用のばかりだがな、まあ、女尊男卑の社会とは言え男の物よりかはビキニなどのほうが見栄えするだらう。そんなことを考えながら一つの店の中であれでもないこれでもないと俺の水着を吟味していた、いや、これは普通逆の立場なんだろうがなあ? 適当な物で良いと言つたらセシリ亞が「もう少し考えなさい!」と怒られてしまった、申し訳ない・・・。

「よし、せっかくだから青のこれでいいか」

「ふふふ、似合ってますわよ」

「よし、じゃあ次はセシリ亞のでも……あ、俺は邪魔か？」

「いえ、できれば音羽に選んでほしいですわ」

「わかった、ラウラ～、行くぞ」

「は～い」

ラウラの手を引き、歩き出したセシリ亞を追いかけるように俺は女性用の水着売り場まで移動するのだった。ちなみにラウラは「お揃いが良い！」とのリクエストで俺と同じレフトサイドテールにしている、陽光を反射して輝く銀髪はとても美しかったと言つておこづ。

「ねえ？ ジャック」

「はいはい？」

「音羽、手え繫いでない？ しかも一人と……」

「そうだね～・・・・・それが何か？」

「何かじゃないわよ、あの妹ちゃんならともかくあのドリル・・・
許すまじ！～」

傍目からは仲の良い家族に見える三人組をあからさまに尾行しているのは、EJ学園生徒会長「更識楯無」とラウラの子守を任せているはずの「ジャクリーヌ・ウェルキン」だった。手つなぎに嫉妬しているのは言わずもがな楯無であり、ジャクリーヌはそれを愉快そうに見ているだけだった。

「どうか、ドリルは無いでしょ？」

「うぐうぐぐ、うなるんだつたら去年の「ひか」触らせねべき
だつたわ」

既に嫉妬の禍々しい渦を出しかけている樋無を見てため息をつきながら、ジャクリーヌは先ほど自販機で購入した缶コーヒーを一口飲んだ。

「ふふふふふ、うふふふふ。でも、それもここまでよーーふせつ
!？」

ついでにエスを部分展開して高笑いする樋無をひっぱたくのも忘れず、「だらしなく崩れ落ちた幼馴染を見てジャクリーヌは再びため息をつくのだった。

「それでね、私の部下の一人がね。『デフォルト標準装備では、色物の域を出

ない!』って言つてたの」

「・・・・ジャックでは無い」とは確かだが、その部下さんが

心配になつたよ

「でしたら、私におまかせあれ」

セシリアがパレオビキニの合体したみたいなもの（名前はわからん）を気に入つたようでお腹いつぱいになるまでワンオフファッショニシヨーを堪能したあと、最後にラウラのもの・・・・となつたのだが。ドイツの黒うさぎ隊つて色々大丈夫なのか？ジャックも「H A H A H A」としか言わなかつたし、ひとまず長期休暇のとき

にでもその船へお上りなきや いけなくなつたがな！

「これはどうかな?」

「大胆すぎやしないか？」

—
?

5分ほど経つてセシリアが少々興奮気味に戻ってきた、その手に持つていたのは・・・まあ、その「大人の下着」、ランジェリーのようなそれなりに露出度が高いものだった。確かに力強さの中に可愛さと妖艶さが散りばめられているが、果たしてラウラに合うだろうか？いや、似合わないことは無いだろうがなあ。

「 いれ? じやあ試着してくる。」

「ああつ、入つちやつた・・・」

「わくわくしたやなわや
落とせあせんじよ」

……まああの錯覚には」わくなか刀魔魔しか

実際、そこまでアクティブに攻めて行かなければ一夏は思いに気づくどころか「これなんの罰ゲームだ?」とか言い出しそうだ、いや、中学時代にそういう事件があつて女生徒を慰めたことがある。あのときほど憤りを感じたことは無かつたな、いや、俺も大概らしいがな。自分で努力はしているが、やはりまだまだみたいだ。俺がモテることも無いに等しいだけかもしれないが・・・・・・。

『ハカラセシ愛ニテ』

「？」

どこからか聞こえてきた一夏の声、そろつと聞こえた方向へと覗き込むように見てみると千冬さんが一ヤ一ヤした表情で一夏を見てい

た。対する一夏は頬を少し染めながら「なん」と言っていた、「これは・・・・・！」

「脈アリですかー！」

「よし、これなら行けるー！」

セシリ亞と向き合つてガツッポーズをしていたら、背後から遮蔽用のカーテンが開け放たれる音が聞こえた。揃つて振り返ると・・・・・まあ、そこに可愛らしい小悪魔が居たとでも言つておひづ。

76・お買い物（後書き）

さうでも良じて作品情報

音羽、シスコンに進化

77・顔から火を噴く「ヒーヒー」と（前書き）

流石に「はい、あへん」は「」で使つことは断念した

77・顔から火を噴くトトロ

「お兄ちゃん、ここお？」

「おう、俺の行きつけだ」

「中々歴史がありそうなところですね」

そんなことでやつて来たのはモノレールに乗つて5分、歩いて・・・
・うん、日本移住時からの行き着けの「五反田食堂」。ラウラがここに来るまで凄い二コニコしていたし、それをセシリ亞はまるでやんちゃな娘を見守る母親のようにしているし・・・まあ、良いんじやないかな?本当の親は知らないが、ミリアさんが親代わりに世話焼いてくれたしなあ、俺にとつてはミリアさんが育ての親・・・
そのおかげで身体能力がガチセバスとかになつてはいるが・・・。

「お~っす、弾君いるかい?」

「あ、音羽さん・・・!...?」

「・・・どうした?」

なぜか店の引き戸をがらがら開けて入ると、五反田家長男の弾君がいきなり口をぽかんと開けたまま固まってしまった。なんか、ぱくぱくやっているがどうかしたのか?ひとまず手を目の前で振つても応答しないので奥の四人がけの席に座る、いつまで硬直してるんだろうか?

「音羽さん、遂にハーレムルートを・・・」

「何を言つてゐるんだお前は、妹と元主人だ馬鹿」

「HMOUTO?」

「おひ」

「・・・そうですか、遂に音羽さんも妹持ちにー。」

「そうなるな」

なにやら、弾君が見たことのないようなテンションでラウラの自己紹介を聞いていた、セシリ亞も続いたが異様なまでのテンションに驚いてしまつていたようだつた。お前も妹いるからつてはつちやけすぎだぞ？さつきから周囲の客がやれやれみたいな顔してゐし・・・。

・一応お前店員だらうがよ。

「あ～、弾君、注文良いだらうか」

「はいはい、なんで」」さんしょ？」

「業火野菜炒め3つ頼む」

「はいわ～」

伝票に書き込み、それを持つて厨房へと消えていった。まあ、その手際の良さは流石長男であると言つたところであるな、事実、本人は気づいていないがその器用さと不器用な兄貴氣質は人気であつた、一夏と中学時代に人気を一分していたというのも頷ける。本人は一夏のモテさんに呆れて自身の状況を知らずにいたが・・・勿体無かつたんだよな。噂では高校でもそこそこにらしいから頑張つてほしいものだがな。

「あ、こりこりがつづくな。ほら、ついてる」

「ん、ありがとうお兄ちゃん」

「わかつたからゆっくり食べなさい」

思つたよりもラウラががつがつ美味しそうに食べていた、それは良

いのだが口の端に特性タレが飛んでしまっていた。見ていられないで仕方なく拭き取る、セシリ亞がそれを二口二口と見ているのがどことなく恥かしい、いや、これはただ兄として妹の世話をしているだけであつて……なんで言い訳を考えたんだ俺？まあいいや。

「ハリヒリ食堂に入るのも久しぶりですわね」

「ああ～、そうだな。向こう立つ前の日は寄ったのが最後か」

たしか、あのときはまだ小学生のセシリ亞の手を引いてたっけか。俺は茶色の長いコードにセシリ亞はフリルが付いた可愛らしき青のドレス、似合つてたよな。

「あのときはセシリ亞凄い泣いてたよな」

「当たり前ですわよ、永遠の別れになると思つていたのですから」

「…………でも、再会できた。俺はそれがとても嬉しい」

「ええ、まさか義妹ができるとは思つていませんでしたが」

「…………字面が違う気がするが、気のせいいか？」

「氣のせいですわ」

「…………そうか」

そういうえば、明田から三田間の臨海学校…………結局ラウラの荷物の準備は俺がやることになりそうだ、「代えの下着があれば十分です！」とか言つていたからな。軍事演習で何日もやりに行くわけじゃないから、あともう少し女の子らしくしようよ。おしゃれとかさ、俺は良く分からぬからどうしようもないがな。

『ハリヒリまでした』

「ハリヒリまでした

あ、いくらか声が弾んでいるのがラウラな。どうやら連れて来て正

解だつたみたいだ、セシリ亞も満足気な顔してゐるし、良かつた良かつた。兄としても、一人の男としても上手くやれたかな？ こういう経験が無いから自信はなかつたが一人の表情を見れば成功だということが良く分かる。

「よし、弾君。 おあいそ頼む」「はーい」

「ふふつ、今日ははしゃぎ過ぎたか」「ずっと楽しそうに見て回つていましたからね」

現在、IIS学園へと向かうモノレールに横に並んで乗つてゐる。ラウラを挟むようにして俺が左側、セシリ亞が右側だ。疲れてしまつたのか、ラウラは幼子のように笑みを浮かべながら俺によりかかつて寝てしまつてゐる。安心しきつてゐるのか、いつものような鋭い気配は無く、ときどき小さな笑い声を上げながらすうすうと寝息をたててゐた。

「むにゅ、お義姉ちゃんとお兄ちゃんキスしてゐる、えへへ~」「！~？」

な、なんて寝言を言つてくれてるんだこやつは・・・・一瞬想像しちまつたじゃないかよ、あ、顔が熱い！ セシリ亞の方をちらつと見るがすぐに恥かしくてお互いにそっぽを向いてしまつ、あつあつ、寝言とはいえ爆弾投下しやがつてこいつは～・・・。ほら、セシリ亞も顔真っ赤にして俯いてるじゃないかよ、いきなりそんなこと言

わかれれば当たり前だらうがよ。

「ま、まあ、ただの寝言だ。うん」

「そ、そそそそうですわ！ええ！！」

心なしかセシリアが慌てている気がするが俺にそれを気にする余裕など無かつた、いや、普通となるんじやね？なんで俺がこんなに恥かしい思いしてるのは知らんが・・・・あうあう。

どこか気恥ずかしいまま、二人してそっぽ向いてそのままモノレールに揺られたのだった。ひとまず、ラウラに後でお仕置きしておかなければとか同じように思っていたことなど俺らは知る」とは無かつた。

77・顔から火を噴くトトロ（後書き）

「」でも良こ作品情報

お兄ちゃん=音羽

お義姉ちやん=お繫しづだれこ

78・博士は「犠牲」になったのだ

「おお～、あれが海ですか？」

「そうだぞ、綺麗だろ？？」

現在、一学年全員はクラスと一緒にバスに乗つて移動していた。ラウラは窓側の俺の膝の上から窓越しに見える青々とした海を好奇心満々で楽しそうに見つめていた。ちなみに俺とセシリアは昨日のことはまあ落ち着いたし気にも留めずに並んで座っている、まあ所詮は寝言。細かいことをこつまでも気にしているほど俺らは子供ではない。

「すう、すう」

「……」

まあ、静かなのはセシリアがなぜか俺に身体を預けて寝ているからなのだがな。前日だからって楽しみで興奮して寝られなかつたのだろうか、そこまで子供ではないとは思つが。気にして仕方ないか、着いたら起にしてあげれば良い話だし。ひとまず、この座席の下にある馬鹿い長を始末しなければいけないが。ステルスマードだからつて分からぬと思つたら大間違いだぞ？

「久しぶりの海だな、楽しみだ」

「そうなの？」

「おつ、去年は受験勉強とかで無理だったからな」

ちなみに、俺らの前の席は一夏とシャルロットである。なんだか一夏が先日プレゼントしたブレスレットの影響か見たこともないほどに笑顔だった、幕がそれを見て嫉妬どころか軽く引いていたのは記

憶に新しい。それにしても、海か・・・去年は夏休みずっとイレ
イズドに缶詰で仕事してたし、精々休憩時に職員とキヤツキヤウフ
フ（水浴び的意味で）だけだったからな。ナターシャ（ISパイロ
ット）が散々弄ってきたので背負い投げで海へと叩き込んだ記憶が
ある。

「ほり、もうすぐだ。しつかり座つていひ

『はーい』

千冬さんの一声で立ち上がっていた生徒や身を乗り出していた生徒
がそれぞれの席へと座る、あ〜専用機の譲渡は明日だつたつけか。
重要人物が来るとか言われているけど、誰だろつかな？

「セシリ亞、もう起きあひ

「ふみゅ・・・・?」

まあ、ひとまずは初日の自由時間を楽しむとしようか。

ほどなくして、山に囲まれた自然のビーチの中央に居を構える旅館
の手前でバスが並ぶように止まった。なんでもこの「花月荘」は毎
年IS学園生の臨海学校の宿泊先らしい、しかも創業50年という
歴史の深さ。温泉もなんと日本の名湯百選に入っているほど、そん
なところを学園生のために貸し切り状態とは・・・国立SUGEE
EEーと言つ奴だろうか。挨拶を程ほどに済ませ、千冬さんの言論
封殺（物理）により俺と一夏は黙つたまま後を着いて行くのだった。

「それにしても、俺らは部屋びつなるんですか？」

「ここだ」

痺れを切らして俺が口を開くと、千冬さんはある部屋の前で指差しながら止まつた。

「教員室ですか？すると先生方と同じ部屋になるんですか？」

「ああ、しかし他の教師では意味が無いのでなお前らは纏めて私と同じ部屋になつた」

そりひと他の教員を役立たず扱いしたことは氣にしない、そりゃあ千冬さんが同室と知れば誰だって近づかないだろ。虎穴に入らずんば虎子を得ずというが、そこに鬼神が居ては危険を冒すところか逆に狩られてしまつ。逆の立場だつたら俺も行かない、といふが行きたくない。

「ふう、荷物はこれとこれひとつ

「千冬姉はこの後どうするんだ？」

「織斑先生と呼べ、まあ、打ち合わせが終わつたら海にでも行くぞ。どこかの弟がせつかく選んでくれたものだしな」

ほお、弟に水着選ばせるとは・・・やるな千冬さん、流石世界最強のブラコン剣士だ。いやまあ、俺は一夏に「世界最強のシスコン」とかいう誇るべき称号をもらつたがな、え、褒めてないつて？ああ、そうかい。そんなこと考へている間に俺は着替えなどを展開して纏めて置く。

「じゃあ、早く行こうぜ音兄ー。」

「わかつたから急かすな、時間はあるんだから」

水着などを持った一夏が待ちきれなくて足踏みをしている小学生の
よつに戸を開けていた、ふう、いつまでもお前は男の子だなあ。た
め息をほうと吐きながら俺も荷物を持って歩き出したのだった。

「なんだ、これは」

「さあ？」

田の前の中庭に聳え立つ地面に埋まつた機械的なうさみみ、某座薬
が埋まつてゐるわけでも無さそつだがなんとも珍妙奇天烈だ。その
隣には「丁寧に「引っ張つてください」の立て看板。誰だこんな
配置した奴、勝手に許可無くこいつの生やしたらダメだろう。い
や、許可が出てもうさみみを地面から生やそつとする人間なんてい
ないだろ？が。

「よいせつと、よし、行くぞ一夏」

「あ、あ～、うん」

「？」

氣のせいだらうか、上空から空氣を切り裂いて何かが落下してくる
ような音が。それもミサイル爆撃のように荒れ狂う音を立てて・・・
・「これからここは戦場に変わつたんだ?ひょいと上空を見上げると
アニメチックな巨大にんじんが落下してきていた・・・・・・・
を危険なのでジャンプして海の方向へと譲つて貰つた「ステイール・
ハーツ」で叩き飛ばした。少し、いや、ベコリと凹ませてしまつた
がまあ問題ないだらう。未確認飛行物体は災難の種になるまえに弾
く、避けることができる災難は早めにその芽を摘んでおく、ミリア
さんから教わつた経営指南の一つである。生活にも生かせるからひ

とまあはにんじんを除外しておぐ」とした。

「つええ！？あああああああああああああああ

なんかにんじんから声が聞こえるが、不法侵入者の声だらう。おそらく落地下地点は沿岸から10km、どうでも良いがな、どうせ緊急時の対策くらいしてあるだらう。それ以前に侵入者に情などかけてやる気は更々無いが・・・まあ、いいや。呑いたときに「ベキグシヤ」とか聞こえたのは氣のせいだ。

「あら、そんなもの持つてどうかしましたの？」

「おお、セシリ亞か。なーに、侵入者に退場願つただけだ」「やつですか、うふふ」

なんか一夏と同じく通りかかつたであろう篠が『いや、待て待て待て待て！』とか五月蠅く言つてゐるがどうかしたのだろうか、俺は邪魔なにんじん（＝侵入者（笑））を打ち上げただけだぞ？千冬さんの仕事も増えない、手間もかかるない。良い事づくめだと思つのだが・・・・ダメなのか？

「まあいいや、早く行くか

「音羽、跡でサンオイル塗つてくださいません？」

「了解、じゃあ後で」

「はい」

篠が「姉さん・・・・」とか言つてゐるがなんでだろうか、ビニールもあの思考破綻者など見なかつたが・・・一夏が言つたのはあのにんじん型のアレの中に篠ノ之束博士が入つていたんだとさ、個人的に一人の科学博士的に言えば製作者の「責任」を放棄してゐるから嫌いなんだよな。後悔はしていないが、姉だったのならば申し訳な

いじをしたな。家族の邪魔をするなど愚の骨頂、申し訳なくて第
に下下座しようとしたら止められた。

「いや、許すから止めろ」

「そりが、すまないな第」

「気にするな」

なんとか許しが出されたので第とセシリ亞と分かれて、氣を取り直
して一夏と男子に宛がわれた更衣室へと向かったのだった。

78・博士は「犠牲」になつたのだ（後書き）

だいじめなこと作品情報

束さんには出番をお預け

79・夏の匂の「り」(前書き)

今回は、少し人によつては不快に感じるかもしません

ぞくつ ゾクつ ゾクつ

「熱つ！熱つ！…熱すぎるぞおいー！」

「ははは、素足でいきなり行くからだ馬鹿者め」

ビーチサンダルを履き、水着に着替えてサングラスをかける。今日は体内の医療用ナノマシンをオーバーヒート回避のために抜き取っている、じやなきやまともにこの暑さの中で長時間居ることなどできないからな。別に怪我をするような原因も見当たらないし、自ら怪我していく予定もない。といつか、これまでナノマシンが治療に稼動したこと自体無い。身体能力がガチセバスとか言わるとまあ、うん、いいや。

「ふう、ナノマシン抜いて正解だつたなこれは

暑がつている一夏を無視して腕時計型格納領域から空中に浮かぶビーチパラソル（一人用）を開いて海の家の木製ベンチに腰掛ける、やつぱ日本の中さはきついわ。慣れてはいるけどやっぱりじわっとしてなあ・・・仕方ないので自作「超保冷ボトル」に入れておいたアイスティー（ストレート）を一口飲む。しつかり温度は4度に保たれていて丁度良い。

「土君、しつかり仕事してくださいよー！」

「なんで俺がバイトしなきゃいけないんだよ、しかも学生のかよ・・・」

なんか、暑さで幻聴でも聞こえてるみたいだ。別に10周年の仮面

付けたライダーがいてもどうでも良いや、そういうえばセシリ亞に「サンオイルを『ソ』って言われてたな。そろそろ着替え終わつている頃だらう。

「ふふふ、遂に来ましたわ！」

「これでセッシーも音っちを誘惑できるね～」

ビーチパラソルをぐさつと念入りに砂浜に突き立て、座るためのシートをふわりと敷き終わったとき、ふいに後ろから声をかけられた。振り返るとクラスメイトであり、簪さんの従者であるという布仏本音さん。いつもだぼだぼでサイズが確実に合つていないのであろう動物の服を（今回は水着の上に着るタイプらしいですが）着ている通称「のほほんさん」ですわ。そのあだ名の通り、いつものそつとゆつくりの動きをしているのですが・・・・・誘惑つて・・・。

「確かに少し露出は多いですが・・・」、この程度淑女の嗜みですわ！」

「わ〜、セッシー顔まつか〜」

「馬鹿にしないでくださいましー！」

すると視界が真っ暗になつた・・・・・え？

「だ〜れだ？」

「！〜？」

聞き慣れた声、細いが力強さを感じる指、考えずとも分かる私の思

い人、如月音羽であつた。

「ちえ～、つまらんない。なあ本音?」

「つまんない、えへへ～」

「もう少し焦らさないと面白くないわ」

途端、音羽が見たことのない笑顔で水色の髪をした女性・・・あれは会長さんに見えましたが・・・の頭を齧掴みにしてフルスイング、がつちりと踏み込みを決めてプロ野球のピッチャー顔負けの投降をしました。

いやああああああああ！」

「まったく、今日は乱入者が多いな」

スッキリしたよつにこちらを振り返る音羽、その凛々しい顔に思わずドキッとしてしまいましたわ・・・不意打ちは卑怯ですわよ！無意識にそつをせるような行動ばかりされるからいなかちらが困るのですわ！

「さてと、サンオイル塗れば良いんだつたな?」「は、はい。お願ひしますわ」

セシリ亞がそう言うとパレオを外し、ビキーの上のブラ部分を外し

てうつ伏せになつた。その際に少しほみ出でてしまつてゐる豊満なそれに一瞬視線が奪われてしまつたのは俺の心の中に秘めておく秘密だ、早く無心にならなければ俺のステイール・ハーツがフルバーストになつてしまつ。女子ばかりのこの場所でそんなことになれば社会的に終わるどひかセシリアに殺される・・・無心だ無心、b e c o o l b e c o o l「もつと一熱くなれよおーーー」五月蠅い、それがダメだつて言つてるだらうが！

「？お願いしますわ」

「あ、あああ、ああ。わかつた」

サンオイルを少量ボトルから垂らして手の中で温める、こつしなければ塗つた途端「パーク・クトフリーズ」になりかねないほどの冷たさを味わうことになる。「ブリザード」でも可。とにかくヒヤッヒ冷たいのは身体にも心臓にも悪い、逆の立場になつて考えればわかるだらう。

「じゃあ、塗るわ。準備良いか？」

「はー」

ゆつくりと均等に塗り広げるようにして背中から腰にかけてすうーっと塗つて行く、この時に例えアレな声が相手の口から漏れていふと、聞こえようと無心でただ塗り続けることが重要である。今、俺はオイル塗りマシーンだと暗示をかけてやらねば真のオイル塗りはできないだけ言つておいつ。

「ひゃんつ、はまつ・・・・・あんつ

「（無心無心無心無心無心無心）」

「んひゃんつ！・・・・・いやんつ、やあ、ん・・・・

「（無心無心無心無心無心）」

無心だ無心、何があるの？！俺は！セシリアに！サンオイルを！塗り続ける！・・・・・ふう、終わつたぞ。なんか「はあ・・・はあ・・・」とか息が荒いセシリアが居るがどうかしたのだらうか？

「お、音羽（ハガハガゴーーー）」

「は、はい（汗）」

なにやら怒つてこらつしやる、何か悪いことしちだろつか・・・・・サンオイルはしつかり全身に・・・・・あ、やべ、男が女性の尻を触るとか・・・・・いかん、無心でやりすぎてしくじつた！！

「やつ過ぎですわー」

「・・・・・申し訳ありませんでした、命だけはお助けを」

競争で運悪く足が轢つて溺れ掛けてしまつた鈴を助け、休ませるために旅館へと送つて帰つてきたところ一つのビーチパラソルの近くに女子ばかり（当たり前ではあるが）が大勢「うわ」「これはEROKE！」とか口々に遠巻きに見つめながら喋つていた。一体どうしたのかと覗き込んでみると、「無心」でサンオイルをお尻に塗り続いている音兄とそれを受けて少しあrena声を上げてしまつているセシリアがいた・・・・・なにがあつたんだ？

「やり過ぎですわー」

「・・・・・申し訳ありませんでした、命だけはお助けを」

気づけば音兄が跪いて頭を垂れ、水着を着なおしたセシリアが腰に手を当てて説教していた、その身体はとても丁寧にサンオイルが陽光を反射していたのだが、如何せん顔がそこそこに赤い、まあ、そうだよなあ。

「もう、仕事が丁寧なのは良いですがもっと注意を向けてくださいな」

「…………はい」

どうしようもなく、『無沙汰すぎる主人への跪き（謝罪）を無意識でしたまま』立腹セシリアのありがたいお説教を受けていた。「そうしなきゃナニが『』とか弁明しちゃダメだよなあ、普通に考えて、「キモい、氏ね」とか言われておしまいだ。そうなった暁には俺は生きていける自信が無いな、俺の生きる理由の大半がセシリアで埋まっているからな。セシコンとか言つた奴前に出N。

「まあ、いつまで言つっていても仕方ありませんわね……あら?」

その声に釣られてセシリアの向いた方向を見ると、シャルルがタオルお化けを連れて一夏と話していた。あの特徴的な眼帯は……ラウラか、いくらなんでもあれは熱いんじゃなかろうか物理的に。ひとまず、セシリアに「今後は気をつけてくださいまし」とご慈悲を頂いたのでお詫び代わりにセシリアをお姫様だつこでラウラたちの元へ歩いた。セシリアが耳元で「もう……」とか言つてくる。ぐつたかつたのは秘密だ。

79・夏の風のr y(後書き)

どうでも良い作品情報

まだまだ初日は続きます

80・楽しい夕食（前書き）

誰得サービスシーン有り

「わ、笑いたければ笑えつ……」

ばさりと全身に巻き付けていたバスタオル数枚を剥ぎ取るようにして脱ぎ去り、堂々とした出で立ちで頬を染めながらラウラがこれでもかと大人の下 g・・・ランジェ r・・・少し際どい水着姿を晒す。どうやら一夏も少し不意打ち気味に「可愛いぞ」とか「似合つてゐる」と褒めてくれている、けして俺が後ろから目だけで「貶したら・・ね?」という視線を無意識に送っていたことは関係ない。

「うん、ラウラ凄い似合つてるよ 」

なんと、シャルルのお墨付きとは・・・流石ラウラだな、え、시스コン乙つて? そうか、それは光栄だ馬鹿野郎、家族を大事にして何が悪いことがあるだろうか。俺には親はないし、ラウラは俺以上になんだから俺がしつかり愛してやらないでどうするというのだ。ああ、戸籍でしつかり正式な家族になる予定だ、手続きをしなければいけないからな。

「お兄ちゃん・・・似合つてる?」

「ああ、最高に可愛いぞ。自身持て」

「似合つてますわよ、胸張つてくださいな」

「うん、ありがとうお兄ちゃん、お義姉ちゃん!」

すると、一夏の手を引いて嬉しそうに走つていった。一夏とシャルルはそれを一瞬驚いたような顔をしたがすぐに微笑みながら追いかけて行つた、うん、一夏の視線が家族団らんを眺めるおじいちゃんみたいだつたのは氣にしないでおこう。アイツが偶に年寄り臭いの

は昔からのことだからな。

「さて、セシリアはどうする？俺は少しモーター・ボートでも借りて来るが」

「わたくしも乗せていただけません？」

「つ、あ、ああ、良いぞ」

そんなことなので海の家で某もやしみたいな人にレンタル料を渡して一台モーター・ボートを借りる、なんか「最高速度120km」とか書いてあつたが大丈夫だよな？ひとまず、その日一日中はモーター・ボートで大海原を疾走しまくったと言つておこう、クラスメイトのアール・ティグレイルさん（灰色がかつたショートボブのスレンダー眼鏡伊少女である）が「はやくけつこんするんだな」とか言つていたがどういうことだろうな？セシリアは「け、けっこ……」
「とかしゃべつて蒸気噴出していたが……？」

そして楽しい時は流れて日も沈み満月が美しいころ、大広間にて賑やかな夕食時になつっていた。普通はこういう場合は逆に浴衣はダメではなかつたのだろうか、不思議なことに浴衣着用が義務付けられていた。そういえば、温泉は素晴らしく良かつたぞにごり湯で保溫性が高く、源泉で温泉卵も作つたし。後で千冬さんに差し入れでもしようか？

「ぐう・・・・・・つう・・・・」
「・・・・・・」

その前に俺の右隣にいるブロンズ少女に提言でもしようか、さつきからふるふる震えて苦しそうにしてるし、まともにせつかくのカワハギも食べれてない。今では高級魚扱いらしいんだよな、滅多に食べる機会が無いから知らないけど。

「なあ、セシリア。そんなに正座苦しいんならテーブル席に移ったらどうだ？」

「…………あう……それは……無理な、相談ですわ。これくらい、ここを勝ち取った苦労に比べれば……」

どうやら何があつても移動はしないらしい、世界中の国々から生徒が集まっているE.I学園ではそれぞれに対応させるため、今が良い例だがテーブル席と座敷というふうにしていたりする。俺は勿論日本人だから座布団に正座で座つて食事をしている、反対側には一夏とシャルロットが並んでいたりする。あ、俺の左側はラウラだ「この程度、拷問訓練に比べれば……」とか言っていた、うん、違うから。

「…………セシリア」

「Now thank you」

わざわざ英語で返すほど移動するの嫌か、そんなにか……なにがそこまで駆り立てるのだろうか、女子って不思議だね。まあ、こくなつたら仕方ない、最後の手段だ。

「セシリア、いつまでもそのままだと美味しく食べれないだろ。俺が食べさせたあげようか？」

「……? は、はい！」

おおっ、ここまで食いついてくるとは思わなかつたぞ俺。そんなに身を乗り出して……頼むから一回座つてくれ、田の行き所にこつちが困る。ああ、座つたな。よし……誰も見てないな。

「わさびはどうする?」

「少なめでお願いしますわ」

「了解、はい、あ～ん」

「あ、あ～ん／＼・・・お、美味しいですわね／＼」

「だらり、だらり、獲れたてのカワハギみたいだからな」

箸で皿に円形に盛り付けられていたカワハギを一枚、わさびをほんの少し載せて醤油（だりやらお高いといひのらじい）にちりつけてセシリアの可愛らしさに口に手を添えて運ぶ。ちりつと反対側に視線をやるとシャルロットと反対側に居た簪ちゃんが一夏に頬を染めながら「はい、あ～ん」をしていた。聞いた限りで週1のペースだが一夏も訓練の合間に専用機の製作を手伝つてゐるらじい、今は確かに武装の開発途中だとか。やつたねかんちゃん！

「あ～！識斑君が『テュノアさん』に食べさせてる～！～！」

「私も私も～！」

「ひつなつたら如月君に・・・」

「お兄様、私にも」

ひとまず、リウリには一口キモを食べさせてやつた。さて、この群集をどう散らせよつか・・・あ。あることを思いついた俺はサイドテールを纏めている髪留めを外して、髪を散らせる、そして浴衣をはだけさせて肩を少し露出させて上田遣いで一鳴。

「やれしゃくしてね？（裏声）」

「いふわ・・・」

「我が生涯に、一片の悔い無し!」

「あふ、あふふふふ・・・（バタム」

「あばまばまばまばりゅうり・・・」

「ふはつ（ピチコーン」

俺のハニートラップ（↙e「恥じらい乙女」）にクリティカルで撃墜された女子数名が鼻から大事な何かを噴出すもなにも汚さないという妙技をやつてから、他の生き残った女子に連れられて席へと戻つていった。生き残った数人には残っていたマグロの赤身を小さく切つて一口食べさせた後、戻らせた。広間に近づいてくる千冬さんの足音が聞こえたからな、一夏はいまだに攻め寄られているが・・・まあ、頑張れ。俺は浴衣を直してセシリ亞と膝に座ったラウラに再び食べさせ始めた。既に俺はほぼ食べ終わつたからな。

「お前たちは静かに食事を取りることもできんのか！」

まあ、騒がしいのは一夏の周囲だけなんだがね。俺の周りやさつき俺が食べさせてあげた女子は満足そうな表情で普通に談笑しながら箸を動かしている、遠目からではあるがどうやら丁度一夏がお返しに簪ちゃんにカワハギを食べさせているところだった。一夏は少し恥らいながら簪ちゃんの口へと運んでいく、対する簪ちゃんは嬉しそうにしていた・・・あいつら良い雰囲気出してるじゃないか、こつち側に文句たらたらであのひづけ氣を放つている笄がいるが。

「織斑、あまり騒ぎを起すな。沈めるのが面倒だ」

「は、はい。すみません」

まあ、一夏はほほ悪くはないんだがな。近づいていった女子がまあ、

うん、同じ年の男子だからあれこれしたくなるのは分からなくもないんだがな。自重というのも必要だぞ、ナノドクターの開発チームのメンバーはそんなの塵も感じられないがな！

80 · 楽しい夕食（後書き）

どうでも良いこの作品情報

今カラは素晴らしいパソコンになりました

81・今宵の酒は良い酒だ（前書き）

未成年はお酒飲んじゃ つけませんよー。

81・今宵の酒は良い酒だ

その後、千冬さんが戻つてからも責め続けられていた一夏を「アデュー」だけで放置し、宛がわれた部屋へと戻つて来ていた。どうやら俺が一番早かつたようなので、つまり用にと適当にベランダへ出てガスコンロの炎と燃焼後の排ガスだけを展開するという手品のようなものをやりながら冷蔵しておいた鰯を金串に刺して高火力で表面を炙る。炎と排ガスだけを存在する状態にすることでガス台が無くても調理ができる、便利だろ？

「ふうむ、正装でとは誰が来るんだろ？かなあ」

空中投影ディスプレイで明日の専用機受理の日程を確認しながら表面が焦げ始めた鰯に包丁で切れ目を入れていく、呼び出して空中に浮かばせているサブアームはねぎをそのマニコピーラーターが小型高周波ナイフで小口切りにしている、久しぶりの出番であるm.k.?はワイヤーアームでポン酢の蓋を開けようとしていた。良く考えたらカオスだなこれ、一人の人間の近くで1・3mほどの流線型の機械腕が同じく空中に浮かんだまな板の上のねぎを押さえて切つてるし、足元では一脚の膝くらいの大きさのロボットが細長いワイヤーアームでビンの蓋をぐりぐり動かしている・・・まあ、慣れてるけどな。

「正装って言つたらあの息苦しいあれか？あれ気密性高くて嫌なんだけどなあ」

「私も重要人物が来るとだけしか知らされていない、正装といつことはそれなりの人物なのだろう」

何時の間にか戻つて来ていた千冬さんにm.k.?が脚部のパンクレス

「イヤを動かしてワイヤーアームで冷蔵庫から某伝説上の生き物が描かれた缶ビールを取り出して手渡す、浴衣姿の千冬さんが一瞬驚いたような顔をしていたがすぐにふう、と吐息を漏らしてベランダ側の椅子に座った。

「ですねえ、はいどうぞ。鰯のたたきです」

ああ、すまんな……相變わらず美味そ二たな

卷之三

サブアームを操作して冷蔵庫にあらかじめ入れておいた山デューを取り出してプルタブを捻りながらコンロと包丁・まな板を格納して小さなテーブルを挟んで千冬さんと向かい合ったように座り、夜空に浮かぶ月を眺める。千冬さんはお構いなしにビール片手にたたきをつまんでいた、いつでも美味しそうに食べてくれるから作り甲斐があるんだよね。

「お? あう 一人とも戻つてたのか?

「誰も連れ込まないとはつまらないな」

いや、俺はそういうのはまだ・・・なあ//「

「おお？ 千冬さんも少しニヤニヤしている、これは良い弄りのネタを見つけたぞ・・・ふふふふふ、まあ、俺は弄らないがな。一級フランク建築士の惚氣など面白くないわ、普通に・・・さて、と、行って来いミーリEX、屋根の上でさつきからこっちを観察している権限乱用馬鹿を始末してこい。少しして「いやああああああああ！」とか某生徒会長らしき声が聞こえたが気のせいだろう。ちなみにE.Sの装甲に使われる特殊合金と防弾シールド用の硬化ナノマシンの複合装甲だから簡単には破壊できない、結局逃げるしかないのだ！！ふうはははははは！」ついでに対レーダー用ステルス機能搭載だから有視界戦闘以外ではE.Sにも量産機程度ならば互角だ、ほ

ぼ自衛用に作ったやつだがな。

「そういえば千冬姉、明日って一日中実習だよな？」

「ああ、候補生はパッケージの運用試験に如月は専用機の受理だ。粗相はするなよ？」

一夏が本当に久しぶりに千冬さんにマッサージをしている、肩揉みと言えど一夏の腕は驚くほど確かにため本当に気持ち良い。それこそ、あの千冬さんが目を細めてリラックスした表情を浮かべているほどだ、いつだか俺もやつてもうつたときの気持ちよさで寝てしまっていたものだ。

「ふう・・・」

「せめて少し彼らに威儀出してこても良いだりう？」

「ら

「今ぐらことはゆっくりしてこても良いだりう？」

「そりゃあ、田頃を考えればそうですけどねえ」

実の弟と親しかった隣家の少年が唯一のIIS操縦者になり、クラス対抗戦では未確認所属不明機に侵入・攻撃を受け、学年別トーナメントでは第一試合で違法のVTSシステムの発動・暴走により中止。なにかある度に始末書を書きながら後始末を深夜まで作業し、落ち着いたころには転校生の一人が女子だとバラす。落ち着く暇などほとんど無かった、生徒のために苦労するのが教師の仕事と言えばそれで終いだが、こたとか問題が起につきかかる。そりゃあ疲れるわな・・・。

「じゃあ、これでもいいですか？」

「ほお、ヒレ酒か。うむ、貰おつ」

女将さんから頂いたふぐのヒレを指先から出した炎で炙り、それをm-k?の中に展開して温めておいたとつくりの中に入れて風味が移るまで待つ。十分ヒレからにじみ出たそれにより、名酒は皿みを増していく。古来から伝わる酒を愉しむ方法の一ツである、それを少量お猪口に注いで顔を綻ばせた千冬さんに渡す。ついでに柿ピーも皿に盛った状態で出す、個人的に料理用に買った日本酒であるが名酒なだけあって香ばしい香りとともに風味ある空気が広がる。

「へ、はあ。良く用意できたな」

「女将さんが快く譲ってくれたんですよ、一夏、ヒレせんべいあるぞ」

「これってふぐのだら・・・滅多にお皿にかかるないな」

あれこれ懐かしい話をしながら、一夏と俺はヒレせんべい（ヒレを高温の油でカリッと揚げたもの）を千冬さんはヒレ酒を飲みながら久しづりの団欒を楽しむのだった。・・・・・まあ、ここで終わらないのがお約束なんだよな。

その後、一夏に久しづり（何回も使っているが実際そうなだけ）に俺も指圧マッサージをしてもらっていた。その際に少しアレなあえぎ声が口から漏れてしまうのはこつものことなので一夏も気にしていない、まあ、髪を散らしてこるから傍目から見れば男女に見えない

くもないんだがね。

なぜかグループの部屋から出て行く際に「頑張れセッサー！」とか「エロくない……だと！？」とか聞こえましたが、一体どういったことでしょう？わたくしはただ用を足しに行くだけなのですが、まあ、音羽に少し明日のことで話を聞きに行つてもいいですね。・・・・・・・そんな陽気な考えをしている時期がわたくしにもありましたわ。

「　　」・・・・・「　　」

「！？」

なぜか、「教員室」と張り紙がされた男子と織斑先生の部屋の戸に張り付くようにして聞き耳を立てている篠さん、鈴さん、シャルロットさん、ラウラさんが居ましたわ。しかも全員死んだ魚のような目をして・・・何がどうなればこんな状況ができるのでしょうか・・・？

「あの、どうかな」「静かに」なんですか？

すると、ラウラさんが手招きを顔面蒼白でしていましたわ・・・だから一体何が（ゝゝ）

『あはは、音兄久しぶりだつたな』

『そ、そうだなあつ！』

『・・・・結構溜まつてたんだな』

『おっ、最近は特にイイ！！ねえツ！』

『ほら、力抜いて・・・よいせ』

『ふあああん！・・・はあ、はあ・・・』

指示されるがままに耳を近づけて聞こえてきたのは・・・え？・・・
・これは・・・日本で言つ腐つた女子が好むと言われているボーイ
ズラブ・・・鈍感ではなくそういうことでしたのね・・・は
う（バタン

「・・・？誰か戸の前で倒れたのか？」

「まあ、待て」

千冬さんが抜き足差し足で気配を殺して戸に近づき、何かに悩られ
なによろにして一気に開け放つ。指圧による激痛が弱まって上半身
を起こした俺が見たのは『へぶつ！！？』とか言つ女子が発しちゃ
いけないような声と、絶望しきった表情で「終わつた・・・なに
もかも・・・」とうわ言のように文字列をリピートし続ける倒れた
セシリアの姿であった。・・・なんだこれ。

8-1・今宵の酒は良い酒だ（後書き）

どうでも良い作品情報

某人たらしひどいかでREXとお戯れ中（こんな予定じやなかつた
のにて・・）

82・上りし月夜に少女は言つ（前書き）

さて、空氣と化していたあの人があよーじと出てきます。
贊否両論ありそつて凄い怖いです

なぜか一夏だけではなく、俺まで汗を流してこいと部屋から閉め出しを食らった俺ら……解せぬ。まあ、その後「大丈夫だつて、俺はセシリアのこと好きだよ」って言つたらビンタ食らつた、しつかり普通の男であることを明言しただけのことなんだがダメだつたらしい。俺の本当の気持ちをそのまま言つただけなのだがなあ、なんでだううな?

「いや、こきなり言わればそつなるだろ」

「……そんなものか? それは悪いことをしたな」

漆黒の夜空に浮かぶ満月を見上げながら俺と一夏は露天風呂に浸かっていた、湯の温度は高めであり遊びつかれた身体をほぐすには丁度良い温度であった。湯には俺の長い黒髪が放射状に広がつて一つの芸術のようになっていた、一夏はおじいちゃんみたいにほう、と吐息を垂いていた。

「あ~、明日は水分補給必須だな

「ん? なんでだ?」

「・・・重要人物、英國、専用機受理・・・確実に政府関係者か開発チームだろ」

「うわあ、めんどそうだな

「まあ、これで良いだろ

そつ言つて私たちを引き止めて部屋に招きいれ、簪さんも連れて来てなぜか更に一人ひとりに飲み物を渡してきましたが・・・何か狙いでもあるのでしょうか?わたくしは紅茶を貰いましたが・・・織斑先生の飲んでいるのはヒレ酒ではありませんの?就業中に良いのでしようか・・・。

「なに、そのための飲み物だ」

『あつー!』

なるほどビ・・・とは思いますが、ラウラが現状を理解できていよいよつでさつきから口をぱちくりとしていますわね。確かに普段の厳格で強く頼れる教師の姿は無く、ただの酒飲みのお姉さんのような、どうやら開いた口が塞がらないのはわたくしだけではないようですが・・・。簪さんは大丈夫なようですね、少し前には聞いた一夏さん宅にお泊りと書つのが原因でしょうか?

「そ、それで一体このメンバーでビーフしたのですか?」

「ふむ、まあ単刀直入に聞け。あいつらのビーフが良いんだ?」「――」「――!?」「――」「――」

まさか織斑先生がそのような話題を自分から出してくるとは、お酒の影響でしょうか?別に恥かしがることではないと思うのですがどうやら私以外の皆さんは恥かしい様子、自分の気持ちを素直に表せばいいのでは・・・?オープンすぎるのも考え方ですが。

「べ、別に私は腕が落ちているのが腹立たしいだけですの・・・」

「あたしは腐れ縁だし・・・」

篇とも鈴さんも素直ではないですね、ラウラに聞いたシンテンレ
とこつものでしょつか？良くなはわかりませんが「違つー」「違うわ
よー」・・・そういうとこりがシンテンレの特徴だと聞きましたがこ
れ以上は野暮ですわね。

「ふむ、ううか。それではそいつえておひづ」
「言わなくて良いですーーー！」

しつとそんなことを言つ織斑先生、口角が上がつてゐるのから推
測するにこの反応を楽しんでいる様子・・・ラウラはいまだに固
まっていますわね。いつになつたら再起動するのやう。はははと笑
つて一蹴してゐるを見ればそつなつて・・・しまづのじょうね。

「僕、私は優しいといひます。心から自分を思いやつてくれるとこ
ろが・・・／＼」
「ほう、しかしあいつは誰にでも優しいぞ？」
「はあ、まあそこまで・・・」

ぼそつと小ちな声で呟くひづ語り、すぐに恥かしげに俯いてしま
つたシャルロットさん。確かに一夏さんは誰にでも平等に優しいで
すわね、それこそ自分のことなど省みずに首を突っ込んでいつて無
理矢理にでも相手のために動く。

「・・・わ、私は・・・いつも影で支えてくれるところです・・・さ
り気なく手を貸してくれる、それに助けてもらつた・・・」

簪さんは過去にいじめられていたところを一夏さんと鈴さんに助け
ていただいたそうですわ、それも生徒会長だった音羽が解決に動き
出すよりも前に。並み居るいじめっこ達を田の前で蹴散らし、怪我

の手当てまでしてくれたとのこと。それ以後はお互に困ったときは支えてくれる存在だと、正にヒーローだったのですわね。

「・・・強いところが、でしようか」

「あいつは弱いだろ？」「

「いえ、私よりはずつと強いです・・・」

確かに、真っ直ぐな気持ちは今の時代には珍しいほどですね。音羽も「あいつには本当の意味で勝てない」とまで言っていましたものね「で、お前は？」はうつ！？

「・・・わたくしの幼いころからの「騎士」^{ナイツ}ですわ。どんな苦境でも心と身体を守り抜いてくれた、唯一の人・・・」

「・・・ほう」

わ、わたくし何か変なこと言つたのでしょうか、織斑先生とラウラ以外は俯いて震えていらっしゃるのですが・・・それも「くつ、これほどまでに純粹な・・・」「ぞ、ゾッコン過ぎじやない」「流石お義姉さま！」・・・しかも歎くように小さな声で叫ぶといつ。

「ふむ、如月はまあ、努力次第だが。さてお前はほんたうだ、欲しいか？」

「――――くれるんですか！？」

「フツ、やるか馬鹿。奪つぐらこの気持ちでこかなくしてどうする、自分を磨けよ少女共」

そつして残り少ないヒレ酒をぐいっと傾けた織斑先生、ぼそつと「如月め、良い女に惚れおつて」呴いていましたが良く聞こえませんでしたわね。まあ、今は何時まにか寝てしまっていたラウラを撫

でましょうか。

「わ、こ、や、あ、一、夏。お前は好きな子、いるのか？」

「・・・・・ノーノメント」

「そ、う、か、つ、ま、り、簪、け、や、ん、は、買、い、物、に、一、人、で、行、つ、た、り、す、る、け、ど、だ、の、友、達、と、・、・」

「な、つ、！、？、な、ん、で、そ、れ、を、知、つ、て、る、ん、だ、よ、！、」

「お、ひ、鎌、を、か、け、て、み、る、も、の、だ、ね、？」

掴みかかってくる一夏を右腕で押さえつけて夜空を見上げると、後ろから戸を開かす音がした。カラカラって音って良いよね、趣があるで。

「ふ、う、ふ、う。や、つ、と、た、ど、り、着、い、た、わ、よ、・、・、」

「・、・、お、お、R E X、倒、し、た、の、か。流、石、だ、な、櫛、無、」

こちらに投げつけられたM—I REXの待機状態を掴み頭の上に乗せたタオルにくついたチップに格納する。一夏は「櫛無さん！？なんでここに、といつかなんで男湯に！？」とか叫んでいたので日本の伝統H A R I S E Nで静かにしておいた。

「それで、何用だ？・・・ひとまずは入れよ

「そうさせてもらつわ、一夏君も良いかしら～（ちゅ～とお話をせてくれないかな？）」

「は、は、こ、じ、う、ぞ、ゆ、つ、く、り（わかりましたから通信回線介してカールマイヤー流さないでください）」

そりいえば初めてだな、こいつやつて三人で風呂ひても。一夏は田のやりどころに困ったのか慌てているが・・・俺はなぜか左腕絡まれて柔らかいアレが当たつてんだよ!いや、こいつのことだから「当たつてる」んじゃなくて「当てる」んだろうがな、俺の慌てる反応見たにとかで。もちろん俺のmy近接ブレードが一閃打突ギリギリで理性総動員で押さえ込んでるわけだが。

「・・・できればやめてほしいんだが「じゃあ」やつくつへーーー!」
「あ、一夏お前逃げんな!ーーー!」

拘束されていない一夏は耐え切れなくなつたのか、即刻退散。居なくなる理由はのぼせてるつてだけじゃないよな?てか、俺を犠牲にして逃げるな・・・・・行つちまつたよ。せつかく年上のお姉さんの鑑賞しないでいくのかあいつは、あれでも男か?まあ、ベッドの下にそういう本はあつたから正常か。

「・・・で?何か襲撃犯でも見つかつたのか?」
「なんでそういう話にすぐなるのよ・・・」
「違うのか?」
「仕事の話をこんな場所でゆつくりするわけないでしちゃうが・・・」
「まあ、当たり前か」

さて、更識の関係でもない話じやないとしたらいつまでして来るとは何事か。別に話くらい学校でも好きなだけできるだらうになあ、楽しそうだから」つて理由で来てるのだらうか?

「ねえ、音羽つて好きな人いる?」
「こきなりなんだ數から棒に・・・つて酒臭いぞお前

「む、やうこつのは突つ込まないものでしょ？」

「・・・そうこつものか？」

「アハこつものよ」

ふむ、一つ勉強になつた。いや、未成年の飲酒はいけないがな・・・
・酔いが冷めるまでは動けないじゃないかよ・・こいつはまったく
・・。

「・・・あのや・・・」

「なんだ？」

「・・・・・私や・・・」

「ああ・・・・」

なんだ、この歯切れの悪さは？酔つたからこいつはいつな奴ではないと思うが・・まあ、時間はあるしゆつくり聞こつか。おそらく部屋ではガールズトークで賑わつてこるといひだらう。

「音羽のことがね・・・」

「うん、俺が？」

「好き」

「そりが、俺も美冴のことは好きだが・・・？」

「I Love you」

「・・・・・え？」

「じゃあねー！それだけ」

・・・・・・え？俺の聞き間違いじゃなければ「I Love
e you」って・・・

美月が何てって言つた
-LOVEつて

LOVEって？ - 愛してるって意味

誰に？
-俺に

その夜、とある男子の驚愕の叫びが、こだました。

82・上りし月夜に少女は言つ（後書き）

どうでも良い作品情報

誰が純粋な元執事と元主人の物語と言つただろうか？

83・重要人物（笑）襲来（前書き）

原作ではリアル年代が明らかにされていないので西暦の提示はしませんでした

ツツツツ/満載・・・ですね（汗）

紅椿のお披露目は反対側でやつてゐる感じ（原作準拠で進行中だと思つてください）

三一ロッパの嘘をとじめんなさい

正装は個人的なイメージです（T-S=剣の受理だからいつなるんじゃね？という想像です）

上記の内容が許容できる方はどうぞお進みください

「…………ふう」

昨日の美月のあれつていつもの俺のリアクション担当のそれだと
思い至った俺は・・・吹っ切ることもできなくて睡眠薬を飲んで昨日
無理矢理に床に着いた。そして翌日朝5時、まだ目覚めないでふ
とんをはだけさせている千冬さんにかけ直し、一夏をそつとふとん
に戻した後一人で浴衣姿で海岸に来ていた。

「冗談とはいえ、意識しちゃつのはなんともなあ・・・」

波打ち際の丁度良い形の岩に腰掛けて脚をブラブラさせながら朝日
を眺める、下から吹き上げる潮風に誘われて結ったサイドテールが
荒々しく揺れる。朝日に照らされてか、俺が火照ってるのか、どちらにせよ俺の色素がそこそこ足りないような頬がほのかに朱に染ま
つっていた。

「結局、俺も本当に一人の男だったってことか?・・・なんとも困
る検査方法だよ」

どうやら、昨日の一件で俺は今まで深く意識していなかつたことへの最終耐性ロックが壊れたらしい。それもよりによつて良く知る人物によつて、帰つたらどう相手しろと言つんだ。経験すらないから分からぬじやないかよ、まさか今まで通りにとは・・・いかないだろう。意識しないようにと生きてきて突然なんだ、無理もないか・
・。

「ふう、まさかこんなことだけでうろたえるとはなあ・・・気に

しても仕方ないか・・

旅館に戻り顔を洗った俺は朝食もそこそこに実習会場であり、「専用機受理」が行われる場所へと異動するのだった。もちろん、『正装』をして。

SF映画の一舞台のように地下を一回ぐるりから再び地上に出てくるとがけに囮まれている開けた場所に出る、バイハザードとかでありますだな、ボスフラグで。そういうえば同じような地形で銃撃戦したこと也有ったな、謎の組織b yドイツの特殊部隊とS & am p; WのM500をぶつ放して応戦した。もちろん死傷者無しで・・・良く考えると人間の1・3倍とかの域じゃないよな・・似たようなのを「想定」した「訓練」をミリアさんにやらされたことはあつた。あれ、俺つて身体がどうとかの前にミリア式訓練でのほうがチート化してないか?

「・・・・・」

現在、某ベルサイユのローズもかくやといふほどの服・・・黒い長袖に白の薄い手袋、その上に特殊軽量合金製の胸部甲冑。乗馬用の防弾・防刃纖維の動きやすいズボンに地上戦用の脚撃用鉄板が入つたぴつちりの長靴。左胸には青い盾に槍が交差した『認定騎士』の証のバッジに、緊急権限用の黒枠青線が平行に4本の『大佐』の袖章。レフトサイドテールは髪留めではなく、白枠青線の模様のリボンで留めている。極め付けは左腰に某セイバーさんのような洋剣を

帯刀してこる」とへりだらうか。

「うわあ・・・・何アレ?」

「音兄すげえ・・・」

横に並ぶセシリアは随所に剣撃を受けるための防刃プレートが並べて縫いこまれている青の白フリル付きの偽装外装ドレスに身を包み、普段と程遠いマットブラックの硬質ブーツを穿き、綺麗なブロンドの髪は同じく白枠青線のリボンでポニーテールに纏められている。

「・・・・ふう、肩こるなあこれは」

「ええ、候補生任命式以来ですわ・・・」

さつきからずつと右側にずらつと並んでいる一般生徒の皆さんに視線が突き刺さる。英國出身者の一部は目を見開いて俺を見ている。
・まあ、王室騎兵隊を構成する「ブルーズ・アンド・ロイヤルズ」の制服に見えなくもないからな、一人はバッジを見て「粉 バナナ」とか周囲の目も気にせず叫んでいたがな・・・。山田先生は驚きすぎてさつきから予定表と俺達をきよろきよると見比べている。

「・・・・よりによつてあの人なのか」

「・・・・また公務をサボつて來てるのじょうね・・・」

はあ、とため息を着きながら遙か上空をこちらに向けて飛んでくるSTOVL機であるF-35B（メタリックブルー塗装）を眺めるのだった・・・。

「何！？ F - 35B ・ ・ ・ なぜここに？」

「えふ・・ 35？あれのことか？」

I Sが世界中の国防を担つこの世の中でも、一国家の国防全てをI Sが代替できるわけではない。英國は保有コア数は12、そのうち機体運用されているのは4機でありその一つがセシリ亞の専用機「ブルー・ティアーズ」に使われている、他のコアのいくつかは新型機開発に使われていてそのうちの一つが俺に「専用機」として渡される。まあ、結局 I Sが登場しても技術フィードバックされた現行兵器群が前線に立つているのだから問題ない・・わけではないよなあ。まあ、英國には凄腕の戦闘機乗りが多いらしいから問題ないのか？ I Sを落とした人も数人いるらしいし・・・。最近 P I Cが使われた V T O L 機が開発されたらしいし・・・。

「F - 35B、あれは・・・最新鋭の G C 型ゲームキューブじゃないよかよ、また『借りるぜ』とか言って空軍からふんだくつたんだろうな」
「・・・まあ、何時もよりはマシですわね」

生徒がいない空き地に垂直着陸した蒼穹の金属の鷹、そのキャラノピーを跳ね上げてはしごもかけず飛び降りて来た白いライトジャケット姿・・・現イギリス連邦王国女王「クイーンエリザベス3世」その人であった。陛下は俺を見つけるとぱあっと輝くような笑顔を見せ飛び込んで来た、陽光に晒されて光をキラキラと反射する健康的な白髪は腰まで伸びている。女王が戦闘機を乗り回すのも大概だが、歴代女王最若年の21歳での即位である（現在28）。勿論そうなったのも名実共に実力があつたからこそ、なんと旧世代のF - 15 Aを内部部品の新規パーツ入れ替えただけの機体でラファール・リヴァイブ3機をM61A1 20mmバルカン砲によるへ

ツドショットとAIM-9サイドワインダーの至近距離限界での接射のみで撃ち落したのだ・・・「ISでしかISを倒せない」その世界的に有名な製作者の言葉を見事に打ち碎いた努力チートの人物である。

「やあ、元気だつたかい二人とも」

「はっ、陛下こそお元気なようで」

「あ～んもう、セシリ亞ちゃんも固くなつなくて良いってのに～」

正装した俺とセシリ亞の頭をがしがしと抱き寄せながら撫でているこの人が、かの有名な「エリザベス3世」である・・・『国民と並んで歩く』という高位者には珍しい考えの持ち主である。2世の場合はまだ高貴さが残っていたがこの人はそれを余裕でぶち壊していく、なにせ日没後に護衛も着けずに市街へ自転車で繰り出してバーでビールを飲んでいるほどなのだ。時には近所のおばさんよろしく託児所で手伝いをしていたりと『王室の人間』とは思えない、血筋はそれでも王室だから不思議なものだ。まあ、その自由奔放さが國民に人気の理由の一つでもあるのだがな・・・。

「陛下、もう少し威厳を出してくださいな。皆さん驚きすぎて固まっていますわ」

「あら? ホントね」

もう一度言つが、このロング白髪ナイスバディのお気楽お姉さんに見えるこの人が「エリザベス3世」である。なんか反対側では赤いISが落下してきたカプセルから出ているが、それに注目しているのは一人不思議に国のアリスをしている女性と笄と一夏と千冬さんだけである。最新・最高性能とか聞こえるがそれに驚いているのは一夏だけで他の生徒はこっちを見て呆けていた。

「じゃあ、自己紹介でもしようか

きりつと姿勢を正して随分ご無沙汰だった「真面目モード」になつた女王、何時の間に着替えたのかラフな水色のタンクトップに青色が濃いGパンになつていた。その隣で米神を押さえている一人の騎士、シユールにも程があつたが女王の威厳により気にならないほどになつっていた。

「初めまして、現イギリス連邦王国女王、エリザベス3世です。今日は彼の専用機を渡しに来ただけだからみんな普通にしてね？ 気輕にえつちゃんつて呼んでね」

そう言つてウインクをする女王陛下、結局真面目顔は名前言つ聞しか持たなかつたか。イギリス出身の一部生徒は普通に「えつちゃん本物よ～！」とか「ここくらいしつかりしようよ～」とか言つている、他の生徒は『これが女王？ そんな馬鹿な』みたいな表情を浮かべている、まあ、俺だつて騎士認定式の後の晩餐会でいきなり女王に「はい、あ～ん」なんてステーキ一切れ食わされたときは驚いたよ。今は「こういう人」つて分かつたから動じないがな、セシリアもそんな感じだし。

「じゃあ、音羽君。今日の本命始めるよー！」

「委細承知」

真夏の太陽に負けないな、と思えるくらいの笑顔で手招きされて俺は女王の元へ歩き始めた。

8.3・重要人物（笑）襲来（後書き）

どうでも良い作品情報

えるしてゐるか、まだ「じょおいつとひょう」しかしていないぞ

84・番外IF その4「事件(笑)」(前書き)

番外編の音羽は本編と違つて体のことをすべて知っています。

また、本編とは身体の設定が違いますのでご注意ください。

番外だからあれこれおかしくても許してね

作者の東方知識は二次創作と某笑顔百科程度の知識しかありません
ので「これがおかしい」などのツッコミはご遠慮ください。

84・番外I/F その4「事件(笑)」

ひとまず、適当に残っていたもので昼食を作り一人（いや、二）の場合一人と一体か？）でとつているとふと思い出したことを口に出す。

「そういえば紫さん」

「あら、美味しいわねこの味噌汁」

「そうでしょう？腕が違うんですよ。・・じゃなくて」

「どうしたの？」

「俺がスキマに落とされたときに近くにいたあの女の子大丈夫なんですか？」

「女の子・・・ああ、チルノのことね」

チルノ？そういえばオルゴット本邸の近くに散歩つて名前の和風の屋敷があつたな、確か槍術の家元だつたか、なんでイギリスに居を構えているのか知らないけど。まあ、幼い俺にミリアさんが不在のときにセシリ亞共々そこそこに教えてもらつてたな、おかげで塩ビパイプでも刀とやり合えるようになつちゃたし。女王陛下もそうだが、イギリストてどうして規格外な人ばかりいるんだろうね。わけがわからないよ。

「あの子、チルノって言つんですけど」

「ええ、あのへんの湖を縄張りにしている氷を操る妖精よ」

「妖精か・・・」

俺が知ってるイメージとは違うな、まあ、まさか氷弾を撃つてくるとは思わなかつたがな。本物と伝承は違うということか、あまりに差異がある気がするがな。

「まあ、チルノなら大丈夫でしょう。あのあと起き上がりでどこか行つたみたいだから」

「そうですか、なら良かつた……」

ふつう、かたつむり（ドラムマガジンのこと）を当てられて大丈夫な人間はいないがな。あれ、実質金属の塊だし。そのまま草原で倒れているままだつたらどうしようかと思つた、妖精とはいえ女の子を氣絶させて放置は嫌だからな。

「さて、と……」

昼食を残さずに食べ終わると、俺は腕時計型格納領域から大切に冷蔵して仕舞つておいたプリン大福を一個展開しようとイメージする。I-Sの武装展開と同じでイメージが大事なんだよな……。

「あれ？」

「どうしたの？」

「いや、しつかり冷蔵しておいたプリン大福が見当たらないんですよ」

仕方なく、イメージを止めて空間投影ディスプレイに格納している物の食料系の一覧を映し出す。カロリーメイトやカツブラーーメン、米300kgに小麦粉200kg、各種調味料に野菜や果物など色々入っているが……『冷蔵』のリストの中には魚と練り物などの低温保存が必要なものだけであり「プリン大福」の「プ」の字も見つからなかつた。昨日3時間も並んでやつと買って仕舞つてから手をつけてないから無くなるわけがないんだが……。

「プリン大福……ねえ……」

俺が視線を向けるとちらりと田を背ける紫さん、常人では気づかないかもしれないが偵察・捗問・その他諸々のスキルを身につけさせられてしまつた俺には見逃すことはできなかつた。いや、常人でも気づくかこれは？

「紫さん」

「な、にやにかしら・・・はう／＼」

「スキマ使つて俺のプリン大福食いましたか？」

「えつ！？・・そ、そんなこと・・・」

「目が左右に45・37度ずつ泳いでますが？」

「やつぱり・・・・・」

「いや、本当は食べるつもりは無かつたんだけど、その・・・」

「MsYukari・・・・」

「な、何？」

「覚悟は良いか？」

「え！？ちょっと待つ、その、とりあえず私の話を・・・」

俺は武器用格納領域から刃渡り（？）5mとあらうかというほどの大リセンをわざとゆつくり展開する、目の前で巨大な何か剣のようなものを光の粒子が像を結びながら今正に現れようとしているのだ。そしてそれを恐怖を浮かべながら見つめる妖怪の賢者、逃げることもできなくその一閃を食らう羽田になつたのだった。

「あやふうつ！――」

「・・・・・」

返事がない、ただの賢者（笑）のようだ。呑きのめされて床に伸びている妖怪の賢者を見下ろしながら乱れた服を整える。

「仕方ない、買いに行くか・・・」

「一つ・・・良いかしら」

「なんだ？」

「幻想郷にプリン大福は無いわよ？」

「なん・・・だと・・・」

そういうえば、そうだ。大福はあるだろうが、カラメルや生クリームがあるかどうかも怪しい、それ以前に冷蔵設備も無さそうだ・・・だいいち売つてたとしたら俺が知っているわけもない・・・不覚！ならば・・・最終手段か。

「自分で作るしかない！」

「作るって・・・そんな変わったもの簡単に作れるの？」

「本格的なものは無理だけども、似たようなものなら作れるはず。原料くらいなら幻想郷にもあるでしきうし」

「ちなみに原料は？」

「ん~、砂糖と白玉粉に卵くらいですかね。後は一応持つてますし」

「それなら、全部人里で揃えられるわよ」

「おお、それは良かつた」

「ええ、人里まではスキマを使えば一瞬で行けるわよ。行く？」

「お願いします」

「じゃあ、スキマで送るわよ。その間私は・・・」

そろ~つと思案顔の紫さん、なにかよからぬことを考えていくよう

な・・・

「何してゐるんです?」
「・・・お寝してゐるわ(キリッ)

「却下」

「ええつ!?

「ええつ!~じやないですよ、寝るんだつたら買い物手伝つてください

さい」

「だめだ」の観者、早くなんとかしないと・・・なんか一日1~2時間寝なきゃあ~だこ~だ言つてるし・・・なんてこつた!

「そんなんしてたから式に逃げられたんでしょうが・・・とにかく買い物には来てもらいます。異論は認めません」

「ひどい・・・」

「ひどくないです。わあ、行きまますよ」

「は~こ・・・」

「は~こ・・・」

「ここが人里か。思つたより賑やかだな」
「そうね。お昼時つてのもあるけど、ここは市が近いから人も多い
のよ」

「市ですか?」

「そう、大体の食材はそこで売つてるわよ
「なるほど、じゃあ早速行つてみましょ~」

そういうて市の方へと向かおひとしたとや・・・

「待て、 その一人」

「ん?」

聞いたことがない声（当たり前だが）がした方向に振り返る、そこに居たのは青髪のなんとも不思議な形の帽子をかぶった女性だった。美月よりは髪の色が薄いかな、どっちかっていうと青みがかつたでも言おつか。・・・うん、 ひとまず初対面だな。

「見覚えのある姿かと思つたが、八雲紫か」

「あら、 誰かと思つたら慧音じゃない。奇遇ね、 こんなところで会うなんて」

「それはこちの台詞だ。なぜ妖怪のお前がこんな真昼間に人里にいるんだ?」

「いやや、 紫さんの知人らしい。 気兼ねなく話していくところから察するに友人といったところか。

「いやね、 彼の買い物に付き合われているのよ

「買い物の原因を作つたのは紫さんですがね」

「うぐつ・・・」

「そここの君は? 見たところ妖怪ではないようだが・・」

「あ、俺は外の世界から來た如月音羽と言います」

「そうか、 外の世界から・・。 私は上白沢慧音、 いの町の寺子屋で教師をしている。 よろしくな」

「いわいわ、 よりしへお願いします。 音羽って呼んでください」

そう言つて俺は慧音さんに向かつてお辞儀をした、 どうやら俺の身体のことまではわからなかつたらし。まあ、 当たり前か。

「わかった。ところで音羽、君は何を買いに来たんだ？」

「俺はプリン大福の材料を買いに来たんです」

「プリン？ 大福はわかるが・・・」

「む、まさかプリンすらここには無いのか？ ふむう、これは由々しき事態だな・・・ 仕方ないといえば仕方ないのかも知れないが。まあ、説明をすることにした。

「えつとですね、卵と牛乳や砂糖を使った甘いお菓子です。それも子供からお年寄りまで世代関係なく人気な、外の世界だと専門店まであるんですよ」

「ほお、それだけの材料で作れるのか」

「はい、ただ、作るのには冷やすものが必要なんですけどね」

量子化して冷やしてもいいが、調理過程のものを本格的に冷やせないからな。冷却中に変質するものは入れられないし、やつたら展開したときに展開座標が狂つてどろどろになつて使い物にならない。あくまで冷却保存は完成したものに限られるからな、どろどろ不完全プリン生地ジュースなど飲みたくない。

「なるほどな、ふむ・・・」

プリンの説明をした途端、腕組みをしてなにか考え方をしあじめた慧音さん。どうかしたのだろうか、まさか、プリンはお好きでない？

「なあ、音羽。一つ頼みがあるのだが、聞いてくれないか？」

「頼み、何でしようか？」

「良ければ、そのプリンとやらを私の寺子屋で作ってくれないだろうか」

「え？ プリンをですか？」

「ああ、実は家庭科の授業で調理実習をやるのだが……何をやろうか悩んでいてな。それでそのプリンという食べ物なりいんじやないかと思つたんだ」

「なるほど、そういうことですか」

まあ、プリン大福も好きだが。そのままのプリンはもっと好きだからな、良いかもしない。プリンの素晴らしさを知つてもううこともできるだろ？

「どうだらう？ 材料はこちうりで揃えるし謝礼もするが……

「そうですね・・・

人に物を教えるのはそこそこにやれる自信はある、伊達に約三年間生徒会長をやつてはいいからな。応用といふことでプリン大福を作つても良いかもしない、甘い物とすれば子供が好きなものでも上位に入るものだ。

「わかりました、やつてみます」

「本当か？ ありがとう、感謝するよ」

俺の返事を聞くと、慧音さんは嬉しそうな顔をしてお礼を言った。良い笑顔だな、久しぶりに女性の笑顔を見た感じがする。最近はずっとあれこれ学校でも私事でも忙しくて見てる暇なんてなかつたらなあ、相変わらず男子勢の突き刺さる恨みがましい視線はあったがな。

「話はまとまつたみたいね。じゃあ、私はこれで～」

「Wait-Yukari」

紫さんがその場を華麗に離れようとしたとき、俺は畳に座る紫さんの肩を掴んだ。しつかり逃げないようにがっしつと。

「わひゅうー？」

「Where are you going.」

「・・いや、そろそろおことましょつかなあ～ヒ

「黙目ですよ、紫さんにもひやんと手伝つてもりこますから

「なにい！」

「そうだな、人手は多いほうが良い

「ですって」

「・・・仕方ないわね、毎の件もあるじ手伝つわよ・・・

「決まりだな、では、私の寺子屋に案内しよう」

渋々承諾した紫さんの手を引き、俺は慧音さんの後ろを着いて行くのだった。寺子屋と言えば日本の昔の学校の名前だったと学んだ、どうのうなものなんだろうな。まだ見ぬ寺子屋に思いを馳せながら、歩いて行くのだった。その間、紫さんが俯いて「あう、手を繋ぐなんて・・・」とか言っていたがどうしたのだろうな?まあ、いいか。

84・番外IF その4「事件(笑)」(後書き)

どうでも良〜い作品情報

考えた結果、本編とは逆にフラグ建築士・・・の予定?

85・ファイント作戦（前書き）

展開が遅いこと遅いこと・・・すみません

「さあて、はい音羽君
「・・・へビツヒトヘ。」

女王陛下がF-35Bのコックピットを『ソノソと漁りながら』ちらに一本の鞘に収められた剣を投げつけてきた、これって俺が今帶刀しているのと同じやつだな・・・輝き方がこっちのほうが良いけど。黄金に輝くそれは、歴代最高と言われていた騎士「ゲルフェイム・シリア」の愛用していた剣に似ていた。レプリカと言わればそれで終わりかもしれないが、それからは気迫を感じられている。聖剣は紛い物にすら命を与えるとは良く言ったものだ。

「いやー、専用機をただ渡すのはつまらないから。私が直々に試験をしてあげようかなあとと思ってねー!..」
「だったら、『正々堂々』仕掛けるものでしようがーー!..」

突然、5mも離れていたはずの距離を、一瞬で両刃剣を抜き放ち切りかかって来た女王陛下の一閃を鞘を抜き捨てた聖剣の端面で受ける。ガキイーン!!と金属がぶつかり合つ音に背を向けて第の専用機を見ていた一夏が振り返る。

「『騎士』なんだから不測の事態にも対応できなきゃいけないでしょ?」
「相手がアンタだったら無理ゲーだつづのーー!..」

なにせ、単機・指揮での戦闘能力は田の前にいる女性 女王陛下がトップクラスなのだから、「上に立つものが一番でなくて何が王か」とドイツ首相と柔道で3秒で倒すという荒業をやってのけたその際

の言葉を聞けばわかる。国民を誰よりも愛し、誰よりも守りたいといふ気持ちが強い、誰よりも強い人。そんな人に認められたのだからソレ相応でこちらも相手をしなければいけないのだが……ヴォーダン・オージェもアドヴァンスドでもないのに生身で一個大隊の銃撃を回避してあまつさえ銀食器だけで無力化した人を相手にどうしようと/or>うのか。天然ではなく努力の末に手に入れた力だというのだから凄いが。

「ふう、よつ、ほつ」

「・・・・・！」

幾度とも無く響き続ける真剣の衝突する音、同時に騎士の服が身体の動きに釣られてふわりと舞い踊る。剣士同士の本気でのぶつかり合い、互いに命を狩る刃を振るうその姿はその場にいる全ての者を魅了してしまうほどであった。切り下ろせば払われ、払えば間髪いれずに突きが襲い掛かる。陽光に照らされる刃は打ち合うたびに火花を散らし、振るわれるごとに煌めきを見せ付ける。

「これが本物の騎士、か。見事なものだな」

「これって……実戦の動きなのか？」

「お兄様、カツコいいです！」

そんなことを外野が口から漏らしている間も剣撃の応酬はひたすらに続く、鍔迫り合いに発展したころには右腕で相手の剣を押さえながら左腕で殴りにかかるという剣の勝負とは程遠いものへと変貌していた。あまつさえ、女王は音羽が放った踏み込みの袈裟懸けを回

し蹴りで往なして自身の剣の持ち手で首筋を突いている。英國軍で「女帝」と影で呼ばれている理由の一つである、曰く「武器を己の身体のみで無と化す」、矢はすれすれで手刀で叩き折り弾丸は剣で切り裂く、噂ではミサイルはその上を走り抜けて回避したとまで言われている。無論、それが噂かどうかは剣撃を素手で往なし続いている女帝を見れば明らかではあるのだが・・・。

「いやー、また強くなつたかな。流石だね」

「一応鍛えてはいるからなあ、貰つたあ！！」

全力の切り上げが女帝の握る剣の刃を両断して跳ね上げる、同時に女帝の身体を後ろから腰に伊田リ腕を回し抱き締めるようにして右腕に握る聖剣の一度も打ち合わせていない切れ味抜群の刃部分を女帝の首筋に触れるかどうかの距離で突き当てる、少しでも右腕を動かせば首が切れる、見事なまでの決着であった。結果的には。

「・・・うーん、流石だねえ。うふふ、大きくなつた音羽君、良いね」

「手加減されてる状態で勝つても嬉しくないんだが、それとちやっこり手を胸に寄せようとするな」

途端に崩れ去る緊張感、勝負を観ていた生徒と教師陣がはあと吐息を漏らして座り込む。斬られて弾き飛んだ刃の一部が足元に突き刺さつて一夏が「うわあつ！！」と驚愕の悲鳴を上げたのを観て簪が苦笑していたのは秘密である。

「さて、じゃあ合格だね」

「…………そ、そうですか」

いまいち手加減されての勝利といつことで納得できないといつ考えが浮かぶが、じゃあ本気出されて勝てるのか?と聞かれれば俺がどんな強力な武器や身体を持つていたとしても「不可能」と答えるに違いない、「女帝」とはそんな相手だ。まあ、手加減でもこのレベルで10%しか出していないのだから全力はどうなんだと聞かれれば答えたくはない。確実にISの存在が危ぶまれるはずだ、というかそれ以前に人間とは何だったのかと日々悩むことになる……女王ってなんだたのかとは会う度に考えてしまうがな、俺は。

「あ、篠ノ之博士。見ます?」

「…………いやない」

「あら、残念。まあ、いらないなら良いか、はい音羽君、得どいらん有れ!~!」

俺がいるからってそんな不機嫌にならなくても良いと思うがな、それに俺は突然来たmk?への秘匿メール(束博士から「楽しいことしない?」)に「自分の作ったもの 責任を果たさない子供への世話をしない親は失格だぞ?」と返信したことが原因で嫌われているらしい。俺は市場を制圧してしまわないうちに他企業には別の支援をして良きライバルとして争うような関係にしているため悪い影響は無い、ソレに対しても束博士はただISを作つて後はほぼ放置、存在によつて発生する影響を無視して世界中を逃げ回る。正直言つてその姿勢は褒められるものではない、別にそういうスタンスを全否定するわけではないが一人の財界の人間として考えればあんまりなあ、と言つたところである。一度しつかり話しをしたいが嫌われているから無理なんだがな。

「……で、今回はどこから来るんです?」

「ふふん、上よ（キリッ）

言われてからふいに上空を見上げる・・・接近する機影も無し、どこだよ。まだ最適化^{フィットティング}も初期化^{フォーマシット}もしていないISは待機状態になることができない。つまりそれまではコンテナだろうがなんだろうが格納状態で運搬しなければいけないのだ。・・・しかし四方八方を見回しても運搬車は見当たらず、コンテナらしきものも無い。上からは聞いたが・・・なにも来ないぞ？

「あ、来たみたいね」

「はい？・・・・・！？」

ふと陛下が指差した上空にはアグスタウェストランド・リンクスが底部に橢円形のコンテナを吊り下げて飛んできていた、それに気づいたころには女帝が無線機で指示を出していた。無線機からはヘリのパイロットであろう人物の声がローターの騒がしい回転音に混じつて聞こえてくる。バラバラバラとけたたましい機械の作動音が響く、波風と相まって吹き付ける風に思わず右腕を上げてしまう。

「よし、降ろしちゃつて！」

『了解！投下します！』

ヘリの底部に固定されていたコンテナが威勢の良い返事とほぼ同時にロックが外されて降下を開始する、ISを積載しているであろうそれはその重さを感じさせることなくゆっくりとこちらへ向かって降下してきていた。どうやらそれには興味があるのか東博士も私は別になんでもありませんよという仕草をしながらそれを見ていた、別に普通に見れば良いんじゃないかな？

「さて、音羽君。来たわよ、あなたへのプレゼントー！」

底部に搭載されていたのであらうブースターによる逆噴射で地面へふわっと着地した卵型のコンテナ、なにかが胎動しているような感じがするのだが気のせいだろうか。それの前面に取り付けられている小さなコンソールパネルを女王がカタカタと操作をし、IISを込み込むキャノピーを蓄が開くかのように開いていく。すると、一枚目のキャノピーなんともどや顔で現れた。

「ええ～、なにそのぬか喜び」

「モ急便の衝撃吸収剤みたいなものよ」

「そうですか・・・」

このフロイントに東博士すらすつじるんでいたことをここに明記しておぐ、え～、一枚目とか・・・これは一枚で終わって欲しかったよ。

「さて、ブレイクザローン！！

そして、女王が指を高々と鳴らした瞬間。最終カバーが幾千もの筋を走らせた後に瓦解する、そこに現れたのは・・・

一つの蒼だった

85・ファイント作戦（後書き）

どうでも良い作品情報

実はこれを書いている11/19の時点で専用機の名前が決まって
ないという事実

86・騎士の剣（前書き）

機体の名前の相談に乗ってくれたジョナサンさまありがとうございました！

遂に、Iの場に姿を現した俺の専用機。

「Iにつが・・・俺の・・・」

「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国、EIS開発チーム
が音羽君のこれまでの稼動データを使用して苦心の末組み上げたB
T二号機、『ブルー・ドラグーン』」

騎士として、戦うために『えられる唯一の剣。蒼穹に染め上げられた鎧が目の前で纏いし主を今かと跪いてそのコックピットを開け放つていた。BT一号機より増設させられた多目的複合兵装ビット「アサルトハウンド」が4基の非固定部位にフィンアーマーとして下部に接続されている、そのフィンアーマーは背部に一枚重ねで固定されており、翼を閉じた鷹のような落ち着いた中の凶暴さを示していた。

「さあせ、ちやちやつと仕上げちゃつよ
「は、はい」

日本刀が持つよつな武器の気迫とでも言つのだらうか、それに気圧されてしまつていて俺は女王の声に返答を詰まらせながらそこに鎮座する蒼い騎士へと歩を向ける。一步、一步と近づくたびに身体に感じる気迫が強くなる。そして、手を伸ばせば触れるという場所まで来た瞬間、EIS自身に呼ばれたかのよつな気がした。

それに返事をするかのように一度顎いてコシクペリッシュと飛び乗る、
『さあ、共に行こう』

自動的に正装の騎士服からIISステッツへ自動的に着替えさせられ、それとほぼ同時に脚から順番に操縦者である俺の身体を包み込むようにして装甲が閉じていく。四肢がまるで元から自分の身体のように感じるほどにフィットした全身、最後にバイザーモードハイパーサーが後方からせり上がりつて俺の顔の半分を包み込み固定される。一瞬視界が真っ暗になるが、すぐに肉眼以上のクリアな視覚と聴覚が神経を通じて俺に伝えられる。ハイパーセンサーが起動した証拠だった。

『全システム フィットティングとフォーマットを開始します』

意識に直接届く合成音であるう女性の声、視界いっぱいには大量の数列が羅列され洪水のようにスクロールされていく。耳にはハードの最適化をしているかすかな機械音が聞こえる、ソフトウェアとハードウェアの両方を調整しているのだからこの程度で驚いていいはいけない。立ち上がって周囲を見渡すと機材やIISを運んで実習の準備を始めている生徒たちが目に入った、今日いっぽいはIIS実習や候補生は本国から届いたIISの追加装備セットとでも言える「パッケージ」という物の試験をすることになっている。某VFTのステータックの性能テストと言えばわかりやすいか。

「これって思ったより時間かかるんですね」

「まあ、特殊装備とか全部試験的なものばかりだからね」

しかも高性能だからそれの最適化にも時間がかかる、ソフトウェアに入れたパソコンの入ってるソフト全部を自分が使いやすいやつに微調整し続けるようなものだ。それも設定画面からじゃなくてソフト 자체を弄つてというもの、事前にマニュアル読んだけどやつぱり半端無いなこいつ。というか、こんな最先端技術を個人に渡して良いのだろうか、悪用する気は無いが万が一ってこともある。

「あはは、大丈夫よ。もしも強奪つてことになつたら男のロマンが守つてくれるから」

「…………嫌な予感がするんですが、というかあなたは女でしょう」

「大丈夫よ、まあ、その時のお楽しみみてことで」

この人が何か企んでるような表情をしてけらけら笑つていることは、なにかと通り越しての何かをやらかしてるときが多い。物理法則然り、世界の技術然り、常識然り。そしてその度にそれを知った国民は「またかww」で済ませるのだ「女王なら仕方ない」みたいに、そんな人が女王やってられるあたりこの世の中は思ったより平和なのかもしれないが。つと、そろそろか？

キイイイイン

そんな金属音と同時にその音の発生源、IS「ブルー・ドラグーン」が青白い閃光に包み込まれる。上空へと噴き上げるそれは機体から放出されるBTエネルギーだった、竜巻のように噴き上がるそれが消え去つた中心には機体のエネルギー・ラインが青く光る一機のISが神々しく四基のファインアーマーを左右に翼のように大きく広げて立っていた。正に『竜』騎兵の名の通りに……。

滑らかになつたシステム音声がフォーマットとファイティングの終

『system A11 complete』

了を知らせる、1号機であるブルー・ティアーズを思わせるような中に鋭角的なスカートアーマー、中世の騎士を思わせる風貌にセシリアがほう、と吐息を吐いていた。

「ふふふ、さあ、あとは自分で頑張つてね お姉さんは帰るから」

「・・・え、マジで渡すだけですか」

「うん、だつて・・・面倒」とはお姉さん嫌いだもん ジャあね~

そう言つて手を振りF-35B-PHCカスタムのコックピットに飛び乗る女王、だつたらなんで開発者でも担当したメンバー連れてこなかつたんだよ、確かにマニコアルはこれでもかつて言つくらいに説明書つてレベルの情報以外に整備方法とか諸々書いてあつたけどさ。設計図まで折込で入つてたし、部品の調達先とか連絡先・・・ISUを自動車か何かと勘違いしてやしないかね?

「じゃあ、たまには顔出しに来てね音羽君!」

「わかりましたよ、少しは周りに気を遣つてあげてくださいよ!」

「善処する~、バイバーイ!!」

手を振つて離陸・・・できなかつた、いや、しそこねたと言つたところか。千冬さんが無線機で『離陸は許可できない』と叫んでいた、そういうえば氣づかなかつたが一般生徒が俺以外居ないな。・・・あれ、実習はしないのか?パッケージの試験は?しないと本国から直々にお叱り受けるぞ、俺だつてまだ機体動かしてすらいないのに・・・。あ、千冬さんがなんか「空域封鎖」だの「特務」だの言つてる・・・なにがあつたんだろうか。

「ブルー・ドラグーン、待機モード」

瞬間、全身が蒼い光の粒子に包み込まれてふわりと地面へ正装で着地する。ひとまず I.S を展開したままで話もまともにできないし、現状把握には必要ない。すると、腰になにやらスラスターと小さな蒼いエネルギー・ラインが入ったウイングの模様が入ったブルーメタルのダブルデリンジャーだった。BT エネルギーでも撃てるのだろうか・・・今はどうでもいいが。ひとまず、太腿の空っぽのホルスターに入れて帰ろうとしていた女王とその前を歩く千冬さんに呼ばれて旅館へと歩くのだった。

86・騎士の剣（後書き）

どうでも良い作品情報

なんで三号機かは・・・わかるよね

87・機体説明（前書き）

はい、先に分かりやすく今日は機体説明です

- ・「機体名」
『ブルー・ドラグーン』

イギリス次期国防対策ISチーム開発BT二号機、高機動・高火力による対象の迎撃を目標として建造された。歐州統合防衛計画「イギニッショング・プラン」のトライアル提出候補、その試験機である「ブルー・ティアーズ」の稼動データと「認定騎士」である如月音羽のIS学園でのISの稼動データをシミュレートして設計された「騎士」の剣としての一機。

- ・「武装」

『78口径BTレーザー複合ライフル「スター・ガーディアン』《星の守護者》』

実弾・レーザー弾の発射、ビットと同じく偏向射撃が可能。セミ・フルオート・三点バースト切り替え可。BTエネルギー系の兵装では全武装中では単体で最高出力を誇る、また二号機に搭載されたスター・ブレイカーの改良版であるためにBTエネルギー・レーザーを纏わせた実体弾を発射可能である。エネルギーの任意での収束チャージが可能であり、追加工エネルギー・キュムレイターの装着によりアウトレンジからの高火力狙撃が可能になつていて、本機体の主武装である。

『^{アーマー}多目的武装ビット「アサルトハウンド』』

一号機に搭載された遠隔操作の射撃ビット、二号機に搭載された防

御・牽制システムに続けて提案されたBTエネルギーの多様的使用を目的に開発された、ビットシステムの第三案。稼動時の操縦者の移動が不可能になる不可から来る欠陥は二号機に統一して改善されたり、また、PICの内臓数増加によるPICのみでの高速機動が可能になりエネルギーチャージのための退避までの時間が延びた。また、イメージインターフェイスの運用の活用として牽制射撃以外にも運用できる。

『複合近接ブレード』「ダーアインスレイヴ」』

北欧神話で魔劍と言われているそれをモチーフにしたBTエネルギーを実剣の刃に纏わせて使うブレード。斬撃力は最高性能を誇り、剣撃を繰り返すたびにBTエネルギーの放出量が増加し威力を増していく。しかし、限界まで収束された一撃を放つと急激なエネルギーの減少と冷却のための強制格納が起こる。

・『エネルギーの供給』「ヒートコンバーター」』

搭載された武装のほぼ全てがBTエネルギーの使用を前提とした仕様になつていていたため、通常のエネルギー供給ではすぐに底をついてしまうため「ブルー・ドラグーン」には試験的にエネルギー回復システムが組み込まれている。機体稼動時に蓄積された高熱を機体各部に内包されたナノマシンでの放熱冷却による熱変換により、理論上はエネルギーが切れてしまうことはない。しかし、過度なシステム利用によるエネルギー回復はナノマシンのオーバーヒートを引き起こし、通信・武装使用・機体制御に影響を与えて最悪の場合、IFSの強制解除・待機状態からの強制離脱が行われる。機体内部に放出される熱による操縦者へのダメージを抑えるためである、しかし、戦闘中に空中へ投げ出される場合があるために改善の余地がある。

・『機体譲渡による問題点』（英國特務外交官記録文書より抜粋）

本来は国防のために国家代表候補生やIAS開発企業にしかコアや機体は譲渡されない、アラスカ条約でコアの売買・譲渡は禁止されているからである。しかし、この場合「英國認定騎士」、つまり緊急権限とはいえ「大佐」の階級を持つ『一人の兵士』への専用機譲渡扱いになつていて、また、現在でも「如月音羽」の戸籍は残されているために一市民としての特例扱いにされているため、国際的な問題には条約・法律上ではならない。また、如月音羽自身が世界各国の税収の一角を担う医薬品企業の技術ライセンス保持者のため、大きな税収を失うわけにはいかないよう口出しを避けている面もある。

87・機体説明（後書き）

どうでも良い番外情報

番外SFの幻想入りを別個で纏めておこうと思います（本編には挟みますが幻想入りはそれで一つの小説にしておこうということです）

88. ニューヨーク市 (前書き)

今日はね、ハサードに切り替ひんで分けました

女王が「帰れない、あ、そっち入って良い?」とか「お姉さんと良い事しない?」とか五月蠅いのを「今度でお願いします」とだけ返して衛星回線仕様携帯電話で『地図^{レイズド}にない基地』のある名を知らぬ管理官（司令官は自分の立場しか考えてない馬鹿だからどうでもいい、というか解雇されてほしい）から届いた秘匿メールを確認していた。もちろん、千冬さんに呼ばれたので大広間へと歩きながら・・えーと、何だつて?

『一時間前にハワイ沖で試験稼動していた新型機が暴走、コントロール不能に陥り試験空域を離脱。注意されたし』

・・・・・これは、やつちゃつた つてやつか、洒落にならんがな。軍用の、しかも試験機ということはスポーツ用のISとは比べ物にならない性能、それこそ耐久力から攻撃能力、稼働時間にシリードエネルギー保有量まで制限を解除されているおかげで破格のものに仕上がっている。スポーツ用で倒せないことも無いが骨が折れる作業になるのは確実だ、多分女王なら鼻歌交じりにフィッシュチップスでも齧りながら戦闘機乗り回して対等に戦つてそうだがな。いや、軍用機が弱いんじやなくて女王が規格外チートつてだけだがな。

「失礼します、如月來ました」
「ああ、遅かつたな。適当に座れ」

「了解」

一応制服に一瞬早着替えをして大広間の戸を軽くノックして中へ入る、中には巨大な空間投影モニターが千冬さんの後ろと候補生（ジヤックは専用機持ちじゃないからいない、簪ちゃんはまだ武装が完成してないから出れない）+一夏と篝が外周を包み込むようにして置数枚ほどの大さしが展開されていた。・・あれって確か良い値段するんだよな、いくらかは言わないけど。ひとまず空いていた千冬さん近くの場所に携帯電話を格納しながら座る。

「では始めるか、山田先生モニター操作お願いします
「はい、わかりました」

それぞれが手前のモニターに映し出されたISとそれに関する資料が表示される、機体名と進行予想ルートだけであるが・・・情報が足りなく無いか？だいいち何を始めるんだよ・・・、嫌な予感しかしないがな、あれ、この機体って確か稼動試験の招待受けてたのじやなかつたか。たしか名前は・・・シルバニア・・・ファミリー？・・それは女の子向けのお人形だったな、なんだつたつけか、まあいいや。

「では、現状を説明する」

千冬さんが中央に配置された空間投影モニターを指揮棒で指しながら説明を始める、やっぱり嫌な予感しかしない。しかも俺の嫌な予感つてのは当たることが多い、結果が大なり小なりにか厄介ごとが発生する、悪ければ空港のテログループによる占拠事件・良くても角から飛び出してきた小学生の乗った自転車に真横からぶつかられる最近はハワイでレンタルしたセスナが燃料漏れで墜落した。厄払いでもしにいこつかと最近良く思うんだよな・・・、厄神でも俺

に憑いてるんだろうかな。

「一時間前、ハワイ沖で試験稼動中であつたアメリカ・イスラエル共同開発の軍用IS_{シルバリオ・ゴスペル}『銀の福音』が突然制御下を離れて暴走。監視空域から離脱、捕獲を試みた米軍機三機を先頭不能に陥らせて逃走了との情報が入った」

・・・ああ、名前それか！一人シリアルス・・一夏と籌は状況が飲み込めないようで呆けているが、俺はポンと納得したために手を叩く。勿論緊急事態ってことは理解できたがな、試験稼動ってことはもう最終調整に入つてたんだな、たしかイスラエルからの技術協力はIWI_{イー・ダブ・エフ・エフ}が一枚噛んでるんだつたつけかな。射撃武装技術のアドバンテージとロボティクス技術を持つアメリカとの技術交流つて名目での開発行き詰まり解消だがな。スランプになつたら人に聞けと言うが国家レベルでそれを実践する辺りらしいがな。

「その後、衛星での追跡の結果、福音はここから一キロ先の海上を通過することがわかつた。時間にして50分後、米軍の要請と学園上層部の判断の結果、我々がこの事態に対応することになった」

この場合は実力がある教師陣が対応することが多いらしい、生徒を作戦要員として参加させればなにかしらの国際問題に発展しかねない。国防の要にもなりうる卵を失いたい国家など今の時代にがどこにもいない・・・はずだ。

「教員は学園の訓練機を使用しての空域及び海域の封鎖を行う。よつてこの作戦の要は専用機持ちに担当してもらつことになつた」

学園上層部は頭が狂つてるのだろうか、たしかに情報から判断するに適所かもしれないが・・・。世界各国から預かっている重要人物

とも言える代表候補生、しかも新型である第三世代型機を持つ専用機持ちを実戦の参加要員として出撃させて軍用の、それも新型に対処させようとするなんて・・・たしかに候補生はそれこそ技量は並みの一般兵よりは力を持っているがもしものことがある。それこそ「最悪死亡」の可能性もあります、米軍も何を考えているんだか・・・。

「織斑先生、質問があります」

「なんだ如月」

右手を上げてしつかりと拳手をする、中途半端な拳手はしていないと同じだからな。

「各国は自国の候補生の作戦参加を容認しているのですか?確認として質問致します」

「・・・緊急時のために学園に所属する現在動ける人員の参加として特例で許諾されている」

「了解しました、以上です」

むう、それならば俺が口出しできることではないな。まあ、今から軍属部隊は間に合わないから仕方ないか、このまま逃がせば行き着いた都市が火の海になる。そうなれば候補生の命どころか何万人、ひどければ何十万人の人命が失われることになる・・・それは流石に避けたい、けして候補生の命が軽いというわけではないんだがな。

「さて、作戦に関して質問はあるか?」

「はい、目標の詳細スペックの提示をお願い致します」

「わかった、だが二力国の最重要国家機密だ。口外した場合は査問委員会による裁判と最低でも二年間の監視が付けられる」

全員（いまだに状況が飲み込めていない一夏と篠を除く）が頷くと

同時に目の前の大画面投影モニターにスペックデータと稼動時にモニタリングされたであろう稼動データが表示される。流石軍用、半端無いぜ！いや、本気と書いてマジって読むくらいには、IWIの参加の影響か射撃武装が主体になっていた。

「広域殲滅を主体とした特殊射撃型・・・わたくしの機体と同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と防御特化の両方特化ねえ、正直厄介ね。しかもスペック上だとあたしの甲龍を上回ってるから、向こうのほうが有利・・・」

「この特殊武装が厄介そうだね。丁度本国から防御主体のパッケージが届いてるけど連続での防御は無理そうだよ」

「このデータからは格闘性能が未知数だ、持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

「・・・最高速度が時速2450キロを越えるとある、現在も超高速飛行中ということだからアプローチは一回が限界だろ？」「となると一撃必殺で仕留めるしか方法はないんだな・・・そなれば

全員（一夏と篝以外）の視線が一夏へと向けられる、やつと状況を理解したのか一回びくっと肩を震わせて驚くと目を見開いて慌て始めた・・・一回落ち着けよ、焦るとどうしようもないぞ？

「お、俺え！？」

間抜けな一夏の声が大広間に響き渡るのは、予想するにかたくなかつた・・・まあ、そうじやなきや一夏じゃないというかそういう感じはするがな。

“ひつ”でも良い作品情報

実は番外編のほうが筆が進むといつ事実

89 · 天災＝馬鹿（前書き）

はい、束さん大好きな皆さんお待たせいたしました

一夏が「俺え！？」とか？なことを口に出してから数分、千冬さんのブランコン発言「織斑、これは実戦だ。覚悟がないのならば無理強いはしない」により吹っ切れた一夏が作戦参加を承諾、詳しい話し合いに入ることになった。ちなみに俺は持ち運び用液晶モニターで後頭部を叩かれたところをさすりながら話を聞いている。あれって重量が余裕で2キロ越えてたと思うんだ、いくら相手がエクステンデッドだからってその仕打ちはないでしょう。いや、これ以上考えてたら今度は近接ブレードで斬られかねない……。

「そうなるとどうやって一夏を運ぶか、エネルギーをどれだけ使わせないかだな」

「しかも目標に追いつける機体でなければいけない、高感度ハイパーセンサーも必要だ」

そうなれば、パッケージ装備も加えて最高速度が出せるのは……モニターに指を滑らせながらデータを見比べる。もちろん戦闘能力・連携も含めてだ。戦場では一人より二人、追撃戦ならば少數精銳での連携が有効的だ。戦闘のノウハウは使用する兵器が何になろうと変わらない、いやまあ、これもミリアさん情報だがな。小学生になに教えるんだとは思うが護衛ならば必要な情報だ……うん。実際それのおかげで追跡者を下水へ叩き落してm9ができたからな。

「現在最高速度を出せる機体所持者は誰だ？」

「はい、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうど本国から強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、高感度ハイパー・センサーも搭載しています」

「俺もです。ブルー・ドラグーンの高機動モードを使用した場合、

ストライク・ガンナー』と同等、また高感度ハイパーセンサーもモード変更で対応できます

ついでに言えば死神の瞳^{リバースアイ}とのシステム同期も可能らしい、ナノマシンのシステムリンクがどうこう言つていたがそこまで情報あつたのか・・・。そりやあ、戸籍の本登録もしたしそういう情報も一応女王経由で伝えただけだ。まあ、ええば便利だらうけど身体への負担がシャレにならない、無理矢理人体に高速情報伝達で動かしてるようなものだからな。

「・・ふむ、超音速戦闘訓練は何時間だ？」

「はい、20時間です」

「・・・6時間です」

関係ないことが地図^{レイズド}にない基地で暇な時間に改良型X-15で耐久8時間レースをした覚えがある、擬似格納領域で燃料補給しながらアメリカ本土を飛び回った。正直とても楽しかった、なにせ最高速度時速70000キロオーバー、衝撃波を出しながら挑発・「怖いの？臆病なの？死ぬの？」、「だ、誰が怖いものか！」ほいほい乗ってくれた司令官と一緒に空の旅をした。そのあとビビッて一時間でリタイアした司令官に青汁を渡して驚かせた。いやー、あれは楽しかつた。

「ふむ、如月は疾風の高速戦闘をしていたな・・戦闘機での音速訓練は経験あるか？」

「・・・言わなきや駄目です？」

「参考にな」

「F-35Cで35時間、最高速度マッハ5・3での無人機撃墜訓練です」

なにか後方から驚愕の声が上がるが気にしない、ついでに言えば350は独断で開発中のプラズマブースター搭載試験機なので音速は余裕で5~6は行けるんじゃないか?「文字通りの近接戦闘」ってことで発生する衝撃波を武器にしてミサイルだの無人機だの碎き落としたからな。まあ、耐G用特殊スーツ着てなきゃ今頃俺も鉄の匂いがほのかに香るできたてほかほかケチャップになつていただろうがな。イレイズドにはそれを生身でヒヤッハーしていたB A K Aもいたけどな。まあ、気にしたらいけないんだろう、アメリカだし。

「・・・経験」ということでオルコット、お前に任せる。如月はまだ機体に慣れていないからな

「了解しました」

「了解」

まあ、機体を動かしての試験なんかしてないからな。いくら俺のデータ使って組み上げられたとはいえ、別物の機体だ慣れなきやアーミードビットもまともに運用できないし武装のクセも掴めない。まあ、当然の結果ではあるか。どれだけ強い兵器でも使いこなせなければ意味が無い、俺だって銃器の使用訓練を嫌になるほどやつてきたからな。

「よし、では決定

する、と千冬さんが言い終わる前に俺は天井のあるところに向けて「修理費は出す!」と叫びながら天井板を蹴り上げるするとある人物の姉にして世界を変えた元凶である天災が「ぶへつ!」とか叫びながら落っこちてくる。すぐに板をはめ直して何食わぬ顔で膝を曲げて着地する。そして首根っこを掴み千冬さんへ一喝。

「不法侵入者を捨ててきます」

「ああ、すぐに戻つて来いよ？」

「Y'a」

そのまま襖を開けて連行しようとする^{馬鹿}と、そのまま俺の背後に回り、俺の首筋をいやらしくべろりと舐めてきやがつた。あ、この野郎……うあ。そのまま力が抜けてしまった俺の身体が弱弱しく床へと座り込んでしまう、お化けと幽霊にもう一つ、首筋は俺の物理的弱点である、しかもそこを不意打ちでやられると力が抜けてしまうのだ。

「ひやうつ！ふわあ……！」

「ぬふふ、その程度じゃ意味無いよ？」

力が抜けて動けない俺を二口一笑顔で見下ろしながら、その天災は勝ち誇ったように告げたのだった。相手が大人の女性とはいえ無力化されてしまった俺・・・情けないな、セシリ亞はなにか悲鳴に近い叫び声を上げてなにか言つているが。展開したmk?のワイヤーアームで無理矢理起こしてもらひ田の雨の天災を見つめる。

「何の用だ、部外者は立ち入り禁止だぞ天災」

「良いアイデアがあつたから言いに来ただけだよん それとももう一回イク？」

「やめてくれ、もう十分だ」

「じゃあ、私と楽しいことしてくれる？」

「メールのアレをやつたなら考えておいてやる」

「うーん、残念」

回復しきつていらない状態で後方へステップして離れる、少しよろけてしまったがまあ問題ないだろ？。といふに嫌われてたんじゃないのか俺？違うのか？いや、そなうそんで俺は良いんだ

がな、みんな仲良く、それが一番だ……あれ、なんで一夏と第三千冬さんが驚いてるんだ？俺も現在進行形で驚いてるところだが。なんか「束が私達以外に話をまとめてしている？」だの「姉さんが・だと！？」とか言つてゐるし。

「ん？ 私がいつおっくんを嫌つたといつのかね？」

「・・・最初で最後の直接メールだとおもつたが？・・・おっくん？」

「音羽だからおっくん、ok？ それにたかが一回で諦める束さんじやないのだ オッケー貰えるまで何回もやるよ？」

「だったら毎日のように匿名でウイルスメール送らないでくれるか、毎回各所に対応するのが面倒なんだが」

「むう、毎回簡単に駆除していくから毎日の楽しみなのに」

腰に手を当ててぷくうと頬を膨らませて文句を言う天災、そのポーズ似合つてはいるが自重しろ20代後半、妹が信じられないものを見ているような目でこっちをガン見しているのだが。というか一夏「友達できたのか、良かつたなあ」みたいな微笑ましい目で見るな。こいつが五月蠅くなる・・・そういうや実際に会うのはこれが初めてか。既に「しつかりしてほしい技術者」から「五月蠅い馬鹿」に評価は変わつてゐるがな。はあ。

「・・・それで、良いアイデアとはなんだ束」

「ああ、ごめんねち～ちゃん。つい夢中になっちゃつた、ええとね」

（）

開放された俺はどかつと床に座る、もちろん天災が立つてゐる正面モニターから一番離れた場所に。またやられたたらたまつたものじゃない、今でさえしつかり座つてゐるものきついといふのに。

「「」は断然、紅椿の出番なんだよ」

「どうこうことだ束」

「ん~とねえ、ほいや」

いつのまにテイスプレイのシステムに侵入したのか、正面も手前のモニターも筆が渡されたIS「紅椿」のデータ表示に切り替わる。千冬さんも言つたがどういうことだ？

「じゃあ説明しようか」

そこから始まつたのは世界のIS開発者の努力を粉砕 玉砕 大喝采するものであつたなどとその時の俺には予想もできなかつたのだつた。

89・天災＝馬鹿（後書き）

どうでも良い作品情報

睨んでいたのはにんじんロケットを前日に吹き飛ばされたから
(子供が拗ねているようなものです。)

90・フラグフレイカー（前書き）

はい、最後へんごめり注意報です

「……で、紅椿には第四世代のシステムである『展開装甲』が装備されているから適任だと？」

「もちのろん！」

この天災が言うには第四世代、つまり「パッケージ換装を必要としない万能機」、ちなみに現在絶賛机上の空論中のものである。イギリス以外は……ね、アーマードビットとか意図せず使用法によってはそうなるらしいし、つづづくイギリスという国が分からなくなってしまったぞ俺は。まあ、俺がそうなるように運用できればとかつていう理論上だからな、実際は第三世代機だ。「しかも全身に搭載したし、全開だと更にスペックデータは倍プラス」「はい！？」

「……はあ、せめて世界中の技術者の仕事を取るな馬鹿」

「いや、つい調子に乗っちゃったんだよね……あれ、なんで静かなの？」

『…………』

大広間は、天災の発言のおかげで絶賛通夜状態になってしまっていた。候補生全員が「〇一二」状態でため息をついている、気持ちは痛いくらいわかる。なにせ本国で大きな予算を毎年かけてまでやっている今の研究開発が全て無駄になってしまったのだ、それもISの生みの親によつていとも簡単に。これはあれだ、世界中のナノマシン技術者を置いてけぼりにして俺が最新技術を売り込みに行つたときのナノドクターの常務さんの纏つてた空氣だ。「なん……だと」「つてやつだ、うん。悲壮感たっぷりにしていたのを覚えてる。

「やり過ぎるなと言つただろう・・・」

「大丈夫だよ、紅椿はまだ完全じゃないし。まあ、教えるつもりはないからね～」

どうやら世界にはまだ開発を続ける意味はあるようだ、正直量産されたらどうしようもないからな。国家予算の大幅な無駄になることはないようだつた、ふう。まあ、対人能力が末期なこいつならば元からそういうことは自己完結で済ませてしまうことが多いだろう、大抵そんなものだ。

「それにしてもあれだね、海で暴走つて言つと十年前の白騎士事件を思い出すね～」

千冬さんがしまつた、とでも良いたそつな目で天災を軽く睨む、どうかしだらうか？

『白騎士事件』

この世界に住む人間ならば小学生のころには必ず教えられる大事件である、今の世界の基盤を変えてしまつたISの世界への実質的なお披露目もある。

10年前に学会に発表された「宇宙探査用マルチフォームスース」ISはその出鱈目な性能から世迷言扱いされて認められなかつた。いや、認めるわけにはいかなかつたとでも言つべきか。

その一ヵ月後、全世界に存在する日本を射程内に收めるミサイル² 341発。それが全て何物かにハッキングされ日本へと発射され。、日本は恐怖のどんぞこに追いやられたのだ、平和ボケしていた日本人にはその脅威は経験なく、また、逃げる時間も無いに等しい。正に日本建国以来最大の危機だった。

そんな中現れたのが白いEISを纏つた一人の女性。

顔は初期型のハイパー・センサーのおかげで見えることはなかつた。しかし、空想でもあるかのよう突然現れたそれは飛来したミサイルを次々とその手に握つた剣で『ぶつた斬つた』のだ。それも人には不可能な超音速で縦横無尽に空を駆け巡り、あまつさえ当時試作型がやつと開発できた陽電子砲を空中に召還、遠距離を飛行するミサイルをなぎ払つた。

「超音速での飛行・急旋回などの機動力」、「第質量の兵器を粒子から構成する機能」、「ビーム兵器の実用化」、そのどれもが現行の兵器を凌駕するほどものだった。

もちろんそんな「危険物」を無視するほど世界は馬鹿ではなかつた、条約を無視し空母に戦闘機などと自国の軍を出撃させ「捕獲」、それが無理ならば「撃墜」と動き出した。しかしそれも死傷者0、当時最新鋭の兵器が大量に投入されたにも関わらずたつた一機のEISに世界は敗北したのだ。

「相手を生かしたまま無力化することができる」までの性能をまさまさと見せつけ、最後にはまるで最初からいなかつたと思わせてしまつようなステルス性能を見せてその消息を絶つたのだ。

「それにしても白騎士って誰だつたんだろうね～？ね、ちーちゃん？」

「そうだな」

「私の予想ではバスト88センチの・・・ぶへつ！」

筈と一夏がこそっと教えてくれたが二人は幼馴染らしい、どうりでさつきから賑やかにしているわけだ。・・・そんな暇もそうないな、邪魔をするのは忍びないが仕方ないか。作戦開始はできるなら早めのほうが良い、それに準備時間も必要だ。エネルギーとか機体調整にも時間がかかる。

「・・・織斑先生」

「わかつていい。束、調整はどれくらいかかる？」

「遅くとも7分だよ」

「そうか、ならば作戦参加は織斑・篠ノ之両名で行つ。各自準備を始めろ」

セシリ亞が抗議しようとしているが止める、まだパッケージの量子トール^{インス}交換が終わつてない以上準備には時間がかかる。早期決着が求められるために早いのならばそちらが選ばれる、それに篠ノ之博士謹製のISだ、毎日打鉄で特訓を欠かさず頑張っていた筈ならばISが助けてくれるだろうし問題ないだろう。

「作戦開始は30分後、準備を各自始めろ

『はい！』

まあ、準備と言つても俺はやることなし。直接参加要員ではないため、俺はブルー・ドラグーンを装着したままにかあつたときの備えとして慣れることにしていた。いや、援護指示が出た場合に備えてだな・・・フラグ立てるなどと言うな。備えあれば憂いなしと日本のことわざにあるだろう、超高速戦闘のレクチャーなんて俺にはできないし、おそらく一夏が理解できない数値説明になるからな。だいいち8時間じゃあ役に立たない、ISと戦闘機じや動き方も違うしな。「一応動きには慣れておけ」と言われたしな・・・。

「高速戦闘用に調整された高感度ハイパーセンサーとはですね」「・・・ふむふむ」

一夏がセシリ亞に高感度ハイパー・センサーの説明を受けていた、じやあ俺はフラグブレイクでもしに行くかな。レクチャーを大勢に受けている一夏を一瞥し、俺はその場を後にした。

開けた海岸、そこに一人の人影があつた。作戦の実働要員の一夏と笄である、既に準備は万端であり白式と紅椿をその身に纏っていた。既に教員は司令室に宛がわれた大広間で配置に着いている、モニタ一は開始されていて、機体が作戦準備完了していることが映像で映し出されている。

「両機、発進準備完了。いつでも行けます」

『織斑、篠ノ之、聞こえるか?』

千冬さんの呼びかけに対し、頷きで返す一人。

「本作戦の要是ワン・ア・プローチ・ワンダウ一撃必殺だ。短期決戦を心がけろ」

「了解」

「織斑先生、私は状況に応じてサポートをすればよろしいですか?」
『そつだな、だが無理はするな。お前はその機体での実戦経験は皆無だ、突然なにかしらの不具合が出るとも限らない』

「わかりました、できる範囲で援護します」

織斑先生が一夏ヘプライベートチャネルで注意をしてくること、俺は通信回線を紅椿へと繋いでいた。

『あー、あー。聞こえるか篠』

「どうした音羽、お前は実働要員じゃないだろ?』

『まあそう堅いこと言つなつて、一つ言いたいことがあつてな

「なんだ?』

『力が手に入ったからって調子に乗つてると《死ぬ》ぞ?間違いな

く

「調子になど乗つていない、真剣だ私は『

『客観的なお前見せてやるからちょい待ち・・・よいせ』

先ほどまでの専用機を手に入れてからの篠を撮影していた映像を見せる、するとすぐに静かになった。その顔には焦りがあった、まあ、狙い通りのことだな。

『どうだ?』

「あ、ああ、すまない・・・やはり私は・・・」

『あ～つたぐ、氣づいたならオッケーだ。なら後は自分でわかるな?
?』

「勿論だ、力を間違えないで全力で行く。ありがとう音羽
『ははは、じゃあ行つて来い!!』

「了解!」

「了解だ!」

吹つ切つたような表情で返事を返し、頷いて空を見上げる。よし、
これで良いかな?

『これでオッケーです千冬ちゃん』

『・・お前は本当に高校生か?』

『じゃあ普通の男子高校生ですよ、あくまでね?』

90・フラグフレイカー（後書き）

どうでも良い作品情報

橋津さん空氣とか言わない、しつかり捕まって司令室で仕事をせら
れています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8335v/>

訳有りの記憶喪失でも生きていける

2011年11月25日20時59分発行